

やはり俺と『 』が
《ボーダー》隊員なのは
間違っている

必殺遊び人

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

両親を亡くしたボツチの少年比企谷八幡と、『都市伝説』とまで呼ばれたゲーム『くうはく』。彼らは唐突に現れ——『ボーダー』という名のゲームの盤上へ降り立った。

「せいじゃ、やりますか？」

いつも通りに八幡は眩き。

「さあ——ゲームを始めようぜ」

「……………かかって、来るの……………」

その兄妹は互いの手を結んで。

目次

『』 vs トップチーム	
一話<>『やはり俺が仕事をするのは間違っている』	1
二話<>『さあ——ゲームを始めよう』	17
三話<>『オレのチームに來い。お前の力が必要だ』	33
四話<>『俺とくればトップまでいかせてやる』	52
五話<>『一応聞くけど勝率は……』	72
六話<>『あいつらのことを俺は天才だ』	72
とってる』	92
七話<>『……かかって、来るの……』	122
八話<>『なら……普通に倒すか』	145
九話<>『勝ったと思った？』	166
十話<>『また、一緒に遊んでください』	188
十一話<>『——この世に運なんて存在しない』	207
『』 vs 裏切りの少女	
十二話<>『じゃあ鬼ごっこでもするか』	225

十三話	『大事な後輩なの』	—	244
十四話	『定石つてのは、結局のところ 限界があるもんだ』	—	261
十五話	『素直になれよ、子供だろ』		283
十六話	『俺にとってお前だけが特別 だ』	—	302
十七話	『改めて比企谷八幡だ。』		322
十八話	『私は——君の事も心配して るのだよ』	—	343
十九話	『——起きて、』 『(くうは く)』	—	363
二十話	『……………underst and? ……』	—	386
二十一話	『それじゃあゲームを続け よう！』	—	410
二十二話	『無理、かな……』		428
二十三話	『青酸カリ!!』	—	450

『』 VS トツプチーム

一話〳〵『やはり俺が仕事をするのは間違っている』

カタカタカチカチと、小さな音が木霊する。

有り体に言ってそれはキーボードの音だった。

であるならばそこには人がいるわけであり、それを証明するように、薄暗いその部屋を僅かに照らすパソコンの明かりがあった。

「なあ——」

男の声だった。もっと言うなら青年の声と言っている。パソコンの前に座る人影が、唐突にこんなことを言ってきた。

「急に思ったんだけどさ、ゲームをやっているけど給料が入るといってゲーム最高ポジションにいるはずなのに、こんなに虚しいのはなんでだと思っ妹よ」

「………？ さっきの………あ、て………弱かつ、た？」

「違う違う。確かにさっきの相手は弱かったがそうじゃないんだ………。そういうことじゃないんだよ。ほら、以前ハチが言ってただろ？ 男は働いたら負けだって。専

業主夫こそ至高の職業だつてさ。なら今の俺らはすでに負けてると言えないか？」

.....

擁護できないほどの屑野郎のセリフだが。男の妹はそれぐらいで兄を軽蔑したりしない。

兄——空。17歳。コミュ障。童貞。がごくまれに壊れたことを言うのは今に始まったことではないのだ。

妹——白。10歳。対人恐怖症。不登校。は自身の現状を棚に上げて先の発言に反論するほど、おつむが弱くないのだ。

時に、彼らのことを語るのであれば、一つだけ外せないことがある。

「ハチ兄、は.....ひねくれ者。わかってる、くせに.....。それに——」くうはく

その言葉に。——ニヤリ、と。兄である空は笑って——そうだったな、と口にした。

ハチという人間が空に言ったことを言葉遊びと捉えるなら——ゲームと捉えるならば、それに納得して負けという言葉を口にするべきではない、と。

「あいつが言ってたけか。これはゲームだつて.....。だったらお前らは負けないんだろ？——だつたけか？ あのとときは笑ったな」

曲がりなりに「近界民^{ネイバ}」と戦う自衛組織として成り立っているこの職場を、ゲーム

とのたまった。仮に、近界民ネイバーに殺された家族がいる奴が側にいたら、こんどは八幡がそいつに殺されても仕方ないようなことを言ったのだ。

「ハチ兄、は……白たちの恩人。そんなつもりで……いつたんじゃ、ないよ？」

「ああ、わかつてるよ」

空は白の頭を撫でながら。

（あいつは『俺たち』に向かつてこう言ったんだ。生きづらいか？ なら仕事をゲームと考えられる場所を教えてやるってな。ならこれを仕事と考えるのは八に対する侮辱だろう。ゲーマーなら——）

——どこまでもゲーマーとして。

「あいつのためにも、そして『俺たち』のためにも、負けはありえない。今度も勝つぞ」

「バッチコニー」

その兄妹は。パソコンの前に居座る男女は。『都市伝説』までになったゲーマーは——。ネット上でこう呼ばれている。

無敗の伝説——『くまはく』と。



「はあ〜〜〜」

——と。彼比企谷八幡は、自身のアイデンティティと名高い濁った目——周りには死んだ目と言われているその瞳を、更にどんよりと濁らせ、盛大に溜息を吐いた。

高校一年生と言う青春真っ只中の彼がなぜそこまで絶望の色を上げられるか、それを一言でいうならば『仕事』をしているからである。

常日頃から、将来の夢は専業主夫と豪語し、先日提出した学校で提出した「将来の夢は？」と言う紙にも同様の事を書いて見せたことから、いかに仕事をすることを嫌っているかが伺える。

とは言え、彼が行ってる仕事は少しばかり……いいや、かなり特殊な部類に入るだろう。

『ボーダー』と言われる異境防衛機関。突然あらわれた未知の生物「近界民」^{ネイバー}と戦う組織。

要は、異世界生物の相手を専門にする自衛隊なのだが、その「近界民」^{ネイバー}と戦うのに必要なトリオンと呼ばれる器官が、子供の方がより発達しているという理由から、戦闘員の平均年齢が15歳程度の学生やら未成年だということが少しばかり特殊と言える部分だった。

「いや、もう本当になんで俺は働いているんだ？ そうだ考え方を変えるんだ。そう、これはゲームだと考えよう。——光る武器を振り回して、近未来的な銃を撃つ職種なんて存在しない。よってこれはゲームと言えるはずだ。違うかな？ 違うな）」

比企谷八幡は、今現在『ボードー』の上層部から呼び出しを受けているという組織的現状を否定すべく、頭の思考を止めることはない。

「あれ？ 八じゃないか？ 珍しいなこんなところにお前がいるなんて。お前もなんか忍田さんに呼ばれてんの？」

「——？ あー迅さんですか そうですよ。その通りです。すごいですねそのサイドエフェクト 未来が分かるなんて主人公っぽくてかっこいいですし」

背後から声を掛けられ、ジトー、つとした目で振り返った先には、S級と言われる称号を持つ男。ブラックトリガー『風刃』の使っていて、迅悠一がいた。

「いや、今回はサイドエフェクトなんて使っていないぞ。八のその目を見たらほぼ一発でみんな分かると思うけどな」

おっと——どうやら俺の目相当濁っているらしい、と。やっと自身の憂鬱ぶりを自覚した八幡は、もしかしてと思いに聞いた。

「もしかして、今回の相手迅さんだったりします？ だとしたら相当めんど

くさいんですけど。めんどくさすぎてボーダーやめるまであります」

「いいや違うよ。今回の相手は俺じゃない。今度はサイドエフエクト使って確認したから確定だぞ。まつ見た感じ面倒な相手って言うのは変わらないと思うけどな」

えーマジですか・・・と、どこぞのツツン頭の少年なみに不幸だオーラをまき散らしながら歩く八幡に、迅はけらけらと笑いながら背中を叩いた。

「まつ、大丈夫だよお前なら」

「根拠がゼロなところが本気で尊敬できません」

「根拠ならあるぞ？ だってお前——」

少しの沈黙後。

「俺に勝ったじゃん」

その一言に八幡は思わず口を噤む。

（この人マジか……。遠回しに自分より強い人いないって言ってるのかな？ てか、「本当は俺が戦いたい」見たいな目するのマジでやめてもらっていいですか？ いやマジほんとに怖いんで……）

「そもそも俺が今回呼ばれたのは多分あれだ、八の結果を見たうえでまだお前をS級とするか見極めろってところじゃないか？ つまりは審判。ってことで俺から合格判定を欲しかったら玉狛支部に——」

「いや、行かないですから．．．．．」

「だよな」

——サイドエフェクトがそう言つてた、と。

どこからどこまでが本気で本当かわからない——適當を体现したかの男は、何が面白いのか終始ニコニコしたままだった。

「で、八が嫌いな会議室についたわけだけど、どうする？ 自分で開ける？」

「開けてくださいお願いします」

ボッチと名高い八幡には、上司の待つ扉へ入るといふのはいささか難易度が高かった。



「それでは比企谷君。今季の相手を報告したいと思う。もちろん最低条件は負けないこと、さらにその上で私たちが君をS級たる存在か判断させてもらう」

会議室にいたのは4人。

中央に、《本部司令》城戸政宗。その横に《本部長》忍田真史と《本部補佐》沢村響子。

反対サイドに《本部開発室長》鬼怒田。

城戸司令のその言葉に始まり、いつも通りにその会議は進んでいく。

ただの高校生が、上層部と面識を持つという光景も『ボーダー』ならではと見えるだろう。さらに言うなら、S級と言う称号は、組織の中でそれほど重要視される事柄だと判断できる。

ブラックトリガーを持たない八幡が、それを持つことによつて初めて得られるそれを手にするというのだから、いくらでも慎重になるべき事柄なのだ。

特殊な権限が与えられる——というのは学生がメイン戦闘員の組織故にほとんどない。だが、いざ戦闘になった際に、S級はより危険な場所へ派遣される。ちよつと強いからと言う理由でそれを与えてしまつては、子供を死地に送り出すのとそう変わらない。

「さて、それで今回の相手だが、今日中にA級の遠征部隊が帰還する。それに伴い、君の相手はA級上位部隊が務めることになる」

「.....」

なるほど、確かに迅さん並みにめんどくさい相手だ、と八幡は溜息を吐きたいのを我慢する。

「それでいつも聞いていることだが、この試験を受けないという選択肢にも君にはある。初めに君がこの条件を差し出してきたときは君はB級で、早く上に上がったのか

もしれない。しかし、今なら試験をうけなくともA級は確実に確保できる。わざわざS級の称号を得る必要は感じないが……」

そう言ってきたのは、《本部長》忍田真史だった。彼は『ボーター』創設者のひとりである。

子供に対して非常によく考えてくれる人で有名だ。

曲がりなりにも未成年に武器を持たせているというアブノーマルなこの組織で、違反者や、犯罪者が出てこないのは、こういった人が上に立っているのも理由の一つだろう。「理由ならあります。とても個人的な事ですが……」

八幡には、何をしてでもS級にいたい理由があるのだ。

「特に負けてもペナルティーがないなら受けますよ。それに、この試験に受けられないのちのチームメイトがうるさいんで。あいつらがいなくなったら俺なんてヘツポコと言つていいぐらいですからね」

「……そうか。なら試験はA級の帰還時期を考えて、一週間だ。準備をしておくように」

どうやらこれで話は終わりの様だった。

背中が洋服とくっつくほどに汗で濡れているのは、きつとなれない人との会話をしたからだろう。

（暖房が強すぎるとかないよね。．．．ないかー。もしかして俺も白と同じで対人恐怖症だったのか？ それはやだなー、嫌すぎる）

「それではこれで俺は失礼します。チームのやつらにこのことを伝えないといけないので」

そう言つて、部屋を後にしようとする八幡に、

「二つ質問良いかな？ 比企谷君」

城戸司令が声をかけた。

「な、なんでしゅうか？」

—— 噛んでしまった。恥ずかしい!! と、どうやら会議が終わったことで油断してしまつたようだ。

隣からは笑いをこらえるように迅が口到手を当て下を向いている。

（な、殴りたい。その笑顔）

おそらく殴りかかっても、持ち前のサイドエフエクトで容易にかわされてしまうだろう。グググ、と力を入れた拳を少しづつ開き、城戸司令の質問を待つ。

「君は近界民ネイバーのことはどう思う？ 復讐したい、もしくは嫌いだ——そう思うのなら、君はA級になるべきだ。S級隊員に遠征はない。しかしA級でトップになればそれも可能になる」

この質問はどういった意図があるのだろうか。

ここに空がいたらわかかったのかもしれないな、と。無意味なことを考えつつ、八幡は正直な気持ちで口にした。

「別に嫌いとか言う気持ちはないですね。……邪魔ではありますけど。俺がS級になるのはただの決定事項ってだけです」

淡々と、それが当たり前のように。

「俺のチームメイトが言うには『俺達に敗北はない』『それは勝負する前に勝っているからだ』だそうです。……ああ、言いたいことは分かります。なかなか痛い奴なんですよあいつは。それでも、なんも間違つてないから質が悪い。そう思いませんか？」

八幡のその回答に、城戸司令は自分が望んだ答えと違かったのか、微妙に眉をひそめるながら、

「そうか。時間をとらせた。下がってよろしい」

八幡が扉に手を触れた時、

「私は君もなかなか痛いと思うがね」

そう、口にした。

唐突なその言葉に、八幡は一瞬体を停止させるも。そのまま無言で動き出し、扉の閉

め際――。

「自覚はあります」

と小さな声で呟いた。



綾辻遙は、A級「嵐山隊」に所属するオペレーターである。

「えーつと……確か『比企谷隊』だったよね。来週あるS級試験に出る隊って」
「そうだよ。私も知った時は驚いたけどね。どうやらこれ三回目っぽいよ。いままでは隠してひっそりやってたらしいね」

食堂で話すその姿は、まさに女子高生と言った風でいて、内容はきっちり『ボーダー』の事である。

綾辻と話すのはA級三位の『風間隊』オペレーターである三上歌歩である。

ともにA級部隊のオペレーターであることと、年齢も近い事からこの二人の仲はかなりいいと言っている。

「確か綾辻ちゃんが実況するんだよね？ でもなんでかなー。今まで隠してたのもそうだけど、いきなり実況までつけて、ランク戦並みに行うなんて……」

「うーん、確かに……。そもそも私ね、S級が迅さんと天羽君以外にいたこと初めて知ったんだ。『比企谷』なんて名前も聞いたことなかったし」

「あつ！ そう言えば私一回だけ聞いたことあるよ。確か私が風間隊に配属された時に風間さんが比企谷って子を入れたかったって話してたと思う。結局断られたんだと思うけど、風間さんが誘おうと思うぐらいなんだから相当強いんだと思う」

彼女たちは知る由もないが、S級試験と言う名前は今回初めてつけられたものである。

そもそもの発端は入隊直後の八幡が、ありえない速度でB級に上がった事からなのだ。

『すみません。S級の誰か倒すのでS級の称号くれませんか？』

当時の事を忍田さんが語るなら、空いた口がふさがらなかつたと言うだろう。

B級上がりたての子がそれを言ってきたのもそうだが、完全に組織と言うものを理解してなお、それを口にしたことである。

組織と言うのは上下関係がはつきりしている。下から上がるから誰もが認め、上のは下を経験したという実績をもとに動ける。それを、『一番強い奴に勝つから一番してくれ』と傍若無人なことを口にするバカがいるとは思わなかつたからだ。

そもそも、B級上がりたての子がブラクトリガーに勝てるなど何を言っている状態なのだ。

なぜなら。

——当時のA級部隊すら、勝利したという実績はないのだから。

そのことまでなら、馬鹿な子供があほなことを言ってきた。それで話が終わったはずだ。

それが結果的には言え八幡がS級と言う称号を手に行っているのは、その時たまたま迅悠一がその場にいたからである。

『やってみてもいいんじゃないですか？ 相手なら俺がしますよ！』

——と、当時から未来視のサイドエフェクトを持つ迅の言葉によって、何かあるのではと感じ取った上層部は、八幡と迅悠一が戦うことを許可したのだ。

「私ちよこつと調べてみようかな。実況するのにその隊の事何も知らないなんてちよつと恥ずかしいし。どこに行けば調べられるかな？」

「あつじやあうちの隊室に来る？ 資料なんかはないけど風間さんなら何か知ってるだろうし、私もオペレーターとして知っていた方がいいと思うから！」

「えっほんとに!? あ……でもいいのかな、遠征で疲れて帰ってきたのに今お邪

魔するのはちよつと……」

「ううん。それは大丈夫だと思ふ。なんか風間さんS級試験に自分が出るつて知つたら、帰つてきたばかりなのに訓練室に入りっぱなしで……。どうにかして休ませたかつたから」

「じゃあおじゃましようかな」

「うん。行こうか」

比企谷隊の噂は尽きることを知らなかつた。

——曰く、ノーマルトリガーでブラックトリガーを破つた。

——曰く、そのチームには黒星がついたことがない。

——曰く、上層部を脅してその地位を得た。

——曰く、誰もそのチームメイトを見たことがない。

曰く……曰く……曰く……

噂が大好きな女子高生が、そのことに興味を示さないわけがなく。夢中になるのも必然だつた。

そして、忘れていないとは思ふが、彼女たちがいたのは食堂であり、であるならば、その目的は食事のはず。二人が注文したのはどちらもラーメンで、夢中に話していたことが原因なのか——いいや、確実にそれが原因なのだが、二人の麵は完全に伸び切つてい

たのだ。

「——あつ………」

そのことに気付いた二人は、捨てるのはもつたいたないと、完全に伸び切った麺を黙々と食べるのであった。

二話<<『さあ——ゲームを始めよう』

比企谷八幡が『ボーダー』という組織に入ったのは、自身がまだ中学生のころ。

年齢は15歳。高校受験を推薦と言う形で確実にした八幡は、いい時期だと判断して入隊を希望したのだ。

当時の『ボーダー』ではカメレオンが後に開発され、今やA級部隊三位の立場にいる風間隊が発足したのもこの時期である。

入隊理由を問うのであれば、『もしもの時、妹を守る力がほしい』と、この一言に尽きる。

今時、というよりも、この三門市では珍しくもないが、八幡の両親はすでに亡くなっている。八幡がまだ小学生のころ、『第一次近界侵攻』によって、両親の死亡が確認されたのだ。

小学生にして親を亡くすという不幸にしながら、その心が壊れなかった理由を挙げるなら、それも妹の存在が大きかった。妹のためにも自分が頑張らなければならない。強

迫観念にも迫る意志によって、八幡の心は壊れずにいたのだ。

中学に入ると同時に将来を見据えて勉強。すでに創設されていた『ボーダー』に入らなかったのは、妹がまだ小さかったことと、今の時点で勉強をおろそかにするのは、今後の学校選択において、後々かかるお金が安くなると子供ながらに考えた結果だった。

『ボーダー』に入った八幡は、才能に恵まれたのかトリオン量によって初期ポイントをと2000ほど貰い、それでも異例な僅か一週間でB級に上がるという大挙をなして見せたのだ。

なるべく妹を一人にしまいと、長い期間訓練生という立場にいるのを嫌った努力の結果である。

だが、事実として、B級と言う肩書きは彼にとつて最もつらいものだった。訓練生を脱却したことによる防衛任務。上がりづらくなる訓練ポイント。そしてランク戦。家を空ける時間が明らかに増えたのである。

ここまで聞けば、八幡は妹に依存しきった危険な状態。そう考えても仕方ないが、実のところそれは逆だった。

妹の方が、兄に依存してしまってるのである。

そう。彼が壊れなかったのは、妹がひそかに壊れているのを感じ取ったからであり。彼が家にいる時間を固執しているのは、それによって妹が完全に壊れるのを防ぐため

ある。

だが、それで妹を責めるのはいささか酷だろう。

八幡はたまたま被害が少ない場所にいた。しかし妹は違った。家に家族といった少女は、目の前で両親が殺害されるのを目撃してしまったのだ。まだ小学4年生だった彼女が、絶望と言う言葉の意味を理解するのに十分すぎる出来事だったことだろう。

故に、八幡は今の現状を何としても打破しなくてはならなかった。

それはつまり。

——いかにしてS級になるか。

A級ではほとんどがB級と変わらない。防衛任務にランク戦。治外活動などを入れれば、その仕事はB級以上と言って差し支えなかった。

S級にも仕事はある。だが、いざという時——つまるところ大規模侵攻の時に最も危険な場所に送られる彼らは、A級やらB級より自由な時間が多く与えられる。そもそも、ランク戦が大きな時間の邪魔になることを考えれば、S級と言うのはそれだけで八幡には魅力的だった。

B級でのソロ活動も視野に入れていないわけじゃなかったが、防衛任務をしなければ給料が入らない。親がない八幡にとっては、それは少しばかりいただけじゃない。

だが、ブラックトリガーを持つてることがS級の条件。無謀を通り越して不可能の話

だった。

だが、そんな時彼は知った。『都市伝説』でしかなかったそれを。そう——。彼が『』と出会ったのもこの時期だった。



そこには、足で器用にマウスカーソルを持ち、あろうことかそれでゲームを行う少女がいた。

『足でうごかした、ら・・・・・両手でご飯食べれる、よ』

と、賢いのか馬鹿なのか分からない妹の発言に、兄である空が頭を抱えたのは無理からぬことだった。とは言え。

『さてよ。それなら一人で四人プレーがでкинじゃね？ 腕が二本と足二本、見よ妹!! この兄の天才的な発見を! これで協力プレーを売りにしているゲームをより楽しめるはずだ!! はははっ——』

と、ボツチを究極的に拗らせたらこうなるのかと、逆に白も頭を抱えたものである。まあ、そのような過去の事はさておき。

パソコンに向かういつも通りの兄弟の光景は——突如として曇ることになる。

それはチャイム音だった。

彼らは別に異次元のはざまにいるわけでも、異世界にいるわけでもない。であるならば、そこは日本、あるいは世界のどこかしらに住んでいるのであり、そこへ訪問者が来るのも必然と言えた。

しかし、その訪問に彼らが出ることはまずありえない。

「……………」

対人恐怖症に引きこもり。その二人が見知らぬ人物に会うことなど許容できるわけがなかったのだ。

お金は白が開発したプログラムや、高度なAIプログラムの対戦、例えばチェスプログラムの相手などで稼いでいる。必需品はすべて通販。さらには自身で開発した返答AIを使い。配達員とも接触しない彼らの徹底ぶりには、もはや怖いものを感じる。

今回も変わらない。通話状態には自然になり。AIが最適な返答を行ってくれるはずだ。何かを頼んだ記憶はないが、そこについても問題ない。人類最高の頭脳と称していい白が、その程度の事を予測していないわけがないのだ。

「行ったか？」

「わから……………ない。でも、来た人……………まだ何も話してない、よ——」

……………まで完璧に引きこもりをしているのを見ると、いつそのこと清々い。

すると。——ゴトン、と。何か落ちる音がした。どうやら扉についている郵便受けに手紙が通入されたようだ。

「つんだよおおお。ただの郵便かよ。ちよこつとビビったじゃねーか」

「にい、流石にそれは……ない」

「じゃあお前が郵便取りに行くか？」

「……すぴー……すぴー……すぴー……」

「……」

どうやら妹は部屋に家にある郵便すら取りに行くことができないようだ。

そんな寝たふりですよと言わんばかりの白の様子を、それでも可愛いと思えてしまうのは空が彼女の兄だからだろう。

「つたく……一体何の郵便だよ。どつかの広告とかならマジで怒るぞ……」

独り言だった。だが、この一言が彼らのこれからを大きく変えた。

「いるじゃねーか。なんででないんだよ」

——ピキリ、と。時間が止まったかのように思えた。

玄関の前。郵便受けにてを突っ込み、中身をまさぐっていた空は、突然の声に動けなくなる。

(いやまて落ち着け……。相手はドア越し、外にいる。無視すればなんの問題も

ねえ。落ち着くんだ空、伊達にコミュ障やってねーぞ!!)

つまり、俺はコミュ障だから会話なんてできません、と。ある意味いさぎよ潔いその行動は、次の一言で完全に崩されることとなる。

『くうはく』だろ。お前」

「——ッ?!」

「ああ間違えた。お前ら——だったか?」

(なんだこいつは………。ブラフのつもりか? いや、ネットごしならまだしも、

ここを特定してる時点でそれはさして重要じゃない)

ここへ来て、空の思考は冷静さを取り戻す。

「誰だお前………。いや、なんなんだ。お前の目的は」

空が選んだのは相手との対話。

仮に、外の人間が空と白の情報を掴んでるとして、あるいは掴んでいないとしても、ここまで来た時点で空にできることは一つ。

「先に俺の名前を言っとくが、比企谷八幡だ。驚かして悪いな………。別に
お前が考えてることをするってわけじゃないんだ。ちよつとスカウトにな」

(ちつ、こつちの考えはお見通しか……。まあ、ただの馬鹿じゃねーてことがせめてもの救いだな)

「スカウト？ 悪いが俺らは e—s p o r t s なんかに興味はえーぞ。それとも、なんかの依頼か？ 悪いが俺たちが受けることはな——」

『『ボーダー』って言えば分かるか？ 俺はその人間だ』

この会話で、空は完全に状況を把握する。

（あいつは俺のほぼ『』だと認めているような質問に、何の疑問も感じてない。つてことはおれらが『』つてことはほぼ確実につかんでるつてこと考えていい。それに『ボーダー』だったか、なら狙いは『』と言うよりは白か……。さて、どうしたもんかね）

「ああ、とりあえず目的だったか？ それだけ言うわ。それが面白そうじゃなかったら断ってくれていい。もうここには来ない。もちろん情報も伏せる。どうだ——？」

「嘘、ではないな。で、目的つて？」

「新しいゲームを紹介しに来た。俺と一緒にやらないか？」

.....

空には何を言っているのか一瞬理解できなかった。しかし、空の思考はすぐに理解する。

「お前、おもしろいな。今開けるちよつと待ってろ」



「で、俺らが『』だつて、どうやって分かった?」

比企谷と名乗る少年を家に上げた空は、はてなを大量に浮かべる妹へ事情を説明し、今は静かに太ももで寝かせている。

本当は知らない男なんぞに完璧美少女たる妹を会わせるわけにもいかないが、空が――そして白がお互いに離れられないことを考慮すれば、それはいた仕方がない事だった。

「それなんだが……。とりあえず先にお詫びさせてくれ。すまなかつた」

「――は?」

「いや、突然押しかけたのもそうだが、お前らの事を特定した方法があまりに非人道的だったからな。俺の方も切羽詰まつたとは言え、本当に申し訳ない」

きれいな正座で頭を下げる八幡を見て、空は少し引き気味だ。

「え、あーうん。まあ顔上げろつて。とりあえずその方法を教えてくれ、他のやつらにもそれで俺たちにたどりつかれちゃ敵わん」

「……それなら問題ない。俺にしかできない方法だからな」

「……?」

頭を上げ、やつとのことで話し始めた八幡に、空は「どういう意味だ」と言う視線を

送る。

「お前ら、サイドエフェクトって知ってるか？」

当然。『ボーダー』関係者でない彼らがサイドエフェクトについて知ってるわけもなく。八幡はサイドエフェクトについて説明し、自身のサイドエフェクトについても語った。

「つまりあれか、お前はそのサイドエフェクトって言う。超能力みたいなもので俺たちを発見したと……」

「ああそうだ」

「で、お前のそのサイドエフェクトが何だっけ？ 『思考投影』だったか？ つまり人の心を覗くみたいな認識でいいのか……。いや、心って曖昧なものより思考を読むって言った方がいいのか？」

ぶつぶつと空が思考に浸る。

空は先ほどサイドエフェクトを超能力と称したが、それは少しばかり違うと言っておこう。サイドエフェクトとはあくまでも人の延長線上に存在する力だ。空を飛ぶとか、火を吐き出すとか、雷を生み出すといったように、超常的な何かをできるわけではない。いくつかの部類に分かれるサイドエフェクトの中で、八幡のそれは、最高ランクの「超

感覚」と言われるものだった。

「あーこればかりは説明より見せたほうが早いかな……」

「え？　俺心読まれるとかすげー嫌なんだけど……。——あ？　てめえもし妹の心読んでみる！　生まれてきたことを後悔させてやるからなッ!!」

「お、おう。そんなことはもちろんしないが。そうだな、その心を読むってところがまず違ってる。違うって言うか本質じゃないって感じか。まあ百聞は一見に如かずだ。なんか適当に腕を動かしてくれ」

妹を抱き込むように庇ってっていた空は、警戒レベルを下げたのか、とりあえず言うとおりにした。

まずは単純に右手を上げる。するとそれと同時に、八幡も右腕を上げる。

「……………」

次に空は腕を軽く回した。先ほどと同じように、八幡も空と同じように、否、寸分狂わず腕を回す。

「——!!」

どうやらこの二つの動作だけで気づいたようだ。

(さすがは『都市伝説』まで上り詰めたゲーマーだ……)

「なるほど。だからお前、サイドエフェクトに名前が『思考投影』なのか。……………」

相手の思考を読むわけではなく、相手の思考をそのまま自身の脳へと投影する。つまりそれで俺らの事や場所を突き止めたってことか」

「正解だ。予想以上でたのもしいわ。流石は最強のゲーマー」

そう。それが八幡のサイドエフェクト。心を読むのとは確実に違うそれは、言ってみれば他人の脳で自身を動かすということ。

右手を空が上げた時、八幡は空が右手を上げようとしているからそうしたのではなく、空の脳の命令によつて右手を挙げた。他人の脳機能で動くそれは、空と『全く同じ』に腕を回した。

他人の脳を自身の脳へ投影する。故に、『思考投影』。

「でもおかしくないか？ 仮に、それで俺らの事を知ったとしても不可能に近いだろ。だって、明らかにデメリットが多い力じゃね？ それ」

——「すげえ。てか、ここまでだと逆に引くな、と。八幡は空のそれに素直に感心する。「それも正解だ。俺も最初これを知った時は大変だった。他人の思考と全く同じことを考えるし、同じ風に体が動くし、はつきり言つて呪いかと思つたぜ」

他人の思考で動くということは、そこに自身の思考は存在しない。単純に、誰かに体を操られるという感覚だけが存在するのだ。自分の意志で体を動かさず、自分の考えたいことが考えられない。

こと生きるに関して言えば、まったくと言っていいほど使えない力だった。

「当時はさすがにやばいと思つてな、訓練したんだよ。で、ちよつとずつだがコントロールも出来てきてな、今では、必要な事だけ取得できるようになった。対象は一人だけだが、そのためそいつとの距離は関係ない。まあ、人間の脳がそもそも意味記憶だの手続き記憶やら記憶部位だけでも複数存在するんだ。できないことはないってことだな」

「なるほどな。俺らを見つけた謎は解けた。それで、俺らにどうしてほしいんだっけ？

新しいゲームを紹介しに来たらしいけど」

「おっと、そうだったな。本題に入ろう」

八幡はそれから自身の考えと、自身の状況について語った。

同情を求めたかつたわけではない。ただ、どうせ聞かれるだろうと思ひ初めに話しただけだ。

「つまりあれか、お前は俺らにそのオペレーターつてのになつてほしいと？」

「そうだ。俺単体の力じゃ、いずれ超えられない壁にぶつかる。A級になれてもトップになれないし、そもそも、今この状況を打破できない。そのためにお前ら兄妹の力を貸してほしい」

八幡の目的は、最初に言った通りだった。要はスカウト。自身のチームへオペレー

ターとして入ってほしいと。

『『ボーター』内の戦闘は、ゲームだと思え。プレイヤーは』^{くうはく}。キャラクターは俺だ。お前らの指示で俺が動きお前らの思考で俺が戦う。うぬぼれてるわけじゃないが、単身での戦闘もそこそこなせる。どうだ』^{くうはく}、『『ボーター』で最強になってみないか?』
もし、『』^{くうはく}と言われている奴らが、ただゲームがうまいだけだったなら、八幡はここまで固執しなかつただろう。

技術だけじゃなかつた。相手の思考を読んでの戦闘スタイル。仮に、チートを使っても相手がチートを使うことまで織り込み済みのその悪魔的なまでの読み合い技術。最高級のチエスプログラムを完封したとされる最高峰の頭脳。知った時点でダメだった。こいつらとなら何ができるか考えてしまうのだ。

「ああごめん、違うわ間違えた」

「——?」

「お前ら』^{くうはく}『なんだろ? ならここで負けることすらないと断言しろ。負けるかもしれない低俗ゲーマーは必要ないわ」

挑発だった。もちろんこんな子供だましの挑発がわからないほど空は馬鹿じゃない。それでも。

「何個か質問させろ。俺らは見ての通り引きこもりでな、それについての対処法は?」

「それについては問題ない。チームを作った隊員にはチームで部屋が与えられる。そこにはいろいろ完備されててな、生活することも可能だ。もちろん給料もでる。『ボーダー』はあくまで職場だからな」

「移動や食事なんかは？」

「なあ、おまえら少しはその病氣（びきもち）直そうとは思わないわけ？」

その言葉に、空は——フツと鼻で笑うと。

「部屋から出たら負けだと思ってるぜ」

こう宣った。

「帰るわ。この話はなかったことで——」

「待て待て待て待て。今のは俺が悪かった。……少しだけ考えさせてくれ」

先ほどの関心の念はどこへ行つたのか、ジトーとした目で見ると八幡に——悪かったよ、とひらひら手を振る。

「なあ白、お前は どうしたい？ お兄ちゃんについてきてくれるか？」

今までめをつぶっていた白は、ぱちりと目を開けると——。

「……しろは、いにい——ついていく。……約束（いやく）通り——どこへ、でも」

そして空は言った。

「比企谷八幡だったか？ その話乗ったぜ。だが一つだけ条件がある」

「.....?」

『^{くうはく}』に敗北はない。つまり、これから先お前の敗北も認めない。それが最低条件だ」

八幡は顔に出さないまでも笑っていた。なぜなら空はこういったのだ。

引きこもりがどのより、『ボーダー』という組織が何かより。

——『^{くうはく}』が負けることのほうが問題だと。

ゲーマーとしての矜持。これを笑わずにいられる人間がいるのか。——否、最高の言葉だった。

「契約成立だな。よろしく頼むわ」

これは始まりも始まり。

「ああ、それじゃ——ゲームを始めよう。とりあえずS級交渉から考えよっか」
後に語られる『ボーダー』最強チームの出会いだった。

三話〕『オレのチームに來い。お前の力が必要だ』

風間蒼也が、比企谷と言う男を見つけたのは本当にたまたまだった。

(あいつは………)

自身のチーム発足のために有望そうな訓練生を探していた時だ。

「いい動きをする。すでにB級上位。いや、流石にまだ中位ぐらいか」

《スコープオン》を使い戦うその姿は、明らかに他の訓練生とは一線を画していた。剣術を学んでいるとかではなく、単純にトリオン体の使い方を知ってる。

才能ではなくセンスが良い。

風間がつけた最初の評価はこんなところだっただろう。

そしてチームメイトを探していた風間が、有望だと判断した比企谷に声をかけるのも必然と言えた。

「おいおまえ。少しいいか？」

「………」

有り体に言つて、風間は見事に無視された。

スタスタスタ、と。振り向きもせず歩いているところを見ると、もしかしたら無視ではなく聞こえてないのかもしれない。

「おい待て、アホ毛のお前だ。さっき125ブースで戦つてただろ」

「……………!?!」

そのアホ毛の男は、ビクつ、と体を震わせ、恐る恐る振り向いた。

言うまでなく、この男が比企谷八幡であり、先程の行動を解説するなら無視していたのではなく、自分に声をかけられていると考なかつた結果である。

（えっえっ？ 何？ お、おれ？ まじかよいつもの俺に声をかけると見せかけての、本当は奥の人間だつた作戦じゃないのかよ……………あ、その作戦名つけたの俺だつたわ……………）

被害妄想乙っ！ と、心の中で完結していることを見ると、人見知り——あるいはコミュ障と呼ばれる類の人物なのかもしれない。

いや、まあ、事実そうなのだが……………。

「急に悪いな、俺は風間蒼也という。今チームのメンバーを探していてな、たまたまおまえを見つけたというわけだ。とりあえずお前の名前を聞きたい」

「え、えーと。俺はひ、比企谷八幡です。あのチームつて……………えっ?」

流されるように自己紹介をしたものの、八幡にはなんの話だかまるつきりわかっていない。

「——？　そうか、まだ知らなかったか。……B級に上がるとチームを作るのが一般的でな、防衛任務なんかもチームで行うのが基本になる。ソロ活動なんかもできないはないが、上に上がるのには少しばかり厳しい。B級からA級に上がるにはポイントの確保にいささか時間がかかるからな」

「は、はあー。えーとつまりそのチームメンバーとして俺に声をかけてくれたと？」

「そうだ。B級に上がったら俺のチームに來い。お前の力が必要だ。すでに一人の戦闘員とオペレーターは確保している。このチームならトップを目標せると俺は思っている」

断られることを想定していないのか、要件だけを口にする。

この時の八幡の考えを言うなら、素直に「どうしようかな？」と考えていた。

話を聞く限り自身にデメリットはなく、むしろメリットの方が多いうだ。風間の実力だけが分からないが、それは入隊条件として見せてもらえば問題ないだろう。

よって八幡が出した答えは——。

「お断りします。誘っていただいてありがとうございます」

八幡
僕はキメ顔でそう言った。

「……………」

もちろんキメ顔なんで八幡は使っていないが、ほとんど考える素振りもなく断りを入れてきたは八幡に対し、風間にもわず口をつむぐ。

「それではすみません。B級に先ほどの試合ですになったので、その申請に行かないといけないうらしく……………」

と、その場の空気に耐えられなかったのか、八幡は逃げる道を選んだ。

断った理由は意外と単純。

八幡にとって大事なのは『ボーダー』で上に行くことではなく、自身の生活をいかに崩さないかである。

風間の誘いは八幡にとってもメリットはあり、ぜひチームに入れてほしいぐらいだったが、その八幡の目的とは少しばかりずれていると判断した結果である。

（あー断つちまったよ。もうあれだ俺に声を掛けてくれる奴なんて一生いないな。そして俺から声を掛けることもできない。つまりはボツチ確定。マジか、ここでもボツチになるとはもはや才能）

すでに、八幡の中では結論がでてているが、せっかく見つけた逸材を素直に手放すほど風間もおとなしくはなかった。

「——B級になったと言っていたな」

立ち去る八幡を引き止めるように。

「え？ まあそうですね。だからその申請へと——」

「なら少し俺と戦え。——ああ、勘違いするな。別に勝ち負けでどうのするではない。単純にお前の力を知りたい。チームの誘いを断つたんだ。これぐらいは良いだろう」

「………っ——」

それを言われると辛い。

いつも通り——あれがあれであれなので、と断つてもいいが、過去同様に失敗するの
が落ちだろう。「はあ？ 何言ってるのこいつ？」みたいな目で見られる率100%だ。

よって——。

「………わかりました。それぐらいなら構いません。その代わり、風間さんの個人
ポイント教えてくれませんか？ こっちもまだB級になったばっかなので、負けてポイ
ントとられるの嫌なんですよ」

今の八幡のポイントはスコアピオンで4012だ。仮にもし、風間のポイントが近
かったら一発でC級に逆戻りである。

と、八幡は思っているようだが、C級に戻るには1500ポイントを切る必要がある
のだ。

「それぐらいはかまわん。俺は《スコピオン》で9340のマスタークラスだ。この点差だと一回負けると3か4ポイントほど減る計算だろう。仮に俺が負けると200ほどは持つていかれるか」

——仮に、と風間は言った。つまり先ほどの戦闘を見た段階で自身が負けることはほとんど想定していないのである。当然だ。それほどに八幡と風間の中ではポイントと言う見える実力差がある。

別にそれで八幡はイラついたりしない、思ったことと言えば、相手がまさかのマスタークラスだと知って驚いているぐらいだ。

「えーと、じゃあ。五本勝負ぐらいがちょうどいいですか？ 時間の方もあれ何で……?」

「……おい、それでは五本負けた時にポイントが4000をきるぞ。良いのか？」
1500をきらなければC級には戻らない、それを知っている風間がこれを言ったのは、八幡はまだB級申請を行ってないからである。

点数はとられる上にC級には戻ってしまう。それが今の八幡の状態であるからだ。
実を言う……。

もしかして計算ができない馬鹿なのか？ と風間が考えてたりした。

確かに事実として八幡の数学の成績はあまりよろしくない。八幡の得意分野はあく

まで国語なのだ。とは言え——。

「いえ、そこは大丈夫じゃないですか？ 一回勝てば200貰えるのであればあまり関係ないので」

——今回は計算ミスなどではないが。

「……なるほどな。なら条件変更だ。一回でもお前が俺に黒星を付けられなかったらお前は俺のチームに入れ。ここまで挑発したんだ。これぐらいは飲んでもいいと思うが」

B級上がりたてのひよつこが、マスタークラスに一勝する。それがいかに難しい——いや、それを通り越して不可能な事は、少し『ボード』としてやっていれば判断できる。

しかし、八幡はそれをできると言っているのだ。相手からしたらなめられているとられても仕方がない。

「えっ？ ちょ、挑発？ そんなつもりでは……えっなんで？」

だが、本当のところは少し違う。八幡は『ボード』に入ってからまだ一週間と少しだ。平均的なB級へ上がる速度を半年とすると、そのスピードがいかに異次元的分かかると思う。風間が勘違いするのも無理はない。

要するに、八幡はマスタークラスの実力を、そこまではつきり認識していなかったの

である。

「いいな」

「……はい」

有無を言わさない風間の威光に、八幡は二つ返事以外の選択肢が見つからなかった。



綾辻遙と三上歌歩は、比企谷隊なるチームについて聞くために、風間隊の隊室まできていた。

「風間さんいるかな？　もしかして個人ランク戦してるかもしれないし」

「なら待つてようよ。さっきの麵食べて少し気持ち悪いし、ちよつと休みたい……」

「あははは……」

二人は、食堂でのことを思い出したのか、顔を見合わせて苦笑いを見せる。

するとそこへ。

「三上か……綾辻も一緒か？　どうした二人でこんなところに」

風間蒼也が顔を出す。

「どうやら二人の考えは杞憂だったようだ。」

「あつ風間さん。実は風間さんに用があつたんですよ。いてよかったです」

「俺に用……?」

「はい。実は来週のS級試験の実況を任せられて、それで比企谷隊の事を調べようと思つたら、歌歩ちゃんか風間さんなら何か知ってるかもと……」

比企谷隊と聞いた時、風間の眉がピクリと動いたことから、風間も相当来週の事を意識しているらしかった。

「なるほどな。確かに、あいつはすぐにS級に行つたからな……。ランク戦に顔を出したのもC級の時だけだと言つてたか? お前らが知らないのも無理はない」

「えーと風間さん? その言い方だとその比企谷つて人はC級からS級になつたみたいなんですけど……。ブラクトトリガーつて、扱える人たちが争奪戦を行うんでしたよね? そんな初期のころから強かつたんですか? その人」

「……? ……ああ、勘違いさせたな。そもそも比企谷はブラクトトリガーじゃない。『ボーダー』が持つてるブラクトトリガーは迅と天羽の二つだけだ。結論から言うなら、あいつは——いいや、比企谷隊はその隊全員でS級の称号を持つてるんだ。あえて言葉にするならS級チームつてところか」

「——えッ!!?」

二人からしたらもはや意味すら分からないだろう。どうやら比企谷個人ではなく、比

企谷隊としてS級と言う称号を持つてゐるらしい。さらには、ブラックトリガー持ちでもないときた。

「確かに。S級試験には『比企谷隊』が出るって発表されたけど……。私はあくまでオペレーターがいるからそう言つてただけだと思つてた」

「いやいやいや。歌歩ちゃん重要なのはそこじゃないでしょ!?! ブラックトリガーなしにS級なんだよその人たち!! 普通A級までしかないんだからどう考えてもおかしいでしょ!!」

歌歩の「あつ確かに……。」と言う言葉を聞く限り、もしかしたら歌歩と言う少女はいささか天然が混じつてゐるのかもしれない。

「あの風間さん。もう少しちゃんと説明してほしいんですけど……。はつきり言つて余計分からなくなりました」

「そうだな。俺が知つてることと言つたらそこまでないが、それでもいいか?」

「はい、お願いします」

二人の返事は早かった。

もうなんか餌を待ちきれない犬の用だと表現してもいいだろう。

そんな二人に、風間は開口一番こういつた。

「はじめから話すとなるとそうだな……。俺は負けたんだ。その比企谷にな……。」

「——え？」

一瞬なにを言ってるか理解できなかった。

——負けた？ あの風間さんが？

「比企谷がB級になりたてのころ、俺のチーム入隊をかけて戦ったんだが、ものの見事に負かされた」

「はっ!?!」

今度こそ理解の範疇を超えた二人の声の大きさに、風間はわずかに顔をしかめた。



風間が入ったのは179ブース。

それを確認した八幡は——もう逃げちやおうかな、なんて最低なことを考えていた。

もちろんそんなことをする度胸は八幡にはない。

(オイオイ、なんでこんなことになってんの？ 俺の人生基本的に負けしかないんだけど……)

こんな時でも、卑屈に笑って何かしらの方法でやり過ごすのが八幡なのだが、今回は笑えない。

「準備できたか？ 出来次第俺のブース番号を指定しろ。訓練生とは違い、正隊員は黒

色になつてゐるはずだ』

「了解です」

どうやらもう逃げ場はないらしい。腹を決めるしかないようだった。

八幡は、イヤイヤ——本当にイヤイヤ、相手への申請ボタンを押した。

『市街地区A。正隊員5本勝負。——開始』

転送された八幡は、店内放送のように空に流れるそれを聞いた。

市街地区A。八幡からしたらAもBもCも違いなど分らないが、簡潔に言つてどこにでもありそうな住宅街。そんなイメージを抱いた。

トリオンで構築されたこの空間は、トリガーなんてものよりよほどすごい技術なのではないだろうか？　なんてことを、八幡は訓練生初期のころは思ったものだ。

個人ランク戦のステージはチーム戦よりも狭く、一辺一キロメートルの正方形だ。

仮に、500mの距離を狙撃できるスナイパーがいた場合、真ん中に陣取れば、ほぼ全員を狙撃できる計算だ。もつとも、高低差やら気候によつても変わるためそんな単純ではないのだが。

「とりあえず一本目は様子見るしかないか……」

八幡はその場からじつと動かず、風間が自身のところまでやつてくるのを待つてい

た。

面積1キロ平方メートルと聞けば、「待ってたら時間がかかりすぎる」と考えるかもしれないが、トリオン体での移動は通常の場合とは一線を画す。

単純な計算だと生身の5倍から10倍。それほどの差があるのだ。個人によって性に差が出てしまうのはトリオンの差とは別に、精神面が大きな理由の一つだろう。

トリオン体ではビルからの落下にも耐えられる。と言うより、トリオン体にはトリオンでしか傷つけられない。

しかし、だからと言ってビルの上からダイブできるか？　そう問われれば恐らくできない。

よく漫画などでは、空を飛ぶ力を得た主人公が平気で屋上から飛んだりするが、現実の世界の人間がそんなことを平気でできるだろうか？　考えるまでもなく不可能だ。飛べるとわかっていても、もしもの事に恐怖し足がすくんでしまうのが落ちだろう。

トリオン体での性能の差とはそういうことだ。いかに傷つかない体でも刃物は怖いし、銃は向けられたら動けなくなるものだ。家の上をポンポン飛べないし、拳を本気で振るうのはためらうものだ。

もちろん、慣れれば問題ないし、慣れなければ『ボーダー』としてやっていけないだろう。逆に言えば、精神にためらいがある奴は上に上がれないということだ。

「隠れもしないか………。余裕だな」

八幡の背後からそんな声がした。

振り向くまでもなく、その声の主は風間であり、それ以外はありえない。

「別に余裕とかではないですよ。風間さんのメイントリガーは《スコピオン》だと言っていたので、どうせ近接戦闘になるならと動かなかっただけです」

「俺が銃手ガンナーか射手シューターのトリガーをセツト

してるとは考えなかったのか？」

そんな当たり前の疑問に……。

「えっ？ 持つてるんですか？」

「いや、俺は近接専門だ」

「なら——その質問意味ないですよね」

「………」

なるほど、と。風間は少しだけ比企谷八幡と言う男を理解する。

（俺の質問に対して、自身の考えを口にしないか。結論を言わず、スルリとかわす。面倒な思考だ）

本質。ではなかったが大かたその認識は間違っていない。

八幡からしたらわざわざ敵に自身の思考を披露する必要はないし、そこから自身の戦

闘スタイルを予測される恐れがある。適当にあしらった方が楽なのだ。八幡からしたら『俺は近接専門だ』という言葉——情報を引き出した時点で得したともいえる。

「じゃあとりあえず開始ってことでいいですかね」

「律儀なやつだな。真正面からの戦闘が望みか？」

そんな戦闘中とは思えない会話をし——

二人は動いた。

ガキンツ！ と、二人の《スコープピオン》がぶつかり……そのまま——八幡は地面を蹴り後方へ下がる。

一瞬の攻防。

「当たったと思ったんだがな……」

それは風間の声だった。

両手に持つ《スコープピオン》。どうやらそれが彼の戦闘スタイルということだろう。

「当たってますよ。もう少しで首を持ってかれるところでした」

「それを俺は当たったと言わん」

パクリ、と。八幡の首から切れ目が生じる。

訓練生用のトリガーは一つしかセットできない。武器一つの相手しか経験したことない八幡へこの不意打ち。どうやら風間と言う男も、こと戦闘においてなかなか性格

が悪いらしい。

（マジかあの人。劍速が訓練生の比じゃねーぞ。しかも二刀流とか……ちよつとかっこいいな）

実はこいつ余裕なのではないのだろうか？ 八幡の無駄思考は最悪だが、一合とは言え風間と斬り合つて生きてる訓練生は珍しい。

流石は風間が見つけた隊員とでも言うべきだろう。

「次、いくぞ」

もちろん、風間がここで手を休める理由はなく、真つ直ぐ八幡へと飛び出した。

先ほどと同じ状況。であるなら、八幡に二度目はない。相手はあの風間蒼也なのだ。二度も同じ方法で逃げることなど叶わない。

風間の攻撃は——同様に一撃目の劍は止められた。

「……………おッ——」

八幡は間抜けな声と共に、体を無理やり後退させられた。つまるところ、風間はその劍を押し込んだ。より簡単に言うなら体重を乗せたのである。

そして、そのまま二撃目。これでもう避けられない。体重が後ろに乗った状態で、後ろへの退避はほぼ不可能。

これは風間の思考による対策と言うより経験だ。こうすればあなる、あなればこ

うする。数百にも及ぶ戦闘経験値が、その場その場での最適解を無意識に検索する。
 (これで一本だ)

風間のそんな心の声は、次の瞬間否定される。

「——ッ!!?」

グツと。風間の剣が動きを止める。止めたのではない。止められたのだ。

八幡の持つ、二本目の《スコープピオン》によって。

(さて、訓練生にはトリガーは一つしかセットできない。こいつはB級申請をしていない。ならこれは……——なるほど)

「枝 ブランチブレード 刃か……」

「……?」

どうやら八幡はその名前を知らなかったらしいが、行ったことは同じである。

体の中で《スコープピオン》を分岐させ、刃を増えたように見せるそれは、簡単そうに見える使いどころが難しい技である。

(だがおかしい、ここまでの長さに分岐させた《スコープピオン》で俺の刃をうけられるのか? それとも相当トリオンがあるのか……)

そう。もともと耐久性が低い《スコープピオン》では枝 ブランチブレード 刃を使った段階でそれがさらにひどくなる。相手の虚を突くときならいざ知らず。防御として使う奴などそういうな

い。

そして、初めに明確にするならば、八幡のトリオンはそこまで多くない。

風間よりは確かに高いだろう。しかし、上位の方ではあるがトップクラスではない。
『銃手ガンナーとしてなら十分だ』その程度だった。

「考え事ですか？」

八幡の蹴りが風間を襲う。

「……………グッ!? ——ちっ……………!」

無理やり風間は後退を余儀なくされる。だが、それだけでは終わらなかった。

(……………ッ!! 斬られた? いつ?)

風間の体に刃が貫通したようにトリオンが漏れる。

「枝ブランチブレード 刃でしたっけこれ？」

八幡は両腕に分岐させたそれと——足アシから出したそれを見せながら風間に聞いた。

「そういう事か。あの蹴りの時に」

風間が気づかなかったのも無理はない。ただでさえ両腕分まで《スコープオン》をのばしていたのだ。風間の刃に対する耐久力を維持しつつ、足からも出すとは考えずらかったのだろう。

単純に舐めていたともいえる。

(スコープピオンの刃を潰して耐久力を上げたといったところか……。器用なやつだ)

「なるほど。強いな」

「……どうも」

「なら、俺も本気で相手をしよう」

「……？」

「どうやら本気ではないらしかつた。——マジかよ、と言う絶望の声を八幡はおし殺し、それでも黙って《スコープピオン》を構えた。

しかし。

「……えっ」

風間の姿が消えた。文字通り世界に溶け込むように消えたのだ。

——いったいどこに……？ そんなことを考えていた八幡は——次の瞬間。

その首が宙へ待った。

『トリオン体活動限界。緊急脱出』

バイルアウト

機械的なその声を、八幡は最後に耳にした。

四話〉『俺とくればトップまでいかせてやる』

それは比企谷八幡にとって初めての敗北だった。

元いたブースのベットへと転送され——ボスンと音を立てながら落ちるそれは、自身が負けたことを如実に告げていた。

少しの間何が起こったか分からなかった八幡は、風間の言った——。

「一本目だ。次いくぞ」

その声で我に返る。

（えっ？ 負けたのか……。全く見えなかった。ていうかなんだあれ？ ……

高速で動くトリガーか、それとも姿を消すトリガーか——？）

——まあどちらにしろ。

「チートすぎるだろ……」

どんよりと言う言葉が適切な今の八幡に対し、トリガーの予測は当たっていた。

言うまでもないが、これは後に風間隊の代名詞たる《カ隠密メトリレガーオン》である。付け加

えるなら《隠密トリガー》は、まだ開発から日がたっていないこともあり、使っているのは風間蒼也一人だけ。

故に周りの認知度も低い。

八幡が知らないのも無理からぬことだった。

「さて、どう対応したもんかな」

——もう負けでいいです。と言いたい気持ちをぐつと抑え、八幡は転送ボタンをポチッと押した。

『二本目開始』

抑揚のない声と共に告げられるアナウンス。

八幡の腕に表示されているレーザーには風間の居場所と現在いる自分の位置が表示されている。

レーザーはトリガーではなく通常装備だ。これがなければ敵の居場所も分からず無駄な時間を過ごすことだろう。その代わり『ボウダー』ではバックワームと呼ばれるレーザー無効のマントを開発している。主に狙撃手が自身の補助に用いるが、トリガーの枠を一つ分消費してしまうのがいささか使いづらい。

そして言うまでもないことだが、八幡は先ほどまで訓練生だった。故にそんなものは

持っていない。

(距離はまだあるか……)

リーダーによると今回はそここの距離がある。それでも一分あればいい方と言う距離だが、八幡が対策を行うには十分な時間である。

「あー作り物と知ってても、家を壊すってのはなんかイヤな気分だな……。ひ、人とかいけないよね？」

そんなことを言いながら、八幡は近くにある一軒家やら地面やらを粉々にすべく破壊していく。

ガラガラ、と音を立てながら崩れるそれを見て、八幡の顔はなぜか満足そうだ。もしかしたら今日のストレス発散にでも使ったのかもしれない。

そして、それは唐突に――。

「来たか……」

八幡の視界の端にそれは映った。

それとほぼ同時。空から落下してきた風間が、二本の刃を振り下ろしてきた。

八幡は先ほど同様《スコーピオン》を体の中で分岐させて防御する。だが――。

結論から言つて、八幡は選択を間違えた。

風間が使用したトリガーに目が行き過ぎたのだろうか。先ほどそうだったではな

いかと——前の戦闘で学習したはずだっただろうと。つまるところ。

——風間蒼也には、同じことが通用しない。

「……………なっ!」

八幡の肩が切り裂かれる。

咄嗟に、肩からもれるトリオンを抑えながら、八幡は距離をとる。

傷は思ったより深かった。右腕は反射的に避けたことでかすただけだが、左の方は恐らくもう動かせないだろう。

「どういう事だ……………?」

防御はしたはずだった。目でも追えていた。さつきは防御できた。ならばなぜ。

考える可能性は先ほどと違う状況だということ……………だけ……………?」

——まさかっ。

「……………落下時のパワーをプラスした、のか——?」

その通りだ。風間が行ったのは剣道やらではありえない、三次元空間の戦闘への利用。

落下時のベクトルを足せばスコープオンを割れるなどシビアな計算を、風間は過去の経験だけで確信していた。

そんな八幡の独り言に、

「正解だ。そして——これがお前と俺の差だ」

律儀に、風間は答えてくれた。

それは余裕などではなく、ただ当たり前的事だったからだろう。

『これがお前と俺の差だ』つまりこれが経験値の差だと。あたかもそれを見せつけるかのように。

「……………」

八幡は押し黙る。流石に理解した。この人は強いと。

しかし、そこで終わる程度なら、風間は八幡に声をかけていなかっただろう。

「……………」知ってますか風間さん。『戦えないことは戦わない理由にならない』らしいです。面白いですよ、戦えないのに戦うなんて」

俺なら逃げますけど、と続け。

「——？」

——何が言いたい。そう問おうとする風間の答えを、すぐに八幡は口にする。

「なら、俺はこの言葉を推奨します。『負ける理由が負けない理由にはならない』そんな言葉を……………」

一瞬、風間はポカンとしたあと。意味を理解し笑みを浮かべる。

なぜなら八幡はこういったのだ。

——俺の負ける理由がなんであれ、それがあなたの負けない理由にはならないと。

「なら勝ってみろ」

「そのつもりです」

その言葉を最後に、二人は同時に動いた。

《スコープオン》同士の接触。トリオンでできたそれは、技術班のプライドか何かなのか、まさに刀同士がぶつかたように金属音をまき散らす。

八幡は片腕だけでなく、体のいたるところから攻撃できる特性を生かし、動かない左腕を庇うように戦っていた。

周りから見れば、相手があの風間蒼也だということを考えると、よく打ち合えていると思う程度だろう。

ただし、その中身ははっきり言えばおかしいことこの上ない。

変幻自在。取り出し自由。それを売りにしている《スコープオン》ではあるが、それをフルに使った戦い方ができるようになるには、数ヶ月にも渡る実践と、訓練が必要だ。さらには、ほとんど防御という機能を捨てているそのトリガーで、守りにを主体としてもたせている今の現状は、はっきり言って異常ですらある。

まあそれでも——。

「……ッ！ くそっ——」

明らかに少しづつトリオンが削られていく。

こればかりは運がなかった。風間が相手だったのではなく、単純にスコープオンを使ってきた年季が違う。仮に技術面が同じでも、風間はそれに対する術を心得ている。

不意をつけない。結果、相手は憶する必要がない。それは戦闘への余裕につながり、パフォーマンスの向上を図る。

(マジで強いな………。挑発したは良いけどこのままだと……。ツ)

思考は止めない。止めたら負ける。

そして、八幡は距離をとる。

しかし――。

「それは失敗だ」

風間の姿が消える。

八幡は風間が《カ隠密メトリレガン》を使う時間を与えてしまったのだ。

我慢できなかった。とりあえず逃げるしかない。八幡はそう思ったのだと――。

そんな風に、風間は考えてしまった。

なぜなら。これこそが狙い。

「――ッ、そこか……。――」

抑揚ない声と共に、投げナイフのような形にした《スコープオン》を、八幡は何もない空間へと投げつける。

(当たった感覚はない、外したか?)

「ん? こつちか——?」

次も八幡は狙いをつけ同様に投げた。

すると今度はグサリ、と。

——当たったか。

そして。

八幡の視線の先、何もない空間から、驚きの顔を隠すことなく——風間蒼也は姿を現した。

風間の今の気持ちを代弁するのはいささか難しい。

なぜなら、風間ですら何が起こっているか分からなかったからだ。

(なんだ……? 確実に《隠密トリガー》は起動していた。見えているわけがない)

警戒しながら、ズサリと、風間は後ろへ下がった。

感じたのは違和感。そして、見つけたのは確信。

そこで風間は答えを知る。

「まさか……音か？」

「マジかよ。もう気付いたのか」

八幡が破壊した瓦礫と化した家やら地面。それは風間の《隠密トリガー》対策だった。仮に、見えないほど高速で移動するトリガーがあつたとしても、こう足場が悪ければ発動すらままならないだろう。そんな高性能なトリガーが、それほど自由に使えるとは思えない。そして、それが消えるトリガーなのであれば、いまのように音で判断できるだろうと。

「だからここ一帯を破壊したのか。下がつたのも俺に《隠密トリガー》を使わせるためだと……挑発もその一種だな」

「——まあ、そういう事です。ここまですぐとくは思わなかつたですけど……。実際のところどんなトリガーが判断がつけばいいな程度でしたから」

その言葉に、風間は思わず拳を握る。

《隠密トリガー》はまだ開発されて日が浅いトリガーだった。だから気づけなかつたなど言い訳にもならない。こんな単純な手に引つかかるほどに、風間はこのトリガーについて知らなかつたのである。

開発されたばかりとは言え、風間もそれなりにこのトリガーを使ってきた。使い慣れていないということはなかつたはずだ。

もし問題点を挙げるなら、試した相手が悪かったのかも知れない。個人一位の弧月馬鹿も、A級になりたての槍馬鹿も、才能豊富の弾馬鹿も。全員細かい戦法と言うより感覚派である。

結果、八幡のように対策らしい対策を行ってきた者がいなかったのだ。

そしてさらに。

「そのトリガー、使用中は他のトリガー使えないっほいですね。使えたなら《シールド》で防いだでしょうし……。えっ？ さすがに《シールド》を入れてないことはないですよね？」

ここまでばれる。

将来。風間隊として《隠密トリガー》が使われたことを考慮すれば、本来は集団戦こそ本領を発揮するものなのかもしれない。集団戦なら、移動音など聞こえないほどに周りの音が響くだろうし、仮に聞こえても複数の音を把握するのは不可能だ。

菊地原と言う『聴覚強化』のサイドエフェクトを求めたのも、これを想定しての事だったのかもしれない。

「でも、まあ今回はこれで終わりですかね」

「……、」

———「どういうことだ？ 風間は聞く前に理解する。」

パキパキツ、と。八幡の体がひび割れるように崩れたのだ。

「さすがに、トリオン流し過ぎました」

『トリオン漏出過多。緊急脱出』
ベイルアウト

比企谷八幡と風間蒼也。二人の二回戦は幕を閉じた。



ベットに寝つ転がったまま八幡は思考する。

（はあ、さすがに二回目は通用しないよな。どうするか……あれ？ これ詰んだっぼいな）

単純な戦闘では、八幡は風間に勝てない。それは先ほどの戦いで理解した。

そもそも、訓練用トリガーで戦ったのが間違いだったのかもしれない。

「まあ、なるようになるか」

やれることをやるしかないだろうと。八幡は通話ボタンを押す。

「風間さん、次始めていいですか」

『……』

返事がないただの屍のようだ。——じゃなくて、なぜか風間から返事が来ない。

(あれ? 通話つながってるよな。——なッ! もしかして帰ったのか! し、しまった油断した。かくれんぼで隠れている最中に他のみんなが帰った時以来だから覚えていなかった……だと……!! おのれ風間許すま——)

「俺がこの勝負を仕掛けたのは、お前に『ボーダー』と言うものを知ってもらうためだ」
唐突に、声が聞こえた。

「えっえ……? 風間、さん? ……あれ、帰ったんじゃ……?」

「どうやらこのボツチは本当に帰ったと思っていたらしい。」

「俺の個人総合は9位。つまり俺の上に8人いるということだ。恐らくお前は一人でもそこまで行ける。だが、一人ではどこかで壁にぶつかる時が来る」

「……」

そして風間も八幡のそれは無視するらしかった。

そのまま、風間は続ける。

「他のチームを考えるのも一つの手だろう。俺のように自分でチームをつくるのもいいかもな。だが、俺はこれだけは約束できる」

そして。

「俺とくればトップまで行かせてやる」

それを言った。

そこまで聞いてそういう事か、と。八幡は理解する。

「なるほど。いちやもんつけて俺と戦う気満々だったわけですね。案外性格悪いですね、風間さん……」

実のところそうなのだろう。

隠密トリガーカメレオンと言う性格の悪いトリガーにいち早く目をつけ、それにキーマンとなる菊地原をもつとも最初に手に入れた。

ニヤリと笑う風間の顔が、それを証明しているようだった。

『『どうだ。俺のチームに入る気になったか？』』

二度目の勧誘。

もしかしたらもう二度とこんな良い人はいないかもしれない。八幡は素直にそう思えた。

断る理由はもうないのかもしれない。

だが、性格の悪さ——ひねくれ度で言えば八幡も負けてはいなかった。

「風間さん。一つ聞きたいんですけどいいですか？」

『『なんだ』』

「サイドエフェクトってランク戦で使用していいんですか？」

八幡は知らなかったのだ。サイドエフェクトを使っているのか否か。まあ、単純に聞く相手がいなかったただけなのだが。結果的に八幡は今までランク戦でサイドエフェクトを使った試しがないのだ。

『なんだお前、サイドエフェクト持ちだったのか。もちろん使っても問題ない。サイドエフェクトはあくまで身体機能、才能と言う認識だからな。常時発動型もいることを考慮すれば、それをなしと言うのは無理だろう』

——そもそも、と。そう続けて。

『才能を出すな、など。普通に考えてありえないと思わないか？』

「……た、確かにそうですね。ありがとうございます」

八幡はサイドエフェクトを才能などと言ったように良いものだと言う認識がなかったため、風間の言い分は少しばかり納得できないが、使えるならかまわないと、頭を切り替える。

「それでさっきの答えですが。そうですね……。条件を変えさせてください。戦う前は風間さんが俺に全勝したら入ることになってますけど、それを五本勝負で三本勝負つことに変えましょう」

『なに？』

「あー五本勝負の理由は今回がたまたまそれだったてことです。要は三本とった方が勝

ち。次の試合を風間さんが勝てば俺はチームに入る。残りを俺が勝てばその話はなし。ハンデなしのシンプル勝負。……で、どうします?」

風間は眉を顰める。

はつきり言つて何を言つてる分からなかった。本音を言うなら——こいつは何をしたいんだ、と。

『いいのか。お前の不利になったように俺は感じるが……』

「……大丈夫です。俺もここからは本気でやりますから。——回りくどかったですかね? 要はトップになれるか試させてくださいってことです」

『ほう……』

——面白い。そう言いたそう声で風間は笑う。

『なら始めるか』

その前に——。

「まだ手を抜いているなら本気出した方がいいですよ」

ただ、ここで悔いを残すべきだとは考えなかったから——。

「多分。そのままだと勝てないと思うので」

八幡は、親切心で本当の事を言つてのけた。



「えーと風間さん……。もしかして今風間隊に比企谷って人がいないということ……」

「最初に言っただろう。俺は負けたと」

質問しといてなんだったが、綾辻は開いた口がふさがらなかつた。もちろん三上も同様である。

その話が本当なら、当時個人総合9位だった風間蒼也を、比企谷と言う子は訓練用トリガーで倒したことになる。

「嘘……。今までそんな噂聞いたことなかつたし、そんな強い人がいたなんて知らなかつた」

綾辻遥の『ボードァー』に入った時期は、ほとんど『ボードァー』発足時といつても過言ではない。

その綾辻が知らないのだ。訓練生がマスタークラスを倒すなんて出来事が、まわりに認知されていないことに驚いたのである。

「それは恐らく偶然だろう。比企谷は目立つことを嫌っていてな。なるべく人がいない時間にランク戦を行っていたらしい。俺との後も、何度も「このことは黙っててください

いと」念を押してきたからな」

「えーつと、疑うわけではないんですが、それって本当なんですか……?」
それほどまでに二人にとっては信じがたい事なのだろう。

お互いにA級部隊のオペレーターを任せられる身。

当時からA級部隊だった風間隊に誘われた三上はともかく、綾辻はB級のころからやつとの思いでA級まで上り詰めたのだ。戦闘員でこそない二人だが、自分たちの隊の人間がそこまで上がるのに相当の苦勞から来ているのを彼女たちは知っている。

「それでその……比企谷って人はどうしてS級に? それほど実力があるならすぐにA級に上がれると思うんですけど」

当然の疑問だ。そもそも、S級とはブラクトリガーありきの称号だ。ノーマルトリガーとは明らかに性能が違うそれでランク戦などを行えば、ポイントを根こそぎ奪ってしまうことを考慮された結果なのだ。

つまり、比企谷……とより『比企谷隊』はランク戦に出れば他を圧倒できるほどの力。まさにブラクトリガー並みの戦闘力を誇るといことだろう。

「あいつがS級になった理由はしらん。ただ、チームメイトは比企谷が勧誘してきたようだったな。確か『二人』ほどだったか?」

「二人? だとすると戦闘員は比企谷って人ともう一人つてことですか? それならな

おさらS級じゃなくてA級でいいと思うんですけど……」

そんな二人の疑問に、風間は首を左右へと振るう。

「いや、それは違う。比企谷が言うにはその二人をオペレーターとして勧誘したらしい。あくまで戦闘員は比企谷だけだ。だから上の方も『比企谷隊』をS級にしたのだろう」

二人の考えは思いのほか的外れだったようだ。

しかし、聞けば聞くほど謎が深まる隊である。

もうなんか『都市伝説』みたい、と。二人は思った。

「そもそも、どうやってS級になったんですか？ A級に上がって強すぎたからの処置なら納得できますけど、その人すぐにS級になったんですよね？ 強い人がいるって噂が流れてない以上、比企谷って人がS級になるの不可能だと思うんですけど……」

「これは俺も見たわけじゃないが、どうやら直接上と交渉したらしいな。『S級の誰か倒すのでS級の称号くれませんか？』とな。目立つことが嫌いな割にはぶっ飛んだ奴だ」

——ほんとにぶっ飛んでますね、と。三上は思いながらも口にしない。

「もちろんB級なりたてのひよつこが言っても上層部は聞き入れなかつたらしいが、迅がやった方がいいと言つてな。結局迅と戦つたらしいが、その時に迅を倒してS級になったとは聞いた」

「——えっ!? 迅さんを倒したんですか?」

「ああ。期間を開けて天羽ともやらせたらしいが、その時も勝つたらしくそのまま継続。大きく発表されなかったのはブラックトリガーに対する周りの認識を変えないためと、単純に比企谷の様な事を言う人間を増やさないためだったな。そうポンポンとブラックトリガーと戦わせるなど言われたら、上層部も困るだろう」

二人はうんうんとうなずき……。

「なるほど……つて！ 天羽君にも勝つたんですか？ 単純なブラックトリガーの性能なら《風刃》をしのぐ天羽君のトリガーを!? そ……そんなにすごい人がいたなんて——」

「まあ、比企谷曰く、『オペレーター二人がいないと俺はヘツポコです』と言っているらしくてな。まあ確かに……迅が言うには、『比企谷単体だと総合でトップになれるほどはあるが、ブラックトリガーに勝てるほどではない』そうだ」

「えっ……? ならどうやって——?」

「本当かは分からないが、オペレーターがつくと明らかに強さの次元が違うらしい。まあ、比企谷自身、自分を過小評価する癖があるからどこまで真実かは疑問だがな」

「その……どのくらい強いんですか。その人……」

「そうだな……。聞いた話だが——迅の『未来視』のサイドエフェクトに、影浦の『感情受信体質』、菊地原の『強化聴覚』を“仮に”持っていたとしても説明がつかな

いらしい」

「……………」

——いや、それ本当に人間ですか？ そんな疑問を、綾辻と三上の二人は抑え込む。

「まあ、オペレーターがつけばの話らしいがな」

その言葉に、オペレーター二人は黙り込む。

なぜなら。もし風間の話が本当なら、オペレーター次第で部隊のレベルが大きく変わる証明なのだ。

すると。

「気にするな。俺も嵐山もお前たちには感謝している。間違いなくお前らはオペレーターとして優秀だ」

二人の心を感じ取ったのか、風間は素直な気持ちで口にした。

こういったセリフを簡単に口にするところが、風間蒼也の良いところなのだろう。しかし——。

「それでも納得できなければ、比企谷に直接聞けばいい」

少しばかり口が過ぎるが。

その言葉に、二人は——そうか！ という風に手を叩き、比企谷八幡捜索隊は結成された。

五話〉『一応聞くけど勝率は・・・・・・・・』

『今回の相手だが、今日中にA級の遠征部隊が帰還する。それに伴い、君の相手はA級上位部隊が務めることになる』

『試験はA級の帰還時期を考えて、一週間だ。準備をしておくように』

「——つてわけで試験は来週日曜の一週間後。相手はさつき言った通りだ。・・・・・・・・で、なにか質問は？」

その場所は、今『ボーダー』で噂がもちきりの『比企谷隊』隊室である。

そのリーダーたる比企谷はもちろんそんなことは露程も知らないが、知らないことが幸せなこともあるだろう。一応補足しておくなら、対人恐怖症及び引きこもりの空と白もそんなことは知らない。理由は単純外に出ないからである。

「今回はA級が相手？ それで試験になるのと思ってるのか？ 俺らくわはく『相手に？』」

その疑問はもつともだろう。過去S級を下した比企谷隊にそれ以下のA級部隊をぶつける理由がない。

「——？ ああ、言葉が足りなかったな。A級部隊一つじゃなくて、遠征部隊の3チーム

合同だ。まっ多勢に無勢つてことだな」

「へー、てことはつまり……」

不敵に笑う空の言葉を引き継ぐように――。

「……しろたち――いじめられて、る……?」

白が怯えるように口にした。

「……」

どうやらぼっちに『合同』やら『多勢』という言葉は禁句らしい。

「いや、なんでだよ……」

「悪い悪い。引きこもりの弊害でな……。てか、ハチも一瞬――まさかッ！ み

たいな顔してたぞ。さすがはぼっちマスターだな?」

ニヤニヤ笑う空の言葉に、八幡は――ほっとけ、と言うように顔をしかめる。

「で、話戻すけど……。A級の1位、2位3位を全員倒せば俺らの勝ちでいいん

だな?」

「まーそうだな。一応聞いとくけど勝率は?」

八幡の何気ない質問に、空はニヤリ笑うだけ。

「……」。愚問だったな」

同様に八幡も――フツと笑みを浮かべる。

真剣な空気だった。八幡も『も即座くわはくに相手の研究を開始した。

——それがゲームならどこまでも本気。そんな空と白の言葉を八幡は思い出す。

しかし唐突に。八幡が言った次の言葉で、その空気が変わる。

「そう言えば今回の試験。ランク戦並みの規模で行うらしいぞ」

ポチポチとゲーム機を片手に対戦チームの研究をしていた空の手が止まる。

「——は？」

「なんか今回はA級が相手だから、隠してやる必要がないんだと。おそらくA級部隊が出るから周りの隊員の勉強も兼ねてるんだろ」

今度は持っていたマウスを白が落とした。

「わ、悪いな……俺もなんとかならないかと言ったのだが、忍田さんに試験を行う条件と言われたら言い返せなくてな……」

すると。何をとち狂ったのか——。

「ハチ……」

「ハチ兄……」

ぼつりとうつむきながら、空と白はそれを言った。

「もう俺たちはダメだ。今回はあきらめてくれ……」

「・・・・・・・・がくがく・・・・・・・・ブルブル——」

どうやら最強ゲーマーは死んだようだった。

「つて待てまで——!! えっ何? お前らそれだけで再起不能になるの? どんだけ心弱いんだよ! ミジンコでももうちよつとましな精神持つてるだろ!」

「なんとでも言うがいい。人前に出るくらいなら、俺たちは引きこもりを選ぶ!!」

「・・・・・・・・『くうはく』に・・・・・・・・、敗北、は——ないッ!!」

「そこはもう死を選んどけよ! お前らの思考はマックスコーヒーか? てか白ちゃん? 人前に出ることが敗北なんてダメな大人になるから言うんじゃないやありませんっ」

——。 本当ならば、今この場では対戦相手の研究こそが行うべき事柄だっただろう。しかし

「よし、わかった。なら訓練をしよう。お前ら今から部屋から出て『ボーダー』内を歩き回ってこい。それで引きこもりは解消だ」

「てえめーハチツ! お前には人間の心はないのか!? お前がその気なら俺らも条件を出そう。ハチが今日中に友達を10人以上連れてきたら俺らもそれをやろうではないか!!」

「・・・・・・・・ハチ兄、友達——10人もいな、い・・・・・・・・。だから・・・・・・・・しろたちも——やらな、い」

「じゅ、十人ぐらい友達いるし!? オイなんだその哀れみの視線は。強がっちゃってみたいいな目を向けられない!! 認めるよ. ! いねえよ友達なんか。そもそもどこからどこまでが友達の定義から——」

「. まえ、ハチ兄がいった。——それがもう. 友達いない奴の、セリフだつ、て.」

「. ぐツ」

「. しろ、その時——傷ついた.」

「えつまつて. ? そこで涙目になるのはせこいだろ. ——ツ!
わかった。わかったよ! 俺が悪かったからそんな顔で俺を見ないでくれ。そして空、その殺気をとりあえずしまえ」

と数十分に及ぶ三人の喧嘩は続き。

「思ったんだけどさ. オペレーターのお前ら人前に出なくて. ?」
「. あっ」

その言葉で幕を閉じた。



『相手の研究次第だが、恐らく今回はあのトリガーも使うことになる、明日までだ。明日までに完璧にしてこい』

空のその言葉によって、八幡はあるところまでやってきた。

八幡はブラックトリガーではない。ならば、使っているのはノーマルトリガーであるわけで、つまるところ、訓練無くして成長が期待されるわけもなく……。

「……………宇佐美。訓練室借りるぞ。適当にトリオン兵出してくれるか?」

八幡は玉狛支部へやってきていた。

「およ? おーハッチーじゃないか! 久しぶりだねここまで来るなんてー」

「まあな。今日は誰かしらと対人戦行いたかったんだ」

「あー……………。ハッチーS級だから本部じゃ戦えないんだもんね」

「そういう事だ」

八幡は基本的な訓練は隊室についている訓練室か、ここ玉狛で行っている。

S級になったにも関わらず、八幡の認知度が低いのはそう言った理由もあるのだろう。

「それならトリオン兵でいいの? こなみ今いるよ?」

「小南かよ。あいつ自分が勝つまで続けようとするからイヤなんだよな……………。できれば烏丸かレイジさんが帰ってくるまでトリオン兵で——」

「それどうゆう意味よ。八・・・・・・・・ツ」

それはとてつもなく聞き覚えのある声だった。

故に八幡は自身が詰んだことを振り返ることなく悟った。

背後からしたその声に、ゆっくりと振り向きながら。咄嗟に八幡はいつもの言い訳を口にする。

「あーあれだ。あ、あれがそれだな——。だからつまり・・・・・・・・（おい、宇佐美助けろ）」

「（いやー無理だよハッチー頑張つてっ！）」

これはやばい。

何がやばいって、相手が小南桐絵だということがやばい。

予想外の登場に、適当に嘘をついて騙すということすら、八幡の頭の中から抜けていく。

「なにこそコソ話してんのよ。さっきのどうゆう意味かって聞いてんの？ 『あいつ自分

分が勝つまで続けようとするからイヤなんだよな』だっけ？ それじゃ私があんたより

弱いみたいじゃない!!」

——もうそこがめんどくさいんだよ、と言う言葉を八幡は飲み込み。

「わかったよ。お前の方が強い方がいいから、今日はもう帰れ・・・・・・・・。今まで防衛

任務だったんだろ？」

めんどくさがりで仕事嫌い。そんな八幡が面倒の体現者たる小南の相手を素直にするわけがないのだ。

しかし。

「今のところあんたに勝ったことないあたしの方が強いってどういうことよ!! あたしのプライドはその程度だって言いたいのか——!」

ウガート、雄たけびを上げる小南から逃げることはもうできないのかもしれない。

負けず嫌いな戦闘狂。八幡とは真逆の様な性格だけに、もしかしたら逆に相性いいのでは? と最初のころ玉狛の人間は思っていたと宇佐美は思い出す。

「いいじゃんハッチーやってあげれば。今日は試したいトリガーがあるんでしょ? 来週の事も聞いているし、こなみはなんだかんだ言っておアツカー3位でトップの方だから大丈夫ツ!!」

何が大丈夫か分からないが、宇佐美のその言葉に、八幡は肩を落とす。

「はあーわかったよ。レイジさんたちが来るまでだから。それに今日は俺が使うトリガー違うけど文句言うなよ?」

とりあえず了承した。

そんな——本気で嫌なんだぞ? 的な八幡の雰囲気を受けても——。

「そうこなくっちゃねー！」

何やら小南は嬉しそうだった。

そんなこんなで、今八幡たちがいるのは、何も無い白い立方体の中。

トリガーで作った疑似空間。ランク戦でも使われる仮想戦闘モードの簡易版みたいなものである。

自分たち以外に何も無い上に、破壊不可能なこの空間は、地形無視の単純な力比べができるのだ。

「それで、あんたのメインってスコープピオンよね？ ていうかあんたコロコロメイン変えてなかった？ オールラウンダーでも目指しているわけ？」

「目指してる、と言うよりは必要だから使ってるって感じか。俺的には狙撃手^{スナイパー}が一番しっくり来たけどな」

ああ似合うわーと言いたげな小南の目を見て――。

「お前、今その濁った眼がスナイパーみたいだと思っただろう？ それ偏見だからな、狙撃手^{スナイパー}に謝れコラ」

「あーはいはい。わかったから早く準備しなさい。今日は何？ 狙撃手^{スナイパー}としてやるの？ それとも前みたいに射手^{シューター}スタイル？」

「……」

比企谷八幡が、それほどまでに多くのトリガーを使っているのは、実をいうと空と白の命令である。

——曰く「お前にもう負けは許されない。……であるなら最強を目指せ。つまり、すべての武器コンプリートだ!!」だったり。

——曰く「『くわく』が使うキヤラクターなんだろ？　ならカスタマイズは最高級にきまつてるだろ!!」とのこと。

だからと言って師匠などをお願いするコミュニケーション能力が八幡にあるわけもなく、初期のころは自室の訓練室にて、空と白に相手をしてもらっていたものだ。

しかし、当時はそのことに驚いたものである。

あの兄妹ときたら、使うトリガーを超速スピードでマスターし、あくまで二人セットが条件だが、サイドエフェクトなしとは言え、八幡をもの見事に圧倒するのである。

というより『くわく』として戦うあの兄妹に八幡は勝つたことがない。

(お互いの射手の弾で合成弾を作った時にはビビったな。あいつら化け物だろ……) 八幡の事を知ってる『ボーダー』隊員がいれば、八幡がS級になってから敗北がないと言う事実の方が化け物じみているのだが。

自分の事は棚に上げ、二人の評価をするその姿は、八幡らしいと言えば八幡らしかつ

た。

S級になったのがB級上がりたてなことを考慮すれば、もしかしたら、後にも先にも八幡に黒星をつけたことがあるのは風間一人になるかもしれない。

まあ、もつともそんな人外たる八幡を破る神くわはく。空と白からは――。

『えっ、やれとは言っただけどまさかできると思わなかった。変態だなお前。俺らには無理だわー』

との評価をいただいていることを考えれば、どつちもどつちと言えるだろう。

「今回はそうだな。お前風で言うなら銃手ガンナースタイル。……つてところか」

トリガーを手でもてあそびながら、何でもないように八幡は告げた。

「へー、なめられてるものね。攻撃手の私相手アタッカーに銃手ガンナーで勝とうなんて……」

（いや、もともとお前とやるつもりはなかったんですが……）

——とは言え。

「やってみないと分からないだろ」

「……」

負ける気などないのだが。

銃手ガンナーなら攻撃手アタッカーに有利なのでは？

と思う周りの意見は最もなのだが。相手があ

小南だと言うのが問題なのである。

小南に限ったことではないが、トップクラスの攻撃手相手では、決定打にかけられる銃手はいまいち不利だと言えるだろう。

単純な戦法でいいのなら、『シールド』で防ぎながら接近し、一発をぶち込めば終わりである。

接近戦で銃手が攻撃手に勝てるわけもなく、相手に接近できるだけの技量があれば銃手はかなり不利に働くのだ。

そして――。

「じゃ、やるか」

そんな気の抜けた一言と共に――。

「『トリガーオン』」

二人の戦闘は始まった。



嵐山准が比企谷八幡との関係を現すなら、きつとさわやかな笑顔でこう言うだろう。

――友人だな、『ボーダー』の仲間でもある、と。

綾辻遙と、三上歌歩。その二人が最初に向かったのは個人ランク戦会場である。

風間が八幡の事を知っているならば、より長く『ボードー』をやっている者も知ってはと考えると結果である。

「とりあえず聞き込みしてみよつか。迅さんがいれば話が早いんだけど、あの人たまにしか本部に來ないからね」

「迅さんの昔からの知り合いなら。例えばほらつ、太刀川さんとか嵐山さんも知ってるじゃないかな？」

最初の目的は比企谷隊の情報を手に入れることだったろうに……。なぜか二人の中では八幡を見つけることまでがミッシヨンと化している。

まあ、そんな彼女らの存在など八幡は知る由もないが——と云うか知っていたら逃げてる。

きよろきよろ、と云うオノマトペが似合いそうなそぶりを見せる二人が見つけたのは……。

「あつ、嵐山さん。こんなところにいましたか」

A級5位部隊率いる嵐山准である。

「——ん？ おー綾辻……と三上か？ どうしたんだこんなところで二人とも」

嵐山の疑問は最もであろう。オペレーターたる彼女たちがわざわざ個人ランク戦会

場まで来ることは少しばかり珍しい。

「実は嵐山さんに聞きたいことがあります」

「比企谷って言う人、嵐山さん知ってますか？」

彼女たちは何かしらヒント、あるいは知らない情報がつかめれば御の字だった。迅の知り合いから探ってみるとは言ったもののほんとに比企谷八幡を知る人間がいるのか疑問ですらあったのだ。要は――。

だって、自分たちが知らなかったし、と。

期待半分。その程度の気持ちで聞いた彼女たちは、

「ああ知ってるぞ」

「えっ、知ってるんですか!？」

「そりゃ友人だからな」

「……りゃ!？」

と間抜けな声を上げることになる。さらには――。

「メル友でもあるぞ」

と言う彼の言葉に。――Oh なんてこった。と予想外の展開に頭を抱えた。

とまあ、先ほどから嵐山は八幡を『友達』と言うように話してはいるが、それはあく

まで彼目線の話である。

八幡は自称ぼっち。ならば嵐山の事はあくまでも、深い知り合い程度の認識なのだろう。

相手方が友人認定しているならそれは友達でいいのでは？　と思うかもしれないが――。

『俺に友人？　そんなものいませんよ。俺の人生過去から未来まで永劫にボツチです。……あつ待つてください、未来永劫はやっぱなしで、ちよつと悲しくなりました』

『俺に友達がいけない理由ですか？　え、逆に俺に友達っているんですか？』

などと平気で口にする八幡を考えるに――つまり、その思いが届いてない時点で、それは友人とは言えないだろう。

まあ、仮に嵐山が直接八幡に「俺たちは友達だよな！」などと口にすれば――。

『おれ、嵐山さんの事信じてました。……でもそれは間違いだったんですね。いくらですか、いくら払えばいいんですか？』

など意味不明なことを言うのだろう。不良のそれと勘違いしたのだろうか……？

そんなことは全く知らない、比企谷搜索隊の二人は、嵐山の言葉を素直に受け取る。嵐山さん! 『比企谷隊』の隊室知ってますか?! 私たちその人捜してるんです!!」

と言う綾辻の言葉に、嵐山は少し困ったような顔をする。

「すまないな二人とも。比企谷の隊室はちよつと知らないな」

「……そうですか」

「でもなんで、二人して比企谷の事探してるんだ? 知り合いだとは聞いてないが……?」

その一言に、綾辻と三上の二人は気づいてしまった。

—— 私たちは何をやっているのだろう、と。

確かにオペレーターの話を聞こうとしているのが目的のはずだ。しかし、その程度の事ならここまで動く必要はない。最低でも来週まで待てば、比企谷と言う男は現れるのだ。結果——。

「……」

二人はその質問に対する答えが見つからなかった。

「まあ、なんであれ。比企谷の知り合いになつてくれるのはうれしい限りだよ。あいつはあまり人と関わろうとしないからな」

「人見知りかなんかですか?」

「うーん。どうやらぼっちと言うステータスに誇りを持つてゐるらしくてな。——まっ面白奴だよ!!」

そうやって、笑う嵐山に対し、

——それは面白いというより変わつてるといふのでは。と言う言葉を二人は飲み込む。

すると。

「もし本当に比企谷を見つければなら隊室より本人を見つけたほうが早いと思うぞ」

と、言う嵐山の言葉に二人は固まる。

「な、なんでですか?」

「さっき言った通りだよ。あいつは人と関わるのが苦手だからな。恐らく隊室に言つても居留守をつかわれるだろう。実際に本人も言つてたしな」

(子供ですかその人っ!!)

奇しくも、綾辻と三上は同じことを思つてしまった。

嵐山はそう言つたが、八幡が居留守を使うと言つたのは、空と白がそこにいるからである。隊室に来てでも意味ないぞ、ということをおろかじめ言つておくことにより、二人のストレスを少しでも軽減させようとしたのだろう。

「ああ、そうか。二人ともちよつと待つててくれないか」

そう言つて、嵐山は電話を取り出す。

もしかして、比企谷に連絡を入れるのでは？ とひそかに期待する二人だが――。

「……宇佐美か。――実は聞きたいことがあつてな。……――そうだ。

比企谷がそつちに行く日を教えてくれないか？ ……えっ今来てる？ 小南と

訓練？ そうか、助かるよ！」

「えーと、今の宇佐美ちゃんですか？」

と言ふ三上の疑問に……。

「比企谷が訓練を行つてる場所が玉狛だからだよ。ほらあいつは本部で戦えないからな。基本向こうで対人練習してるらしい」

「な、なるほど」

「それで、どうやら今玉狛にいるそうさ。これから小南と訓練すると言つていたから今なら行けば間に合うんじゃないか？」

「――!! 本当ですか!?! え、えーつと、嵐山さんありがとうございます!!」

そんな綾辻の言葉に、嵐山は――気にしてないよ。と言ふ風に笑顔を向ける。

まさかの大収穫であつた。

その後――。

二人は嵐山から得た情報により、玉狛支部までやってきた。実のところ、彼女たちが

ここへ来たのは初めてであったりするので、道に迷ったりいろいろあったのだが。——やつと見つけた、と二人は謎の達成感を得たものである。

「だ、誰かいますかー」

「えっ、勝手に入っちゃっていいの綾辻ちゃん!? まずインターホンじゃないの!」

「あ、そそそそつか。な、なんか緊張してきちゃって」

二人がテンパるのも無理はない。あくまで話を聞いた段階であるが——と言うより話しか聞いていないためか、彼女たちの中での比企谷と言う男は、もうなんか噂になるべくして存在している人なのだ。

わくわく、やら。ドキドキを通り越して。本当に会っていいのか罪悪感すら感じているのである。

するとそこへ。

「あ、はるちゃんに歌歩ちゃんだ。いらっしやーい。嵐山さんから話は聞いてるよ。お菓子もあるからどうぞどうぞー」

玉猫のオペレーター、宇佐美が顔を出した。

「あつ宇佐美ちゃん。急にごめんね」

「ごめんね栞ちゃん。それでその……比企谷さんっていまいるかな?」

そんな恐る恐る聞く綾辻に。

「ハッチーならいるよー。まだこなみと戦ってるからもう少し待っててね。ほらあそこのモニターにいるでしょ？」

さも当たり前のように口にした。

ドキリ、と言う音を心臓から聞きながら、二人は部屋についているモニターへと目を向ける。

すると、ちようどその試合の一つが終わったところなのだろうか。

『小南ダウン。スコア9対0比企谷リード』

そんな信じられない音声が届いてきた。

六話〉『あいつらのことを俺は天才だと思ってる』

貫かれた『トリオン伝達脳』が治るのと同時に。

『10回戦開始』そんな音声^{アタッカー}が室内に響く。

小南は今までの9回の戦闘を、すべて敗北と言う形で終わっていた。

(まっじで化け物!! おかしいでしょ、こんなことある!?! 私が一勝もできないなんて………ッ!)

小南のそれは、別に自身の思い上がりなんかではない。

事実として、小南はA級の實力を持ち、攻撃手^{アタッカー}のランクは3位と言う見える評価がついている。仮に小南を弱いと仮定すると『ボードー』と言う組織自体が弱いと言ってもいい認識になるのだ。

「どうする? ……もう少しやるか? どっちにしろあと一戦しかやらんが。ほら、10本勝負の方がキリが良いだろ」

攻撃手^{アタッカー}3位が一度も勝てずに敗北する。しかも、ただのノーマルトリガーに。

そんな異常事態を引き起こしている張本人が何かほざいていた。

「あんだ、実はメイン銃手とかではないわよね．．．．．」

「——？　ん、どうだろうな。結構前から触つてはいたが——これがメインだ、と胸を張れるほど使いこなせてはいないと思うが」

「．．．．．」

八幡のそんな気の抜ける回答に、

(そうだったわ。こいつは基本的にあほだったわね)

と、呆れ顔を見せて。

「で．．．．．続きをやるか、だったわよね。——そんなの．．．．．やるに決まってるでしょうがっ!!　負けっぱなしでいられるかってのよ!!」

キレるように怒りをぶつけた。

「お、おい。そんなにムキになるなよ。ただの練習だろうが．．．．．」

「——ッ!　ほつんと、あんだのそういうところがムカつくのよね。全力でやりなさい!!」

「や、やってるんだが」

なにこれ理不尽．．．．．、と言うような顔をしながらも、八幡はトリガーを構える。

両者が構えたら開始する。これは二人で決めた暗黙の了解みたいなものだ。

(ほんと、こいつをS級認定したのは正解ね………。だって——)

小南切絵は薄く笑った。

——あたしじゃ無かつたら、心が折れる程度じゃすまないでしょうから。

そして、静かに。

動く様子を見せない八幡へ、小南は動いた。

迫ってくる小南を見ながら、八幡は顔をしかめる。

動きが早かつたとかそういうのではなく、小南が背中に隠している《メテオラ》を察知しての事だ。

小南が飛ぶと同時に、背後にあつたそれが顔を出す。

上からは小南の斬撃。前方からは《メテオラ》。シンプルにして単純な攻撃手段。

「まっそれにわざわざ付き合う必要はないけどな………」

次の瞬間、すべての《メテオラ》がその場で弾け飛ぶ。

それを見ていた人物は、誰一人として何が起こつたか分からなかつた。対戦相手である小南も、外から見ていた綾辻や三上たちもだ。

八幡に動きはなかつた。——否、動きはあつた。

『くうはく』が考案し、八幡が形にしたそれを、三人は『インヴィジブル不可視の弾丸』と名付けた。

技名をつけるに至った理由を挙げるなら、当時の八幡達はまだ若かつたということだろう。

そして、その技を解説するのならば、要はただの「早撃ち」だ。

仕組みは単純明快。つまるところ、腕を上げて撃つて下げる。それを見えない速度で行なっているだけ。

小南ですら捉えられない早撃ち。撃つたとすら認識できない早業。

絶技と言つてもいいそれを行いながら、八幡はこの時——もう一つの技を同時に行つていた。

それを『くうはく』は『銃弾打ち』と呼んでいる。

行っていることはこちらも簡単。トリオンの弾を自身のトリオンで撃ち抜く、ただそれだけの事。

《メテオラ》は爆発を起こすトリオン弾だ。それは大砲のそれとは違い、少しでも衝撃を加えれば即座に爆発する。ならば、自身にそれが届く前に撃ちぬけばいい。そこから得た発想だった。

しかし——拳銃より遅いといえ、秒速100メートルは下らない速度で迫るそれを撃ち抜くのだから、その異常性は見て取れる。

ほとんどの『ボーダー』隊員が、銃手ガンナーや射手シューターの弾を、《シールド》で防ぐか範囲外に逃げていることを鑑みるに、それがどれほど不可能かは分かるだろう。

(何度見ても認識できない……ッ。どんな速度で腕を振ってるのよッ！)

驚くのも無理はない。

こんな頭のおかしいことができるのは、比企谷八幡一人だけだ。

何でもないようにそれを行う八幡を見るに。

——どうやらこいつ、本当に人間をやめたようだった。



以前、『攻撃手アタッカーの連携は銃手ガンナーよりシビアだ』なんてことを風間隊は公言していたことがある。それ自体を評価するなら、それはあくまで『すごい事』であって、別にそれが『勝てる理由』にはならない。

攻撃手アタッカーの攻撃は一撃一撃が必殺だ。それを連携で行えるなら確かに強力だろう。それは言ってしまうがゲームの攻撃手段が、『必殺技』のみで戦闘を行っているようなものなのだ。強力すぎるチートである。

だが、風間隊が言うように、それはとてつもなく『シヴィ』な行為だ。

そして、『シヴィ』とは崩しやすいと同義である。つまるところ――。

――『必殺技』を避けられたら、ゲージ溜めからやり直しが基本だと。

今回で言えば、小南は一人でそれを行っていた。

《メテオラ》での陽動。メインの攻撃である自分。チームでの動きを想定する風間のカスタムとは違い、あくまで一人戦えるようにカスタムしたのが小南のトリガーであった。

故に、調節の効く射手^{シューター}トリガーを攻撃のサブとして用いているし、そのコンボが強力なのは周りの認めるところである。

――が、先ほと言ったように、それはあくまで『シヴィ』だ。
であるなら――。

パパパンツ！ と、八幡は空中にいる小南に《アステロイド》を放つ。

当然のように『不可視の弾丸^{インヴィジブル}』で放たれたそれは、言うまでもなく認識できない。

しかし、あくまで見えないのは弾を放つ瞬間であり、トリオン弾自体の速度は変わらない。

であるなら彼女はそれに反応でき、迫るそれを《双月》で切り裂いた。

急に弾が飛んできたという摩訶不思議な光景に、前の9回だけですでに反応するレベ

ルまで行えてるのだから小南と言う少女はやはり強い。

放たれてた《アステロイド》は確実にすべて打ち落とした。その程度で小南桐絵は倒せない。

そのはずだった――。

「――ッ！」

小南の頬に線がつく。

(ブラインド弾ッ?!? しかもあたしが反応できないぎりぎりを――ッ)

トリオン弾の死角に隠れるように放たれた《アステロイド》が小南に当たる。

と言っても、頭を中心にねらったそれを避けた小南の反応速度は、かなりぶつ飛んでいると言えるだろう。

流石は高速戦闘を行う攻撃手アタッカーのトップクラスである。

そんな中、暢気な声がその場にこだました。

「あーきいっける。そこ地雷だぜ」

「――はえ？」

そんな疑問の声とは裏腹に、小南は自身の置かれた状態を理解する。

(なッ――《メテオラ》……!?)

『射手』用の《メテオラ》。ほとんど速度を0にして、八幡は小南の落下位置にばらま

いたのだ。

本来なら、空中で身動きできないという失態をさらすほど、小南桐絵は間抜けではない。
い。

体重移動だけで自由に動く程度なら、A級クラスならだれでもできる。

だが、先ほどの八幡の攻撃によって、体勢を少し変えさせられてた。——否、それが八幡の目的だったのだろう。

仮に避けられたとしても、それはギリギリ。先ほど自分の《メテオラ》を撃ち抜いて爆発させられたように、至近距離の爆破に巻き込まれるだろう。

つまるところ詰み。

だが——。

「——つなつめんなー!!」

起動確認——《グラスホッパー》作動。

「……ええ?」

間抜けな声を上げたのは八幡。

小南が使ったそれは、空中移動を可能にするトリガー《グラスホッパー》。それだけなら別に珍しいトリガーではない。それをカスタムしている隊員など山ほどいる。

しかし、小南に限って言うならば、それはおかしい事だった。

——小南の本来のトリガーには《グラスホッパー》はセットしていない。

普段の小南のトリガーにはセットしていないそれを、対八幡用にカスタムしたのだ。もちろん、日ごろから小南のトリガーを知る八幡は、それを持っていることなど少しも知らなかった。

(……)まで使わなかったのもそのためか……)

素人目には、ほとんど追うことすらできなかった。

二回。直角的に移動した小南は、八幡の背後へ着地した。前方には八幡が自身でばら撒いた《メテオラ》、不意を突いたうえでの挟み撃ち。しかも自身の間合い。逃げ場はない、絶好な状況。

「《接続機^{コネクタ}》——オン」

火力を上げる小南専用オプショントリガー。《双月》が合わさり斧へと変わる。

強力無比。一撃必殺。それを体現したような武器。

八幡はまだ振り向かない。反応してない。

(とった……ッ！)

——小南はそう思った。

しかし。その斧は宙を斬った。

考えるまでもなく、八幡がそれを避けただけ。まるでお辞儀をするように、ただ、後

ろから来た攻撃を見ることなく。

だが、小南はそんなことを冷静に思考する前に、斧を下方向——八幡へと振り下ろす。そもそも。

背後の攻撃を避けるとか。長距離狙撃に反応するとか。異次元的な動きを見せる者など、『ボーダー』にはごまんといる。この程度の事にいちいち驚いていたらきりがない。

(これで………ッ)

小南のそれは、ある種の願いだったのかもしれない。

八幡と小南の試合は合計100を超える。追い込んだ状況など山ほどあった。しかし結果が語るように、そのすべてが失敗に終わった。

そしてそれは今回も——。

小南が振り下ろすそれを、八幡は体をひねるように容易に避けた。

小南が八幡の背後に立ってから、そこまでの攻防はわずかに0.5秒。

ほとんどノータイムで行われたそれを、本当に背後に目があるのかと思う動きでよけて見せた。

普通ではありえない。トリオン体だからできる動き。体を筋肉やらで動かしていな
いそれは——武闘家なら絶対行わない人間として無理な動きを、少し強引に成し遂げ

る。

(躲された——ッ)

そう判断すると同時に、すぐに小南は後ろへと飛んだ。とりあえず、今は体勢を立て直すべきだと。

だが——。

「……が……はあッ!!」

メリメリ、と。小南の腹に八幡の蹴りが突き刺さる。

身を引いたのと同様だった。受け流すこともできなかつた。——八幡はそれを『逆力ウンター』と呼んでいる。

相手の引く力を利用し、自身の攻撃力に変えるそれは、最も無防備なタイミングで攻撃を放つ。

単純計算で倍の威力。後ろに飛ばうとした力と、八幡の蹴りの威力が合わさった。結果、大抵のことでは体を崩すことがないトリオン体を。

明確に隙だと認識できるほどに——その体は崩され、僅かに体が宙を浮いた。

——ヤバい、と。小南がそれ認識する前に。

「!!!」

銃口を向ける八幡の姿を確認した。

(《フ、フルガード》——ツ!!)

咄嗟に展開されるシールド。

しかし、小南は疑問に思うべきだった。『不可視の弾丸』^{インヴァイジビレ}を有する八幡のそれを、何故目にする事ができたのか。

「……………《メテオラ》、まだ残ってるぞ?」

小さな声だった。聞こえるか聞こえないかぐらいの。

八幡は《メテオラ》の速度をほとんど0にして放っていた。であるなら、その弾は少しずつ移動し続けるわけで。——結果。

(読まれてた……………ツ。ここまで全部!?)

小南の目の前までそれは迫っていた。

方向を最初にした指定できないことを考えると、それは異常な事だった。

そう、何故なら——。

(そんな……………。私の動きをすべて予知してないと、こんなことできないツ——!!)
それでも、この程度をかわせない小南ではない。目では見えてる。八幡に言われるまでもなく認識していた。

——しかし、そんなことは意味をなさない。

小南は気づいてしまったのだ。——自身がすでに詰んでいるということ。

八幡は《アステロイド》を数発放つ。

しかし、それはシールドを構えている小南ではなく、小南に当たる寸前の《メテオラ》にである。

それによって……つまり近距離で爆発したそれに巻き込まれた二人は、お互いの《シールド》を粉々に破壊された。

銃型のトリガーを用いていたためか。一つしか《シールド》を使っていない八幡の方が被害がでかく、少しばかりトリオンが漏れている。が、それはもう関係ない。

なぜなら。

少し遅れて、追加に放った銃弾が小南の『トリオン供給機関』にヒットしたのだから……。

自身の胸にトリオンの弾が当たるのを認識しながら。小南は目を見開き驚いていた。

だってそのはずだ。自身が追い詰めているように見えて、追い詰められていたのは自分の方。

最初から最後まで、結局小南は動かさされていただけ。

今までの戦闘で、小南はしっかりと対策を講じたはずだ。布石もうまくいったはずだ。

「……う、そ——」

辛うじてでた、その言葉を最後に――。

『トリオン供給機関破壊。小南ダウン』

機械的に告げられるそれを、小南は聞いた。



モニターに映る『あの小南』が一勝もできないという事実。

それを目撃した綾辻と三上の二人は、出されたケーキに手を付けることもなく、じつとそれを見つめたままだった。

「あちやく、またこなみ勝てなかったかー」

できる眼鏡こと宇佐美栞のその言葉で、二人は――はッ、と意識を戻す。

「す、すごかったね」

「うん、なんて言うかすごかった」

オペレーターと言う立場にいる彼女たちではあるが、別にランク戦を見たことがないなんてことはもちろんない。戦う姿を知らないでどうやって補佐をするのだ、と言われるまでもなくその通りだ。

しかし、ここまで上位クラスの試合を見るのは久方ぶりである。

小南桐絵と比企谷八幡。ともに『ボーダー』で一位をとれる可能性があるもの同士の戦いなのだ。小南が玉狛所属であることと、八幡がS級であることを踏まえれば、これはかなり貴重映像なのではないだろうか。

すると。

ひそかに感動している二人の元へ。

「つてことはあれなの？ あんたは最初から私が《グラスホッパー》持つてること知つてわけ!？」

「まーそうだ。全然出さないから使わないのかと思つたけどな」

「ほつんと面倒ねツ、あんたのサイドエフェクト。『思考投影』だつて、そんなに使われたら作戦駄々洩れじゃない。このチート野郎!!」

「おい、人聞きの悪いこと言うな。風間さん曰く『才能を出すななど。普通に考えてありえない』だそうだ。つまり、才能を使うことはチートじゃない。その他大勢の決定事項だ。なんか民主主義っぽくていいだろうが」

「めんつどくさ! だからあんた友達がいけないのよ。……このボツチめツ!」

「おいコラ、負けた腹いせに俺の精神削りにくるのやめてくんない？ てかボツチを馬鹿にするなよ。ボツチこそ至高の存在だからな。世界がボツチだけなら戦争はなくなる。……ほら、近界民^{ネイバー}とかめつちや群れるだろうが」

おつと子供の喧嘩かな？ 先ほどの感動はどこへやら、綾辻と三上の二人はそんな感想を抱いた。

「あんた、最後私にあの見えない「早撃ち」を使わなかったのって……」

「——ん？ ああ、それだけならお前よけられただろ？ だから別の方法を選んだ。銃口を向けられたとき、お前シールドを展開しないとって思つたろ？」

「……っ——」

八幡のそれは答え合わせ。

（そういう事。『避ける』じゃなくて『防御』と考えちゃった私の負けってことね）

「ま、避けることまで視野に入れてたなら別の手をうつしかなかったよ」

「……」

見えない部分の戦闘。それこそが二人の真価だった。八幡は自身のサイドエフェクト『思考投影』によつて、常にその時必要な小南の情報を取得し続けた。

背後からの攻撃を避けたのは彼女の視覚情報を共有したからであり、小南に攻撃するタイミングなどは、小南の一部思考を奪取したから容易に当てたのである。

どこまで警戒していて、どこからが予想外か。どこに攻撃したらいいか、どこから攻撃すべきか。——それを踏まえての戦闘。

もちろん。ここまでの力に昇華させたのは空と白の指導によるものだが——とりあ

えず地獄だったといっておこう。

「どう？　今回の結果は満足できたかなこなみ」

ニコニコ、と言う表情が似合うえみを浮かべながら、宇佐美は小南に駆け寄った。

「満足できるわけないじゃない!!　今日もまた全敗なのよ……もう泣きたいぐらいよ」

顔を伏せる小南を見て、

「えっ、ま——。泣くのはなしだろツ……いや、あーその……ま、また今度相手してやるから、な?」

八幡はそんなことを口走ってしまった。

それを確認した小南は。——ふツ、と。笑みを浮かべ。

「言質はとったわよ。聞いたよね宇佐美?」

「聞いたよ聞いた。約束は守らないとねーハッチー」

どうやら騙されたようだった。

いつも騙される体質の小南が、八幡をだますという何やら珍しい状況に、八幡も素直に感心し怒るに怒れなかった。

あきれるように顔を歪める八幡達へ。

「あの一」

——と、そこで今まで空気と化していた少女が呟いた。

「あッ、ゴ、ごめんねはるちゃん！ す、すっかり忘れてたよー」

ソファアの端にちよこんと座る少女二人に、それ以外の全員が目を向ける。

「あれ？ 遙に歌歩じゃない。どうしたのこんなどころに、初めてじゃない二人がここに来るなんて？」

「お、お邪魔してるね桐絵ちゃん」

「小南ちゃんお邪魔してます」

どうやら、女子グループの方は全員知り合いらしい。

『ボーダー』には、連携している学校がいくつもある。それは『ボーダー』の活動が、学業に大きな影響を与えるだろうとの懸念から来たものであり。そのため、『ボーダー』に所属している学生が、同じ学校に通っているというのも実は珍しくない。

学校と言う名の基準にするつながりがあるのであれば、そこからつながりができるのは自然であり——。

結論を言うと『ボーダー』は基本仲良しである。

まあそんな中、ぼつちたる八幡が存在を消されるように省かれるのは自然現象と言っても過言でなく。ステルスヒッキーを自動発動させてしまうのも仕方ないといえた。

（よし、レイジさんたちとやるつもりだったけど、もういいや。小南と十分やったし今日

はもう帰ろう)

と言った風な思考は、八幡の中で僅かコンマの出来事である。

——よし、と。背中を向けると同時。宇佐美のそんな言葉を八幡は聞き。

「この二人はハッチーのお客さんなんだってー。ちゃんとあいさつしないとだめよ」

「お前は俺の母ちゃんか」

まさかの女子グループ会話第一声がそれだった。

数分後。

「そ、それで、えーつと?」

落ち着いた5人は、適当にソファへ腰を下ろすと。八幡のあたふたした声でそれは始る。

「あ、初めまして。私はA級8位部隊のオペレーター綾辻遥です。で、こっちが——」

「A級3位『風間隊』のオペレーター三上歌歩です。突然押しかけてすみません」

「えーと、俺はひ、比企谷八幡でしゅ……」

おーつと死にたい。八幡は素直にこう思った。

もしかしたら今ここで死ぬために生まれてきたのかもしれない。そう考えるぐらいに、今の八幡は恥ずかしさの渦にいた。

「ふ、フフフツ……」

それでも何とか命をつなげようと思えたのは、隣でプルプルと震えながら笑う小南を、いつか絶望の淵へ落としてやろうという決意からである。

「(おい、笑ってんじやねーよ。騙され王女)」

「(だ、だって……ふふツ。あんたあたしの時も同じように囁んでた……ふふ、あはは)」

——そう言えばそうだった、と。恥ずかしさを2段重ねにされながらも、何とか八幡は話の軌道修正を図る。

「そ、それで。俺に何か用があったのか？ 悪いが俺はお前らの事知らないんだが。……どこかで面識とかあったか？」

「ううん。面識は今日初めてであつてるよ。えーと、比企谷君でいいかな？ 同い年だから大丈夫だよね。……そもそも、君を知ったのも今日んだけど——」

「……はあ？」

八幡にはいささか理解不能だった。今日知った相手に会いに来たと……。——
ううん。なぞだ、と素直に思った。

しかしそれは仕方がない。なぜなら綾辻も自分で言っていて意味不明だったからだ。変人たる八幡がこの場にいるから今回は良かったが、もしいかなかったら変人オーラは綾

辻の独占状態であった。

今日知った人を探しに来た！ など、頭のおかしいストーカーと同じである。

「え、えつとね……ツ。その、えーと、んー……。——歌歩ちゃんパスト
！」

「えー!? わ、私!? えーと、そのですね。私たちは比企谷さんの来週の試験を聞いて、少しお話が聞きたいな、と」

——来週? と八幡は少し首を掲げるが。すぐに何か思い立ったように。

「あー、えつと三上だったか? 確か今は風間さんのチームのオペレーターやってるんだっただ。でも聞きたいことってなんだ? 特に話すことはなかったと思うが……」
「な、なるほど。た、確かにそうですね。今のはなしで……ちよつと待つてくだ
さい」

どうやら変人が3人に増えたようだ。

そこで見かねた宇佐美が二人に助け船を出す。

「多分二人はハッチーの噂を聞いて探してたんだと思うよ? ほら、今『ボーダー』はハッチーの噂で持ち切りだから」

「はっ、え? 噂? 何それ俺初耳んだけど……」

「そ、そうなんです! じよ、女子って噂がすきなんです!」

「・・・・・・・・・・。そして宇佐美、お前の予想は外れてるっばいが・・・・・・・・・・。」

目が泳ぎながら言う三上のそれに、八幡は『思考投影』するまでもなくでつち上げたと判断した。まあ、そもそもこんな事でサイドエフェクトなど使わないが・・・・・・・・・・。セクハラスペシャリストの迅とは違うのである。

人の脳を見るといつても過言でないそれを、八幡は必要以上に行使しない。

すると——ぼつり、と。

突然と言い換えてもいいかもしれない。

「オペレーターについて聞きに来たの」

静かに、綾辻と言う少女は口にした。

「オペレーター？ それは俺のチームの話か・・・・・・・・・・？」

「うん。風間さんに聞いたんだけど、オペレーターがいるのといかないのとじゃ、実力が全然違うって。だったら私たちにもまだオペレーターとして何かできるかもって知りたくなって・・・・・・・・・・。」

その言葉に。——なるほどな。と八幡は頷き。

「それなら無理だ。あきらめろ」

バツサリと否定した。

少しも考える素振りもなく、何のためらいもなくそう言った。

二人の感情の変化を言葉にするなら——ポカンからイライラへの移行が正しいだろう。

自身のオペレーターとしての成長を否定されたように感じたのだ。二人には、到底納得のいく答えとは言えないだろう。

「な、なんでですか？ あたしたちじゃ能力不足だったってことですか」

「……………そうだな。その通りだ」

「……………ッ！」

八幡は迷わず切り捨てる。

「ちよ、ちよつとハッチー？」

宇佐美はいつもとは少し様子が違う八幡に心配そうな声をだすも、八幡の手に言葉をひっこめる。

宇佐美が比企谷と言う男を語るなら、『言葉が足りないのが玉に瑕の優しい少年』と評するだろう。

誰かのために動いているのに、理由をつけず。自分は得をしないのに、不満を語らない。

しかし、それはある程度の付き合いがあつて初めて理解できる。今回で言えば、宇佐美と八幡の付き合いは意外と長い。『ボーダー』に入ってから、と言うのは当然だが、風

間際に勧誘された後、自身のチームを作る時にオペレーター的重要性を教えてくださいましたが彼女である。たまたま玉狛へ彼女が移転したこともあつてか、時間で言えばトツプクラスに付き合いが長かった。

であるなら、宇佐美が八幡の意図をくみ取るのは容易であり、必然と言える。

「比企谷君。私たちは一応A級部隊を任されるぐらいにはできるつもりだよ。それでも実力は足りないかな。今は足りなくても、今後可能性がないかな」

三上の代わりに綾辻が問う。

綾辻にとつても、今の八幡の対応はあんまりだったのだろう。

はあー、と。ムツとした顔を向ける三上と、真つ直ぐ見つめる綾辻を見て、八幡は軽くため息を吐いた。

(わざわざ説明するのも嫌なんだが……)

めんどくさいというのではなく、知らなくてもいい事だからだ。しかし、それ言わないと二人は納得しないだろう。

仕方ない。と八幡は判断し。

「一つ聞いてもいいか」

「……?」

「お前ら、チエスで十の百二十乗の手番をすべて読み切れるか？」

まず初めにそれを聞いた。

もちろん。二人は何を言っているのか分からなかっただろう。

「ならそうだな……」。俺とジャンケンをして絶対に負けないと誓えるか？」

「……」

黙るしかない。だってそんなことを言われてもできるわけがないのだから。

しかしその問いになんの意味があるのか、二人には判断付かなかった。

「——まあ、できないよな。つまりはそういう事だ。今言ったことをあいつらはできて

お前らにはできない。できるできないじゃなくて立つてるステージが違うんだ」

「つ、つまりどういう事ですか」

言っていることは理解できる。だが言いたいことがわからない。

そんな三上の問いに、

「あいつらの事を俺は天才だと思ってる」

八幡は一言そう答えた。

「それは私たちは天才じゃないから無理ってことですか……」

「違うな、そうじゃない」

八幡はどう言えばいいか少しだけ考え——。二人の兄妹について語った。

「あいつらは異常だ。それはもう目を背けたくなるほどにな。例えるなら、社会の渦か

ら自然とつまみ出されるような異物つてどこか？　．．．．．少し一緒にいれば分かる。あそこへはたどり着けない」

二人は、黙って八幡の話を聞いていた。

「あそこへ行くつてことは、常識から外れた道に行くつてことだ。周りからは自然と妬まれ。気持ち悪いと蔑まれる。何もしなくても疎まれ。排除しようと否定される。——そんな人生を、お前らは選べるか？」

「．．．．．ッ」

「言つとくがこれは例えじゃない。あいつらは実際にそれを経験してきたんだ」

その一言に、二人は密かに青ざめた。

「無理だとか、できないとかじゃない。するべきじゃないんだよ」

八幡は疲れたのか、適当に姿勢を変えると。

「俺はあいつらがいないとヘツポコだ」

「ちよつと待ちなさいよ。それじゃ私までヘツポコて言われてるみたいじゃない」

「．．．．．。宇佐美」

「あいあいさー。はい、こなみちよつとこつちに来ようねー」

宇佐美に引きずられながら部屋を後にする小南を見送り。

「お前らがなんでどうやって、俺のチームのオペレーターを知ったかはわからん。まあ、

話を聞く限り風間さんだろう。人から聞いただけなら、お前らのように自分でできることをしようと考えるのは当然だ。……けど、それを言った人が言つてなかつたか？ 『お前らはよくやつてくれてる』って感じのことを」

その言葉に、二人はバツと顔を上げる。

確かに風間から聞いた時、彼は最後に同じようなことを言った。

——でもなんで……。

「そりゃ分かるだろ。俺を見つげにここまで来たんだからな。それだけで俺なんかの何倍もすごいわ」

簡単だとしてもいうように、素直な気持ちで八幡は口にした。

「たぶん。風間さんは気づいてたと思うぜ。俺のチームにいるあいつらのやつてること。それはもうオペレーターの仕事じゃないってさ。それ以上は違うだろって——」

それを最後に、八幡は口を閉じた。

そして。

「——な、なら。……どうあるべきなのかな、私たちは」

ほんの少し、疑問に思ってしまった。

抽象的で、意味不明だった。よくわからなくて不快だった。でも、なんとなくは理解はできた。

だから、すこしだけ迷ってしまった。

聞く必要はなかったのかも知れない。それでも。

舞い上がったのは確かだった。

『比企谷隊』の話聞いて、まだできることがあると思って、うれしくなっていたのかもしれなかった。

だから、ほんの少し見失いかけていた。けど、それはとても簡単な事なのだよ。なぜなら――。

「そのままでもいいんじゃない？　だって、お前らは十分すぎるほどによくやってるだよ。………気にするなよ。比企谷が相手じゃ化け物だったただけだ。それでもし、チムが弱くなるようなら、それは隊員の根性が足りないんだらうよ」

八幡の口から『根性』なんて言葉が出たと知れば、話のタネであるあの兄妹は小一時間くらい笑い転げることだろう。

八幡ですら、今の自身の発言はないわー、と思っていたりした。何でもないような八幡のその言葉に。

二人は同時に立ち上がり。

「ありがとうございます」

お礼の言葉を八幡に告げた。

「——は？ えっなんで？」

困惑する八幡に、二人は軽い笑みを浮かべると、

「だって、なんか嬉しかったから……。お礼はちゃんと言いたくなって」

「はい。でも次の試験。絶対『風間隊』あなたを倒して見せます！」

どうやら吹っ切れたようだった。

八幡からしたら適当なことを言つて適当に終わらせた程度に認識でしかない。支離滅裂も甚だしかった。

（まっ二人が納得できたなら問題なしか……？）

だから。——そうか、と一言呟いて。

「まああれだ。どうしても何かしたいって思うなら、来週の試験よく見とけ。俺たちは『もう勝つてる』。——勉強するなら最適だろう。少しぐらいなら近づけるだろうしな……。」

ポリポリと。頬を書く八幡を見て。

「ふふ。比企谷さんつて、少し痛いところありますよねっ」

「ねー」

と、二人は再びそれでもさつきより大きい笑みを浮かべた。

「……ほっとけ」

そんな二人に対して、八幡は一言だけそう言った。

七話>>『……かかって、来るの……』

会場にはすでに何人もの『ボーダー』隊員が集まっていた。

それは、待ちに待ったと言っているいい日である。

『比企谷隊』によるS級継続試験。

それを見ようと、たまたま本部にいたA級、B級隊員はもちろんの事。非番のはずの隊員から、玉狛支部の小南や烏丸、そしてレイジまで。

恐らく、A級のチームランク戦ですら、ここまでの人は集まらないのではないだろうか。

この中で八幡を知っている人物となればかなり少数だろう。

そもそも八幡には師匠などいなく。本部での対戦行為もC級時のみ。

A級隊員ですら、古くから『ボーダー』にいないと比企谷などと言う名前も聞いたことすらないだろう。

そんな期待の一戦まで開始十分。

『ボーダー』屈指の花であるオペレーター。綾辻遙が口を開く。

『さて、本日のS級試験実況を務めさせていただきます。A級8位、嵐山隊の綾辻です。本日はよろしく願います』

周りの声がかんざんと静かになる中で。

『本日は解説として、「ぼんち揚げ食う？」でおなじみのS級である迅さんと、過去A級部隊を率いた実績のある、東さんにお越しいただきました』

その言葉に、紹介された二人は——どうぞよろしく、と声を上げる。

『ところで解説のお二人は『比企谷隊』をご存知でしたか？ 実は私もつい一週間ほど前に知ったのですが。どうやら周りの認知度がかなり低い部隊と思われるのですが……』

何気ない質問。

だからだろうか……。

『もちろん知ってるぞ。なぜなら最初に『比企谷隊』のS級試験を担当したのは俺だからな。本当は俺が今回もやりたかったよ。あの時は見事に負かされたからな』

気軽に……されど確実に放たれたその言葉で、場内が沈黙に変わり。

次の瞬間。爆発的なものへと変わった。

「お、オイ。マジかよ……S級に勝ったって本当だったんだ」

やら、

「あの迅さんが負けたなんて……………、本当なんですか嵐山先輩」

「本当だぞ。当時の迅ときたら結構落ち込んでな」

とか、

「どうしたの、米やん先輩。なんかすつげー戦ってみたそうな顔してるけど？」

「それはお前もだろうが緑川」

等々。

各個に驚きの声を上げている。

「『み、皆さんお静かに!! えーと、続いて東さんの方はいかがでしょう』」

「『あー俺も知ってたぞ。あいつはS級ってこともあつてよく『ボーダー』の会議にも参加してたからな。その時に知ったんだ』」

「『なるほど。ではお二人方はどちらも面識があるということですね。恐らく知らない隊員も多いと思うのですが、ご存知のお二人が解説を担当していただけると助かりますね』」

ほっ、と息を吐く綾辻の言葉に。二人は少しキョトンした後、面白いというように笑い声を上げる。

「『ははは、違うよ綾辻。俺らはたまたま選ばれたんじゃないやなくて、お前らがやれつてお願

いされたんだよ。ね、東さん？」

「『そうだな。理由を聞いた時は流石に笑ったな』」

「『え？ えーと……。ではお二人が選ばれたのには理由があると……？』」
困惑の声を上げる綾辻に向かって。

迅は簡潔に告げた。

「『なに、俺の未来視のサイドエフェクトと、東さんの戦略術がないと、誰も解説がままならないだけだよ』」

その言葉に、再び会場が静まり返る。

「『そ、それはつまり……』」

周りの声を代表するように告げる綾辻の言葉に。

「『まっ見れば分かるよ。比企谷八幡は、すごい奴だつてことが……』」

何が面白いのか——。いや、事実面白いのだろう。

迅のサイドエフェクトで何を見たのか……。

不敵に笑う迅の表情が——先ほどの発言が何も大袈裟でないことを如実に告げていた。



そこは噂の『比企谷隊』——隊室。

「おい今の聞いてたか。……………つく——はは。『比企谷八幡はすごい奴』だってよ……………あはははッ」

「……………ハチ兄——名実ともに、ボツチになった……………」

口に手を当てながら笑う兄妹——『くうはくは吹き出すのをこらえてプルプルと震えてい

る。
「お前ら笑いすぎだ。別に迅さんもまだ俺がボツチとしてすごい奴とは言っていないだろ
うが……………っ」

ジロリ、と睨む八幡を見て。

二人は、顔を俯かせながら。

「はは、そう怒んなってハチ。冗談だよ冗談。冷静さをなくせば勝てる勝負も勝てなく
なるぜ？……………ぶふッ——」

「……………に、笑いすぎ……………。ハチ兄、可哀そう……………ぶふッ——」
どうやらもう隠す気もないらしい。

足をばたつかせながら笑う二人の姿に、八幡は握りこぶしに力を入れる。

……………。

.....。

「はあー.....で、お前ら今日寝なくても言いわけ？ 全力を出せなくて負けましたとか言ったら本気で殴るぞ」

「おまつ.....。もうすでに殴ってるだろッ——」

「.....い、痛い.....」

頭を押さえながら、床で悶絶する二人。

どうやらこの三人は今回の試験において、緊張と言うものは皆無らしい。

「——それで、寝なくていいかだっけ？ その答えならYesだ。てかお前もわかってんだろ」

「.....しろたち、ゲームならどこまでも本、気。——でも、楽しむために、.....その度合いは、しろたちで決める——」

八幡の心配は杞憂だった。

油断だとか、慢心と言う言葉は二人にはない。

そう見えても、実は相当頭を使い——相手を誘うための罠だったりするのが『くうはく』だ。いつ見てもあきれるその姿に八幡は。

「.....さいですか」

と、軽く眩きながらも、口元は笑っていた。

そんな三人とは対照的に、A級部隊である『風間隊』は静かにその時を待っていた。「風間さん。確認なんですけど、絶対単独では比企谷先輩とは戦わない。それは絶対で大丈夫ですか」

風間隊の万能手オールドワンダーである歌川遼が口を開く。

その問いに、閉じていた目をパチリと開け。

「そうだ。単独で挑めば必ず負ける。あいつとやるなら、チームで動く、それ以外はなしだ」

臆しているわけではないのだろう。

風間が最大限に比企谷と言う男を警戒しての言葉だった。

「でも風間さん。そこまで警戒するほどですか？ 風間さんが負けたのだからかなり前じゃないですか……………。確かに訓練時からそこまで強かったのには驚きましたけど、今時それぐらい……………。緑川や木虎みたいなものではないでしょうか？」

だが、それに異を唱えるように言ったのが、『風間隊』キーマンである菊地原士郎。

サイドエフェクト『強化聴覚』を有し、音の反射のみで素材の材質。硬さや厚みに至るまで、あらゆることを解析するその聴覚機能は、キーマンたる存在を如実に語っていた。

しかし——。

その問いに答えたのは風間ではなく三上だった。

「菊地原君。それは違うよ。それじゃダメ」

カチカチ、と。機器の前で最終確認をおこなっていた三上は、静かに菊地原のそれを否定する。

「三上先輩……？　なんでそんなこと言えんの？　周りも少し大袈裟すぎると思っただけ」

そんな疑問に答えるように。

「10対0。それがこの前の小南ちゃんと比企谷くんの結果。……これがいかにありえないことか菊地原君には分かるよね？」

「……」

それを言われると、菊地原は黙るしかない。

別に、菊地原も八幡の事を軽視しているわけではない。ただ、そこまで警戒するべき人物なのだろうか、と、素直に疑問に思っているだけだ。

遠征部隊とは、そもそもブラックトリガーに対抗できると判断された部隊だ。それが三チームも集まって、警戒しろと言われる方が難しい。

「菊地原の気持ちもわかる。……が、今回は初見だ。なら、作戦通りいくぞ」

まとめるように言う風間の言葉で。

「ちえ、風間さんが言うならしかたないですね。でも、仕留めるのはうちの隊にしてくださいよ」

そつぽを向きながら菊地原はそう言った。

「ふふつ。きつと菊地原君、風間さんの仇をとりたかつたんですよ。怒らないでくださいね」

小さい声で風間に言う三上の言葉は、どうやら『強化聴覚』を持つ菊地原には聞こえていたようで。

「ねえ三上先輩。少しの間黙っててくんない？」

少し空気が軽くなったようだった。

同時刻。『太刀川隊』では。

「聞きましたー？ 太刀川さん。なんか迅さん負けたつぽいんですけど……………」

A級一位部隊の射手シューターである出水公平。

——マジかやばいなー、と言いなながらも笑うその表情は、もしかしたらこれからの戦いを楽しみにしているのかもしれない。

そして、話しかけられたその男。『太刀川隊』のリーダーであり、アタックカー攻撃手で一位の肩書

を持つているそいつは。

「……………」

無言でありながらも、その笑みを絶やさなかった。

(まったく、戦闘狂な上に強いんだから質が悪い)

そんな出水の心の声を読んだのか。

「……………楽しみだな——」

と、静かな声でそう言った。

そのまま。

「——あー楽しみだ！ 早く時間こいこいつ!!」

と、おもちゃを待ちきれない太刀川の声は、その場にいる出水にしか聞かれることなく。

その出水も、——確かに、と言いう言葉をつぶやいた。

そして、A級二位部隊であるその場所は。

静かも静か。狙撃手スナイパーナンバーワンの男と、『ボーダー』でも数少ない、トラツパーと言
う立場にいるその二人は、見事なまでの御昼寝タイムを満喫していた。

「おーこい」

じゃないですか」

「……え？」

どうやらすでに冬島隊長殿は彼女の前で正座をしているらしく。——お前も早くしろ、と目くばせすらしていた。

もともとエンジニアとして入隊した冬島を、戦闘員として引き抜いたのがオペレーターである彼女だけに、どうやら頭が上がらないようだ。

しかし、彼も思うところがあるようだ——。

「あのー真木ちゃん。ほら、そろそろ時間だから準備しないと……」

「そうだけ。こんなことで速攻退場なんてしたら笑いもんだ」

つなげるように言つた当真の言葉を聞き。

その少女は——。

「確かにそうですね。……なら、うちの隊がその比企谷つて人を仕留められなかったときは……」

「——時は……」

そして、ドサツと。

数百枚はくだらないと思われる書類の束を目の前に見せ。

「これ、遠征時の報告書類。おふた方に全部任せますんで、よろしくお願いします」

「!!!」

それからの二人の動きは早かった。

まさに目もくらむ速さで準備を整えた男二人は、お互いに顔を見合わせ。

「当真」

「ああ、わかってる」

いつもの数倍のやる気を見せるのだった。

そして、各隊の思惑を乗せながら会場の綾辻の声で、それはとうとう――。

『『それでは各隊準備が整ったとの報告がありましたので、S級試験開始したいと思います』

す!』』

――ある隊は、来たかと言うように静かに立ち上がり。

――ある隊は、待ちきれないというように心躍らせ。

――ある隊は、負けられないとやる気に満ちて。

そして――ある隊は……。

「せいじゃ、やりますか」

いつも通りに八幡は呟き。

「さあ――ゲームを始めようぜ」

「……. かつて、来るの…….」

その兄弟は互いの手を結んで。

『試合開始。転送!!』

その戦いの始まりは告げられた。



そこはおなじみの市街地。

と言つても、所詮はトリオンで再現されたものであり、何も特別に変わったことはない。

今回は試験とは言え3チームを相手にすることから、場所や天候は平等にランダム。

結果。場所以外適当なためか昼。気候や風も安定し、どの隊にも自身の全力をぶつけるには最適と言える環境だった。

そして、そこに転送された八人の隊員は各々に、しかし確実に動き出した。

『おい、ハチ聞こえるか。割り出したぞ、とりあえず一人だ、行け——』

「ん、了解」

そんなやり取りをしながら、比企谷八幡も動き出す。

時と場合で毎回セットするトリガーが違う八幡は、今回使用するそのひとつを起動させる。

(《バググワーム》起動確認。さて、行きますか……)

会場からは、綾辻の解説により、『冬島隊』の二人、そして『風間隊』も《バググワーム》を起動させたと告げられた。

八幡のリーダーにも、映っている隊員は二人しかない。

今回はチームランク戦のように混戦状態になる可能性がなく、相手が八幡一人と考えるとき、狙撃手である当真と、トラップである冬島以外はつける必要がないように思えた。

事実、会場にいる多くの隊員からは疑問の声が上がり、各隊の思惑を読み切れていない。

もしそれを言葉で語ろうとすれば。

今回で言えば、風間隊はチームで動くことを想定し、奇襲を作戰としているため。

冬島隊は言わずもがな。

太刀川隊は、単純にそれぞれが単体で十分強いいため、すぐには殺されないという判断だ。

しかし、八幡もそれを使用するという。各隊は予想外の事に、集合を目的とする『風

間隊』と、すでに動いている『冬島隊』とは違い、太刀川隊は完全に足が止まっていた。そして、もし各隊が八幡のそれを疑問に思ったならば、とりあえず作戦通りを遂行するのではなく、その意図を読み警戒をするべきだった。

A級のトップクラス。遠征部隊。言うまでもなく彼らは強い。

だからこそ仕方なかった。油断していたわけではないだろう。警戒はしていたし緊張もしていた。

攻撃を受ければすぐに対応するぐらい余裕ではあった。

八幡が狙撃手スナイパーのトリガーを入れていることを想定し、オペレーターに真つ先に狙撃ポイントを洗い出させた。

射線が通らないように動いていた。移動一つとっても完璧。

そんな、見えない部分の彼らの対策。作戦をあざ笑うように――。

『3』

『2』

それは八幡の頭に響くカウントダウン。

白の声で流れるそれを聞きながら。

『1』

どこにでもある家の屋根。その場所へ身をひそめながら《イーグレット》であるそれ

を構え。

『0』

それと同時に。見えたのは一瞬。家と家の間。そこを横切る人影を見て。否、正確には見える前にそれは行われた。

静かに引かれた引き金とほぼ同時。

『トリオン供給機関破損。バイルアウト』

狙われたのはたまたまだった。

あと二人程度は狙えてはいた。ただ、その中で彼が一番めんどくさいと判断されたため。

ある意味、八幡と『くうはく』にめんどくさいと称されるのだから、むしろ褒められるべきことだったのかもしれない。

とは言え、別段彼におかしなところはなく。

撃たれた本人も何が起こったか分からなかっただろう。

狙撃距離800メートル。

秒数にして開始から僅か20秒前後。

(……………!!!)　なんだ、とッ!?)

そんな僅かな時間で。冬島隊隊長、冬島慎次は脱落した。

時に、『』である二人がたたき出した記録の中で、コアゲーマーがひしめき合うFP Sと言うジャンルにおいて、不動の記録を出したのは空ではなく白だ。

悪魔的なまでの計算能力によって敵の動きを把握。

そこから導き出される行動パターンと、射撃時間までおりこんだ未来予知に迫る偏差射撃に回避行動。

見知らぬ相手のそれすら読むことができる白が、相手の情報をえられるという『ボダー』の戦闘において。つまるところ、相手の思考を読んで見せるという空の力を借りれる今の状況で、初期位置から誰がどう動くなど。

——開始20秒もかからないほど、簡単に成し遂げられる。

「なッ！ 誰が脱落したんだ!!」 まだ開始からそんな経ってねーぞ?!」

ベイルアウトの光を見ながら、出水公平は驚きの声を隠せない。

レーダーに表示された初期位置を思い出すに、どう考えても接触するだけで三倍程度の時間は必要だろう。

（まさか狙撃？ 風間さんの話だと攻撃手^{アタッカー}って話だったが・・・）

その疑問に答えるようにA級一位『太刀川隊』のオペレーター。国近柚宇が出水に

言った。

「あつ出水君？ やられたのは冬島さんだったよ。それと同時に比企谷君は《バグワーム》を解除。今向かってるのは——」

ズサリ、と。出水の前方に人影が見えた。

「あ、柚子さん。その先は言わなくていいです。・・・・・・・・どうやら、二人目の獲物は俺らしいので」

出水と冬島のやられた場所の距離は、軽く見積もっても500メートル以上の距離があった。

（つてことはやっぱり狙撃か・・・・・・・・）

「なあ、お前が比企谷だろ？ 俺に顔を出しに来たのは理由でもあるのか？ 狙撃手な
スナイパー
んだろ、お前。もしかしてなめてんのか・・・・・・・・」

出水が勘違いするのも仕方ない。

500メートル以上の距離を一発で狙撃。しかもオペレーターである国近の報告では、狙撃の射線は一秒も通らなかつたらしい。

そんな狙撃をされれば、いくら冬島とは言え反応できないだろう。

しかしだからこそ、出水は思った。そんな変態的な狙撃ができるものはA級クラスの狙撃手だけ。『ボーダー』にも数人しかそんなことができる者はいないだろう。

ならば、比企谷八幡は狙撃手スナイパーであり、目の前に現れるのはありえないと。そんな出水の疑問は。

『思考投影』をした八幡を用いて、空が代わりに答えた。

『ドツチボールって知ってるか?』

「——は?」

相手が勘違いでイラついている。ならば——。

『その必勝法ってさ、弱い奴から倒すらしいぜ。ほら、そうすると外野から戻って来れないからな』

挑発するに絶好の機会。そして、それをするのに空以外の適任が三人の中にいるだろうか。

出水には、一瞬なにを言ってるか分からなかった。

それを感じ取ったのか、空はただ簡潔にこう告げた。

『てめーが一番落としやすいって言ってるんだよ。うだうだ言ってねーでかかって来い』

もちろん『思考投影』によって言いたいことを考えているのは空ではあるが、実際に口に出しているのは八幡なわけで……。

(おいちよつと待て——言いたいことだけ言って逃げてんじゃねーよ引きこもり野郎っ

!

そして、そんな八幡の言葉にキレないでいられるほど大人ではない出水は。

「あー、太刀川さんが来るまで時間稼ぎしようと思つてたけどやめだ。お前はぜつて俺の手でーハチの巣にする」

両手に《アステロイド》のトリオンキューブを展開させながら。

次の瞬間。

八幡が放つた《イーグレット》によつて、冬島隊の当真がバイルアウトした。

「は!? ……ッ!!」

『トリオン伝達脳』を貫かれた当真が驚き。

「……うそ、だろ……ッ!」

出水が驚愕の声を上げる。

そんな出水にポツリと。八幡の口を借りて空が語る。

当真のバイルアウトの光を見ながら。

『……気づいてないと思つたか?』

相手が、空の思考に追いつけるように、間を開けてゆつくりと。

『俺の挑発に乗つたように見せて、実は狙撃手の準備を待っていた。……そし

て、お前が構えると同時に狙撃手が仕留める。よくできてたと思うぜ、『おれら』以外が相手

ならぬ』

手に持った《イーグレット》をもてあそびながら。

『狙撃手スナイパーが最も油断するタイミングってなんだか知ってるか? 獲物を仕

留めた時だよ』

「仕留めた時 ?」

そこで、ようやく口を開いた出水は、言っている意味が分からなかった。

だって、——お前はまだそこにいるだろう、と。

『当真つて野郎はさ、撃つときは必ず外さない、だろ? なら——撃った瞬間は油断だ

らけだ』

「 ツ!!」

そう。当真勇とは外す弾は撃たないというポリシーを持っている。それはつまり、

撃つ時には必ず当たるといふ確信があるということ。

それが、ただの狙撃手スナイパーより質の悪い油断だと、『くうはく』は言ってるのだ。

『今度は気をつけとけよ。撃つ時に警戒するなんて、狙撃手スナイパーなら基本だぜ』

(それは敵が複数いるときの基本だろうが——ツ)

疑問点は多々あった。

そもそも、どうやって当真の位置を知ったのか。

いつの間に《イーグレット》を装備したのだとか。

ただ確かなのは、出水の前に現れた時、八幡は手ぶらだったということだ。

いいや、先のすべてが八幡——否『くわく』の計算ならば、それすら当真と出水を釣る作戦だったのだろう。

そもそも、釣ってガードしたならまだわかる。それを——逆に狙い撃ちにしたことが異常すぎるのだ。

「思った以上に化け物で、笑えねーな」

「悪いな……………それはうちのオペレーターに言ってくれ」

「どうやら、今度は八幡が話しているらしく——とは言え、そんなこと出水は知る由もないが。」

そして——。

「あー太刀川さん？ 早く来ないと俺落とされそうです」

通信を隠すことすら頭から離れてたのか、久しぶりの冷や汗をかきながら、出水公平はそう言った。

八話〈 〉『なら．．．．普通に倒すか』

会場では、綾辻である解説者を含めて、誰も言葉を放つことができなかった。

モニターでは、向かい合う出水と八幡。

A級トップクラス射手相手に、噂の『比企谷』がどう動くのか。それ故に沈黙してるのではなく、開始一分もしないうちに脱落した、冬島隊が破れるまでの光景に驚きを隠せないのである。

『えーと、綾辻？ 解説しなくていいのか？』

迅のそんな言葉で、綾辻はハツとしたように我にかえる。

『あ、あつすみませんッ！ 実況を続けます。——ベイルアウトしたのは冬島隊長の冬島隊員とナンバーワン狙撃手スナイパーの当真隊員。えーと、すみません。僅か数十秒で起きたこの出来事に説明をつけるのは私にはできないので迅さんと東さん、解説の方をお願いします』

『了解了解。って言っても解説することはほぼないぞ？ 要は八がふたりを狙撃した。』

「事實はこの一点だけだろ。ね、東さん」

「『いやいや迅、みんなが知りたいのはどうやって《バックワーム》も起動させた二人の居場所を、比企谷が知ったのか。それを知りたいんだろ』」

「そんな当たり前の反論に。」

「——あーなるほど、と。迅が笑って。」

「『それなら簡単だ。オペレーターに計算させたんだよ』」

「さも当然のように、それを言った。」

「三人の話を静かに聞いていた隊員たちは、同様に頭をひねる。」

「それを代表するように。」

「『えーと迅さん？ 計算させたとは……。その、どういうことですか……？』」

「『そうだなー。今回で言えば『風間隊』は合流を真つ先に行った。『太刀川隊』は八の元へ向かった。そして『冬島隊』は狙撃位置の確保と、トラップの準備だろ？』」

「一つ一つ、順序良く、八幡——否、『くはく』が行ったことを明確にしていく。」

「『その上で、その人間がどう動くのかそれを計算したんだよ』」

「『——えッ!!? そ、そんなことできるんですか』」

「綾辻の疑問と同時。周りの隊員もあり得ないと首を振るう。」

しかし——。

『事実できてるだろ。今この状況ですら、八は周りの人間がどう動いてるか把握してるはずだ。冬島さんが狙撃されたのは移動最中。しかも射線がとおってからわずか0.3秒。家と家の間、そこを通るほんの一瞬それを行った。これは狙撃手東さんの方が分かると思うよ』

『そうだな。A級レベルの狙撃手スナイパーなら、相手が動いてようがわずかな隙間だろうが狙撃可能だ。けど、それはあくまで、敵を補足してどう動いているか見えてる状態でだ。どこにいるか分からない敵を、どう動くか分からない敵を、狙撃することは不可能だろうな』

東のその言葉は、迅の先ほど言ったことの肯定だった。

つまり——。

7人もの隊員の確実な動向把握。

『比企谷隊』のオペレーターはそれを行っている。

しかしそれならば、八幡が当真の位置を補足していたことにも説明がつく。

だが、今回の真価はそこではない。それを付け足すように。

『』と言つても、見るべきところはそこじゃない』

『えーと？ それは一体……』

「ほら、さつき八も言つてただろ。『狙撃手は仕留めた瞬間が一番油断する』つてさ。なら、それはこういう事だろ——。つまり、八には——そのオペレーターには、敵が狙撃するタイミングまで手に取るように分かるつてことだ」

ありえない。ありえないだろ。会場にいる隊員のその言葉が、沈黙となつて押し寄せてくるようだった。

そんな周りのそれに笑みを浮かべなから。

「驚いてるところ悪いが、あれは誰でもできるぞ」

迅は、ネタバラシをするのを少し楽しそうにして。

「出水を挑発した理由。それを考えれば自ずと答えは見えてくる。あの場面でなぜ挑発したのか。それは——」

少しためるように話す迅のセリフを奪いさり、

「『出水に攻撃する理由を与えてやったんだろ』」

結論を東が口にした。

「あの状況での出水の最適解は、逃げに徹して落とされないことだ。にもかかわらず、交戦なんて選択肢を取れば、釣りとしてスナイパーがいることがバレてしまう。だからこそ出水は攻めあぐねていた」

東に言葉を取られたことに対し、ムスつと言う顔をしながら、迅が言葉を重ねる。

『それじゃあ狙撃タイミングがわからない。だから、あえて挑発することによって、出水の攻撃するタイミングを誘導した、交戦する理由を与えた。——そして、出水が攻撃するタイミングとはつまり、スナイパーの狙撃タイミングでもある』

そう、それこそが、『くっはく』の作戦。

誰でもできる。と迅は言ったが、それは流石に言いすぎだろう。

それはあくまでも、誤差コンマ数秒のしろの計算を。コンマ0まで落とし込むための一幕なのだから。

『さすがにそこまでとなると俺のサイドエフェクトでも不可能だろうな。てか、読み合いで俺負けたし』

それはつまり、迅よりも先の未来を見ているということ。

ただの計算で、そこまでやってのけるという事実。それがいかに異常な事か、その場の全員が理解していた。

とは言え、『迅よりも未来を見ている』というのは少しばかり違う。

仮に『くっはく』が解説するなら、それは、迅よりも先の未来を見ているのではなく、迅が未来を見たうえで、の行動を予測していると言うはずだ。

両者は似ているようで全く違う。

何故なら前者には限界があり、後者にはそれが無い。未来を見る人のそれとは違

い、あくまで予測であり計算である』』のそれには、限界値くわいはくが存在しない。

白の頭脳でどこまでも、空の考察でどの可能性だつて、『ふたり』はそれを予測する。

『迅さんは——A級部隊に勝ち目があると思ひ、ますか……?』

実況者として、それは聞いてはいけなかつたかもしれない。

それでも、綾辻は思つたことを止められなかつた。

会場の多くは、まだオペレーターしか評価してない。けれど、綾辻は知っている。

比企谷八幡という男が、小南桐絵に一度も敗北したことがないという事実を。

そんな綾辻の疑問に迅は。

『それは分からない。未来は無限につながつてる』

お決まりともとれるその言葉を口にした。

ただ、お決まりの言葉を口にしたということが——もう答えを語っているようだ、

綾辻は思つた。



『比企谷隊』の戦い方は、完全なまでの役割分担によって、それは行われている。

それはつまり。

まずは——白がすべてを計算し。

その上で——空が状況を読んで八幡へ報告。

それを元に——八幡が動く。

それが三人にとつての基本だった。

その行為とはつまり。迅の言うところの『無限に未来はつながっている』その無限を

『一本の道』へ強引に導き出す公式。

白の悪魔的なまでの計算によって、その場をすべてを常時把握。空が相手の思考を読むことで、考えうる可能性を限定する。そして、絞り切れない部分は八幡への指示で誘導する。

八幡が単体で戦う時などは、自身のサイドエフェクトを使い、最後の一つ。相手を常に誘導することのみを行っている。

相手からしたら最初から最後まで動かされているだけ。ただ、イレギュラーや、読み違いを防ぐためにサイドエフェクトを使っているのだ。

ただし、それでは完璧ではない。

それを補うのが『くはく』と言う存在だ。

99パーセントを100パーセントにする。それこそが三人での戦い。

風間が以前言っていた、『オペレーターがつくことによって、明らかに強さの次元が違

うらしい』とはこういう事だ。

しかし、戦うのはあくまで八幡なわけで、いくら誘導しようともそこで負ければ意味がない。

『思考投影』のサイドエフェクトを相手にではなく、『くわはく』に使い空達の考えをリアルタイムで取得していることを考えれば、単純に八幡の戦闘力は落ちる。

だからこそ、その落ちた部分を補うのも――。

『くわはく』の仕事だ。

出水公平は、比企谷という男の化け物つぶりに頭がおかしくなりそうだった。

それを表す言葉として適切なのは雨。

前方から迫る、出水の《フルアタック全攻撃》を、八幡が無防備にその身へと受ける。

『ボーダー』随一と言われる出水のそれに、自らあたりに来ているとすら出水には写った。

否、出水にはそうとしか見えなかった。

にもかかわらず、八幡にダメージはない。

まるで、八幡と接触する瞬間に、トリオンの弾が消失しているようなのである。

(いやいや意味わかんないだろツ!? 無敵になるトリガー? そんなトリガーがないと

説明つかねーぞ………ツ

「くそツ——《バイパー》!!」

あえて相手に見せつけるように、前方から細かく分けた《バイパー》。弾道を指定できるそれは、オートでそれを初期値にするのが基本になる。それを出水クラスともなると、無数の弾道をリアルタイムで描きだす。

全方位。上下左右。

さらには当たる直前に向きをかえるというおまけつきをお見舞いしてなお。ダダダダン、と。当たった音は響くのだ。

しかし、当たったはずの八幡には、わずかなトリオン漏れすら存在しない。

とは言え——。

「………だろうな」

——それはもう学習した。

（わかっているさ。仕組みは分からないが無効化されるんだろ？ なら最初から死角へ飛んで来たらどうする）

そう。背後から放った追尾弾《ハウンド》は、住宅街を迂回しながら、背後から八幡を襲う。

本来トリオンに反応し追うそれを、視線誘導に切り替える。出水にとつても死角にな

場所を通りながら向かうそれは、A級トップクラスでもなかなかお目にかかれない離れ業。

放たれたことすら八幡には見えていない。

完全なまでの死角——さらには知りえない攻撃。

仮に気づいていても、『バイパー』に気をとられていればそれで当たる。

そんな絶対を——。

『……無、駄……』

その声は、『比企谷隊』のオペレーター室から放たれた言葉だった。同時に——。

背後から迫った『ハウンド』が八幡へ当たる。しかし。

——いとも簡単に無に帰す。

「すげえな。多芸すぎるだろ。……ま、家のオペレーターの方がもつとすごいけ

ど」

何でもないように八幡は呟く。

「ま……まじで——」

足止めもできない。

八幡のあしを止めることさえできない。

(このままじゃ、太刀川さんと合流する前に落とされるなこりや)

そう思いながらも、出水は攻撃を止めることはなかった。

モニターの前。

笑みを浮かべながらいるその男の名は空。

その空の膝に乗るように丸まっているのが白。

「今頃驚いてるころか……？　ま、無理もない。あいつにとっては、トリオン弾がハチにあたった瞬間に消えてるようにしか見えなからな」

今は、彼の仕事ではないのか、空は楽しむようにそれを見ていた。

「フハハハハハッ!!　見たか諸君っ！　これが我が妹の力!!　そして『くうはく』の力だ!!」

「………に、うるさいッ………！　集中——してる、から………だ

まっ、て………!!」

「………はい」

流石に、あれほどの量の弾丸をすべて計算するのは白にも難しいようで、極限の集中力を必要とするらしい。

落ち込む姿を見せる空のそれには、一里たりとも同情の余地はなかった。

そんな中。

——それにしても、と。空は考え。

「ハチのあれ。流石に俺たちでもできなかったからな」

あきれるように呟いて。

「対処は不可能だろうよ。ハチの『高速切替』ラビッド・スイッチに白の計算による弾道予測。それを突破するには、亜音速程度じゃ足りないぜ？」

そう言つて、空は不敵に笑みを浮かべる。

八幡の行つているそれは、言つてしまえば《シールド》で防いでいるだけ。

特に新しいトリガーではなく、特別なものは何も無い。

トリオン弾が当たる瞬間。その部分だけ展開させた本当に小さい《シールド》。それを当たる瞬間に繰り返しているだけである。

白の計算によつて導きだされる弾道予測によつて、八幡は絶対防御を可能にする。

そもそも、《シールド》とは本来と壊れやすいものである。

いくらトリオンがあろうと、無限に防御することはできない。

しかし、八幡の『高速切替』ラビッド・スイッチは、それを対策として考案した戦法である。

『高速切替』は要は武器の高速切り替えだ。コンマの世界で武器の入れ替えを行うハチにとつては、白のアシストがあれば《シールド》の切り替えで弾丸の全防御なんて余裕だろ」

そう、言つてしまえばそれだけの事。

先ほど当真を攻撃するときも、瞬間的に《イーグレット》をだし、狙撃して消しただけなのだ。

「いくらリアルタイムで《バイパー》の弾道を描けても、狙う場所、放つタイミング。それに弾のスピードに至るまで。さらに過去のデータまで照らし合わせてんだ。白なら予測できないわけがない」

瞬間的に《シールド》をだし——消す。

コンマ数秒ごとに迫ってくる——まさに雨と言つていいそれを、すべて対処してるのだから、もう言葉も出ない。

あくまで白の予測ありきの強引な技だが。

——技の掛け合わせとか超萌える!! とほざく無敵のゲーム様には、どうやら琴線に響いたらしい。

そして、面積が狭ければ固くなるという《シールド》の特性と、複数に分けることができるという使い勝手が、射手や銃手では、八幡と白の前では絶対勝てない証明式をたててしまった。

そして、それを過去に練習相手として味わったことのある玉狛支部の連中が、迅の代わりに解説した会場では。もうどこを驚けばいいのか理解不能だった。



出水の攻撃の手数がだんだんと減ってくる。

どうやら八幡にトリオン弾は無意味と判断し、太刀川の合流を優先しだしたようだ。

その時その時の判断は流石にA級1位を思わせるものだった。個人芸だけでは、そこへ行けないということだろう。

『ハチ。流石に合流されると面倒だ。『風間隊』もすでに集まつてる。あいつはここで落とすぞ。白と変われ』

「あいよ。しろ、頼んだぞ」

『……まか、せて——。にい、も補助、よろ……』

その言葉に、八幡は攻撃をする時に使うすべてのリソースを、白の脳にゆだねる。

視界も良好。意識もある。

ただ、白の脳がそこにある。

そんな違和感が八幡のかすかに残った思考を支配する。

「それじゃいくか、白」

『……おー……』

そんな気の抜ける会話と共に、八幡は動いた。

「クソツ、太刀川さんの合流地点まであと30秒……。間に合うか？」
そんな出水の言葉。

少しの安堵。それをすべて奪うように、無数のトリオン弾が出水に迫った。

（——ツ!! やっぱそう簡単にはいかないか……! 《フルガード》!!）
背後に展開される《シールド》。

広範囲にして、おおぎつぱ。しかし、出水のトリオン量を考えると、それでも十分削り切れる前に逃げ切れる。

——そう、出水は思ってしまった。

（なツ……《バイパー》!?!）

《シールド》を迂回しながら飛んでくるそれに、出水は驚きを隠せない。

なぜならこれは——。

「リアルタイムで弾道を描いてツ……。」

そう。これは出水と同じくリアルタイムでの弾道設定。

A級クラスの狙撃に、攻撃手としての情報。それに射手としての実力も入ってきたのだ。出水が驚くのも無理はない。

それを見て、出水は咄嗟に向きを変える。

家を盾とする動き。瞬間的な判断としては合格と言えるだろう。

——まあ、もちろん。

「……悪いな。白のそれは——」

悪魔的な八幡の声。次の瞬間。

「逃げられないんだよ……」

すべての弾丸が出水を貫いた。

(マジかよ……クソツたれ——ツ)

もう笑うしかなかった。

まるで最初から出水がどこに逃げ、どの程度のスピードで逃げるかまで計算された弾道設定。

もちろん。それだけではベイルアウトまでもつていくことはできない。単純な火力不足だ。

『なら……次、は……全、部——致命傷……だよ』

続いて放たれる《バイパー》。

このままでは出水は終わる。だが、それで終わる程度ならA級一位部隊としてやっていない。

「このまま終われるかよ……。フルアタック全攻撃《ハウンド》」

静かに告げられたそれによつて、出水の両手から大量のトリオン弾が放たれる。

《シールド》では防げない。なら撃ち落とす。

『ボーダー』でもトップクラスのトリオンを誇る出水だからこそ。もちろん、その精度は折り紙付き。いくら誘導弾とは言え動く的にはまともに当たらないそれを、僅かな調整で必中にする。

しかし――。

(――ッ!?!? だめだこりゃ……すみません太刀川さん先落ちます)

八幡が放った――否、白が設定した《バイパー》の弾道は、出水が放った《ハウンド》をすべて避けるように飛んできた。

あくまでそれは比喩だ。トリオンが自ら避けるなどあるわけではない。だが、白の計算によつて放たれたそれは、もはやそうとしか見えないほどだった。

もちろん、出水が避けることまで計算しつくしたそれは……。

『トリオン供給機関破損。ベイルアウト』

すべて弾丸が必殺の場所へと殺到した。

白による弾道の計算。それはまさに、『弾が避けて通り、弾が追尾して追ってくる』かの如き錯覚を敵に与える。

事シューティングゲームにおいて――つまり打ち合いにおいて、白という存在に勝て

るものなど『ボーダー』にはいない。

仮に相手が物理限界ギリギリの行動ができたとしても、それが物理の計算に当てはまるのであれば。

——白はすべてを予測しつくせる。

ペイルアウトの光を見ながら、最後のメッセージを聞いた太刀川は。

「出水がこんな早く落とされるとはな……。はつきり言つてなめてた。けど——面白い」

『ボーダー』で名実ともに一位の男。

太刀川と八幡は出会った。

「……ひと足遅かったですね。もしも後数十秒早ければ間に合っていました」

「はは、もしもなんて話には興味ないんだ」

「なるほど、強そうですね……」

その会話が、時間稼ぎでないことは空にはわかっていた。

つまり、それが太刀川という男の素なのだろう。

「さて、もうすぐ風間さん達もここに来る。それまでさしでやろうぜ」

これまでの八幡の戦闘結果は、オペレーターである国近と、出水からすでに貰ってい

る。

それを見てなお、さして八幡とやろうとしているのだ。

要するに、太刀川慶という男はそれだけ自信があるのだろう。

事実として、太刀川は《風刃》を持つ迅が戦つても、十分渡り合える実力を持つている。

「……お手柔らかにお願いします」

八幡は静かに《スコープオン》を構えた。

「へー、今度は攻撃手ね。オールラウンダーってどこか。しかもそのすべてが一流」

「——？ 一流って……。別におれはそんな大層なもんじゃないですよ」

そう言いながら、八幡は手に持った銃型トリガーで《アステロイド》を放つ。

『不可視の弾丸』プラス『高速切替』。

完全な不意打ち。

弾丸の届く距離があるとは言え、認識不可のその攻撃を——。

「へーそれが噂の『高速武器切り替え』か……」

太刀川の展開していた《シールド》によって阻まれた。

「まだ見せた人物少ないと思うんですけど……」

「俺の隊のオペレーターは優秀だな。出水の証言をもとに導き出したんだよ。出水の攻

撃全弾防ぐそれには驚いたが、攻撃手アタッカーの俺には関係ないな」

「マジか……すごいですねそのオペレーター……」

「お前がそれを言うのかよ……。——まっとりあえずいくぞ」

そう言つて——。

《弧月》を構えた太刀川は。

「——《旋空弧月》」

ただ愚直に、八幡の命を狩りに来た。

そんな中。

『——に、少し疲れ、た……。……ちよつと休んで、いい……』

？』

『ああ、よくやったな白。大体手はず通りだ。——なら、ここからは俺が時間稼ぎしてや

る』

——ニヤリと笑う空をみて、安心するように白は目をつむる。

そんな白へ言うように、

『だが、別にあれを倒してしまつても構わんのだろう？』

恐らくキメ顔で、一度は言つてみたいセリフ第6位を口にする空へと、八幡は呆れ顔を見せ。

「それ死亡フラグだからやめてくれない？」

放たれた《旋空弧月》を容易にかわしながら。見ているこつちが恥ずかしいと言うように、八幡は口にする。

『ああそうか。なら……普通ふつうに倒たふすか』

再び、『くはく』の片割れはニヤリと笑った。

九話<<『勝ったと思った?』

アタック
攻撃手一位の男は、自身の両手に《弧月》をもつて、静かに言った。

「——いぐざ」

瞬間。振るわれるは《旋空弧月》。

言つてしまえば刃の拡張。《弧月》の専用オプシヨントリガーであるそれは、瞬間的に刃のリーチを伸ばす。

伸びる剣。と表現できるそれは、敵の間合いを無視する必殺斬撃。刃に重さがあると、いう弱点があるものの、逆に言えば刃の先に行けば行くほど威力が増すという性質を持つ。

剣を振るう速度。相手との間合いの把握。重さという弱点を無視する二刀斬撃。そして単純な剣の技量にいたるまで。

——太刀川という男がいかに化け物かが一瞬で分かる攻撃だった。

とは言え……。

すべて読めてるなら避けることはたやすい。

しかし——。

(「……………つぶねっ——。思った以上に速いな……………」)

余裕はあつた。ただ、少しばかり速度が速かつただけ。

それでも、空の予測を突破してきた太刀川に、八幡は驚きを隠せない。

『ハチ、あーゆタイプは意外と実力を隠すもんだ。俺らみたいに楽しむためにな』

「——それで、対策は……………」

『俺が相手の思考を読む。後はお前がやれ』

「(おいおい、おもつきし人任せじゃねーか)」

濁つた眼を少しばかりよどませながら言う八幡へ。

『忘れるな。俺にできないことは白がやる。白ができないことは俺がやる。なら——』

『』にできないことはお前がやれ。全員で『』だ。……………『ボーダー』ではな』

「……………」

そう。それが『』の在り方。

一人でやろうとは考えない。——否、全員で一人だと。

そんな空の物言いに。——そうだな、と。八幡は笑みを浮かべて。

「んじゃ、少し気合入れますか……………」

そう言つて、八幡は太刀川へ迫る。

二人の戦闘を言葉に表すのなら、ただ高い技術の応酬。それに尽きる。

先ほどまで異次元的な戦を見せた八幡を思い出せば、『すぐくレベルは高いが驚きはない』そんな評価を得そうな攻防だった。

そうは言っても、二人の戦いは『ボーダー』随一と言っても過言ではない。

剣を振って相手がかわす。躲し終われば剣を振るう。

剣速が早すぎてたまにしか見えないそれは、一步間違えればそこで終わりのサドンデス。

「《旋空弧月》」

少し八幡が距離を置けば、反射的に繰り出されるそれを。

「……こわっ」

刃の平地の部分弾き——いなす。

横に振るってた刃が直角に打ち上げられるその様子に、それを見ていたA級隊員すら息を呑む。

その影響か、太刀川の体勢が後ろにずれる。

もちろん。そんな大きな隙を見逃す八幡ではなく——。

(がら空き……)

太刀川の首をめがけて《スコープオン》を振り下ろす。

それを目にした太刀川は。

——ニヤリ、と。

反対の手に持っていた《弧月》を、八幡の首へ横なぎに刈る。

オプシヨントリガー《旋空弧月》を使い、遠心力を利用して、体勢を無理やり戻してきたのだ。

狙っていたわけではないだろう。動機としては思わず体が反応した、程度のことですらあった。

だからこそ。太刀川慶という男は異常にして最強なのだ。

瞬きの間もなく、二人の剣は交差するはずだった。お互いの首を切り落とし、振り抜いた勢いで。

勝負はそこで終わるのはほぼ確定だった。

——ああ、二人が地面を蹴って距離をとっていなかったらだが。

「……………危ない賭けしますね。もう少しで仲良く首飛んでたんじゃないですか？」
「賭け？ 違うな。俺は今の通りよけられたぞ」

「それは俺が手を引いたからでしょ……………」

「どうだかな」

……………。

.....

あきれるほどに高次元の攻防を見せる二人。

八幡達はただ首を振るって刃をよけただけ。追撃ではなく退避を選んだふたりを見るに、どちらも確実性を求めた結果だろう。

——いけるかもしれない、ではなく。

——確実に行ける、それを狙って。

「にしても思ったより普通だな。腕も立つし余裕もある。けどブラックトリガーに勝てるほどとは思えないが.....」

「いや、太刀川さんも強いですよ。さっきの射手シューターと組めばもしかしたらブラックトリガーに勝てるかもですし」

「.....上から目線のご演説か?」

ムツとしたように言う太刀川のそれで、八幡もわずかに顔をしかめる。

(やべツ、少し空の影響が出てるのか.....。戦闘に集中しすぎて調整ミスった) 逆に言えば、八幡はそれほど苦戦しているとも言える。

『思考投影』によって、リンクした空の思考が、僅かに表へと出てしまうほどに。

「(おい、まだか空——。そろそろ風間さん達も来るだろ)」

『ああ、今ので修正した。白も起きたしもしもの時も任せろ』

『……おはよ、う』

「(本当に寝てたの? 馬鹿かお前ら……)」

八幡は苦戦していた。ただ、それは八幡がサイドエフエクトを使うことなく——さらには一人だつた状況での話だ。

つまるどころ、ここかが本番。

『……やりますか』

『くうはく』のその眩きは、誰に聞こえるわけでもなく——しかしながら、確かに言ったその一言で。

彼らは本領を發揮する。

そしてその数秒後。

S級ランク戦の実況会場。

そこでは、何度かも分からない沈黙がその場を支配していた。

何を言うべきかわからないこの状況で綾辻遙はなんとかそれを口にしようとする。

『比企谷隊員は先ほど、当真隊員を狙撃、そのまま出水隊員を撃破。そして太刀川隊の隊長である太刀川隊員との戦闘を開始したのですが……』

口ごもる綾辻の続きを言うように、迅も苦笑いでそれを言う。

『いい勝負だったな……』——さつきまでは』

息を呑む攻防から一転。

すでに片腕を切り落とされた太刀川は、トリオン漏れによるベイリアウトすら視野に入るほどだった。

つまり——。

『風間隊が間に合わなければ落ちるな。あれは』

そんな東の声が場内に響いだ。



そもそものところ、太刀川は勘違いしていた。

『不可視の弾丸』インヴィジビレやら『高速切替』ラピッド・スイッチ。白による高速演算。空によつて無効化される駆け引き。

それを有する八幡にとつて、ポジションなんてものや相性といった類は存在しない。すべての相手に有利に動け——。

——そのすべてを上回る。

作戦なんてものは良いように利用され、使う『技』の次元が違う。

そんな相手に、一人で戦うということ自体が——すべての間違いだったのだ。

(なるほど………これが迅を倒した男か………)

太刀川は、無手で迫る八幡を見ながら、満足そうな笑みを浮かべる。

はつきり言う、太刀川は不愉快だった。

ライバルである迅の敗北。

決着がつかなかった自分たちの戦いに第三者が横やりを入れたようだったと。

しかし。これを見せられては納得するしかない。——いいや、認めるしかないと言ったところか。

「………ちッ!!」

八幡が無手で振るうそれを見て、その腕の延長線に入らないように体をひねる

それでも——。

スツ、と。太刀川の体へ刃が通る。

(武器の高速切り替え………まさかこつちが本領か——ツ)

その通りだった。八幡の『高速切替』ラピッドスワッチの本領は攻撃にこそ真価を発揮する。

そもそも、『シールド』による絶対防御は、白の頭脳ありの離れ業。八幡一人では使えない。

だからこそ、八幡は攻撃にこそ、それを主に使っていたのだ。
つまるところ、無手から繰り出される認識不可の攻撃。

出し入れ自由という《スコープオン》を、相手に接触する僅か一瞬だけ展開する。であるならば、相手には間合いすら知ることができず、刃の形すら分からない。

もしかしたら、短い短剣かもしれない。

もしかしたら、曲がった不可思議な形かもしれない。

『変化』。といった《スコープオン》の特性上。防御と言う概念が喪失する。

さらには――。

『……《変化炸裂弾》、弾道設定――終了』

太刀川が離れた瞬間――合成弾が放たれる。

A級でも、ここまで高速に合成弾を作りだし、《バイパー》の弾道をリアルタイムで設定できる奴がいるだろうか。

その時間僅か0.6秒。

「まじか……《旋空》――ッ!!」

太刀川ならばそれも可能だろう。

コントロールの難しい《旋空弧月》で、トリオン弾をすべて撃ち落とすという行為す

らも。

しかし——。

『……そうだよな。だつてお前さっきの戦い見てるもんな』

空がそれをあざ笑うように予測する。

《旋空弧月》によつて、打ち落とそうとした太刀川のそれを——斬撃を避けるように弾は進む。

それはまるで、弾が自らの意思で避けているようですらあつた。

それが届くまでに四度は振るつた。瞬間的に《旋空弧月》を数回出すという、誰がみても異常なそれをして。

そのすべてを回避するようにして、弾丸は止まることはない。

「——!!? 《シールド》ッ!」

《グラスホッパー》で距離を開け、さらには前方を《シールド》で守るそれをして。

太刀川を追うように《変化炸裂弾》は走り、《シールド》を迂回するように背後から。

「……しまッ——!!!」

轟ッ!! と、太刀川の背後にそれは当たる。

しかし、八幡は警戒を怠らない。

「ハア……はあ、威力は低めだったのか……?」

複雑な弾道を描いたためか、そちらにリソースを使い威力は低め。

それでも、追尾型であるはずの《ハウンド》より、確実に追ってくるそれを、太刀川は恐怖する。

「なるほどな………。これがお前の本気か？」

「……………」

八幡は語らない。

その代わり、それが答えだともいうように。

接近して腕を振るう。

見えない斬撃。《スコープイオン》であるそれを、本当に攻撃か分からないそれを、反射的に防御する。

体の本当にギリギリ。僅か数センチのところへ《シールド》を展開する。ギリギリで展開される八幡のそれを受け止めるために。しかし――。

(当たって、ない………?)

いつまでたつても来ないそれへの疑問。

ほんの少しの思考停止。

太刀川のそれは隙へとつながり、目の前に光る銃口への反応が遅れた。

「――っ!!」

攻撃が認識できないならすべてを回避、もしくは防御しなければならない。であるならば、それを駆け引きに利用しない空ではない。

回避なら追撃し。防御なら別の手で。

『高速切替』と『不可視の弾丸』を持つ八幡にとって、同時に二つまでしかトリガーを展開できないという欠点はないに等しい。

「終わりですかね……」

そんな軽い言葉と同時に放たれる弾丸。単純に威力の高い《アステロイド》。

《シールド》は先ほどの腕につられて展開してしまった。《弧月》も展開している。

八幡のように瞬間的に武器を切り替えられなければ、敗北必須。

「……そうだな」

いや、もう太刀川は負けた。

すべての弾丸が太刀川へとヒットする。

『トリオン漏出過多』

そんな音声を聞きながら太刀川は、最後に残った時間を使いそれを言った。

「そう言えば、『狙撃手は仕留めた瞬間が一番油断する』……だっけか？　ならよ、

今この瞬間はどうだ」

うつすらと、八幡に見えるように笑うそれは。

八幡の顔を驚きへと変える。

「《ステルス隠密トリガー》解除」

その声と同時に現れる3人の影。

A級三位『風間隊』。

(この瞬間を待ってたのか？ すぎえな………)

八幡はその瞬間わずかにだが宙に浮いていた。

《グラスホッパー》で空中に逃げたのをジャンプで追ったのだ。

地面まであと数センチとは言え、その状態でのそれは絶望的。

そしてさらに言うなら、八幡のトリガーの中に移動系のトリガーはセットしていない。

もちろんそんなこと他の隊が知るわけもないが、結果的には言え、『風間隊』は八幡を追い詰めたと言えるだろう。

いいや、風間隊にはわかっていたのかもしれない。

今まで使用した八幡のトリガーをみて、後なんのトリガーがセットしてあるのかを予想し、いけると判断した結果かもしれない。

リーダーでは見えていた。警戒もしていた。

つまるところ——それを分かっていたからこそ、『風間隊』はこの瞬間まで待っていた

のだろう。

「終わりだ……比企谷ツ!!」

風間の叫び。

それと同時に。三人の刃。6つの斬撃が八幡へ振り落とされる。

流石は攻撃手^{アタッカー}三人でA級三位まで上り詰めた隊である。回避する場所は皆無。体が浮いているため退避も不可。

連携は完璧。

高次元な攻防戦を行うのでもなく。トリッキーな技の応酬をするのでもなく。

ただ愚直に——。

この時だけの一撃。

それを入れるためにこの数分を動いていた。

だが忘れていないだろうか。彼らは『^{くうはく}』だということを。

静かに、それを評価するように二人は語る。

『見事だ。相手を仕留めた時こそ最も油断する時。俺らが言ったあの言葉を逆手に取ったか』

『……集団戦、これだから——やめられない……』

『そうだな。だからこそ俺らも返そう』

振り下ろされるそれを見ながら、八幡を含めた三人は同時に言った。

「『勝ったと思った?』」

それと同時。

全員が動きを止めた——否、止められた。

「——ッ?!」

驚きを隠せない三人へと。

そのままゆつくり、動きを止めた無防備を見せる『風間隊』一人一人に。

八幡は剣を振るった。



太刀川と八幡の戦闘を目撃しても、そこへ風間が介入しなかった理由を挙げるなら。

風間蒼也という男が、最大限比企谷八幡という男を警戒していたからに他ならない。

「(風間さん。速くしないと太刀川さん落とされますよ? 今のうちに仕掛けなくていいんですか?)」

通信を使い言った菊地原のそれをきいても、風間は動こうとはしなかった。

それはつまり、トリオンを垂れ流している太刀川と組んで戦うより、あるか分からない

い確実なその瞬間を待った方が確率が高いと判断した結果だった。

勝つために、分の悪い賭けにすべてをささげる。

そして、その瞬間を実際に手繰り寄せた。

もしそれを『くはく』が聞いたのであればきつと——。

超かっけー!! と、両手振り上げで喜んだことだろう。

ただしその後、——それでも『俺』が勝つ、と。そう笑うだろうが。

風間は自身に迫るそれを見ながら。

「……………ぐつ……………おおおおお!!」

本当に数センチ。されど数センチ。

八幡の剣を回避して見せた。

それができたことに理由をつけるのであれば、風間の力量はもちろん。八幡が《スコーピオン》を振るった順番が最も遅かったことがあげられる。

『トリオン伝達系破損。バイルアウト』

『トリオン供給機関破損。バイルアウト』

『トリオン漏出過多。バイルアウト』

しかし、それ以外は見えての通りだ。

——一人は、体と離れるように首をとばされ。

——一人は、気づいたら胸を貫かれていた。

——一人は、トリオンの流れを止めることができずに。

全員が全員、光となって飛んでいく。

それを見ることすらなく。

瞬間的に距離をとった風間は、すぐにその空間の異常を理解する。

「そうか……」。《スパイダー》の糸。これを仕掛けていたのか」

色彩を変化させた《スパイダー》。

よく見ないと発見できないそれは、はつきり言つて人気のないトリガーのそれだった。

使いどころが難しい。しかも基本受け手の罠としての機能。

チームランク戦ならいざ知らず、実質攻撃力のないそれは、トリオン兵にはほとんど意味をなさない。

「流石ですね風間さん。今ので終わりのつもりだったんですけど……」

何でもないようにそれを告げるところを見るに。これは彼らの思惑通りだったという事だろう。

しかし、それではおかしい。

「いつ仕掛けた。お前は開始からずっと戦闘を繰り返していたと聞いている。ここにも太刀川が逃げながら着た場所だ。仕掛けるタイミングなどあるはずがない」

その通りだ。風間の言う通り本来ならありえない。

『比企谷隊』がもう一人いないとできない計算。

だが、そんな風間の疑問に八幡は気軽に答える。

「いつって……今風間さんが言つてたじゃないですか。太刀川さんが逃げてきた場所だって」

「……!!!」

その言葉に風間は戦慄を覚えずにはいられなかった。

なぜならそれは。

「お前はこれすら想定してたのか……?」

「まあそうです。正確には俺ではなく、俺の隊のオペレーターが、ですけどね」

さも当然のように。

太刀川との戦闘の最中にそれを気づかれずに仕掛け、風間の考えすら完璧に読んだ。

「いや、それだけじゃ説明がつかない……。《スパイダー》は究極的に罠ではない。俺たちが全員その罠にかかることを期待していたのか……」

都合よく、彼らの攻撃が止まるように——さらに言うなら彼らの腕が都合よく引つか

かるはずないと、そう言っているのだ。

「攻撃手アタッカーの連携つて『シヴィ』ですよ。逆に言えば型にはまってるともいえます。『風間隊』のログ、俺も結構見ましたよ……」

——武器を手を持つてる相手には反対側から攻めたくなる。

——不意をつこうと思えば背後から。

——念には念を入れ相手の攻撃範囲外から。

そんな無限の可能性を、自身の体勢——そしてそれまでの状況を見せることによつて誘導する。

八幡はまだ納得できないという風間のそれにこたえるように。

「太刀川さんも回避するとき流石にうまかったです。見えない剣なら反応できるように一歩下がり、トリオンを放てば道が広いところに出なくなる。うまいとはつまり、理にかなっているということです。もちろんイレギュラーはあります。でも……それをすべて読み切るのがうちのオペレーター達なんですよ」

「なるほどな。確かにこれは迅の未来視と同じだな」

「どうですかね。彼奴らに言わせれば、わかっていたのではなくて、決まっていたって感じです。ま、俺にはそこまでわかりませんが、あいつらの頭を借りてるだけです」

結局のところ、風間はもちろん。全員が『くうはく』のそれを上回れなかっただけの事。
《スパイダー》にしてもそうだろう。

太刀川の戦闘中に仕掛けたということは、少し間違えれば気づかれていた恐れがある。それだけではない。ほんの些細なことで、八幡自身の逃げ道を塞ぐ結果にもなったことだろう。

A級トップクラスを、完璧なまでに動かし続けた。移動や、攻防はもちろん、どう腕を振るうのかまで。

そんな針の穴を通すような偉業を――。

『くうはく』は易々と成し遂げる。

「じゃ、やりますか………風間さん」

《スコープオン》を構えるそれを見て、風間は笑みを浮かべる。

「懐かしいな」

「――？」

疑問を顔に出す八幡に答えるように。

「あの時も、おまえはそう構えて俺を倒した」

「………そうですね。でも、あの時は俺の事を風間さんは知らなかったわけですし。

初見殺しもいいところですよ」

「いや、それを含めて俺の負けだ。お前がそうだとしようように、俺の事をお前も知らなかっただろう」

「……………」

この会話になんの意味があるというのか……………。
もしかしたら意味などないのかもしれない。

「『じゃあとりあえず開始ってことでいいですかね』
八幡のその言葉に、風間は少し驚いた表情を見せて。」

——ふつ、と。僅かに笑みを見せながら。

「『律儀なやつだな。真正面からの戦闘が望みか?』」

あの時の言葉を口にして。

同じように。

されど。

全く違う戦いを見せるでお互いの未来を考えながら——。

「本気を出せば企谷。そのままだと勝てないぞ」

あの時の意趣返しのもりだろうか。

八幡のそのことばを風間が言ってる。

「……………お互い様でしょ」

八幡のそのことばを最後に。
二人は同時に動いた。

十話>>『また、一緒に遊んでください』

以前。比企谷八幡は『くうはく』である彼らを『天才』と称した。

彼らがいないと自分などたいしたことないと。あいつらこそが『本物』だと。だがそれは、『くうはく』とつても同じだった。

空と白は思っている。比企谷八幡は『天才』だと。

空は昔——。人類など信じていないと白に言った。

どいつもこいつも馬鹿ばっか。自分も含めて人類には未来などないと否定した。しかし、彼は——。

人類の可能性なら信じてる。——そう思えた。

白と出会い。『本物』の『天才』に出会った。

わくわくしたと。ときめいたと。そして——分不相応に憧れたと。死に物狂いにあがいて、近づけるといふ可能性を少しでも信じて。

そんな時。彼は比企谷八幡という男を知った。

正確には知る機会を得たと言うべきか。どちらにせよ、空は比企谷八幡をみつけたのだ。

すぐにわかった。こいつは白と同じそれだと。

——白と同じ天才的な頭脳があるわけではない。それでも、こいつは『本物』の『天才』だと直感的に理解した。

だからこそ彼は『ポーター』に入ったのだ。

こいつのそれを見てみたい。こいつがどんな可能性を秘めているのかこの目で見てみたいと。

『ポーター』というゲームで頂点に立つことも目的と言えば目的だった。だが、それ以上の理由があるとすればそれしかなかつた。

そして事実。彼は思った通りの天才だった。

戦闘という分野において。比企谷八幡以上のものはありえないと思わせるものを持つていた。

白のそれとは違い。本来ならば埋もれるはずであろう才能。それを見つけたことに、空は歓喜の声すら上げたかつた。

——わくわくしないはずがないだろ。まだいるんだ。そう本物の奴天才らが。

それを見つけた空という男も、その『本物』だろうに——それを自覚することなく。

八幡と『』を分断させるのが最も勝率が上がるなどという考えは、それこそ彼らのことをなめている。八幡はあくまで『』の一人として戦っている。であるなら、空と白が手を出さないという戦法も、用意してしかるべきだ。

『』が戦術を考えてる時、あるいは手を出さない時、先ほどのように三人で戦う時。すべてがすべて彼らの思惑だ。

時間稼ぎも計算の内。それで八幡が傷を負っても、それも計算の内。予定外のミスですら、その後の作戦に取り入れる。

そんな無限の if をたどって勝利をつかみ取るのが『』なのだ。
つまるところ、二人の中で勝負はついている。

モニターの前で座る兄妹は、八幡が負けることなど微塵も想像していない。
勝つて当たり前——などではなく、勝つことしか信じていない。

それが三人の在り方。

八幡も『』を信じている。それができて初めて完成する『ボード』での『』の存在。
比企谷八幡は『』が天才だと信じて疑わず。

『』は比企谷八幡が天才だと信じて疑わない。
故に彼らに負けはない。

彼らの出会いは、奇跡的にさえ思えるそれだろう。

しかし……もし仮に——。

そんな彼らを出会わせたのが偶然ではないとすれば、それはきつと彼のおかげだろう。

八幡が『ボーダー』入隊してわずか。八幡はチームなど作る気は少しもなかった。

だからこの一戦は比企谷八幡にとつても、何も知らない『くうはく』にとつても特別だ。

『くうはく』にとつて比企谷八幡が恩人だというのなら。

風間蒼也という男は比企谷八幡にとつて恩人だった。



3年前。第一次大規模侵攻の後。

両親を失った少年。比企谷八幡の日課として挙げられたのは、勉強やら家事など覚えることなく——。

ランニングと言う行為だった。

妹である小町の事を考え、自分に何ができるか考えた結果だった。

小さい子供の考えでは、もし次があつた時に何をしたら方がいいか。その対策として用意したのが妹を連れて逃げられる足だということだろう。

小学生ながらにして、朝、放課後、そして夜中と。妹がなるべく寝ている時間。並びに家にいない時間を考え、馬車馬のように毎日走った。

もちろん。そんなことが近所やら周りに知られないわけもなく。八幡へ優しく声をかけてくれる者もいた。しかし、それをやめない八幡を見て、周りのそれも変わってくる。だんだん周りは八幡という存在を気味悪いと思い始めてきたのだ。

それについて言えば、幼いながらに八幡は周りが自分にたいして抱いてる感情など手取るように理解できた。

自身のサイドエフェクトなど使うまでもなく、八幡は他人の感情を読むことに長けていたのだ。

それについて彼自身思うところはない。

周りがどう思おうと、自分のすべきことと認識したそれをやめることはない。

そのすぐ後には、妹を抱えることも考えて筋力もつけようと筋トレを始めた。金銭的な面を心配し、格闘技やスポーツといったものは習えない。

朝に起きて妹が起きるまで走り。学校が終わった後も妹が友人と過ごしている時間に走り。夜中、妹が寝静まったときにまた走る。

それ以外。家のなかでは筋トレと勉強を行い。彼が欲したものなど、少しの勉強道具とランニングシューズではないだろうか……。

『なあ小町……。今度遊びにでも行くか？ 少し外に出ようぜ……。』

『えー!? お兄ちゃんが外に連れて行ってくれるの!? 行くよ! 小町超楽しみっ!!』

妹に自分のそれを悟られないように、外によく行つてゐるアピールも欠かさなかつた。

一部だけ切り取るなら、親がいなくても兄妹仲良く頑張つてゐる微笑ましい家庭。ただ、その裏には八幡の異様とも言えるそれがある。

そして、そんなことをしてゐる八幡が周りから嫌悪されるのしかたないと言えるだろう。

周りの大人は変な子供だと、気味悪がれ。同年代の子供からは、嫉妬あやまと言ひじめにあう。

小学生やら中学生からしたら、毎日走つてゐる八幡の存在は、頑張つてゐる——努力しているとも映つたのだろう。

それでも……。八幡は走ることをやめなかつた。

その行為が、今の八幡のそれに何も影響をあたえなかつたとは考えられない。

それほどに、彼は愚直にそれだけを繰り返してゐた。

結局のところ、八幡にとって妹と言う存在はでかかつた。

妹のためなら、自分のそれを犠牲などとは考えなかつた。

——当然だと。妹のためなら必然だと。

『お兄ちゃん……うつつ……、おかさんとおとうさんがあ……』
第一次大規模侵攻が終わりを告げた後。泣きながら胸に飛び込んでくる妹を見て心底安心した。

瓦礫と化した家を見て、失ったと思っていたのだから。
忘れてはいけなかった。

つまるどころ——。

彼もまだ、小学生と言う小さな年齢だったのだ。

八幡が『ボーダー』という組織にすぐに入隊しなかったのは、勉強やらを優先する以外にも、『ボーダー』を信用していなかったのが最も大きい。

彼からしたら何も守れていなかったのだ。憎しみこそ抱かなかったものの、『ボーダー』をヒーロー扱いする周りとは相容れない。

その時の『ボーダー』に対するという八幡の認識を正確に表すのであれば、あそこにいれば身の回りくらいは守れるかもな——その程度のもだった。であるなら、『ボーダー』に入ったのも誰かのためでもなく、復讐のためでもなく、ただひとりの妹を守るというのに行き着くのも当然と言えた。

『『ボーダー』に入る理由を教えてくださいませんか？』

『……自分の身と、家族ぐらいは守りたいと思ったので……』

入隊時の面接時のときもそのように答えたはずだ。

いざという時、誰も頼りにならないことを知っている。

心配してきた周りの大人たちも結局は消えた。

友人なんてものは守る対象が増えるだけだと思った。

——なら、そんなものはいらなかった。

八幡は自分で一人でできると信じていたし、事実そのことを間違ったと思っていな
い。

今までのそれが変だとは思わない。

その努力を間違っているとは思いたくない。

——一人でいれば、誰かに同じように思わせることも……ない。

いざという時まで視野に入れたそれは、ある意味達観していた。

妹も、八幡の努力が効いたのか、初期のころに比べれば心の傷は癒えてきている。

『ボーダー』に入ったのもそのためだ。

『うーん？ ソロ活動ってできるんだっけか……？』

入隊してからもその考えは変わらなかった。

これまでと変わらない。ひとりですべてを終わらせようと。

そんな時——。

『おい待て、アホ毛のお前だ。さっき125ブースで戦つてただろ』

八幡に声をかけたのが——風間だった。

その時の八幡の心を明確にするならば、——またか。という思いが強かった。

結局今だけだろうと。否定すればいなくなるだろうと。

だが違った。風間蒼也は最後まで諦めなかった。それだけじゃない。その後はチームや『ボーダー』についても教えてもらった。

人がいない時間帯を選び『ボーダー』へ来ていた八幡を見つけては、必ず声をかけてくれた。

——嬉しかった。嬉しくないはずがなかった。

一人でやらないと、と思っていた。そんな八幡の心の壁を少しづつ削つてくれたのだ。

おそらく、風間がいなければ彼はチームを作ろうとも、『くっはく』に声をかけようとも思わなかっただろう。

だから、この一戦は八幡にとって特別だ。

『もし、お前がチームを作ったときは——俺のチームが相手をしてやる。断つたことを後悔させてやるから覚悟しとけ』

『それは楽しみです。その時は全力で遊びましょう』

『——遊ぶ？』

『はい。俺のチームメイトはそう言うと思います』

——彼らにとって、この戦いは——あのときの約束なのだから。



比企谷八幡と風間蒼也。

二人のそれはただの剣の打ち合い程度で終わらない。

『不可視の弾丸』の応用——『無病死』。

無防備に風間へと迫るように見えた八幡の腕は、たしかに風間の首を飛ばすように振るっていた。いいや、振るつてるように見えないだろう。

見えない速度で腕を振るい、対象を撃ち抜く銃撃技術があるのであれば。見えない速度で剣を振るうのは、より簡単に行える。

一瞬。——それで終わるはずだ。

「.....避けるって、信じてました」

ああ、それで終わると八幡が本当に思っていたのなら——。そこで勝負は終わって

た。

(……ほんとにすげえよこの人)

風間が八幡の《スコープイオン》を防いだと同時に、腕を引く八幡に対し、今度は風間が首を狩りに来た。

ただそれだけ。

もし、油断なんてものがあれば、八幡の首が飛んでいただろう。

「見えない速度？　なら……慣れるまで見ればいいだけだ」

風間には辛うじてだが、八幡の腕が見えていた。

何度も戦闘ログを見直したのだろう。努力もしたはずだ。

なら、それを防御することは不可能ではない。

仮に、八幡が《スコープイオン》を二本手にしていたならその時点で負けだった。結果

としてだが、八幡は一つしか《スコープイオン》をカスタムしていない。

受け止められることを想定していないそれは。痺れるように八幡の腕を硬直させる。

小南とはまた違った一撃必殺。

——それが『無病死』。

風間の《スコープイオン》は、八幡の首の直前で《シールド》に防がれている。

息を呑む攻防。

先に動いたのは八幡。

地面を蹴り下がると同時に、

「………ッ!!」

置き土産とでもいうのだろうか。

まるまる一つの《メテオラ》をなげ捨てた。

風間もそれを見て離れる。

だが、あくまで弾であるそれは、風間を追うように追撃する。

「………ちっ」

軽い舌打ちをしながら、風間は横へと退避した。あくまで《メテオラ》単体であれば、直線に入らなければ当たらない。

だが、ここで風間も気づいた。

——違う。そうじゃない、と。

『不可視の弾丸』インヴィジビレ プラス『銃弾打ち』ビリアード。

横へ逸れる時のわずかな速度停止。

瞬間——轟ッ!! と、そこ一帯が爆発の渦に巻き込まれる。

速度と射程距離にリソースを割かず。威力を重視したその弾は、確かに風間であればよけられた。

攻撃は直撃。回避も間に合わなかったはずだ。

(「……………」——どこだ……………?)

それでも、八幡は終わったと思っていない。

あれはまだ防御できるレベルだと。風間の反応速度なら、爆破の瞬間に《シールド》を追いつかせることも可能のはずだ。

爆発のせいで周りの音がうるさい。そのせいで、僅かに空間が把握しづらい。八幡は風間の位置を知るためにサイドエフェクトを使った。

というか——。

「……………マジかッ！」

あと少し遅ければそこで死んでいた。

(のせられた……………ッ!! 《隠密トリガー》を使うためにあえて隙を……………)

背後から——さらに言うなら虚空から現れた風間のそれは、八幡の肩を貫いた。

そう。一対一において《隠密トリガー》では音が弱点だということももう知っている。消えたところを見せれば、自然と警戒され、むしろ対策を用意させることにすらなりうる。対一で使うにはあまりにも愚策。

もちろん風間も《隠密トリガー》が、あくまで奇襲でこそ本領を發揮することを理解していた。

だからこそ、八幡に使う条件を整えてもらった。

気持ちよく技を決めさせ、その上で自分は消える。音の心配もなくなり、絶好な形でそれを使える。

八幡があと少しサイドエフェクトを使うことをためらえば、そのまま胸を一突きされていただろう。

(左腕をやられたか……)

八幡は追い詰められたように距離をあける、もちろん、それを追うように、風間も前に出る。

「逃がすかッ」

「いえ、逃がしてください」

その瞬間。追おうとした風間の足が止まる。

——グラッ、と。体の軸がずれるように前へ倒れこむ。

(……!! 《スパイダー》か!? いつの間に……)

《スパイダー》を戦闘中に仕掛けるという無謀と思えるその行為も、八幡が『思考投影』によって、相手の視覚情報を共有していれば可能である。どこを見ていて、どこへの意識が薄いか。それさえわかれば、見えないところでそれをするだけ。

いたってシンプルな解決法だ。

そして、体勢を崩すという風間のそれを見逃すほど、八幡も馬鹿でない。

「——ッ！」

反応できたのは偶然だろう。体勢が崩れたと思うと同時に——警戒しなければ、と頭
のそれが過去の経験から引つ張ってきただけ。

八幡の『不可視の弾丸』は、それだけで強力な武器と化す。

初期位置。とは言わないが、二人は離れた距離で態勢を立て直す。

「一応トリオン供給機関狙って正解でした。頭なら傷すらなかったでしょうし……」
「……俺が避けても、どこかには当たるはず。それを狙ってか……」

八幡が放った《アステロイド》は、風間の腕をぶち抜いていた。

状況だけ見れば互角。

そんな中、唐突に——。

「俺のサイドエフェクトの弱点……知ってたんですか？」

八幡は風間へと問う。

無敵に思えた八幡の『思考投影』の弱点。それを知らなければ風間はもつと早くに終
わっていた、と。

「あくまで可能性——だったがな。お前のそれはあくまで俺の脳との疑似リンクだ。な
ら、一步間違えれば、俺が受ける衝撃。あるいは一種の思考停止までお前のそれは知覚

する」

話すのは、それを教えてもなんの問題もないから。

「だからこそ、お前は定期的にしかそれをしない。瞬間的に思考を奪取し、それを生かす。それこそがお前の戦い方だ」

そう。それこそが弱点。

八幡でも常に相手の脳とリンクし続けることは叶わない。

あくまで代用なので処理能力がどうかはわからないが、単純に要らない情報が多すぎる。

「お前は、相手をうまく誘導することで、常に情報を得ていると相手に錯覚させる、が——俺が攻撃を受ける瞬間はそれを毎回解いている」

それも正解。

攻撃を受ければ脳が揺れる。物理的ではなく精神的に。精神が揺ればサイドエフェクトの発動などままならない。

それを心配しての八幡の処置がそれだった。

「流石です。うまく騙せてると思っただんですが……」

「少し考えれば誰でも分かる。お前が大部分の頭脳を任せるオペレーターを求めたのは、外の人間ならその心配がすべてなくなるからだろう」

「……………それも正解です」
よく調べてある。

「どうやら『ボーダー』には負けず嫌いしかいないらしい。
風間にとつて、あの一戦は何も清算されていない。

「やっぱり、風間さん嫌な性格してますね」

「お前が言うな」

「そのまま——。」

風間は動かない左腕を無視するように、《スコープオン》を右に構える。
迫ってくる風間の姿を見ながら、八幡は無防備にただ立つだけ。

「……………俺の弱点には前提条件があります」

その声は、風間には届かないほど小さな声だった。

目の前で腕を振るう風間を見ながら、

「それは——相手が一撃で終わらないことです」

今度の声は風間にも聞こえた。

だが、その時はすべてが終わっていた。

——まず始めに、腕の動きが停止した。

——その次に、自分の体が固定されたように動かなくなつた。

——そして最後に、自身の首が飛んでいるのを知覚した。

『トリオン体活動限界。ベイルアウト』

それを見ながら、

「また、一緒に遊んでください」

八幡のその声は、静かに。風間の耳へと届いていた。

十一話〈 〉『——この世に運なんて存在しない』

風間蒼也は隊室のベットで目を開けた。

『また、一緒に遊んでください』

八幡が言った最後の言葉を思い出し——。

(フツ………最後までなめた奴だ)

軽く顔をしかめながら。

風間がそこから起きると、風間隊の二人が声をかける。

「風間さん………すみません。あの時、まったく動けませんでした」

「………」

ばつが悪そうな二人を見るに、即座にリタイアしたことを悪いと思っていたらしい。

だが、風間してもあれは仕方がない事だった。

「気にするな。菊地原の耳にも比企谷の鼓動からは驚きの心音が流れた。いけると判断したのは俺だ」

ああ、八幡は驚いていたのだろう。本当に『くうはく』の予測を超えて。自身の予測まで来てくれたことを。

あの場面での《スパイダー》など誰も予測できない。

『比企谷隊』を褒めはしても、他の隊を責めることはできない。

「それにしても、風間さん。最後なんで動き止めたんですか？　もしかして何かを警戒して……?」

それは三上の疑問。

その問いに、菊地原と歌川の二人も確かにと言う顔をする。

あの時、八幡に動きはなかった。まさか三度も《スパイダー》に引つかかるほど風間蒼也という男は弱くない。

——であるならなぜ……。当然の疑問だろう。

「あれか……」

と風間は最後の場面でも思い出したのか、僅かに顔を歪ませ。

「あれはただの《シールド》だ」

「《シールド》……ですか?」

「ああ、あいつは俺の体に沿うように《シールド》を張ったんだ」

「——はあ!」

驚くのも無理はない。そんな芸当。耳にしたことすらない。

「《シールド》に攻撃力はない。だからトリオン体を傷つけることはできない。耐久力で

言っても、ピンポイントでガードしなければ《スコープオン》も防げないだろう」
そして——ただ、と。そう続けて

「トリオン体にはそれを破壊できるほどの力はない。勢いをつければそれも可能だろうが、体を覆うように作られた《シールド》を少しの力で破壊することはほとんど不可能だ」

「そうか。．．．．だから、あの時」

「でも、そんなことできるんですか？ 止まってる相手ならまだしも、動いてる相手の体にピンポイントなんて．．．．」

歌川と菊地原のそれはもつともだ。

「できるはずだ。．．．．と言うより、あいつのサイドエフェクトはこういった小細工こそが本領だろう。まあそれにしても驚いたがな。それをするには空間把握能力の処理が異常だ。恐らく、出水の時見せた弾の防御。その副産物といったところだろう」
恐らく、と風間は言ったが。それはほとんど正解だ。

いくら白の脳があるとはいえ、数ミリの誤差もなくすほど正確に《シールド》で『ラビッド・スイッチ高速切替』を行うなど、訓練なしにできるわけがない。

少し違うところをあげるなら、相手を完全に動かさないように固定するなど、八幡一人では不可能だ。空間を座標のように認識する白の脳をリンクして初めて可能な荒業

だ。

一人なら、《シールド》を腕にぶつけて、攻撃をキャンセルさせる程度が限界だろう。と言つても、目で追うのではなく感覚で追う攻撃手アタッカーのそれにたいして展開できるのだから、八幡のそれもおかしい事この上ない。

「だが、迅の言う通りだったな」

ぼつり、と言つた風間のその言葉に、全員が首をかしげる。

「迅が昨日俺に言つてきたんだ。『きつと戦つたあととはすごく楽しいと思いますよ』——とな」

「楽しい……ですか？」

——何が？ と続けようとする三上の言葉を聞く前に。

「ここまで完膚なきまでに負けたのは久しぶりだ。運ですら言い訳にできない。納得するしかないのではなく、納得させられる。これが楽しくないわけがない」

各自思うこともあつただろうが、それでも——確かに、と。そう思わずにはいられなかった。

次も挑みたくなる。そんな相手だった。

だからこそ、八幡は最後にあの言葉を言つたのだろうか。

「お前ら、何故迅が比企谷と戦つたか知っているか？」

「……」

無言で答えるそれは、言外に知らないから早くつ、と言っているようで、少し笑みを浮かべながら風間は言った。

「迅は、比企谷を見た時、『未来が一本につながった』と言っていた」

「……一本、に……？」

「そうだ。迅の未来視のサイドエフェクトはあくまでも無限に広がるそれを見る。未来が確定するのはほとんど数秒の先の事だけらしい。戦闘でも数秒先を見て戦っているしな」

言うまでもなく迅の未来視は全部が全部便利というわけでない。

見逃す未来もあれば。

いつまでたつても確定できないこともある。

そこを言葉巧みに誘導する戦いは、八幡のそれとよく似ているだろう。

「その無限の未来が、比企谷を見た瞬間に確定したそうだ。……どの未来をたどつても、迅と比企谷が戦い、自身が負けるといふ未来にな」

「——ツ!!」

「上層部がどんな言い訳をしようと、比企谷には迅と戦う手札があった。そして、戦った結果、最後は必ず迅の敗北で終わる。だからこそ——あいつは比企谷と戦ってみたいと

思ったんだろう。『初めて、自分の未来を変えてみたいと思ったよ』と迅は言っていたな」

三人は声が出なかった。

いったい、どこまで先を『比企谷隊』は見ているのだと。

つまるところ、彼らがゲームと決め、動いた時はすでに——。

——チエックメイト。

そういう事だと、彼らは理解した。

だからこそ——なるほど、と。

そのチエックメイトを崩してみたい。そう思えた。

「まあ次はうちが勝ちますよ。結局最後まで残ってたの俺らだけでしたし」

「おい菊地原。それこそ運みたいなものだろう。——最初のそれには同意だけだな」

それこそが楽しいということだ。楽しみだということだ。

「風間さん。二人とも、これから迅さんたちの評価が始まるらしいですよ。そのことは

また後で」

「そうだな」

そんな風間隊のようすでも見ていたかのようには、会場では迅と東による評価が語られていた。



「『それでは迅さん。初と言っているS級試験だったのですが、終わってみれば『比企谷隊』の圧勝と言ってもいい結果に終わりました』」

そんなお決まりの言葉ともとれる綾辻それから始まり、4チームのそれを評価するよ
うに迅が語る。

「『どうだろうな。結構八もギリギリだったと思うぞ。特に最後の『風間隊』の動き、あれは俺が見てた未来の中で最も可能性が低かった。——つまり八達にとつても嫌な動きだったはずだ』」

「そうだな。俺から見ても太刀川と『風間隊』が組んで戦った方が比企谷には美味しかったはずだ。もつと『楽に』勝てた可能性すらあっただろう。風間のあれはファインプレーだと言えるな」

「『えーと……それは何故ですか?』」

上手く進行するためではなく綾辻には素直に分からなかった。

本音を言うなら、今回の戦いすべてが分からない。

「『比企谷が言ってただろ『風間隊の連携はシヴィ』——だと。そんなところに太刀川

なんて入れてどうする気だ？ 本気を出せませんと言つてるようなもんだろ」

「そんな東の言葉に、会場の全員が——あ、という声を上げそうになつた。考えてみれば簡単なことだ。

まあもちろんそれだけではないことは確かだが、そう言つた小さいことを積み重ねていつたからこそその結果のはずだ。

『八の細かい技術については俺らでもパスだな。あれはどう考えても頭がおかしい。撃つたことを視認できないなんて俺知らなかつたし』

『確かにな。出水の弾の全弾防御までなら何とか説明がつくが、早撃ちだの高速切替だの、そつちは完全に個人の技量がはいつてる』

『なるほ……ど……ど……？ ちよつ、ちよつと待つてくださいつ!! 出水隊員に使つたのあれを説明できるんですか!?!』

思わず納得しかけた綾辻のそれに、周りの隊員たちも待ちきれないといった様子で耳を向ける。

『あくまで机上の空論だ。例えばだが、『ハウンド』の軌道は『ボーダー』で作つたプログラムによつて動いている。A地点からB地点までどういう風にとんでいけ、とな。そのB地点がトリオン反応がする場所だつたり、視線の先だつたりするわけだ。——なら、そのプログラムを解析していれば軌道を読むことは一応不可能じゃない』

本当に机上の空論だった。

仮にそれが本当だとすると、『ボーター』のトリガーで彼らに勝てないといっているようなものである。

『《ハウンド》の微調整も、《旋空弧月》の展開速度も、《バイパー》のリアル起動設定も、すべて過去のデータで数値化できる。癖と言っても良いけどな。強ければ強い奴ほどその数値にブレがない』

——そもそも、強くないとできないけどな。と続けた東の言葉は、攻略法がないことを言外に伝えていた。

強いことが前提条件なのに、そこに至れば攻略対象になる。

——いったいどうしろと？ そんな隊員の言葉が聞こえてきそうだった。

『たしか、比企谷がよく言ってたな、実際に言ったのはオペレーターのやつらって話だけ』

『——この世に運なんて存在しない』

『ルール、前提、賭けるもの、心理状態、能力値、タイミング、調子、……そういう無数の見えない変数で、ゲームの勝敗は始める前に終わってる。偶然なんてない』
『知ってれば1パーセントが100パーセントに変わる。知らない奴は運が悪かったと

愚痴をたれ、知っている奴は必然的に勝利をもぎ取っていく』

「要は、その変数をどっちが多く知ってるかってことだろ。あるいは代入するか。そして、それができてからあいつらは負けないんだ」

もう黙るしかない。

最初は、とてつもなく賢いオペレーターがいて、比企谷八幡は才能に恵まれた。その程度の認識でしかなかった。

それを——。

はつきりと否定された。才能ではなく、どこまで本気かの違い。

天才と言う存在は、無自覚に周りを傷つける。だからこそ——。彼らは周りから煙たがられたのだろうか……。

そんな中——。綾辻はそれを言った。

「迅さん。つまり、それをすれば私たちでも勝てるってことですよね」

勝つ方法ならそこにある。追いつける可能性があるなら十分だと。

その綾辻の言葉に一瞬。——ポカンとした迅は、自然と笑みを浮かべ、

「『そうだな。あいつらの計算やら技術は変数を確定する方法だ。なら別の方法で変数を埋めればいい。もつと言うなら、あいつらの予測を超えて変数を書き換えてもいい』」

楽しそうにそう言った。

その言葉に綾辻も笑い。

「『じゃあ、次のS級試験は『嵐山隊』が出ますね!! 次あるA級のチームランク戦。そこで私たちは上に行きます』」

高らかに、全員の前で宣言した。

そして、『ボーダー』には負けず嫌いしかいない。

それを信じるなら、それを黙ってみているものなど、ここに誰一人としているわけがなかった。

隊室で聞いていた『太刀川隊』『冬島隊』『風間隊』はもちろん。

B級隊員ですら、戦ってみたいと心躍らせ。

もしこれが、上層部が狙っていたことなのならば、その思惑は達成できると言えるだろう。

ただ、ある隊室で——ニヤリ、と。ほくそ笑み、唯一のS級チームがこれを狙っていた可能性もあるが……。

言ってしまうば。

——ゲーム相手は多い方がいいだろう、と。

それが本当なら大変だ。

『^{くうはく}』はこれのために、ギリギリの戦いを演じただけかもしれない。

もつと楽に勝てたのにここまでした可能性すらある。

ゲームに負けたぐらいで終わつたと思うな——次の布石を打っているのが『^{くうはく}』だと。



八幡と『^{くうはく}』は会場で行われているそれを聞きながら、自分たちの最後の布石がうまく発動したことにほくそ笑んでいた。

「マジですごいわお前ら……。こういうのなんて言うんだっけ？」

「……時限式の、爆弾……。」

八幡のそれに何でもないように答える白。

「実際そこまで大したことでもないけどな。今回のそれはうまくいけば御の字程度のそれだ。最後のハチと風間の戦いがなければ、ここまで隊員を煽ることもなかっただろ」

これにて終局。

そう言うように、そらは静かに目をつむる。

「にしても悪いな。最後の最後に白の力借りちまって……。さすがに一人じゃ確実をもぎ取れなかった」

独り言のつもりなのか、そのまま八幡は言う。

「最後。サイドエフェクトで風間さんが間違いなく攻撃するところまでは分かった。けどそれ以上は無理だ。誘導できなかつたし、倒す方法も一つしか思いつかなかつた」

《シールド》による人体拘束。それをするために、八幡は最後に白の力——つまり『くうはく』を頼つた。

風間と戦うなら、『くうはく』の力は使えないと言つた空の忠告を無視し、不確定要素を入れてしまった。

負けなかつたからよかつた。

逆に言えば負ける可能性があつた。

八幡の言葉は、それに対する謝罪だつた。その言葉に——。
パチリ、と。空は目を開けて。

「それなら気にするな。そんなことは分かつてた。俺が『くうはく』に頼るなつて言つたのは、ハチ一人で戦うことで、最後の一手を風間の認識外から攻撃するためだ」

「……逆に、最後までハチ兄が一人で戦つたら——勝負、分からなかつた……」
——は？ という八幡の言葉を無視するように。

「風間はよく研究してたぜ。太刀川と組んで戦わなかつた段階で、ハチに対抗する何かを持つてるところまでは確信があつた」

「……しろたちが手伝っているか……ハチ兄一人の力か……見分けるくらい、多分——できる」

そう。風間は八幡の動きから、サイドエフェクトを誰に使っているかなんとなく分かる程度まで研究していた。

八幡のサイドエフェクトは、持っているというだけで相手にプレッシャーを与える。

——もしかしたら作戦が漏れているのかもしれない。

——あるいは、次の動きを予測されているかもしれない。

そう言った相手の不安から、八幡は敵の動きを限定するのだ。

「結局のところ。最後まで攻めてこなかったのも、俺らの動きを見るためだろ。見せた

パターンなら、何かしら対策、あるいはカウンターくらいは用意されてたと思うぜ」

「……しろたち、相手の動き予測する——けど、自分の事は……自分が

一番、知ってる」

つまりはそういう事。

風間は『』と八幡のセット相手でも、何かしらと言うよりは、何とか食らいつく程度

の力量があったということ。

技量で太刀川に劣っていくようが関係ない。

要は『比企谷隊』の動きをどれだけ知っていたかの差。

「なんだよ。なら最初からそう言えばよかつたろ……」

「違うんだって。それを言ったら、ハチの最後の一手は、『どうしようも無い一手』から『狙う一手』に変わるだろ」

「……その違い、分からないほど——ハチ兄……馬鹿じゃ、ない……」

「……」

それを聞かされては、八幡も納得するしかない。

何かを隠し持っている人間というのは、それだけで呼吸が変わる。

一般人ならいざ知らず、ネイバー近界民やら遠征やらで戦い——戦争と置き換えてもいいその組織に身を置いている者が、さらに言うなら、そのトップの実力者なら、違和感程度なら見つけられただろう。

違和感は警戒を生み、それだけでこちらの計画を崩される。

「要は油断させてた方が、動かしやすいつてこつた。ハチと風間ぐらい差があるなら——まあ、風間からしたら格上相手に警戒を解くなんて本来有り得ないが……」

「……最初、互角に戦えて——作戦も、うまくいつ、た……」

「——なら。行けるかも……その程度には思うはずだ。全力を常に出す相手でも油断を誘うことはできる」

「……落差、だいじ……それ、大きければ——油断……」

「……………」

八幡も、二人がここまで読んでいるとは思ってもみなかった。

一年以上二人と組んでいるが、ここまでふざけた連中だったかと——あいた口がふさがらない。

「ほんと、お前らが敵じゃなくてよかったわ……………」

やつとの事でも出た言葉がそれだった。

笑うしかない。こいつらを出し抜こうとしている『ボーダー』の連中に憂いの念すら捧げたいほどに……………」

(まあ、俺も『ボーダー』なんだけど……………)

ほんとに敵じゃなくて良かったと。八幡は大きなため息を吐き出した。

「てか風間さんにとつて俺が格上って、お前ら頭いいのになんでそこだけ馬鹿なんだ？」

今日ので分かっただろ……………それほど差がないって」

「……………」

八幡のその一言に、二人は思わず絶句した。

——こいつ、トリオンをあんなに消費して、散々不意を突かれて。何を言っているんだ、と。

作戦やら、相手の動きのサポートは確かに『くわいはく』がやった。

それでも、実際に戦ったのは八幡なのだから、それは自分の実力と判断してもいいと思うが。

「どうやら、こいつ。肝心なところで馬鹿らしい。」

「なあハチ。それ本気で言ってるんだつたら流石に引くわ……………」

「……………ハチ兄、強い。——そろそろ、わかれ……………」

白の口調が思わず崩れるほどには、八幡のそれはおかしらしい。

全部が全部新しい戦法。

しかも、できるのは八幡一人と来た。

「……………」

「どうやら八幡には本気で分からないようで、首を傾けて頭にはてなを浮かべている。」

「とは言え。」

「(わからないフリうぜえー。自分から認めたくないのは分かるがここまでだと思わねー」

わ……………」

「空には八幡のそれが照れ隠しだと容易に見破っていた。」

「……………ハチ兄、ちよつとムカツク……………今度ゲームする、ぼこる」

「やめてくれ」

「そんな二人の言葉を最後に——。」

「『それでは、S級試験の方を終了したいと思います。比企谷隊員は、後に『ボーダー』本部から連絡が来ると思いますが』」

綾辻のそんな言葉がアナウンスで流れた。

『 』 v s 裏切りの少女

十二話〈 〉『じゃあ鬼ごっこでもするか』

比企谷八幡にとって、『ポーター』とは職場である。

それ以上の何者でもなく、それ以外の何物でもない。

(あー給料日。給料日が早く来てほしい。．．．．．あと休暇も)

究極的に言ってそこに求めているのは、力とお金だ。何やら、どこぞの権力者やらのそれと著しく似ているが、それが本音なのだから仕方ない。

そもそも、彼がクズのようなことを考えているのは今に始まったことではないのだ。

——また始まった、と諦めて。——はいはい、と聞き流すのが得策だろう。
 であるなら、彼に他のものは必要ないと言っていい。

例えば友人。これはもうなんて言うか．．．．．哀れだと言っておこう。

そして近界人^{ネイバー}。仕事を増やす彼らには適度にいらもう程度がちょうどいい。

まー等々。彼にとって本当に先に言った二つ以外は必要ない。

だからこそ、八幡は心から叫んでこれを言いたかった。

(周りの視線がいらねえー)

自分に向けられるそれを、マジでどうにかしたいと。

八幡にとってS級試験のその後の状況。まあいわゆる今のこれなのだが、はつきり言うとは予想外だった。

(視線が辛いッ——。つて言うか痛い……)。マジで早く来いよあの人っ)

公開処刑という言葉がこの時に浮かんだが、まだ処刑の方がましなのでは？ と、頭のおかしいことを考えてしまうほどに、八幡はこの状況を打破したかった。

彼が今ここ——ランク戦会場にいる理由は、メル友である嵐山から呼び出しをくらったからである。

言うまでもなく、八幡にとってはメル友でも何でもないが、家族以外で唯一メールする関係にあるということを見ると、一万歩ほど譲ればメル友と言えるかもしれない。

(落ち着くんだ比企谷八幡。無心だ無心。……無、無、無無無無無無無無無無無無無無無無)

時間がたつごとに、八幡の目が加速度的によどんでいくのを見て取れる。

だが、その目のおかげで周りから話しかけられずにいることを考えれば、八幡は自身の目に感謝すらしたかった。

見られるのは話しかけられるよりつらい。

いくら八幡が人外じみた力を見せようが、嫉妬するのが人間であり。大袈裟に広げるのが世論である。

ギリギリ、と。八幡の精神が削れる音が聞こえてくるようだ。

そんな時――。

「あつ比企谷君お待たせ!! ごめんね待たせちゃって、少し手が離せない用事があつて………」

手を振りながら、そして笑顔を見せ。

周りに聞こえるぐらいの声を出し。

A級8位オペレーター。綾辻遥はやってきた。

(……マジか……)

さてここで問題である。この状況を八幡が望んだ展開だと言えるだろうか……。考えるまでもなく否だ。

美少女が、笑顔を見せ、あたかも仲がいいようにこちらに来る。

これを地獄と言わないでなんという。

いいや、彼女は悪くない。綾辻からしたら謝罪の言葉を言っただけであるし、笑顔が
どの素なのだ。

とは言え——。

「よし、お前ふざげんな……つ！ 次のS級試験待たずに今すぐぼこぼこにしてやるからかかって来い」

八幡がどう思いうかは別問題であるが。

目立つことが嫌いな彼にとって、悪魔的状况から魔王的状况に格上げされただけである。

「——えっ？ え？ 何で怒ってるの……。遅くなってごめん、ね？」

(ハイ可愛いですね……ってちゃうわ)

一瞬綾辻の光に浄化されそうになった八幡だが、持ち前の精神で立て直す。

「なんでお前？ 俺嵐山さん呼び出されたんだけど……。」

「え？ 嵐山さんから聞いてないの？ んーまあいつか……。とりあえず一緒に来て」

「……。」

——よくねーだろ、と。思わず反論しそうになるが、今はこの場からの離脱が先決。

綾辻のそれをみていた周りの、『話し終わったら今度は俺が——私が』オーラを感じ取ったのである。

「(覚えとけよ……)」

八幡の呪詛でも吐きそうな小さな声に、綾辻は

「……………ん？」

と首を傾げる。

「……………」

その反応に、八幡はもう黙るしかない。

無自覚に可愛さをまき散らす女は、八幡ランキングの中でも上位に来るほど危険な存在だ。

——ガルル、ととりあえず威嚇をしているところを見ると、彼の中の警戒度はマックスのようだった。

「それで、なんで俺呼ばれたの？ 早く帰って妹を愛でなくちゃいけないんだけど……………」

「い、妹？ 確か比企谷君の妹さん、もう中学生だよ……………。——シスコン？」「おいちよつと待て。なんでお前が俺の妹の年齢を知ってる。そして俺はシスコンじゃない。千葉ではいたって普通の現象だ」

妹への感情を現象と言ってしまうところがもうなんか……………。と綾辻は思ったが、ここはツッコムべきではないだろう。

「妹さんの事は嵐山さんから聞いたんだよ。『比企谷が妹の事を言ってきたらとりあえ

「ず言い訳だから情報は必要だ」ってね」

「……………」

（あの人……………マジでか。いい人だから恨めないのが辛いっ）

——ふふん、と。何やら胸を張るように誇る綾辻はそのまま——。

「それで本題なんだけど……………」

ガシつと。八幡の手を思いつきり掴んだ。

「——!? はっ? え、ナニコレ……………!」

言葉が片言だ。突然のそれに、ボツチ歴16年の八幡は対応できない。

「これは逃げられないように。トリオン体になって逃げようなんて考えないでね。私の

力じゃ怪我しちゃうから」

どうやら自身の体を入質にとったと見せかけて、八幡の社会的地位——『ボーダー』で

のそれを入質にしたようだ。

「わかった。わかったから手を放せ。……………お前これセクハラだからな? 訴える

ぞこの野郎」

「駄目。嵐山さんから比企谷君の声には耳を傾けるなって言われているから……………」

——またかよ、と八幡は頭を抱えなくなった。

手を掴まれてるからできないが。

とまあ、そんなこんなで八幡が連れてこられたのは嵐山隊隊室。そこに来て、綾辻はようやく本題を言った。

「実はね。少し指導してほしい子がいるの」

「え、やだけど」

そして――。

比企谷八幡は逃げ出した。鍛えた足を生かし、一もなく二もなく逃げ出した。

だがもちろん………。

「逃がしませんっ!!」

綾辻のそれが良しとしなく。

足だけが前に出て腕を逆方向に引っ張られてしまった八幡は、その場で大いにずつこけた。

――痛いっ!!



木虎藍という少女は、『ボーダー』の中でも才能豊富の新人である。

半年ほど前から導入された訓練生用システム。

ただランク戦を行うだけでなく、集団での訓練をおこなうことでポイントを稼ぐシステムの事だ。その中の一つ、捕獲用トリオン兵『バムスター』。その討伐タイムを競う訓練において、彼女は他の髓を許さない記録を出して見せた。

時間にして9秒。

長年『ボーダー』をやっている人物であるなら大した驚きはないだろう。しかし、まだ中学生の女の子が、武器すら持ったことない子供が、それをしたとなつては話が別だ。確かに、彼女はそれ以前の活動で優秀な成績を見せていた。訓練の初期ポイントも、3600ほど貰っていたことを鑑みれば、その結果にも納得がいくかもしれない。

それでも、ほとんど初めて相對するトリオン兵に、何も臆することなく戦闘をした彼女の事を、周りが天才だと称するには十分だった。

『君、木虎君と言ったかな？ 是非とも入ってほしい隊があるのだが』

『入ってほしい隊……ですか？』

とまあ、容姿も綺麗だった彼女は広告活動をも目的としていた嵐山隊へ、B級になつてから間もなく勧誘された。ここまでのことを上げれば木虎にとつて『ボーダー』としての活動は満足の行くものといえただろう。

ただ、問題はここからだった。

当時A級部隊としてやっていた嵐山隊ではあるが、未だにA級上位になつたことはな

い。メディアの活動が邪魔をしているのか、B級にこそ落ちないもののA級下位をウロチヨロしていた。

木虎が入ったことによりそれも解決かに思えたが、ここに来た彼女はトリオン能力と言うものにつまずいたのだ。

ポイントで言うならば、8000どころか6000の壁も超えられない。

長引けば負けしかない。

《シールド》がなかった訓練時代に比べ、B級からはそれがある。決して割れないこともないが、トリオン量を考えると、数撃つという方法は現実的ではない。

言ってしまうえば足手まとい。

敵の足止めが精いっぱい。

それが、現在のまわりが木虎に対する評価だった。

『嵐山先輩……私このチーム抜けようと思います……』

彼女のプライドを考えると、メディアの顔として嵐山隊に入ったことへの気が引けた。

せめて、自分の個人ポイントがマスタークラスに至るまで。チーム脱退をするべきだと木虎は考えていた。

とは言え、嵐山を始め、嵐山隊がチームメイトを簡単に見捨てることなどあり得ない。

そこで一つ提案を出したのだ。

『比企谷に頼んでみたらどうだ？ あいつは基本的に全部のトリガーがマスタークラス以上だし、何かいいアイデアを出してくれるかもしれないぞ』

『比企谷って、以前S級試験に出ていたあの人ですか・・・？』

『ああ、あの時も銃型トリガーを使っていたし、サポートではなく一人で点をとることを考えるなら、あいつの話は聞いてみてもいいと思うぞ』

『……………』

——確かに、と。木虎は思った。

そもそも、サポートという面で考えれば彼女はすでにチームとしては優秀だ。問題は一人で点をとることができないことだったりする。

ランク戦に限れば、転送位置によつては合流できずに負けることもあるし、一人残つた時などはもう何もできない。

一人で戦う力を身につけたい。それが今の木虎の願いだった。

『まっ、物は試しだろ。ちよつとメールして見るから待つてくれ』

『——え？ 嵐山先輩、比企谷先輩と知り合いましたんですか？』

『当たり前だろ。じゃなかったらこんなこと言いださないさ。メル友だからメールアドレスも持つてるんだ』

だからメル友ではない。——が、メールアドレスを持つてるのは事実だから反論も難しい。

もちろん木虎はそんなことは知らないわけで、へーと関心の声を上げていた。

『よし綾辻出番だ』

『——？ え、何がですか……』

『比企谷を連れてきてくれ。今『ボーダー』にいるらしくてな、ランク戦会場に呼び出したから、有無を言わさず連れてこれるはずだ』

『いや、ですから何で私が……？』

戸惑う綾辻へ、ことも何気に嵐山は言う。

『恐らくそのままほんとのことを告げるとあいつは逃げるからな。できれば何も言わずにつれてきてほしい。俺が行くより綾辻が行った方があいつは来るはずだ』

それは単純に、付き合いの差から嵐山が何を考えているか、見ただけで予測されるのを恐れての事だろう。

——あととはまあ比企谷は女の子に弱いから、と。八幡の嫌がることを嵐山は普通に言つてのけた。

『少し遅れて行くといいかもな。周りの視線から逃げるように、簡単についてきてくれるはずだ』

何も悪いことしてませんよ。という風に笑いながら言うその姿に、綾辻はわずかに顔を引きつらせる。

(嵐山先輩、比企谷君の事となると意外となんでもするなー)

仲がいい事は確かだろう。

お互いの事をよく理解しているからこそ、ここまでする必要がただけなのだ。

『じゃ、綾辻頼んだぞー!』

とゴーサインを出す嵐山へ、

『はいっ、行つてきます!!』

と綾辻も敬礼で返す。

ただ一人……。

『これ、来ても指導してもらおう前に逃げるんじゃない……。』

そう呟く木虎の声は、周りには聞こえなかった。



そして嵐山隊隊室では……。

「つてことだね。比企谷君には木虎ちゃんの指導を少しやってほしいなーつて。……」

ダメかな？」

と、今までの事を悪びれもないよに言う綾辻へ――。

「駄目に決まってるだろ」

濁った眼を改め、冷たい視線で即座に返した。

何がだめって、連れてくるまでの経緯を素直に全部言ったことがもうだめだ。

(なんでランク戦会場に呼び出したかと思いきや……。嵐山さんマジ策士っ！ 『くうはく
何て目じゃない!!』

「そこを何とか頼むよ比企谷……。少しでいいんだ。弟子がどうのとかいう話じゃない」

「なら素直に言えば良かったじゃないですか。こんな嫌がらせのオンパレード……」
「でも、素直に言ったらお前来たかっただろ？」

「え、いやー。き、きましゆたよ……?」

言うまでもないが、八幡は人と係わるのを基本嫌がる傾向にある。

話かけられないではなく、相手から話しかけられないようにするのが八幡のスタンスであり、ポリシーだ。

それは言わば、目立たないイコール虐められない。という中学時代からの、身を守る方法ですらあった。

つまるところ、誰かと関わりと目立ってしまった。だから周りとは関わりたくない——というようなサイクルが彼の中で出来上がっているのである。

まあそのせいあつてか、単純に人と関わるのが苦手ということもあり、今では関わりたくない……ではなく、関わりたくない——というほうが近いかもしれない。

「まあ、ここまで来ましたし話だけでも聞きますよ。で、誰ですかその人は……」
 とは言え、基本的に捻デレと呼び声高い八幡は、嫌と言いながら引き受けてしまう傾向にあると言える。

そこへ——。

「あの……急にすみません。アドバイスだけでもお願いします」

ペコリ、と。頭を下げる木虎を見るに、相当切羽詰まった状況なのだろうか。

彼女を知ってる者ならば、この光景には驚きを隠せない。

プライドが高く、自分にも厳しい少女。それが木虎藍という人物なのだ。

基本スタンスの一つに『年上にはなめられたくない』と公言すらししたことある彼女が、黙って頭を下げているところを見ると、精神的にも相当参っていたのかもしれない。

「え、えつとこちらこそ……よ、よろしく?」

……。

そんな珍しくもシリアスな場面を、八幡は簡単に消し去ってしまった。

これでは空の事を二度と馬鹿にできないだろう。どちらも対人経験が少なすぎる。

「えーと、それで、トリオン量で悩んでるんだったよな……。銃手ガンナーから攻撃手アタッカーに変更しようとは思わなかったのか？」

「それは今やつてます。《スコープイオン》をセットしては見たんですが、やはりすぐにはなかなか……」

その言葉に、なるほどな——と八幡は厄介だと顔をしかめる。

（早く結果を出したいって感じか？ まあたしかに時間をかければ解決する問題ではあるからな）

実のところ今すぐに強くなりたい。という指導を求める新人は『ボーダー』でも意外と多かつたりする。

そしてすぐに強くなれるか、という質問に答えるのであれば、YesでもありNoでもある。

トリオン体による戦闘。そしてトリガーでの戦闘は、早期成長が可能であるのは事実だ。未成年の方がトリオンの成長が早いというのもそうだが、肉体的成長を必要としないトリオン体での戦闘は、長年かけて体を作るといふ項目をショートカットすることができる。要は実践オンリーの訓練が可能なのだ。

言ってしまうえば借り物の体を操作するようなもの。コツさえつかめれば誰でもすぐに戦えるようになる。

A級になれるかといえばそれは流石に不可能だが、ある程度のトリオン能力とセンスがあればB級の中位程度なら、そこまで苦勞せずとも至れるはずだ。

しかし、それはあくまでトリオン体を扱いきれていない者達に対してのアドバイスだ。

木虎のように、すでにトリオンの使い方がわかっていている者に対してはあまり意味のないものになってしまう。

B級中位以上になるには、何かしらのオンリーワンが必要になってくるということだろう。

まあなくてももちろんなれるが。むしろない方がいい。特化しすぎたオリジナリティなど、相手に攻略してくださいと言っているようなものだ。

独自の戦闘スタイルは、あくまで地盤がしっかりできている者がやるからこそ光る。太刀川などがいい例だ。一つ一つがただ強い。それを体現した存在は彼を置いてそ

ういない。

とは言え、今回に至ってはどうでもいい話ではあるが。

(いい感じは無理難題だな。……ってことは多分……嵐山さんも面倒な事

頼んでくるな)

八幡の言った通り、これは流石に不可能だ。だからこそ、嵐山は八幡に別の事をお願いしている。

それを口に出さずに理解するあたり、八幡と嵐山の付き合いはやはり長いということだろう。

「木虎……だったか？　なんでそんなにすぐ強くなりたい？　お前確か入ってそこそこだろ。嵐山隊に入ってるだけで十分エリート出世だと思うが……」
「だからですッ!!　それが私にはいやなんです。力が無いのに、広告塔と言う理由だけでA級にいるのが嫌なんです……」

「なるほどな……」

確認のための質問だったのだが……

本格的に予想が当たってきたことに、八幡は嵐山へ恨みの念を向ける。

「まあ了承しちまつたしとりあえずは全力を尽くすが、期待はしないでくれ」
「それでもかまいません。何か掴めるだけでも十分です」

「……」

それはつまり、今現在ではその何かすらも木虎には無いのだろう。

「とりあえず実力が知りたい。が、時間も惜しい。訓練と同時進行で行こう」

「同時……ですか？」

そもそも、隊員の訓練と言えば、ほとんどがランク戦である。

そして実力を知りたければそれこそランク戦でいいのだから、同時並行という意味すら木虎にはわかりかねていた。

「じゃあ鬼ごっこでもやるか。お前から鬼で。十分間で捕まえられなかったらこの話し無しな」

「——え？」

鬼ごっこ……。鬼ごっこ？

八幡のその発言に首を傾げたのは、木虎だけでなく遠目で見ている綾辻たちものように、

「俺が使うのは《シールド》と《これ》だけな」

すでにトリオン体なのか、黒く光る銃型のトリガーを見せ。

「ちなみに《アステロイド》だから。そっちは何使ってもいいぞ。……綾辻、今すぐ適当にトリガーカスタムできるか？」

「……えつと、それはもちろんできるけど……」

二人の疑問をそのまま置いていくように、八幡はポンポンと話しを進ませる。

「俺は攻撃無し。お前は何でもありだ。ただ、手でタッチするまでだから間違えるなよ」

ルール確認は終了というように、八幡は口を閉じると、
「トリガーはよく考……えて選んどけ」
それだけ最後に付け足した。

十三話〉『大事な後輩なの』

『ボーダー』式鬼ごっこ。

そんなふざけた名称を考えたのは、言うまでもなく『くわいはく』だ。

ただの戦闘ではなく、遊び——つまりゲームを取り入れるという発想は、ゲームナーらではと言ったところだろうか。

これは八幡が銃手ガンナーを用い始めた時よく行っていた訓練である。

とまあ、何やらオリジナリティあふれる訓練方法と思うかもしれないが、ぶっちゃけ鬼ごっこである必要はない。

今回重要視すべきなのは、木虎が銃手ガンナーであるということ、接近戦を学びたいということ、そして、勝利条件が手で触るということである。

鬼ごっこと言う名称にしたのは、単に、八幡が木虎のプライドへの配慮からなのだ。八幡が木虎を攻撃せず、トリガーすら限定的にしなければならぬこの訓練において、それを素直に受け入れられるように考慮した結果である。

木虎が鬼ならばそれから逃げるのは必須であり、鬼に攻撃などもつてのほかだ。これならばまあ、納得できない理由でもないだろう。

どこその漫画では、鬼ごっここの必勝法は鬼退治などと豪語しているが、それが許されるのは昔話の桃太郎だけだと思いたい。

そしてこのゲームの肝を『くま』は八幡へ後のように説明した。

『ここで重要なのはルールの限定だ』

『——えーと? どういう意味だ?』

『ランク戦つてのはよくも悪くもなんでもありだろ。それじゃ選択肢が多すぎて考えて戦うつてことを学べない。もちろん考えずに経験だけでその場の最適解を導き出せるほうが強いのは確かだが. それプラス考えられる奴の方が強いに決まってる』

『あー言いたいことは分かるが、ピンとこないな』

『. トリガーの悪い、ところ. とりあえず、誰でも——そこそこ戦え. ちゃう.』

『白の言う通りだ。学ぶつてのには順序がある。学校と同じだ。テストばかりやれば確かに復習で次はいい点が取れるかもしれないが、それじゃあ過程で得られる大事なものを学べない』

『いいこと言ってるけど一つ言わせてくれ. 不登校が何言ってるんだ?』

『……………。なんか説明したくなくなつたわー。後は実戦で何とか理解してくれ』
 『……………うっ……………グスツ……………』

『ごめん。悪い、悪かったから、続きを願います』

その後『』との戦闘で、八幡は空達が何を言いたかつたのか理解したが、圧倒的不利な状況、さらには相手のホームグラウンドであるゲームという基盤によつて、数十回とぼこぼこにされたのは三人しか知らないことである。

付け加えるなら、『鬼ごっこ』なんてゲーム要素を取り入れた最初の理由は、八幡を自分たちのステージに引つ張り込んでボコボコにするためだつたりと、その後の大げんかになつながつたりしたのだが、それはまあいいだろう。

この段階で、木虎は八幡の意図をくみ取れずにいた。

ルールはなんとなく理解した。恐らく自身がなめられていることも。

あのセリフ。『トリガーはよく考えて選べよ』それを考慮するなら、何か作戦の様なものを用意して戦えと言っているのかもしれないなかつた。

「比企谷先輩、あの……………これって何か意味あるんですか？ 普通に戦うだけでいいと思うんですけど」

——ん。と振り向く八幡は、その行為に軽く称賛を与える。
木虎のそれは正しい。

相手の意図が分からないからと言って、それを自身だけで考える必要などない。なぜなら、これはあくまで訓練なのだから。

逆に言えば、これを一人で考えて、適当な答えを導きだそうものなら、八幡はこのまま帰ったことだろう。

「まあ確かに意味はあるんだが、そんな深く考えなくていいぞ。今回に至っては俺は攻撃しない——つまり防御に徹する。これならお前の銃手ガンナーとしての腕も見れるし、接近戦もしやすいだろ。とりあえず精一杯試してみろよ。案外簡単に終わって自信がつくかもしれないだろ」

「わかり、ました」

すべてを話しているわけではないだろう。ただ間違ったことも言っていない。
ただ、確かにそれなら木虎の実力を最大限に見れる。

お互い全力を出せば、木虎は使い物にならない接近戦など使用しない。さらに言えばその場のしぎにしかならない使ったことすら無いトリガーも使わないだろう。

だが今回、木虎は『鬼ごっこ』に勝てるトリガーをセットすればいい。《テレポート》だろうと《カメレオン》だろうと、何を使っても構わないのだ。

相手が攻撃しないことと、トリオンが消費しない訓練モードを加味するに、むしろこちらのほうが八幡の狙いなのだろう。

それはつまり——戦闘に対して、しっかりとした理論建てをさせるため。

八幡の後ろ、何をセツトするか真剣に考えている木虎を見るに、八幡の狙い——というより目的はとりあえずうまくいつている。

根が真面目なのだろう。意図を理解しているというよりは、とりあえず全力を尽くすという風に思考している。

(心が強い子だな。まあだからこそのこの事態だろうが……)

そんな八幡の肩を、ツンツンと。

振り返ると、そこには綾辻が上目遣いで八幡を見ていた。

「……………」

無言で、ただその場においていたく自然に、八幡は距離をとった。

いや、もうほんと、計画的じゃないところが逆にあざとい。

八幡は綾辻遥という少女に対する警戒度を上げた。と、何やらシリアスな雰囲気を八幡は出しているが周りから見ればそれは茶番以外の何物でもないのだが、つていうか——

警戒度って何？　みたいな感じである。

そんな八幡のそれを木虎から距離をとったと勘違いしたのか、そのままズイズイ近づ

いてくる綾辻に、八幡は苦い顔を浮かべたくなる。

「ねえ、なんで『鬼ごっこ』……だっけ？ 私初めて聞いたんだけど？」

「んあ？ あ、ああ、そうだな。この場合鬼ごっこである必要はないんだが……」
と、答えながら、八幡は綾辻遥という少女がなんとなくつかめてきた。

好奇心旺盛な天然者。過去に八幡を見つけるためにいろんなところに顔を出していたのは、そのいろんな人に聞いた。

自身が抱く疑問に素直で、そのためなら少しばかり考えなしな天然具合もここまでくればなんとなく分かる。

異性に対してこの距離間。『ボーダー』という組織を加味しても、学生であるならばもう少し距離を開けるべきじゃないだろうか……。

言うまでもなくこれを、好意と勘違いする八幡ではない。むしろ八幡にとって綾辻は少し苦手なタイプになるだろう。

「じゃあなんで？ もしかして無理やり連れてきたから怒って？ そのことならごめんなさい。だからちゃんと教えてあげてほしい。大事な後輩なの」

……。

(ついでに、後輩想い……ね)

本当に——八幡はこういうタイプにはつくづく弱い。

「大丈夫だ、真面目にやってる。どうやら今回は強くすることが目的じゃないから。少し遠回りになるが、それには目をつむってくれ」

「えっ……強くすることが目的じゃないって……」

「あれ？ 嵐山さんから聞いてないのか。短期間で都合よく強くする方法なんてねえよ。そもそも、それならなんで外部の人間である俺をよんだんだよ。外部の人間じゃないとできない事だからだろうが」

あえて遠回しに言うような八幡の物言いに、頭の中で迅を浮かべる綾辻だが、彼と八幡で全然違うなと考え直す。

迅の場合は、自分のペースに相手を巻き込んだりするためだが、八幡は単純にひねくれているからだろう。

考え方だけじゃなく話し方までひねくれているとは、もはや擁護のしようもない。

「木虎には才能がある、が——それだけに今を焦ってる。チームを抜けるなんて相当だ。だからそれを何とか解消してくれ、つてのが嵐山さんの依頼だろう。本当に面倒な事任せてくれたって感じだわ」

「ええ!! 嵐山さんそういうつもりで比企谷君呼んだの!?!」

「いや、そこは気づいとけよ。普通に考えれば短期間でつよくなるよりよっぽど現実的

だ。チームメイトの声じゃ届かなかったんだろ？ まー良くも悪くもお前らは優しすぎるからな、木虎のプライドじゃ、それが逆に嫌だった——というよりも申し訳なかつたんだらうぜ」

「……………そうだったんだ。私木虎ちゃんが元気になれるならと思つてて……………」
「別に責めてるわけじゃねーよ……………。適材適所だ。俺も嵐山さんには世話になつてるし、これぐらいならまあ、やつてやらんこともない。連れてきかたは卑怯だと思つたけどな……………」

濁つた眼を少し淀ませながら言う八幡に、綾辻は——フツと可愛らしく笑みを浮かべる。

「じゃあ任せちゃおうかな。頑張れっ！」

「仕事の応援なんて有り難みがないからいらん……………」

その切り返しにブーたれる綾辻を押しつけながら、八幡も準備を始めた。



「準備はいいか？ ルールを軽くおさらいしとくと、お前はの勝利条件は手で触る。俺の勝利条件は十分間逃げ切ることだ。お前はトリガーも攻撃もなんでもあり、俺は

《シールド》と《アステロイド》だけ。そして攻撃不可——つてことでいいな」

まるで自身の不利など存在しませんとでもいうように、木虎有利なルールをつらつらと並べる。

手で触るとというのがシビアだが、この空間はトリオン切れがないというだけでダメー
ジは入る。ぶつ倒してから悠々とタッチと言うのももちろんありだ。

それを踏まえれば、流石に負けるはずがないというのが木虎の感想だった。

「問題ありません」

ツンと言う感じで答える木虎を見るに、流石に八幡のこれにはイラつと来たのだら
う。

ここまでできれば木虎じゃなくてもムカつくだろうが。

「そんなじゃ合図よろしく」

気軽に言った八幡の言葉のすぐ後に、

『訓練開始します』

どこからか、綾辻の声がそこへ響いた。

それと同時に——。

——《ステルス》——オン……。

まず初めに、木虎はその場から消えた。

今では珍しくもないトリガー《カメレオン》。
当然だろう。

鬼ごっこ。相手の攻撃不可。無尽蔵のトリオン。そのような条件が揃っていて、このトリガーを使わないほうがむしろ疑問だ。

(まあ、だからこそ……)

そう、だからこそ……。

「悪手以外の何物でもないけどな」

「——ッ!？」

そつと、真正面から近づき、八幡の体へ伸ばした手は、ものの見事に空くうをきる。

なんで……? そんな疑問を思い浮かべる前に再度伸ばした木虎の手は、八幡に見えてるかの如く回避される。

(なっ! ……音? それとも心配? 違う、その程度じゃこんなことはできない)

二人はだんだんとスピードを上げていき、すでに全力の鬼ごっこが開始されている。と言っても、木虎の姿はまるつきり見えないのだから、八幡が何やら一人で動いているぐらいいしか周りは見えない。

見ている綾辻や嵐山は、それが可笑しくて仕方ない。

だっておかしいだろ——。

どうして見えない木虎のそれから比企谷は逃げ続けられているのかと。

「そろそろ一分だが、手を変えなくてもいいのか？」

見えていたら二人のそれは完全に熱戦間違いないのバトルにまでになっていた。

手で触ることを一度諦め、足技などを交えた単純な戦闘。うまくいけばその過程で触れる、と考えた木虎の作戦である。にもかかわらず、八幡は手以外には素直に防御し、手だけは絶対触れないように続け始める始末。

確かに、このまま続けても木虎の勝利はありえないだろう。

スーっと。八幡の声に応じるように、木虎は姿を現した。

「もしかして、それが噂の比企谷先輩のサイドエフェクトですか……」

息切れしてる様子はない。

トリオン体で疲れを感じることは多々あるが、それはあくまで精神的にだ。今回のそれは木虎もそこまで気を張っていたわけではないのだろう。

「えっ、なに？　噂？　なんで毎回俺の知らないところでそんな事になってんだよ……」

答える気はなし。

それでも、木虎は自身の考えが正しいだろうと予測をつけていた。

そしてそれはあつていた。『思考投影』による《視覚共有》。戦闘するにあたつて、敵の視線——その一点さえ取得できればその攻防で負けることなどありえない。

もちろん、八幡が長年そのサイドエフェクトと向き合っていたからこそその芸当であり、八幡の戦闘的才能あつての事だろうが……過去、入隊初期の風間との戦いで、そのみで風間を圧倒したことを考慮すれば、その洗練具合は説明するまでもない。

「相手の思考をかすめ取るあなたのサイドエフェクトなら、私は視覚を奪い取ります。それならさっきの事にも説明がつかますし」

「へーなんかサブキャラみたい有能力だな。ほんとにそんなことができただけど……」

「嘘が下手ですね」

「正直者なんだよ」

舌打ちしそうになるそれを堪えながら、木虎は自身の銃型トリガーを八幡に向ける。確かに《カメレオン》が効かなかつたのは嬉しくない誤算だ。だが、ルールを開示してきたのが八幡だけに、それを想定してないことはありえないと思つていたのも事実。

——なら、別にそんなものじゃなくても……ツ。

木虎は、勝つために自身の引き金を八幡へ引いた。



八幡は思う。

木虎藍はプライドが高いのは周りの知るところだ。

しかし思い違いをしてはいけないのは、ただプライドが高いだけではないということ。

今でこそ『A級としては』実力が追いついていないが、彼女が優秀で有能なのは誰が見ても一目瞭然である。

まあ彼女を八幡が知ったのはつい先ほどなので、何とも言いがたいのだが、自身の考察は大方当たっているだろうと予想がついていた。

(本当に強いな……)

そう、彼女は強い。力でなくその心が。

今この瞬間にも何かを掴もうとしている。

——なんでも良い。なんでも良いから自身が強くなる何かを……。

普通なら挫折するだろう。周りの期待に押しつぶされることだってあったはずだ。

だって、彼女はまだ中学生になったばかりの少女なのだから。

痲癩を起して、駄々をこねて、周りに八つ当たりしても誰も責めない。

『ボーダー』の戦闘員の平均年齢を考えると、それこそ日常茶飯事なのだ。それでも――。

(それでも何とか……前に進もうと思ってる、か……)

八幡は自身の昔を思い出しながら、だからこそ彼女に称賛を送る。

当時の八幡は、八つ当たり気味に『ボーダー』を憎み、誰も頼ろうとすらしない。本当にガキだった。

(だから嵐山さんの願いを聞いたんだけど……)

八幡は、木虎が撃った《アステロイド》を、『銃弾打ち』^{ピリアード}で撃ち落しながら、自身の考えが最近変わってきていると改めて自覚する。

攻撃をしながら突っ込んでくる木虎を見て、八幡も下がる。

本来なら銃手が^{ガンナー}接近してくるなど愚の骨頂だが、今回はその限りではない。むしろ八幡の『銃弾打ち』^{ピリアード}を考えると、『至近距離で撃ちまくる』が正解だろう。

(――っ、上手いな……、いつも間にか角に押されていたのか)

気づかぬうちに、というほどでもないが、木虎は八幡は角へ誘導することへ成功する。流石は期待の新人と言ったところだろう。単に戦いなれている。

ダンッ、と。それを期に木虎は八幡の元へダツシユする。

攻撃は飛んでこない。相手が移動できないように牽制しつつ、一気に詰め寄る。
——勝った!!

勝利を確信した。やはりハンデが大きかったのだ。これは当たり前の結果だと。
安堵と笑みを浮かべる木虎へ、

「そういうえば……《スコピオン》を使い始めたんだっただな」

八幡はその状況を危機とすら感じていないように、

「ちよつと銃手ガンナーの戦い方見とくか？」

気軽に口にする。

何を言ってる？ そう思うより前に、木虎の表情は驚きへと変わる。

(なんでっ?! ——自分から………ッ)

今まで逃げ回っていた八幡が、自身から木虎へ向かってきたのだ。

考えるまでもなくチャンスで、絶好の機会。木虎は迷うことなくトリガーを向ける。

が、その瞬間——。

「うそッ………っつ!!」

思わず声を漏らしてしまうほどに、木虎はその光景に驚きを隠せなかった。

八幡は撃ってきたのだ、木虎へ向かって。

ただ、木虎本人ではなく、その銃型トリガーに向かって。

「……つ、この——ッ」

銃を向ける——が、その瞬間に弾かれる。

木虎が八幡を捕捉し、引き金を引く前に。八幡の《アステロイド》が銃を弾く。

（反応が早すぎるッ!? 確かに、威力がそもそも足りない銃型トリガーでは、『武器破壊』は確かにできない。でも、だからって銃口を曲げに来るなんてッ!）

木虎は思う。

これこそがオンリーワンだ。

これが唯一ノーマルトリガーでS級の男だ。

（レベルが違いすぎる………ッ）

木虎は迫る八幡を押し戻すように銃を構える。だが遅い。

『不可視の弾丸』と言われるほどの速射性を持つ八幡と木虎では、あまりに初動の差がありすぎる。

『思考投影』によって木虎の『撃つという意思』をそのままアクセスできる八幡にとっては、イージーすぎる行為だ。

「じゃあ——」

木虎の目の前で………文字通り手が届くような距離で、

「あと六分だな」

比企谷八幡は、残りタイムを口にする。
まるで、自身が十分間逃げ切れることは確実というように。
木虎の目の前でそう言った。

十四話』『定石つてのは、結局のところ限界があるもんだ』

八幡が綾辻たちの策略にはまっているそのころ。

『^{くうはく}』は、自身の隊室で、珍しくも仕事をこなしていた。

「じくろく、まだ終わらないのかよー」

「……あと、もうちよつと……だから、まつてて、ね？」

疲れを隠す様子もなく、子供の様に声を上げる空に対し、子供であるはずの白は、大人のように優しく答える。

「まあ、今月の近界民^{ネイバー}の送り込み方ちよつと変だったもんな」

「……う、ん。それに……、少し誘導座標もずれ、てた……」

「で、やっぱり俺の睨んだ通り——」

「……間違いない、ない……。新しい——近界民^{ネイバー}の国、見つけた……」

普段はゲーマーとして、というかそれ以外のイメージがない『^{くうはく}』だが、彼らは天才である。

それを知ってか知らずか、『ボーダー』は彼らにある依頼を定期的に出していた。いや、順序が逆だろう。

そもそもの発端は、『ボーダー』という組織を暇つぶしに、『くわはく』が調べつくしたことである。

過去、まだ『くわはく』が『ボーダー』へと八幡に連れてこられた当初。

『なーハチ、この組織どうなってるんだ？ これだけの新技術！ 手に入る情報量!! これだけのものを持っていながらこの体たらく!!! はつきり言ってる俺らより仕事してないと言ってもいい』

そもそも仕事なんぞしたことないだろうが、とツツコミを入れたくなる八幡であったが、その時はまだお互いにそこまで仲を深めているとは言い難かった。

『とりあえず俺らはS級交渉に必要な材料を集める。お前はおれらが出した条件をできるようになってろ』

『俺の方は良いが………。交渉材料ってなにすんだ？』

何気なく聞いたのだろう。だからこそ驚きすらおきなかった。

『ちよつと、ネイバー近界民の世界地図つくるわ』

言葉が出ないとはこれの事だと、八幡は当時深く思ったものだ。

そう。あろうことかこの『ふたり』は、データだけで近界民ネイバーの軌道配置図を作り出したのである。

そもそも、同じように見えて国によってトリオン兵のデータはまるつきり違う。さらには、今までの遠征からある程度近界ネイバーフットの軌道配置図はあるのだ。

ある特定の場所から送られてくる誘導座標の誤差を元に計算すれば、どの国が、どのようなトリオン兵を使って、どのような軌道でこちらの世界を周回しているのか。

それらを求めることなど容易なことだ。

幸いなことに、トリオンに関係することならば、すべてがデータとして残ってるし、かなり細かいところまで研究されている。

むしろ、ここまであつて何故襲ってくる敵の軌道配置図を割り出せないのかと『ふたり』は疑問に思うほどだった。

まあ、その話を聞いても、『くっはく』以外の人間は誰一人として『できる』とは答ええないだろうが——と言うか、そのほうが普通だ。

遠征で行ったことない国だろうが、知らない国だろうが、こちらにトリオン兵を送つてさえいれば——。

——『ふたり』は計算でそれを導き出すことができる。

もちろんその役割は主に白で、『未知の国』が来た時こそ空の出番なのは言うまでもない。

さらに言うなら……いや、今は良いだろう。

ここで重要なのは、『^{くわはく}』の二人は、あたかもゲーム感覚で、『ボーダー』に多大な貢献をしているということだろう。

そして、その二人が言うのであれば、また新しい国を発見したという。

簡単そうに二人は話しているが、あくまで白の天才的な頭脳があつてこそ。

さらには必要なデータが揃ったからこそ求めることができたのであり、時間にしてその国は半年ほど前からこちらの世界にトリオン兵を送っていた。

そう、半年だ。

新しい国を見つけるのに半年。

長いと感じるものもいるだろうが、これはむしろ早い方である。

遠征の帰還が数ヶ月ほどだということと、その時にかかる費用。危険度を考えればこれはありえないほどの貢献度である。

『^{くわはく}』が来る前から相当数の情報があつたことから、この一年で彼らが見つけた国はすでに二桁以上。

ブラックトリガーでない上にS級並みに強い八幡が遠征部隊に選ばれないのは、『^{ふたり}』

の貢献があつてこそ。

三人が三人とも、『ボーダー』が失うべき存在ではないのだ。

「……………お、終わった………」

キーボードを叩く音を止め、空へと寄りかかる白の表情は、久方ぶりに強いゲーマーを相手したときと同じ表情である。

もはや人間の行えるレベルの事ではなくなっている。それはまさに——。

——イレギュラー。

そしていつも通りゲーマーとしての矜持を全うすると思いきや。

「んじゃ、本題に入るか」

「……………ん……………」

唐突に——。

二人は再び小さな部屋で光るパソコンの光に目を向けながら、比企谷八幡の戦闘ログを見始めた。

それは、先ほど疲れを訴えていた空の見る影もなく、軽口を叩く余裕のあつた白ですら黙る始末。

『ボーダー』として『^{三人}に負けはない。

——が、それは本来の『^{くうはく}』であつてもそうでなくてはならない。

比企谷八幡相手に『^{兄妹}』は負けることを許さない。二対一？ 知ったことか。それでなお、油断して挑めば次は負ける。

八幡と『^{ふたり}』の差はそれほどしかない。

訓練だろうと。喧嘩であろうと。負けることは許さない。
そのための研究。

「あいつ、あそこまで精密な射撃できてたか？」

彼らが見ているのはついこの前の風間と八幡の戦い。

「……まるで、別人……前より、速くて——正確……」

「俺らがいないところでやってやがったなあいつ。こればかりは、ハチのそれを引き出してくれた風間に感謝だな」

「……多分ハチ兄、隠したかった……はず」

声の真剣さと真逆。楽しそうに顔に笑みを浮かべながら。

いいや、その真剣さこそが楽しみの証拠だろう。

「にしても、ハチ結局あれ使わなかったな。本来ならもつと楽に勝てただろ」

「……相、性……？」

「さーな。そこまでは分からんが。使わないことだけは分かっていたからこそ、あそこまで策を練る必要があつたんだよな——」

不意に二人は聞き捨てならないことを口にする。

手抜き？ いいや、二人の様子を見るにそれはないだろう。

「拳銃型銃手ガンナーによる超近接戦闘」

「……多分、白たちと……相性、最悪——だから、隠してた……」

ああ、やつぱり。三人は全力を尽くしてなお、何かを隠していたのだ。

「めんどくせー。データは多いに越したことないんだが……。対応策、見つけれ
れるか五分五分だな」

「……でも、にいの仕事。——バッチ、よろ……」

最強のゲーマーは、画面の光で顔を照らしながら、比企谷八幡を超える一手を考える。



嵐山隊訓練室。

木虎と八幡はお互い至近距離でトリガーを構える。

「この距離ならッ、触る方が早い——ッ!!」

手を伸ばし、目の前のそれに触れようとする前に八幡の腕がそれを阻止する。

そう——木虎の手を、八幡の腕がだ。

避ける暇がなかった、のではない。

勝利の笑みを浮かべようとする木虎の顔が固まる。

(シールドを腕に巻くように!?)

ダメだ。これでは触れたことにならない。

「でも、こんな事いつまでも——」

——続かない。そう口にする前に、木虎の横へ何かが通過する。

腕どころか体が硬直したように動きを止める木虎へ、

「もし、これがランク戦なら、今ので終わってたな……」

八幡は口にする。

向かっていたのだ。八幡の銃口が、木虎の方へ向いていた。つまり、先ほど顔の横を

通過したのはトリオン弾だと言う事。

——狙って……外れた?

いやそうじゃない。と木虎は気づく。

これは外れたのではない。ルール上外してくれたのだと。

「こ、これに何の意味が……」

「いいのか? 時間無くなるぞ。多分だけど、《スコープオン》も入ってるよな?」

言葉が詰まる木虎に対し、八幡はとぼけるようにそれを言う。

「………ッ」

まるですべてを見透かされているようで気にくわない。

自身の苛立ちをぶつけるように、言われた通り木虎は八幡へと《スコープオン》を振り下ろす。

しかし――。

パンツ、と。またしても木虎の顔横をトリオン弾が通過する。

もちろん、木虎の攻撃を腕で止めてだ。《スコープオン》本体でなく、木虎の腕へ自身の腕をぶつけることでの攻撃中断。

（――またっ!?!）

驚きの方が強い、それでも、木虎はスピードを上げるように腕を回す。

その攻撃を、八幡は避けながら反撃する。

手首の向きだけを変えて………攻撃をキャンセル、あるいは回避しながら、連続的に《アステロイド》を木虎に浴びせる。

言うまでもなくすべて外しているが、木虎からしたら同じこと。あと少し手首をひねれば、自身の頭を八幡は撃ちぬけるのだと確信がある。

まさに、攻撃と防御を同時に行っているかのようだ。

理にならなっている、先ほど八幡は『銃^{ガンナー}手の戦い方』と言った。

確かにこれだけ近ければどんな体勢であろうと、手首をひねれば相手に当たる。距離が距離だ。相手は避けることも難しいだろう。

「……………すごい」

接近戦ができれば、という大前提があるのは確かだが、木虎はこれこそが銃手ガンナーの理想形だとすら思えた。

普通なら——トリガーでないのなら……つまり本当に普通の拳銃で人を殺すためなら、近づく必要は皆無である。なぜなら一発当てれば終わるのだ。

遠くからコソコソやれば相手は死ぬ。むしろ相手も同じものを持っていてもおかしくないのに、近づくなんて馬鹿のやることだろう。

だがトリガーは違う。

トリオン体相手には一発では終わらない。そもそも当てることすら難しい。身体能力の向上、《シールド》、さらにはトリオン能力。様々な要素が銃手ガンナー一人で戦うことを不可能と断じている。

だからこそ、と木虎は思ったのだ。

これならば、攻撃手でなくとも銃手ガンナーとして——否、一人で勝てる。

説明するまでもなく、これなら当たるし一発だ。

トリオン能力すら関係ない。

——が、これはあくまで技術ありきの離れ業。同じことなどできるわけもない。
——下がるしかない。

木虎が体を引くと同時に、八幡もその距離を詰める。

（——だめっ、逃げられない………ッ）

銃手である木虎ではこの距離では何もできない。近距離武器である《スコープオン》
なんて何の意味もなしていない。

明らかな実力不足。

本来ならもう何回倒されているのだろう。

木虎もただ腕を振り回しているのではないのだ。

《グラスホッパー》を使ってみた。《スコープオン》を変形させてみた。

——それでも、それでも通用しないのだ。

「て、——《テレポート》——ッ」

ここに来て、やつと木虎は距離をとることに成功する。

だがダメだ。

これは木虎にとって切り札だった。

最悪の場合はこれで捕まえる予定ですらあった。

使ったのではない、使わされたのだ。

木虎は足を止める。

——万策尽きた。

先ほどの様な勢いなどなく。腕を下げ。

「もう、終わりでいいです」

木虎は、うつむくように、唇を震わせながら口にした。

「自分の実力がよくわかりました。比企谷先輩とこれだけやらせてもらつていい経験を
得られたと思います」

本来これほどに実力差があれば、決着自体は数秒で着く。相手の戦い方を見ることも
なく、技術すら得られず。

しかし、今回は八幡のそれを十分にまじかで見れた。

——ああ、満足だ。

「ご指導、ありがとうございました……」

途切れ途切れで泣きそうに肩を震わせながら……。

——違う、違う……違うッ。

「もし、機会があれば……うっ……また、お願いします」

——満足なわけがないだろうッ。

でも、これに負けたら八幡は帰ると言った。これ以上お願いするのは申し訳が立たな

い。

自分からやめといて。——それが正しかったとしても。

それ以上を求めることなんてできない。

「あと二分あつたが………。確かに少し長すぎたな」

八幡は顔をしかめるように、残り時間を確認した。

つまり、これで終わり。

「じゃあ、反省点とこれからの事少し話すか」

八幡の言葉を、木虎は仕方がないとそれを受け入れ………?

「………はい。ありがとうございます、し………た?」

………。

………?

今なんて言った? 木虎は自身の耳を疑った。

「いや、だから反省点を………」

「そうじゃなくて! 比企谷先輩私が負けたら帰るって言ったじゃないですか!! なの

に、どうして………!」

掴みかかろうように近づくと木虎に、八幡は押され気味に後ろへ下がらる。

と言うよりも、八幡は何故今怒られているのか分からなかった。

（ちよつ、え？ なッ．．．．．近いし、綺麗だし．．．．．つてあぶねー危うく口リコン認定されるところだった）

「もしかして、あれは嘘だったんですかっ!？」

悔しくて泣きそうになったのだ。あれを嘘と言ったら許さないと、木虎の目が告げている。

なので八幡は——はいそうだよ、と言えなかった。

「あーえーつとだな。木虎負けてないだろ」

「——は？」

凍えるような声に、八幡の顔が引きつる。

「ま、負ける条件は俺が十分間逃げ切ることだろ。けどその前にお前はゲームをやめた。途中放棄は負けにはならん。勝ちではないけど、まー．．．．．引き分けた」

この時、八幡は我ながらいい感じの理論を展開したと自画自賛さえしていた。

——お前は心理戦で勝ったんだー! とむしろ相手に勝ちを譲ってすらあると、自らのファイインプレーに歓声すら上げていた——心の中で。

だが、忘れてないだろうか．．．．．木虎藍のプライドが高いということ。

「．．．．．な——」

「——な？」

「なツめんなああああああ!!」

もはや普段の淑女たる様子など微塵も見当たらず。拳を振り上げる木虎に対し、先ほどよりも逃げ惑う八幡の姿がそこにはあった。

その光景は、綾辻たちが止めに来るまで終わらなかった。



「本当にすみません」

開口一番、木虎は謝罪の言葉を口にした。

あれは確かにやばかった。

先輩に対する物言いかよりも、普段の木虎の言動ですらなかった。

先ほどののは一時の気の迷いだ。そうに違いない。

木虎は軽い自己嫌悪に苛まれながらも恥ずかしそうにそう思うことにした。

「いや、俺も悪かった……。悩んでるやつにやるようなことじゃなかったな、悪い」

謝る八幡の姿を見て、なお自身の失態に木虎は頭を抱えそうになる。

もうさっきの事は忘れない。その思いでいっぱいだ。

と、まあ、お互いに暗い雰囲気を出している二人であるが、——そうじゃない、と本来の目的を思い出す。

「そ、それで反省点と比企谷先輩は言いますけど……あの、その……」
良い淀むように、チラチラと様子を浮かべる木虎に八幡は聞き返す。

「なんであの形態での訓練にしたんですか……って聞きたいのか？」

「はい……」

コクコク、とうなずくように木虎も答える。

それは最初から木虎の疑問だった。

わざわざ鬼ごっこなんて遊びを取り入れ、ハンデまでつけて行ったのか。予想はついているものの、ちゃんと八幡の口から確認をとりたい。そう思うのは必然だ。

「……そうだな。まあそれも含めての反省——って言うか考察なんだが……」
お前、なんで最初に《カメレオン》を使おうと思った？」

明言しておく、今この場には木虎と八幡の他に人はいない。

深い話をする部分に当たって、チームメイトは今邪魔でしかない。疑問に思うかもしれないが、『チームを抜ける』とは意外と非常事態なのだ。

『ボーダー』がチームで仕事を割り当てているのは、危険な戦闘を確実にこなすためとは他に、人間的成長への配慮の方が大きい。

何度も言うが、子供が危険な武器を持って振り回すというのはそれだけで異常だ。

犯罪やらいじめやら、すぐ隣に危険があると行って過言でない——もちろん加害者として。

それを緩和するためのチームと言う措置がそれだった。連帯責任と言うと言葉が軽い、お互いにお互いを見張る状況こそ、『ボーダー』が求めたそれでもある。

今回の場合でこそそこまで深刻なものではないが、木虎の『心が衰弱して』の脱退は、これからの木虎の将来に大きくかわる。

学校における不登校。と、ある意味同じかもしれない。重要性と言うよりも慎重に当たるべき事柄であるのは事実なのだから。

その張本人である木虎は、悩むことなく八幡の質問に回答する。

『《カメレオン》は、あの状況で一番最初に取りべき『策』だと判断しました。誰が見ても、あのルールなら使うと思います。……』

木虎が言うように、百人いたら百人が同じ回答をするだろう。

疑問にすら思わない。当然ではないか——。

「そうだな。確かにあの状況なら誰でも使うと思う。……だからこそ、それは『策』にならないと思わないか？」

「——っ!!」

言われて気づいた。

『策』と言うのはその場で最適解を求めるものではない。敵に思いつかない突拍子もない事であるべきだ。

「お前の戦い方は確かに上手い。俺の攻撃に対応するためにあえて詰める。距離を無視できる《テレポーター》を用意する。どれもどれも最適解。まあ、容易に予測がつくわな。俺はそれを『策』とは呼ばないと思うんだけど……どう思う?」

「……………」

言われるまでもなくその通りだ。むしろなぜ今まで気付かなかったの方が不思議でならない。

「銃手ガンナーで上に行けない……だつたか? ——ならどうするか……。その

答えとして俺が用意できるのは『銃手ガンナーでは行わないそれを用意する』だ」

「銃手ガンナーでは行わない。……比企谷先輩が見せた接近戦と言う事でしょうか?」

「ん? まあ、あれもその一つではある。けどそれに固執するべきじゃないぞ、自分に合う——つて言うか自分が考えたそれの方が相手に攻略されづらくてむしろ有効だ。てか俺のあれは結構難しいからな? 最初こそ攻撃手アタックカーの俺だから容易にできたけど、銃手ガンナーとして戦うなら攻撃手アタックカーよりも一歩前に入る必要があるし」

その通りだ。

剣を振り下ろすという動作を必要としない八幡が行った戦法は確かに強い。しかしあの攻撃方法の決め手は防御にこそある。

敵に腕をぶつけて攻撃をキャンセルさせながらの攻撃。攻防の同時化。それができなければ綺麗にスライズされること間違いなしだ。

——だからこそ、攻撃手アタッカーよりも防御のリーチが短くなる銃手ガンナーでは『さらに一步』踏み込まなければならぬ。

攻撃手には《シールド》が役に立たないのだからなおの事。相当のセンスが要求される。

「別に奇抜なことをやれてることじゃないんだ。定石は確かに大事だしな。周りを見て強くなることも重要だろ。けど忘れるな、定石つてのは結局のところ限界があるものだ」

百人の命のために一人を殺す。

正しいですね。勇気のいる決断をしましたね。

——ああ、笑わせてくれる。

今度は99人のために一人を殺すのか？ 残りの命が何人になるまで続けるつもりだ？

まあ、例を出してしまえばそんなところだろ。

「それに、それだと最後は結局自力の力が物を言う。今回で言えばトリオン能力とかだな」

理論的に、そして無理なく、木虎がこれから何をすべきかを解いていく。

「少し真つすぐ気質なところがお前にはあるかもな。俺が『手を変えなくていいのか』って言ったら素直に《カメレオン》解除したし、《スコープオン》の話したらそれを使ったりしてたっけ？ 相手の言葉通りに動いちゃダメだろ。それが誘導だつて気づかなかつたのか？」

「……」

まさにその通りである。何を素直に敵の言葉に従っているのか……。

《カメレオン》をサイドエフェクトで対策が講じられたからと言って、それを長時間使用できるわけではない。長時間使用できるわけではない。

あんな異次元芸当、そこまで長く集中力が持つと考える方が難しい。

《スコープオン》だつて木虎が苦手としているトリガーへ誘導されただけではないか。少し考えれば分かることだった。

勝手に、自分のやるべきは『持てる技術をすべて見せる事』なんて考えていた。

「戦闘中にお喋りなんて普通はしないが、それは本来そんな余裕がないからだ。本物の

戦争なら少しの油断で死ぬからな。けど、トリガー使い同士なら基本的な相手の手を見る瞬間ってのが必ずある。……だつてなんのトリガー持つてるか分からんからな。——言葉巧み、なんて言うつもりはないが、ちよつと相手を言い負かす程度の気概はあつてもいいだろ」

確かに、それができれば強いかもしれないと木虎は思った。黙つて戦うのは確かに定石——なら、それ以上ができる人物の方が強いに決まつている。

「……比企谷先輩は、どうしてそこまでできるんですか。そこまで……普通なら考えません」

単純に疑問だった。

発想がすべてこれ以上ないと木虎は思った。

だからこそ、どうやったらそこまで考えられるのか。——それが知りたい。

「どうだろうな……。普通なら考えないからじゃないか？」

その答えに、——ん？ と意味が分からないというように、木虎は首を傾げた。

だが、少しでも八幡を知っている人間なら、思わず頷かずにはいられなかつたことだろう。

なんてことない、ただ——捻くれた考えただけではないか。

木虎は八幡の考えをこれ以上ないと評価しているようだが、別に、何もそれが最高な

わけではない。

事実として、八幡はあの『^天』に負け続けている。

それはつまり、その考えではまだ足りなくて、その技術には何かしらの弱点があつて、相手にはそれ以上の何かを持つていて。

結局——重要なのは考えを止めないこと。

木虎はそれをここで学んだ。

嵐山さんに感謝しないと、と木虎はお礼の言葉を考える。

——だつてもう、これで終わりなのだから。

少し悲しそうな表情を見せる木虎へ、八幡はどうとう本題に入る。

ああ、忘れてはいけない。

本来の目的はここからなのだ。

「それで、なんでお前嵐山隊抜けようとしてんだ？」

気軽に、けれど確実にその言葉を口にして——。

「!？」

——なんでそれを……。そう問う前に、八幡は言葉を重ねる。

「逃げんじゃねーよ、弱虫が」

淀んだ目で、木虎の覚悟を否定した。

十五話 素直になれよ、子供だろ

『逃げてんじゃねー、弱虫が』

突然、人が変わったように言った八幡の言葉に、木虎の表情が固まった。

「……な、なにを……」

大人びてるとはまだ14歳の中学生。

自分より2つ以上年上の男性の言葉に、自身の言葉がうまく出ない。

「お前、もしかして『嵐山隊には顔で選ばれたみたいでいづらいです』とか思ってるんじゃないのか？」

ビクツと。木虎の肩がわずかに揺れる。

「それが逃げてるって言うてんだ。……あのな、今『ボーダー』には大体四、五百人程度の隊員がいる。A級言ったらその中の数パーセントだ。実力だろうが運だろうが、容姿だろうが、行きたくてもいけない隊員が何百人といえる中で、『今ちよつと勝てない』程度でそれを捨てるとか…… — お前、流石に『ボーダー』なめすぎだろ……?」

「——ツ!!」

なんだこれは。

なんで急にこんな事……。

木虎は突然の八幡の物言いに、頭の中で先の言葉を整理するだけで限界だ。

「入隊直後はうまくいかないとか、年下の相手に負けるとか、才能ある新人にぼこぼこにされるとか、そんな人間山ほどのぞ。それに比べたら、お前のそれは……あーなんだ、もしかして才能ある自分が負けるはずないとも思ってたのか？」

「……そ、そんな事ありませんっ、私はただ、このままではチームに迷惑をかけると思つて……ッッ！」

「なるほどな、それを、嵐山さんたちが言つてたと？」

「——え？」

「いや、だからな？　嵐山さんたちが、お前がいたら迷惑だとも言つたのか？」

「……」

木虎は言葉を失う。

確かに嵐山は木虎にそんなことは一度も言っていない。むしろ一緒に頑張ろうと言つてくれている。

けど、木虎が言いたいのはそんなことではない。迷惑云々など理由の一つに過ぎない。いいや、もしかしたら理由ですらないかもしれない。

——感覚で、なんとなくて、自分は嵐山隊に入れないと、心のどこかで思っているのだ。

むしろ感情に理由をつけようとするほうが間違っている。理由をつけられないから感情なのだ。それこそが普通なのだ。

八幡の言い回しは、はつきり言つて卑怯だった。

まあだからこそ。——それを言つたのだが。

「なるほどな。要は我慢できなかつたわけか、周りの目が怖くて、結局自分から逃げることを選んだ。嵐山さんたちはその理由付けか？」

木虎の心の内を読むように、八幡はその先を潰していく。——否、言われたくないことを口にする。

サイドエフェクトではない。そんなもの使わなくても、八幡は元から人の中身を見ることに長けていた。

好き勝手に言つてくれる。

ここまで言われて黙っているほど木虎も大人ではない。

「逃げてはいけませんか……」。これは私の問題で、嵐山隊の問題のはずです。わざわざ比企谷先輩に言われることじゃないと思います！」

キツと、睨みつけるように、木虎は言葉を返す。

「……………そうだな。本当なら俺が言うべきことじゃないが、俺だから言えることもある」

淡々と、八幡は木虎のそれを認めた。

「……………」

「抜ける抜けないはぶつちやけどつちでもいい。それは確かにお前が決めることで嵐山隊の問題で、俺がどうこう言うつもりもない。けど、お前は嵐山さんたちの事もちゃんと知るべきだ」

———という意味だと、木虎が聞く前に。八幡がそれを言う。

「さつきはああいったが、お前が嵐山さんたちに迷惑をかけたくないってのは本当だろう。それはつまりお前が嵐山隊の事を思ってるからだ。……………なら、その逆ももちろんあるだろ」

「……………」

「嵐山隊はお前の事が心配で、悩んでるお前にかける言葉がなくて、それでも何とかしたいと思ってるんじゃないのか？ お前のそれを、無碍にしてるとは俺は思わねえよ、実際に抜ければならない状況もあるかもしれないからな」

静かに。

八幡の言葉は紡がれる。

『ボーダー』でのチーム解散はそこまで珍しくない。B級上がりたてのやつらが組んで、上に勝てずに解散だって結構ある。結局個人で続けて、C級まで逆戻りなんてのも珍しくない。だから何が言いたいかかっていうと……えーと、だからあれだ……、こんな良いチームそうそうないと俺は思うぞ?」

バツと、木虎は下げていた目線を八幡へ向けた。

「実力がどうたらとか、容姿がどうのとか、そんなことはチームを抜ける理由にするな。チームを抜ける理由にすべきは、チームメイトの気持ちとお前の気持ちだろ」

「……そ、それなら実力が足りないから抜けたいって言うのが私の気持ちで——」
「——でも、ここにいたい。その気持ちの方が大きいんじゃないのかよ」

木虎の言葉を遮るように八幡は言う。

ああ、そうだ。その通りだ。

チームを抜けたくない。その思い方が断然大きい。

木虎は思う。どうする方が正しいのか。いいや、自分はどうしたいのか。
そんな木虎に——。

「はあー、なかなか強情だな。……素直になれよ、子供だろうが」

ポン、と八幡は木虎の頭を撫でた。

無意識だったのだろう。まるで妹にするように、自然と手が向かっていた。

幸い、即座にそのことに気付いて謝罪の言葉を述べる八幡だが、木虎はその言葉を聞いていないのか撫でられた頭をそつと触り、

「もう少し………嵐山さん達と話してみます」

普段は見せることのないそれを。

軽く微笑むようなその顔を八幡へと向けた。

ただ――。

「それとは別に、私は弱虫ではありません」

先ほどの笑みなど見る影もなく、むしろ凛という表情で告げた木虎は、いつも通りツンとした感じでそういった。



時枝充が比企谷八幡という男を知ったのは、実をいうとつい最近の事である。

比企谷八幡のつながりを考えるにあたって、最も強固で深い関係は『くはく』だ。しかし、それ以外に全くつながりがないかと問われればそうではない。

入隊初期に知り合った風間や迅などもそうだが、玉狛支部との付き合いの時間も意外と長い。

今回で言えば嵐山もそうだし、八幡が入隊してから一年間と言う月日を考えれば、それは言うまでもなく自然なことだ。

特筆すべきこともない。

彼の人生はある瞬間から始まったわけではなく、物語の主人公でもないのだから当然だ。

だが、時枝充にとっての比企谷八幡は特別だった。

当時、たまたま目についた嵐山と話していた少年。それが比企谷八幡だった。

『少年』と称したが、時枝は自身よりも一つ二つ年上だろうとその時は予想した。

『嵐山先輩こんにちは。ところでそちらの方は？』

『——ん？ ああ充か。こいつは比企谷って言ってな……——紹介するよ比企谷、

こっちは嵐山隊の一人で時枝充っていうんだ』

別段変わった様子もなく、一般的な質問をした。

『(なんか目が……)』

変ですね、と言う感想を口にすることなく。まあそんな感じが八幡と時枝の最初である。

そんな彼が八幡に抱いたのはシンパシー。

お互いに目に特徴があることだったのかもしれないし、口数が少ないことかもしれないな

い。はたまた雰囲気か……。

別に劇的な出会いではなかった。そもそも男同士であるし、間違つても恋心なんて言うものではない。むしろそんなものならごめんすぎる。

小学校で最初に友達になるのは隣の席だとか、話しかけたらたまたま趣味があつたとか、シンパシーなど言ったが、興味を引かれた理由はその程度のものだろう。

当時こそ自己紹介程度で話は終わったが、それ以降、時枝はなんとなく——と言う理由で比企谷へ話しかけることが多くなつた。

知り合いだからとりあえず、通りですれ違つたから、目が合つたから。

『出来る男時枝充』名高い彼は、礼儀をしつかり重んじる人間なのだ。

その最中、時枝はあることに気づく。

『……あれ？ 比企谷先輩と話すのが楽しい？』

時枝の入隊時期は彼が12歳の時、中学一年生だつた。三年間と言う『ボーダー』では長い年月を過ごしているが全体で見れば年下の部類に入るだろう。

それでも、何事においても優秀な彼を周りは『すごい』と称しながらもそれが『時枝充』だという目で見ていた。

悪い事ではない。要は『出来る男時枝充』と言う肩書が定着しただけの事。言つてしまえばクラスの委員長と認識は同じだろう。

それが当たり前の中、八幡だけそのフィルタを透さず時枝充を見ていた。単にその噂を知らなかっただけでも言えるかもしれない。

『比企谷先輩。この間嵐山隊A級に上がったんですよ。久しぶりに自分で点数とりました』

『おーすごいな。相手は……えーと、まーあれだ。おめでたいな、マックスコーヒーを奢ってやろう』

『同じ『ボーダー』の仲間ぐらい名前は覚えましょうよ。後普通にジュースが良いです』

『名前を覚えるのは苦手なんだ……』

『……俺の名前、覚えてますか』

『あー、その話はまた今度な』

軽く最低な部分があったが、可もなく不可もなく。そんな会話。

嵐山准と言うインターフェースを介して知っているだけのちよつとした知り合い。それがお互いがお互いに求めたポジション。

それ故に心地いい。

時枝にとって比企谷唯一気を張りすぎなくていい人物であった。

『悪いな充。俺の書類まで手伝ってもらって。今日は妹と弟のご飯を作らないといけなかったんだ』

『気にしなくていいですよ嵐山先輩。俺も暇でしたから』

『そうか。あまり気を張りすぎるなよ？ 疲れたら言ってくれ』

『大丈夫ですよ。さつき比企谷先輩と会ってマックスコーヒーを奢ってもらいましたから』

結局マックスコーヒーだったか、と言うのはさておき、時枝にとって比企谷八幡とはそういう男だ。

時枝充は一人っ子。もしかしたら時枝にとって八幡とはお兄ちゃんと言う存在と酷似しているのかもしれない。

緑川駿で言ういうところの迅悠一。黒江双葉で言う加古望。

一つしか違わないじゃないかと思うかもしれないが、時枝にとってのそれが八幡だった。

.....

そんな時枝だが、いいや、だからこそか。

遅れたことによつて知らない事情。

木虎と八幡の戦闘と言う意味不明な現場を、嵐山から状況を聞いた段階で、八幡のしたい事をすでに看破していた。

ただ、時枝が思ったことは八幡のそれによつてこのようではなく――。

『比企谷先輩らしくない』

——と言ったものだった。

そうなのだ。いくら嵐山の頼みだとしても、相手が年下の女の子と言うことを加味しても、今までの比企谷八幡ではここまでしない。

何もしない。のではなく、ここまで凝ったことをしない。

時枝は、木虎と八幡の訓練が終わるのをモニターで確認し、すこし考える素振りをした後。——ああなるほど、と頷いた。

同様に嵐山も気づいたようで、——少し無理な頼みをしたかな、と申し訳なさそうな顔を浮かべている。

この三人の中で綾辻は、八幡の行動にそもそも疑問を覚えることのできなかつた。それは単純に付き合ひ時間が短いからだろう。

「……………」

一人首を傾げる様子を見るに、二人が何に気付いたのか分からない。

しかし、八幡が好奇心旺盛の天然者と表したことから分かるように、綾辻はその氣質がある。

結果。

「自分たちだけで納得しないでください」

綾辻は二人に向かって素直に口にした。



木虎は隊室の前。扉を開けることをためらっていた。

——普通に恥ずかしい。

我ながら子供っぽいことをしていたものだ。木虎は今までの自分を子供と称した。年齢からして子供だろうに……。『今までの自分は子供』——その思考がすでに子供っぽいことに木虎は気づいていない。

「……………よし」

意を決し、扉を開けようとした瞬間。時枝の声が扉越しに聞こえた。

『比企谷先輩は、基本的に面倒くさがりなんですよ。ましてや今回は嵐山さんの頼みとは言えチームの問題。それに首を突っ込むほど、比企谷先輩は『良い人』ではないんですよ』

恐らくは時枝の声のそれに、木虎は動かそうとした手が止まる。

『多分木虎を怒らせることにはなることになっても、チームに残る理由を作るぐらい、簡単にできたと思います……………ですよね？ 嵐山先輩？』

時枝の言葉を引き継ぐように、

『まあ、そうだな。木虎も達観してるが、比企谷の方がまだ上だ。言いくるめるぐらい初対面でもできるだろう。面と向かって話せるかどうかは別としてだけどな』

わずかに木虎のプライドが刺激されたが、先ほどの問答を思い出しても、事実だ。――と客観的に感じ取っていた。

口が上手いというか何と言うか。

正しいことを言ってるわけではないのに、なぜかこちらの心をついてくる。

『なのに比企谷先輩はここまでした。多分……俺たちが思ってる以上に、木虎の事を大事にしてくれたんだと思います』

『……えーつとつまり？』

『ですから本来有り得ないんですよ、比企谷先輩がこんなことをするのなんて』

『でも実際……』

『そうですね。きつと比企谷先輩はほつとけないんですよ、木虎みたいな危なっかしい子は』

木虎は運がよかったと言えるだろう。

八幡は基本的に年下に甘い。それは自身に妹がいるというのもそうだが、年下の……それも女の子の苦痛の表情は一番嫌いなのだ。

あの頃。

泣いていた妹の顔を思い出すから。

比企谷八幡は無意識故にそのことには気づかない。

『恐らく比企谷は最低限の解消ではなく、最大限の解消の手を打っています。何を話しているか、何をしているかわわかりませんが、俺らが話すよりはマシなはずです』

『……………』

八幡は始める前に綾辻に言った。

適材適所だと。

それをこの二人は分かっていたということだ。

『木虎は真面目だからな。どうしても自分の嫌なところダメなところを見る癖があるだろ？ それだけなら別にかまわない。けど俺らはそんなことを隊を抜ける理由にしてほしくないんだ』

『そうですね。俺たちは木虎に残ってほしい。でも、木虎にはその言葉が重荷になる。だから、気づいてもらうしかないんですよ。本当につらいならそんな理由じゃなくて……………気持ちで決めてほしいってことを』

(……………ッ)

ああ、思えば八幡は最初からそれをしていた。

木虎を怒らせるようなことを言っても、何が抜ける理由なのかを念入りに探っていた。その上で、『木虎藍』がどうしたのかを聞いてきた。

『じゃあ、その上で藍ちゃんか嵐山隊を抜けたと言ってきたら……』
綾辻は少し悲しそうにそれを口にして。

『そうだな。その時は木虎がまた戻ってくることを待つしかないだろう。でも、俺は残ってくれると信じたい。俺は今のチームで上に行きたいからな』

それを聞いて、木虎は改めて自分のその馬鹿ばかりに気付いた。

弱いから抜けるなんて、自分のこれからの成長に、自信が持てないと言っているようなものではないか。一緒に強くなると思う考えすら及ばない、だから抜きたいなどと言い出した。

——なるほど。これでは確かに『弱虫』だ。

木虎は思った。

考えるべきは、——どこで強くなりたいか。それだけだと。

【やって後悔とやらずに後悔するのどちらが良い？】

そんな言葉遊びがある。

木虎がそれに対する回答を言うの言うのであれば。

——ああ馬鹿馬鹿しい。そんなの、質問から、願下げだ。

と、そう答えるだろう。

そもそも、何故後悔すること前提なのか。

「後悔はするかもしれない。けど、成功するなら嵐山隊の元で私は——したい」

心の内は決まった。嵐山たちと話し合うまでもなく、木虎は答えを得た。

それと同時に。

木虎は走った。

(まだこの辺にいるはず………つ)

隊室を出てすぐ。

木虎の予想通り、アホ毛を揺らしながら。比企谷八幡はそこにいた。

「比企谷先輩ッ!!」

木虎の声に反応するように、ビクツと肩を揺らしながら振り返るそれを見て、

「私を弟子にしてください! 比企谷先輩の下で強くなりたいです!!」

バツと。頭を下げた。

「……………」

木虎には八幡の表情が見えていない。故に何を考えているかもわからない。

もしかしたらすごく嫌そうな顔をしているかもしれない。むしろそのほうがありそ

うだと、木虎は苦笑いを浮かべている。

答えは聞くまでもなかつた。

「悪いな、弟子とかそういうのは取るつもりはないんだ。お前らと俺とじゃ『ボーダー』にいる理由が違う。今回は嵐山さんに頼まれたからたまたまだ」

——そうだろうな、と。木虎は思った。

(そんな気がしていたもの)

「師匠なら。一人良い奴がいる。烏丸つていう奴なんだが、恐らくお前の師匠には一番合つてるだろう。玉狛所属だが、ほとんど本部に顔出してるし、嵐山さんに聞いてお願ひしてみろよ」

そういう事じゃないんですよ——と不満を顔に出そうになる木虎だが、仕方がないと表情を戻す。

「だったら仕方ないですね。今日はありがとうございました」

改めてお礼を口にして。

——気にするな。と言う八幡の言葉を遮り——。

「私、嵐山隊に残ることにしました」

「………そうか」

「S級試験時の、綾辻先輩の言葉覚えてますか？」

………。

.....

「お前、本当に負けず嫌いだな」

木虎の言葉の意味を理解し。不敵に笑う木虎に露骨に嫌そうな顔を向けながら、八幡は口にする。

「負けっぱなしは絶対に許しません。その時まで黒星とつておいてくださいね。私たちが付けるので」

はあ、とため息をつきたくなる想いを何とか抑えながら。

八幡は頭をがしがしとかき。

「まあ無理だと思いが頑張れよ」

——これだけは譲れない。

『くはくと手を組んでから、これだけは譲ったことがない。』

他のすべてが仮に負けたとしても、いや、勝つとかどうでもいいままであるが……。
『くはく』としてだけは、比企谷八幡も負けるつもりはなかった。自分のためでもあいつらもためにも。

——ニヤリ、と。

珍しくも笑う八幡の顔を見て。

「比企谷先輩、ちよつと気持ち悪いです」

「ぐはっ……」

木虎の侮蔑ある言葉に、いつも通り、比企谷八幡は負けていた。

十六話<<『俺にとってお前だけが特別だ』

「お兄ちゃん朝だよ起きてっ。早くしないと小町が作ったご飯が冷めちゃうよ。愛情と小町の髪の毛が入ってるんだから絶対食べてから学校行ってよね」

その声色はなまめかしく、そして異常な言葉だった。

それは、朝が基本的に弱い八幡が思わず覚醒するには十分すぎる言葉であり、ジロリと目を向けると、そこにはエプロン姿で、何故ここまで持つてくる必要があるのか……。おたまを装備した妹——比企谷小町が新妻感あふれる恰好でその場で笑顔を向けている。

そんな妹に冷めたような目を向けて八幡は言った。

「で、いつからお前はヤンデレヒロインに転職したんだ？」

対して小町は——ニヒヒ、と笑い。

「あれ？ 小町的にはもうちよつと驚いた反応がほしかったんだけどあれー？ ヤンデレならやつぱりおたまじゃなくて包丁だった？ 流石に危ないと思って躊躇したのが失敗かー。まっお兄ちゃんを起こす目的は達成できたから良いかな。ほら起きてお兄

ちゃん、朝ご飯と愛情は本当だからっ！ あっ今の小町的にポイントたっかい〜」

「いやいや小町ちゃん？ そんなことしなくてもお兄ちゃんは普通に起こしてくれば十分だからね？ 一瞬マジかと思つてめっちゃ焦つたからな？」

ガシガシと頭を搔きながら体を起こす八幡に小町は応じるつもりがないのか、早く早くと腕を引つ張つて立たせようとすらしってくる。

「こら、引つ張るなよ」

文句を口にしつつも、八幡は妹のその行動が愛おしくて仕方がない。

目にいれても痛くないほど可愛いのではなく、仮に『痛くても目に入れる自信がある』と言つてのける八幡は、小町の腕を振りほどこうとすることなく、せかされるままにリビングへ向かつていく。

「じゃーん！ 今日朝からハンバーグなんだよお兄ちゃん！ 新学期だからねちよつと気合を入れてみたんだー」

「新学期つて言つても名前だけで他の一日と変わらねーよ。特定の日だけに意味を持たせて騒ぐとかりア充どもと同じこと俺はやりたくない」

「うわー朝からネガティブだねーお兄ちゃん。わかつてないなー人間つてのはその日その日に意味を持たせないと生きていけないんだよ。なんでもない日を特別だと思える人がきつと一番生きてるつて感じてるよ」

妹のその言葉を聞き、何かを理解したように八幡はにやりと笑い、

「なら俺は問題ないな、小町がいるだけでその日その日が輝いてる」

なぜなら、とそう続けて――。

「俺にとってお前だけが特別だ」

真剣な口調でそう告げる。

「えっ!?」 う……………うん。あ、ありがとう……………」

小町は慌てたように手を動かし。

照れた表情を浮かべ、うつむきながらお礼を口にする妹に、八幡は困惑したように首を傾げる。

（あれ？ いつも『お互いに悶絶する会話選手権』じゃなかったの？ いや、この場合

小町は照れているわけで俺の勝ち……………でも、自分の言葉についてわけじやなさそうだし……………あれ？）

仲がいい兄妹の会話遊びだったのだが、予想外の展開に八幡は自身のミスを微かに感じ取る。

「え、えーとあれだ。早く食べようぜ、うまそうだ」

誤魔化すようにご飯を口へ運ぶ八幡を見て、小町も苦笑しながら――そうだね。と食事を開始する。

それ以来八幡へ声をかける難易度が周りの中で下がり、顔を見せればノーマルトリガーをいいことに勝負を申し込む者が増えたのだ。

木虎の事は何とか烏丸に押し付けることに成功した八幡だったが、一度押し寄せた波は収まることを知らず、『くっく』同様に引きこもる始末。

それらの事を小町に話し終えると、

「す、すごいよお兄ちゃん!! 小町お兄ちゃんの妹で良かった!! 最高に自慢できるお兄ちゃんだよ!!!」

目を輝かせながら、嬉しそうに口にする。

小町は八幡と違い『ポーター』を周り同様にヒーローと認識してるようで、その中で兄が有名人だというのだから猶更だ。

「そ、そうか……?」

八幡は一瞬ポカンとしたように口を開け。必死で笑みを耐えるその表情は、思わぬところで妹への評価が上がりまんざらでもない。

「ああもうっ、これでたまに出るお兄ちゃんの気持ち悪いのさえなければ完璧なのにくっ!!」

「え……」

小町は兄の事が大好きである。しかし、八幡とは違い友人も多い彼女からすれば、や

はり兄のそれは恥ずかしいと思うらしい。

毒を吐いたことに自覚がないのか、さりげなく心を傷つけられた八幡は悲しく瞳を涙で濡らし、それでも――。

(そうだな。お前のためなら俺は……)

軽い笑みを浮かべながら、八幡は妹の作ったハンバーグへ口に運び、現状の平和をかみしめる。

基本的に、比企谷八幡は自己完結を起こす人間だ。

周りの意見を取り入れずに自身の独りよがりというよりは、聞いた上で自分が決めるから、といった生き方をしている人間である。

故にその他大勢とはずれた考えの持ち主であり、その自覚がありつつそれが別段正しいと思ってもいないという独特の価値観の持ち主でもある。

普通なら躊躇するような行動が取れたり、他人との話がかみ合わないと言ったのは彼の中ですでに「丸」か「ぼつ」が決まっているからに他ならない。この場合はどうこうすると言った、その時その時で考えを起こすということがほとんどないのだ。

例えば、大切なものは？ と聞かれれば八幡は迷うことなく答えられるし、好きなものは？ 嫌いなものは？ と言ったある種のプロフィール的なものであれば考える素

振りもなく答えることがでいるだろう。

就活の履歴書作成において最高に使える特技ともとれる才能ではあるが、将来の夢は専業主夫と豪語したり、そもそも一種の社会不適合者の様な考えがその有用性を排除して余りある。

さて、そんな比企谷八幡だからこそ、少しでも彼の事を知っていれば彼の思考は読みやすいどころの話ではない。たいていの事ならば無限の「丸・ばつ」で物事が簡潔するような人間なのだ。

そう、例えば――。

比企谷八幡にとって一番は？ と問われれば・・・。

すべての人間が迷うことなくこう答える。

比企谷小町。妹大好きな残念なお兄ちゃん、それが比企谷八幡だと。



新学期。始業式当日。登校中。

比企谷八幡は白い雪を見た。

もちろんこれは比喻であり、春の風が気持ちいいこの季節に雪が降るわけがない。

だが、思わずそう表現したくなるほどのものに出会ったのだ。

その肌は白く、決して健康的と言えるものでなかった。しかし、逆にそれが彼女の儚さを際立たせている。

どこか手を指し伸ばしたくなるような、けれども触れれば消えそうな存在。

淡い髪色に、薄い光を宿す瞳。

声をかけられただけで恋に落ちそうなそんな少女が、苦しそうに胸に手を当て、道の端でしやがみこんでいる。

そんな少女をみて比企谷八幡は彼女を特に意識することなく、さも当然のように――

その横を通りすぎた。

（ふっ、危なかった。過去の俺なら煩惱にあふれて声をかけ、『えっ大丈夫なので話しかけないでください』ぐらいの事を言われてそのまま家へリターンするところだったぜ）
八幡は中学時代のトラウマを軽く思い出しながらも、過去と同じ轍を踏まなかったことへファンファーレを鳴らしていた。

（最悪自分で救急車ぐらい呼べるだろ……見るからに病弱そうだし、薬か何かを持っている可能性も高い。肌の色から外出も少なそうだ。ああいうのは異性に対して恐怖心を覚えているのも少なくないしな）

自分に言い訳するように、しかしながら理論的に間違っていないことを考える。

そもそも登校時間までギリギリだ。ボツチである八幡は、授業に出ないというのは通常より大きなハンディキャップを背負う羽目になる。

背を丸めるようにしてしゃがみこんでいる彼女を背に、八幡は足を進める。

少し早足になってしまふのは自身の罪悪感からか……。

……。

……。

しかし、その足はだんだんとペースを落としたり。そして緩やかにあしを止める。

「はあ……、声をかける程度はまでなら常識だよな」

その足は逆を向き、来た道に戻るように足を進める。

八幡は再び足を止めると、下を向く彼女の前に立ち、

「あの、だ、大丈夫で、ででちゅ、か？」

盛大にやらかした。

その女の子は声に反応しながら、何か言いたそうに八幡を見上げる。

結果的に目が合った八幡は、自身も同様に顔を上げ、彼女とは違い空を見上げるよう

に天を仰ぐ。

「……ふっ」

八幡は自身で笑いをこらえられず、自嘲気味に声をもらす。

(あー！ツ!!! 死にたい死にたいしにたい!! 恥ずかしいよぅえーん)

嘔みまくりだった。恥ずかしい。お家に帰りたい。

もはや羞恥しかないこの状態で八幡は静かに目の前の女の子の言葉を待つ。

(お願いします。もう何でもいいからこの状態を終わらせてください!! 早くこの場から退避させてください!!)

自身から話しかけといて、自分の失態で逃げかえるのは流石にみじめすぎると、彼女からの一言『大丈夫ですから』を真摯に待ち続ける。

「ふ、ふふふふふふ」

まず初めに、彼女は笑った。

まともな思考回路が働かない八幡は、口を手で押さえて肩を震わせる彼女へ、もはや無に近い状態で顔を向ける。

「いえ、あの、ごめんなさい。なんかこの間の試験でのイメージと違いすぎたからつい、ね」

目じりに浮かぶ涙をぬぐいながら、彼女は八幡を再度見上げる。

そこでやっと思考が戻ったのか、八幡は今の言葉の疑問を口にする。

「——? 試験? イメージ……? ——っ! もしかしてお前……」

その言葉に、彼女は「正解」と言うように、軽く笑顔をみせて。

「初めまして比企谷八幡君。那須玲って言います。私も『ボーダー』なの。桐絵ちゃんから聞いてはいたけど確かに面白い人ね」

思い出したようにまたしてもクスクスと笑う彼女——那須を見て、八幡はある主人公同様に思わず口にした。

「ふ、『不幸だー』」

「む、流石にその物言いはひどいと思うわよ。私を助けにきてくれるんでしょ？　まず立たせてくれると助かるかな」

八幡の言葉に顔を軽く歪ませながらも、しかし手を伸ばす那須に八幡はそれ以上に顔を歪ませる。

嫌がらせだろう。恐らく小南から、八幡の『面白い』話でも聞いていたのだろう。あからさまに悪意を感じる。

何を間違ったのかと言えば、何も間違っていないのだが、八幡は現状をあきらめた。「わかったよ。すぐそこに公園がある。そこまで歩けるか？」

手をとって立ち上がりさせる八幡へ、

「ありがとう」

比喩ではなく本当に消えそうな笑みを浮かべる那須をみて、八幡は彼女の容態を少し

重く受け止める。

「苦しくなったら言えよ、救急車呼ぶから。無理だと思ったら迷わずトリガーを使え……てかお前なんで何もせずうずくまってたんだよ。携帯ぐらい持ってたろ」

先ほどまでは笑っていたが、立つだけで辛そうな今の状態を見て、那須に自身の対応を責めるように言う。

「……たの」

「ん？」

「携帯……忘れちゃったの」

先ほどの仕返しで笑ってやろうかと思たが、那須の頬が赤く染まったのを見ては笑うに笑えない。

仮に、だが。もしこれが羞恥ではなく、熱であればなおの事。

(いや、マジで笑えねーな)

『ボーダー』の愚痴を話した後のフラグ回収の様な出来事に八幡は自身の運命を呪った。

ああ本当に——笑えない。



『青春は嘘であり、悪である』

そんな冒頭から始まり、その文章は『リア充爆発しろ』の文字で締めくくられていた。それが書かれたレポートを机に置き、その人物は目の前の少年に問いかける。

「なあ比企谷、私が出した課題は何だったか説明が必要かな？」

「いえ、タイトルにもある通り『高校生を振り返って』と言うテーマだったと記憶していません」

淡々とした会話ではあるが、八幡は額の汗を隠せない。

今の会話は会社の面接の最初に『道には迷わなかったかね?』と言った緊張を和らげる緩和剤みたいな会話だからだ。

つまりここからが本番。

目の前にいる教師——平塚静は溜息をつきながら八幡を睨む。

「ああ、その通りだ。良かったよ。国語の教師ともあろうものが生徒に課題の意図すら伝えられなかったのかと冷や汗ものですね。ハッハッハッ」

「そ、そんなわけないじゃないですか。は、はははは……」

まるでアメリカンの様なやり取りの後、——では、と言葉を紡ぎ。

「ではなぜ君はこんな犯行声明を書き上げているんだ？ ああん小僧」
「びいい……っ！」

トーンを下げた平塚のドスの聞いた声に八幡はおびえたように声を上げた。

だが、流石にそれは予想していなかったのか、平塚静は苦い表情を浮かべて、「いや、そこまで怯えられるとそれはそれで悲しくなるのだが……まああれだ、呼び出した理由は君なら分かるだろう？ なぜこんなものを提出したのかね？」

『君なら』と言う言い回しからも予測がつくように八幡の成績は優秀なのだ。流石に学年一位などと言うほどではないほどの、学年上位成績者に名前を連ねる程度には教師の中では有名だ。生徒には——いや、今は良いだろう。

お金をかけられないという生活のため、塾などに通えないことは八幡は理解している。妹の事もある。学業などと言った必ず金銭が絡む事柄への取り組みをおろそかにしたことはない。

「あ、あのですね、出だしのインパクトを求めた結果と言いますか何と言いますか……。いえね、今朝少し精神が疲れる出来事がありました、ストレス発散を思わずしてしまつたと言いますか……」

「別におびえなくていい、勘違いしてもらつては困るが私は別に怒っているわけではないのだよ。正直言えばただ君と話しをできる体のいい言い訳がほしかっただけなん

だ。……まあレポートは書き直してもらおうがね」

毒気を抜かれたように椅子にもたれかかる教師を見て、八幡は少し困惑の色を出しながらも安堵の表情を浮かべている。

「こ、怖かったよー。もう何なの今日？ 朝には『ボーダー』関係者に大恥さらすし、きちんと学校に遅刻したし、放課後には……いや、これは自己責任か？」

今朝の事、と言えば那須玲の事なのだが、それに関しては彼女を学校まで送って行った。

薬を飲めば落ち着くということで、水を買ってきたり落ち着くまで側にいたりとも心休まることがなかったが八幡的には特に語ることもない。

それよりも今はこの状況だ。

（教えたがり、か。教師としての別に間違つてはないと思っただけだな）

八幡は平塚静の事を知ってる。それはもちろんこの学校に通っていて授業もうけていれば当たり前なのだが、それ以上に――。

「それであのー。帰つてもいいですか？ レポートは明日までにやってきますから」「駄目だな。言っただろう、私は君と話してみたいのだよ」

（知ってるよ。あんたはそういう教師だから……クソー、捕まらないようにしてきた苦労がッ）

平塚静は良い教師なのだ。積極的に問題児に声をかけ、生徒と話す時間も十分に確保する。

八幡が周りから見ただけでも目立つのだ。

最近では珍しい教育者とも言えるだろう。

普通なら毛嫌いされそうなのだが、生徒の評判も悪くない。理想の教育者の一人だ。しかし――。

（俺はあまり関わりたくなかったんだけどな）

「さて、比企谷。学校は楽しいかね？」

「ぼちぼちですかね」

実は八幡は「ボツチ」と「ぼちぼち」かけてみたのだがこれに気付く様子はない。

「ふむ、君は『ボーダー』に所属しているのだったかな？ それに目に留まることと言えば妹との二人暮らし。比企谷、私は少し心配なのだよ。君の事が」

「.....」

「私の知る範囲なので失礼かもしれないが、学生同士で会話するところを見たところがない。今回こそなめた作文を持っては来たが、それ以外は実に優秀な生徒だ。余計なお節介と自覚はあるが、私は君を気にかけているのだよ」

隠す気すらないのだろう。『私は君を気にかけている』その言葉通り、平塚静は気にし

ている。

平塚から見た比企谷八幡は異常なのだ。

それは気持ち悪いとかどうのではなく、『一人ぼっち』を実現していることが異常なのだ。

この一年、誰かに話しかけられたことがゼロに等しいほどにない。

そんな境遇にいながらいいじめなどの問題行動が存在しない。

そして、それを良しとしていてそれに満足すらしている。

嫌でも目に付く。

まるで誰かに認識されたら負けだというような無謀なゲームを一人でしているようなのだ。気にならないわけがない。

そこまで相手の気持ちを八幡は理解した。その上で――。

「あの、何か問題ありますか？ 確かに学校には話し相手はいませんがそれ以外なら少ないです。それに妹との二人暮らしにはもう慣れました。心配していただくなくても大丈夫ですよ？」

とぼけたように口にする。

友人ではなく話し相手と言うところが八幡らしい。

「自覚がありながら問題ないというのかね君は……」

「えーつと？ 何の話で？」

「いや、いいんだ。今のは独り言だ」

（はあ、よく見てるんだよなこの人は。さて、どうやってかわすか）

何を二人は言っているのだ、と言う感じなのだが、その理由はすぐに明白になる。

そう、彼女の次の一言によって――。

「そう言えば、きみは部活動には参加していなかったな」

（そ、そうきたかー!!）

八幡は平塚静の予想外の言葉に、焦りの色を隠せない。

「え、ええまあ」

「どうだろう。私が顧問している部活動に入ってみないかね？」

八幡は自分がちよつとした問題児であることを自覚している。

生徒想いの平塚静なら自分に声をかけてくる可能性があることもなんとなくわかって

ていた。

自身の問題点が常時一人にいるということもわかつている。

八幡自身そこまで問題視していないし、むしろウェルカムなのだが、教員としてはいだけないらしい。

「は？ いや、え？ 部活？ 嫌なだけで……」

口調が崩れた。

これはペースを相手に持つていかれた証拠だ。

学校では目立ちたくない比企谷八幡。

それをできれば解消してあげたい平塚静。

お互いに不一致の思惑が激突した瞬間だった。

だからこそ、八幡は捕まらないように問題行動を起こさなかつたというのに……。

「そう言うな。とりあえず見てみるだけでもいいだろう」

「いや、あのーですから——」

「何かね？ ふざけたレポートを書いた比企谷八幡君？」

「……」

（この教師つ、空みたいなの追い詰め方しやがるッ）

平塚静はこう言っているのだ。『レポートの罰としてでも言つて言い訳を用意して

あげようか』——と。

——さて行こう。

と腰を上げる教師を見ながら、八幡は今朝の妹のやりとりを思い出したかのような溜

息をついた。

なるほど。確かに今日と言う日は八幡にとって特別だったらしい。

本当に。

——なんて日だ!!

十七話〉『改めて比企谷八幡だ。』

「で、誰なんですか？ ヌボーツとした人は」

開口一番がそれだった。

平塚静に、彼女が顧問をする部活に連れられて来た八幡は、教室にいた一人の美少女にそう言われた。

とりあえず突っ込むべきかと判断した八幡だが、何かを発する前にその対象を変えるほかなかった。

「ああ、彼は比企谷八幡。新しい入部希望者だよ」

「ちげえだろ馬鹿野郎」

思わず悪態どころか教師に対してはアウトな発言をとってしまった。

しかも、正確には言わされてしまった。

「ふむ、君はもう少し賢いと思っていたのだがやはり対人経験が不足気味だな。それとも自分の首を自ら絞めるのが好きなマゾなのかね？」

（とんだだけこの人俺を部活に入れたいんだよ！）

学校とは、『口が悪い』『態度が悪い』で生徒を何かと強制的に言うことを聞かせられる理不尽な社会だ——という建前を振り回してくる平塚静に八幡は思わず心の中でツッコんだ。

「言ってる意味がわかりませんよ先生。そして雪ノ下、喧嘩売ってんなら買うぞ？ それと入部希望者じゃなく見学だ」

八幡は楽しそうに心理戦をするバトルジャンキーな平塚静を適当に流しつつ、いきなり失礼極まりないことを言つてのけた学校の有名人へ言葉を返す。

「あら、なぜあなたは私の名前を知っているのかしら？ 返答によつては入部と見学間わず別の場所へ行くことをお勧めするのだけれど」

「よし分かった、俺が悪かった。だからスマホをしまえ。ストーリーカードじゃないからかな？ てかお前自分が有名人だつて自覚がねーのかよ」

依然怪しげな目を向けてくる美少女——雪ノ下雪乃。

女の武器を迷わず使おうとするその少女へ、八幡は開始数秒で負けを認めた。

その一連の流れを見た平塚は軽く苦笑し、未だ警戒を解かない雪ノ下へと声をかける。

「そう無碍にしないでくれたまえ。見ての通りこいつは女を襲えるほど根性は持つてないよ雪ノ下。それに比企谷は私の推薦だ。よければ数日見てくれないか」

「……………平塚先生がおつしやるのであれば信用しますが、その下卑た視線を向けられるのに数日も耐える自信は私にはありません。未熟な私を許してください」

「いや、君ならば問題ない。耐えてくれ」

確か、口車にのせられないと気合を入れたのだ。茶番なのは確かだ。

そう易々と同じ手に――

「オイコラ。黙って聞いてれば言いたい放題。そろそろ切れるぞこの野郎」

まだ数十秒。八幡は同じミスを繰り返した。

ハツとした表情を浮かべる八幡に対し、平塚静は勝ち誇った表情を前面に浮かべてた。

それはとてつもなくいい笑顔だった。

……………

……………

「それで、ここは何部なんだよ」

――あとは任せた。

と教室を後にした平塚静によって、八幡は逃げるタイミングを失ってしまった。

流石にここでバックレるわけにはいかないだろう。もとはと言えば、自分で蒔いた種である。

それに、今後のためにも罰は受けましたと言う免罪符が必要だ。

「呆れたわね。あなた、知らない部活の見学に来たの？」

「知らない部活だからこそ見学に来ると思うんだが……？ それはそれとして半ば強制だったからな、展開についていけないだよ」

「……そう。ならゲームをしましょう。ここが何部か当ててみなさい」

悪い奴ではなさそうだった。口が悪いのは見た通りなのだが、ちゃんと相手を見ていつてる。

八幡はむしろ相手を見極めるためにあえて、と言う感じがぬぐえない。

考えすぎかもしれないが、『くっはく』を普段相手に行っているとこういつた考えが抜けなくなるのだ。

まあ、それはなしにしてもゲームと言われれば燃えてしまうのは完全にあいつらの影響を受けているなと八幡は軽く笑う。

「質問はありますか？」

「そうね。一回までなら認めるわ」

——そうか、と一言呟き、八幡はあたりを見回す。

教室自体に変わりはない。どこにでもある空き教室と言った感じだった。

雪ノ下は先ほどから文庫本を片手に読書しているが、それ以外に特筆すべきものがな

い。

(なるほどな……分かん。なら——)

「わかつた決めたぞ。ここは相談部か？」

「……その心は？」

「教室にはめぼしいものがない。だが、お前は恐らくこの状況からでも推測できるモノでなければゲームにしないだろう。であるなら、相談部、文芸部など特に物を必要としない部活ってわけだ。……それで質問の答えは？」

「及第点つてどこかしらね？ 答えは奉仕部よ」

雪ノ下は勝ち誇るように口にする。

そこまで聞いて——ニヤリ、と八幡は笑みを浮かべた。

ちよろすぎる。後二、三手考えていたのにすべて破棄するしかないらしい。

そしてここまでくれば当然——

「ありがた教えてくれて。ゲームの回答を言おう、ここは奉仕部だ」

ゲームの答えを口にする。

八幡の言葉に、雪ノ下は意味が分からないという風に首を傾げる。

「何を言っているのかしら？ あなたはすでに答えを言ったわ。それとも何かしら、何回でも答えを言っているのかしら？ 仮にそうだとしてもすでに私が言ったあ

とでは無効なのは当然でしょ？」

八幡はそれを聞いて——よくしゃべるな、と感想が浮かんだ。

負けず嫌いの典型だ。しかも頭が良いとは手に負えない。まあ、だからこそプライドを刺激すればそこでおわる。

「意味が分からないのはこっちのセリフだ」

八幡はやれやれと言った風に腕を振りながら。

「俺はまだ『一回の質問権』しか使ってないぞ？」

「………だから、さっきから何、を………ツ!？」

そこまで言って雪ノ下は気づいた。

「だからな、俺はまだ質問しかしていないだろ？ ゲームって言ったのはお前だ雪ノ下。ならば仮にお前が何を口にしても俺が答えを言うまでは、ゲームの終了条件は満たされな

い………だろ？」

「——ッ、そんな口八丁が通じるとでも？」

「逆に聞くぞ？ 言い訳は本当にそれでいいのか？」

「………っ!!」

雪ノ下は黙るしかない。なぜなら八幡は口になっているのだ『質問の答えは?』と。雪ノ下が聞き逃す可能性のある語尾に………。だがそれでいい。

今回のキモはそれを雪ノ下にそれと認めさせる事。

そうすれば雪ノ下の中に広がるのは言わされたと言う事だけ。

つまりそれはこれ以上雪ノ下が喋ると自身の失態を認めると同義。プライドが高いほどドツボに嵌る嫌がらせ。

だからこそ、八幡は勝ち誇ったように雪ノ下へと顔を向け。

「改めて比企谷八幡だ。数日だが一応言っておくか。よろしくな」
先ほどまでの意趣返しを完了させた。



「てなことがあったんだよ」

「なるほど、愉快的学校だな。どんな不思議ファンタジー学校だよ。てかその教師面白いな。ハチの思考を潰してくるなんてなかなかできないだろ。——あ、ハチ白のフォローよろ、5秒でいい」

二人の声の傍ら。

カチカチ、カチカチ、と。光るデスクトップの前でマウスを動かす音が耳に残る。

「……………ハチ兄の……………学校、楽しそう……………」

「それは勘違いだぞ白。俺は休み時間と言う地獄をいかに乗り越えるか一喜一憂してるからな。——おっと、スキル溜まったぞ、使うタイミングの指示は任せる」

「にしても奉仕部か……入部するののか？」

「入りたいか入りたくないかで言えばもちろん後者だが、平塚先生がなんで俺をあの場合に連れて行つたのかも気になってんだよ」

「確かにな——今そいつにスキル使えば倒しきれるぞ」

純粹な疑問だった。

平塚静が声をかけた生徒は他にもいることを八幡は知っている。しかしそれだとおかしい。

あの教室——奉仕部にいたのが雪ノ下雪乃だけと言うのには違和感しか覚えない。

(もちろん、声をかけたが入部しなかった、と言う可能性もあるかもだけけどどな……)

雪ノ下と言う存在と平塚静の性格を考慮すればその答えでは納得できない。

「まあ五分五分つてところだ。あの先生がなんで俺を入れたいか予想つか無いし。恐らくうまい具合に『ボーダー』を言い訳にして活動時間を譲歩する感じでまとまると思うが——つて、え？ 相手耐えたんだが、てかおい！ 俺敵のスキルくらつて死んだぞ！？」

「妹にはちゃんと話しとけよ。お前が一番優先すべきことなんだろう？」

「……妹、大事に……しなきゃ、めっ……」

「なにいい話風にまとめてんだ？ お前ら俺を捨て駒に使ったろコラ」

目の前のPCに映る「DEATH」の文字がうかんでいる。

今日は妹が友人の家に泊まるということで、八幡はオールで空達がゲームをやるのに付き合っているのだ。

ちなみにサイドエフェクトの使用は禁止されている。理由は簡単、つまらなくなるからだそうだ。

それをなしにしても八幡はサイドエフェクトをそう易々とは使わないが。

確か、ぶっ続けで10時間はマウスを動かし続けているのだが、空と白の集中力が切れる様子はない。

そんな中。

——にしても、と空は口にして。

「ハチが知らぬ間にリア充街道を走ってるとはなー。あー捨て駒程度じゃおさまらねー」

「……ハチ兄……ずっとポツチって、言った、のに……」

「——は？　なんで俺がリア充になってんだよ」

軽く目をつむり、ソファーに横になりながら八幡は答えた。

時間はもうすぐ朝日が昇ろうとしている。

徹夜慣れはしているとはいえ、ここまで長くゲームをやれば流石に八幡もきつい。

「はっ!! 一日に何人もの美少女と知り合いやがって!! しかも妹と教師も入れて女としか喋ってねーじゃねーか!! 裏切者が!」

そんな空の叫びを聞いて、八幡は納得したように——はいはいと手を振った。

「おい白。どうやら空もお疲れらしいぞ。今の話を聞いてうらやましいとか…….
そろそろゲームも終わらせたほうが良いな、寝させてあげとけ」

八幡が納得したのは空の現状についてだった。

可哀そうに。引きこもりは美少女がいかにか危険な存在か理解していないらしい。

八幡は本気で空の事を心配していた。

こうなつてはここには白しか頼る相手はいない。

兄の暴走を止められるのはいつだって妹だけなのだ。

「ふふふ、ハチ兄…….美少女とだけ、話す…….逆説的に、白も、美少女…….」

「…….よし分かったお前らもう寝ろ? マジで何徹してんだよ。てか白はすでに完全無欠の美人さんだろ…….何を今更」

「てめえー!! ハチ! 何白に色目使つてんだクソ野郎つ!!!」

「あーもううるせー!! 早く寝ろよこのシスコンがつー!」

カップ麺の残骸を見る限り三徹は確定なのだが、一日すら待たなかった八幡からすれば化け物じみたゲーマー魂である。

絡み自体はめんどくさい以外の何物でもないのだが。

微かに聞こえるゲームのBGMが変わった。

恐らく『くはく』が勝利したのだろう。

二人は八幡の言葉を一応聞いていたのか、ゾンビのように自室のベットへ向かっていった。

あのような状態だったというのにゲームだけは確実に勝ってくるのだからさすがは都市伝説である。

「………それにしても美少女、ね」

学校での雪ノ下との会話を思い出しながら、八幡はいやいやと首を振るった。

『えーつと確か………比企笑い君と言ったわよね? あなたは私に恋慕を抱いているという認識でいいのかしら』

その言葉に八幡は目の前の少女の頭を本気で心配した。

『笑い方が気持ち悪いって揶揄ってんのか? 負けた腹いせとか見苦しいぞ。それにな

んで俺がお前に好意を抱いてる前提なんだよ』

『あらごめんさい。私どうでもいい人の名前覚えるのが苦手なの』

『謝られてる気がしねえ』

『それに、あなたみたいな人が部活の見学に来た理由がそれぐらいしか思いつかないのよ。安心して頂戴、私は自身が気量良しと言う自覚があるわ』

なにを安心すればいいのだろうか。

半分冗談半分本気と言った感じだった。

『容姿だけは認めるが、それ以外は見当違いも甚だしいわ馬鹿。言っただろうが、半ば強制だったってな。それに俺以外ならそれ自殺もんだから、心折れて泣いてるから』

『勘違いしないで、このような態度をとるのはあなただけよ』

『おれの知ってる「勘違いしないで」の使い方と違って悪意しか感じないな。で、その心は？』

『あなたの顔を見るとむしゃくしゃするの』

『なめんなクソガキ』

雪ノ下のむくれたように言った言葉に、ちよつと可愛いなと思ったのは内緒のことだ。

八幡はそれらの会話を思い出し、『美人』の定義を自分の中で再確認した。

(残念だ……)

ときに日本語とは残酷な現実をつきつけてくるのだ。

「さて、マジでどうしたもんかな」

「いったい何に對してなのか。」

八幡は夢の中か現実か、そう呟くと、静かに寢息を立て始めた。



「あら、また会ったわね比企谷君」

目の前にいたのは軽い笑みを浮かべた純白の少女。

空達との徹夜ゲームに応じた翌日。

いいや、日付はすでにまたいでいたのだから当日と言うべきか。

比企谷八幡はまたしても那須玲と遭遇していた。

「そうだな。それじゃ」

ここは流石に比企谷八幡。熟練されたボッチはその程度意に返さなくてもいうように、手を振っていた那須のそれを軽くワンターンで回避して見せた。

予想できなかったわけではない。

そもそも昨日であったのはお互い登校時だ。時間が合えば会うこともあるだろうとは思っていた。

(ふっ甘いな、ここ度重なる不運、俺の精神はこの程度では揺るがないぜ)

口をゆがめてほくそ笑むその男——病名は高二病患者だ。

あくまでクールにその場を終わらせる。

ごく一般的ならばそれで終わっていた。しかし——。

「ねえ待って」

「ぐべえっ!？」

思わず掴んでしまったのだろう。悪気はなかったはずだ。

だが、襟元を引っ張られ首が絞まった八幡には相手の感情は関係ない。

「ご、ごめんなさい! お礼を言いたくて……その……」

「わ、わがっだ。わがっだがらその手をは、ばなせ……」

その言葉に慌てて手をはなす那須と咳き込む八幡。

文句の一つでも口を開こうとした八幡の腕を那須は掴む。

咳き込んでいた八幡はそれを回避することはできず。

「ついてきて。お願いがあるの」

走り出した那須に引っ張られるようにその場を後にした。

（お礼じゃなかったんですか……てか離して？ 学校行かせて！ トリガーオンしちやうよ？ 不可視の弾丸インヴィジビレつちやうよ？）

心の中での反論が聞こえるわけもない。

理不尽の親友たる比企谷八幡はその腕を振りほどくことも、それを拒むこともできなかった。

つまるところ、八幡の二日連続遅刻が決定した瞬間だった。

……

「で、朝からなんの用だよ。偶然見かけたってわけじゃねえんだろ？ そもそもお前学校はどうした……」

そこは昨日の公園。

裏路地の近くに位置しているためか、今この場に八幡と那須以外の人物はいない。

（よくもまあ男と二人で来れるもんだな。あぶないだろ普通……）

「ごめんなさい。でもこの機を逃したらもう無理だと思つて……。昨日のお礼を言いたかつたのもほんとなのよ？ ただ、あまりにも素っ気なかつたから思わ
ず……」

「……、」

それを言われてしまうと逆になぜか申し訳なくなつてしまう。

一般的に考えればあの態度は少しただけなかったかもしれない。とは言え、八幡の対人能力はマイナスだ。しかたないのだ。

「それに学校は大丈夫。ほら私病弱だからそこらへんは臨機応変にね、電話一本で解決で問題ないのよ」

「俺の学校は問題だらけだけどな？ お前ボッチが一時間休むとどれだけ辛い思いするか知ってるか？」

「そ、そうだよね……ごめんなさい」

(ボッチの部分認めちゃったよこいつ……)

シユン、としたようにうなだれる那須を見ると、逆にこちらが謝りたくなってくる。

美人プラス病弱。このワードはほんとに汚い。

そもそも八幡のさじ加減次第なのだが、ここで断れないからこそ比企谷八幡なのだ。

「それで、お礼とかは別にいらねえよ。大した事やってないしな。ほらあれだ、あの日は一時間目から調理実習だったからな、適当にさぼる理由がほしかったんだよ。ボッチの……」

一時間目から調理実習、と言う部分だけは本当だ。

事実、学校に到着した八幡は案外那須に感謝の気持ちすら持ったほどだ。

「ふふふ、聞いてた通りね。捻ねデレさんだ」

「おい、その不名誉を広めてる馬鹿を今度教えろ。それで昨日の事をチャラだ。——消し炭にしてやる！」

思わず力の入った声に、那須は一層お腹を抱えた。

一通り笑ったのか、——それでね、と那須は言つて。

「……………弟子にしてください、お願いします」

先ほどの態度が嘘のように真面目に、真つすぐに八幡をみてそう言つた。

「……………」

昨日の事は完全に偶然だったはずだ。

つまり、昨日の今日で彼女は八幡へのアプローチを決意したのだろう。

「それにしても強引だな。今ここで言う事か？」

「そうだ。いかに同じ『ボーダー』に所属しているとは言え、頼み方としては間違つてる。」

弟子をとるとらないの前に、八幡はそのことが疑問だった。

「……………その自覚はあります。間違つてるとも思つてる。だからこれは私のわがまま。でも、私は……………『那須隊』隊長として！あの子たちのためにできることをしたいの！」

「へーお前隊長なのか……………」

「うん。でも、私たちは強くない。それに私たちは全員女子のチーム、ここまで言えば分かるでしょ?」

「親の反対……か?」

「そう。私はトリガーで体を動かせるようになった……けど他の子たちは普通に『ボーダー』に入ったの。一定の成果、実力が評価されないと……だからお願い! 私たちに手を貸してください!!」

まあ珍しくもない事だった。

『ボーダー』ではよくある問題の一つと言えるだろう。

実際C級はともかく、B級A級の男女比は広い。それはつまり、C級から出れない奴はやめていくことが多いのだ。その中でも最も多いのは親による強制。

危険な職場に、可愛い愛娘をほおっておく親などそういないということだ。

それが悪いか良いかはさておき、彼女たちはそれを心配しているのだろう。「なるほどな。事情は把握したがそれ、俺である必要ないだろ……」

八幡はそれに応えるつもりはなかった。

木虎にも言った通り、八幡は他のメンツと『ボーダー』に在籍している理由が違う。

極端なことを言えば、もし少しでも『ボーダー』での利益が八幡にとっての不利を下回った場合、即座にやめる程度には『ボーダー』に思い入れなどない。

八幡にとって『ボーダー』とは手段であつて目的ではない。『ボーダー』に入ること、いることが大半の理由の彼ら彼女らとは決定的に違うものがある。

まあそれは、『ボーダー』が自身を、町を救ったヒーローとして売っているから仕方ない事であり、別段何が正しいというわけではないが。

「……綺麗だと思つたの……」

那須はポツリとそう呟いた。

「……？」

「あの日あなたが見せた戦いが、私たちの目標になつたの……。ううん、わたしはあなたの『バイパー』に惚れたの。だから比企谷君、師匠にはあなたしかいないと思つた」

「あ……」

——あつぶねー。

思わず勘違いしそうになつた。

これだから美人は苦手なのだ。危うく中学の二の舞を踏むところだった。ただ。

「悪いが俺は攻撃手だ。他を当たってくれ……」

八幡の答えは変わらない。

話は終わりだとしても言うように、八幡はベンチから腰を浮かす。

時間的にはそれほど経っていない。まあ遅刻は確定しているから、うまく休み時間に合わせよう。

八幡の意識はすでにここにはなかった。

「だつたら!! だつたらなんであんな戦いを見せたの!?!」

その声に、八幡の足が止まった。

「桐絵ちゃんに聞いたわ。あなたの實力はあの程度ではないってこと。本気でやればもつと効率的に勝てたって!」

彼女らしくない行動だった。声を張り上げるなど、那須玲を知っている者ならまずありえないと首を振る。

「あんなにワクワクしたのは初めてだった。心踊ったのなんて久しぶりだった。目指す場所をあそこなんだって、本気で思ったの!」

病弱故に動くことができなかった。だから彼女は『ボーダー』に救われたと思っっている。動いている今を楽しんでいる。

ただ動く。それだけで満足だった彼女が、あの時——それ以上を見つけたのだ。

「比企谷君のそれ、狡いと思う……」

自分勝手なことを言ってる自覚は那須にもあった。

まるで他人の玩具を奪い取ろうとしている子供と同じ。見せつけられたらほしくもなるだろう。だが、それはあくまでこちらの感情だ。

「・・・・・・・・えっあつ・・・・・・・・その、ごめんなさい、つい・・・・・・・・」

ふと我に返った那須は慌てたように謝罪する。

・・・・・・・・。

それ以上何を言わない那須に八幡は振り返り、

「弟子をとる気は俺にはない。俺は誰かに教えられるほどの人間じゃないなんて本気で思っているからだ。——けど、その、あれだ・・・・・・・・」

いつも通り、もはや定型文の様な、形式美ともいえるそれを口にして。

「どうしても、っていう時は声をかけてくれ、手伝う程度ならできるだろうよ・・・・・・・・」

直接見ることはできないのか、そっぽを向き、八幡はそう言った。

そんな八幡の様子を見て、一瞬ポカンとした後、那須は素直に思った。

「ありがとう。でもほんとに話通りのひとね、比企谷君って」

「よし分かった。まずはそのふざけた認識から指導してやる!!」

その那須玲の笑う姿に、あるいはその可愛さにか。八幡も静かに、小さく笑顔を見せた。

十八話〈 〉『私は——君の事も心配してるのだよ』

那須との朝二度目の会合から数時間。

見事に遅刻した八幡は、それ以外はごく普通に授業を受け、すでに放課後をむかえていた。

「さて、君はどこへ行く気かね？」

教室のドアをまたいですぐ、平塚静は姿を現した。

遭遇率が高すぎる。恐らく彼女がポケモンのキャラなら、どこにでもある草原でお目にかかれる程度のレアリティだろう。

「どこって部活見学ですよ。先生が言ったんでしょうが」

もうすでに諦めました、とでも言うように八幡は答える。

言いたいことはある。が、特に反発する理由もない。

集団で何かをする部活でもなく、そこまで特殊な活動があるとも思えない。

そもそも昨日回避しきれなかった時点で、八幡はすでに自分が詰んだことを理解している。

別に教師を敵に回せば問題ない。だが八幡はそれができないのだ。要するに、対人経験不足で善意に対する対処を知らない。

もし、空がこの現状を知っていたら。

——『ハチの性格を使った良い手だな』と、称賛の拍手を平塚に、嘲笑の目を八幡へ送っていただろう。

「なんだ？　君との心理戦はなかなか楽しかったのだがな。もうあきらめてしまったか……」

少し嬉しそうに、しかしそれ以上に悲しい表情を浮かべる教師へ八幡は残念な目を向ける。

まあこういう部分が生徒から好かれる要因なのだろう。

何を隠そう八幡も嫌いになれないのだから仕方がない。

「心理戦って……厨二臭いですよ先生」

「そうかそうか!!　先生もまだ若いということだな!」

「……」

決定的に何かがかみ合っていないような気がするが、そこはあえてスルーする。

そんな中身があるのかないのか分からない会話しながら、二人は歩く。

「ところで——」

平塚静は真剣な声で問いかける。

「君から見た雪ノ下雪乃はどうかね？」

その声色を聞いて、本当に不思議な人だと八幡は思った。

この人が真剣になるとどうも周りが見えなくなる。なんて言うかそう——世界の作り方がうますぎるとでも言えればいいのか……。

要は空気の作り方がうますぎる。

「どうって口が悪いのは当然として……いえ、誤魔化す気はないですよ。そんな顔しないでください」

「……はあ、わかっているのだろう？ なぜ私が君にここまで固執するのか」

「ええまあ、ですがそこまであいつがお気に入りですか？ 特定の生徒に肩入れしすぎるのはあまりお勧めしませんけどね」

何故自分なのかと言う疑問はある。

しかし今はそんな事などどうでもいい。今言えることは、平塚静は比企谷八幡と雪ノ下雪乃を接触させたがっつてると言う事だろう。

……。

昨日の会話だ。

何かの口論の途中だったと思う。だがそれまでの流れは覚えていない。なぜならそ

の後の彼女の一言が、それを忘れさせるほど強烈だったからだ。

『それじゃ誰も救われないじゃない!!』

怒鳴るように告げた彼女の表情は、知り合つて間もない八幡が口にするのはおこがましいと思つたが、彼女らしくないと思ひ。それ以上に雪ノ下雪乃らしい言葉だとも思つた。

何か問題を抱えてる。と言うよりはこじれていると言つた印象を受けた。

繰り返すがその言葉を八幡は強烈に思つた。

強い言葉だった。笑い飛ばすことすらできないほどに。

なのに、その言葉に重みを感じなかつた。——それが本当に雪ノ下の言葉かすら分らないほどに。

だから思つた。

それが、平塚静が彼女を気にかけている理由なのだ。

.....

そんな一幕を思い出し、八幡は再び平塚静を見る。

「俺は、そこまで知つてもない人間をどうこう言うつもりはないですよ。むしろ俺は先生の見解の方が聞きたいですけどね」

「ふつ、君らしいな。だがその前に一つ勘違いを正しておこう。私は誰か一人に肩入れ

したりしないよ。確かに好みは存在するし、面倒を見たくなくなる子供と言うのは往々にして存在する。しかし忘れたか？ 昨日も言ったはずだがな……私は——君の事も心配しているのだよ」

そこで初めて八幡は表情を変えた。

目を見開いたように平塚静を見て、それを取り繕うように視線を逸らす。

「かつこいい事言いますね先生、もしかして狙って言ってます？」

「ふむ、やはり君は対人能力に難ありだな。答えを教えるのは国語教師としては控えたのだから特別だ。それは聞いてはいけない質問だぞ比企谷」

この人と喋っていると自分がまだまだ子供なのだと言確認させられる。

八幡はもし風間蒼也と会っていないければ、きつとこの先生を心底尊敬して恩義を感じていたかもしれない。そう錯覚してしまうほどに。

それほどに、平塚静の言葉は心を動かす。

気持ちが気持ちがかもっている。

(まあ昔の俺ならまずそれを疑ってたかもしれないけど……)

八幡は知ってる。気にかけてくれる。心配してくれる。それがどれだけ心が救われるのかを。

だから。

「あいつは、まだ知らないだけですよ」

八幡は言った。

その言葉に、今度は平塚静が驚きの顔をうかべ。

「あいつは言っていました。自分は可愛いから、優秀だから生きづらいのだと。人は完璧ではないからそれを変えると、人ごと——この世界をつて」

「そんなことを言っていたのか」

傍から見たら馬鹿と以外取れない言葉だが、八幡と平塚静にそれを笑いものにするような雰囲気はない。

「あいつは——まだ『本物』を知らない」

比企谷八幡は繰り返す。

『『本物』の天才つてやつを知らない。そして、それがいかに小さい人間かを知らない。でも不思議なんです。そんな奴らだけど、俺は、あいつらがいれば、つて言う考えを捨てられないんですよ』

『くはく』——。彼らは天才で、それでいて世界に押しつぶされたただの引きこもりと違って差し支えない。お互い離れることすらできない。人類史上最弱と言っていていい兄妹だ。それでも、と八幡は言っているのだ。

雪ノ下にも、まだ知らないことは多いと。

そう、かつて。

——空が白を知ってまだ世界は救いがあると思つたように。

——白が空を見て何もなかつた世界が色づいたように。

——八幡が風間蒼也と出会つて、誰かに頼ることを知つたように。

「見方が変われば世界は変わるもんですよ先生。優秀だから生きづらい？ 可愛いから虐められる？ その程度、俺はすでに乗り越えた過去です。なら、俺より何倍も優秀なあいつができないわけがない」

平塚静は八幡のそれを最後まで聞いていた。

それを聞いて、彼女は自身が誤解していたことに気付いた。

彼女は、八幡の言うその『知らない』がお互いになればと思つて二人を接触させたのだ。

つまるところ……。

(ああつまり、私は比企谷八幡をまだ過小評価していたと言う事か……)

平塚静は、雪ノ下雪乃の姉の存在を知っている。

姉——雪ノ下陽乃は雪乃以上に優秀で、それでいてそれ以上に生きづらそうにしていた。

結局。平塚静は彼女のその目を変えることはできなかった。八幡に偉そうなことを

言っておいて、もしかしたら、その贖罪のつもりで妹の方を気にかけているだけかもしれないという自覚もあった。

そしてそれは正しいのだろう。なぜなら、雪ノ下梅乃彼女の側に——。

——この生徒比企谷八幡がいたら、そんな想像すらしてしまう。

(恐らく、雪ノ下雪乃はもう問題ないだろうな)

そう確信する程度には、平塚静は八幡の事を信頼することができた。

(なら、もしもの時は君の事は私が支えよう)

そして、ここまで考えるからこそ、彼女は平塚静なのだろう。

「見つかると思うかね？」

平塚静は問いかける。

「それはあいつが見つつけようと思うかですよ」

あくまで自分は知らないことだと、突き放すように口にする。

「なるほど。やはり君は優秀だな。是非とも君をそうした人達にあつてみたいものだ」

その言葉に八幡は足を止めた。

「.....」

いいや、すでに部室の前だから止めただけだろう。

もし、平塚静が本当に八幡の周りにいる多くの人を見たのなら、それはそれで化け物

じみている。八幡は自身の思考が考えすぎだと首を振った。

「では、俺はここで」

「ああ、すっかり部活動に励んでくれたまえ」

背後を向けながら手を振るその姿に――

――かっこうつけめ。

そんな言葉を胸に秘め、八幡は部室の扉に手をかけた。



「あら、こんにちは比企谷君。もう来ないかと思ったわ……」

本から目を話すことなく告げる雪ノ下雪乃。

つい先ほどまで会話していた平塚静とのことを思い出し、少しばかり変な気持ちに駆られてしまう。

夢い。美しい。絵になる。

昨日は思わなかった事柄が、何となく頭を駆け巡る。

「早いな……来るの」

八幡はその程度の事しか口にできなかつた。

「……はあ、まずは挨拶を返しなさい。あなたはやはり常識と言うものがないよ
うね」

……。

「……コンニチハ」

本場に『美人』の前に『残念』と言う言葉がお似合いな女だ。

八幡は思わず力が入った握りこぶしを彼女に突き出したい衝動に駆られるも、今回は自分にも非があるのを認め緩める。

八幡は——ふうー、と息を吐き、適当に椅子へと腰を下ろす。

出会ってからまだ二日目。

距離が縮まってるわけもなく、それからの二人は無言だった。お互いに文庫本を広げ、ページをめくる音だけがその場に響く。

それが居心地悪いかと問われればそんなことはなかった。

恐らく二人はどこか似ているのだろう。

本を読み進めること数十分。

唐突に、——パタンと八幡は本を閉じた。

「……この部活、奉仕部だったか？ 依頼かなんかあんの？ 昨日もそうだった

「がこれなら外で奉仕活動をしたほうがましな気がするけどな」
 手持ち無沙汰になったわけではない。

ただ、自分がまだこの部活について何も知らなかったのだと思い出したのだ。

本を閉じたのも雪ノ下に対して——なんか話そうぜ、と言う意思表示でもあった。

「話しかけないでくれるかしら」

本の表紙に皺が入った。

(こ、このアマ……………)

文句の一つでも口にしようとしたその瞬間。

今度は雪ノ下がため息を吐き、

「もう少して読み終わるから、少し待っていて……………」

「……………」

その一言で、八幡は自身の熱がおさまるのを感じる。

静かに放たれた言葉が、少しやさしさのあるその言葉が、ひどく嬉しく思ってしまったのが今年入って最大の屈辱だと八幡は思った。

(あれだな。きついことを言われ続けたからちよつといい言葉をかけられると嬉しくなっちゃう……………ってチヨロインか俺は……………!!)

……………。

.....

それから。

パタン、と。

雪ノ下が本を閉じて。

「奉仕部、と言つてはいるけど。ここは地域交流をすることが目的ではないの」

脈絡もなく話し始めた。

いや、言葉だけを抜き取るなら八幡の先ほどの質問に対する回答なのだろう。だが勘違いしてはいけない。

時間を見れば、すでに三十分は経過している。

(なんかあれだわ.....一周まわってこいつ面白い奴に思えてきたな)

「——は？　じゃあここ結局何する部活なんだよ」

「昨日あなたが言った相談部。言い得て妙ね。ここは主に対人を想定したボランティア活動を主体としてるわ。そう、例えば——モテない男子に女の子との会話を体験させてあげたり.....ね」

今してる事よ、とでも言うように笑顔を向ける雪ノ下を、八幡は今日何度目かの殴りたい衝動にかられる。

「勝手にモテない男子を押し付けるのはやめてもらえますかね。.....いや事実で

すけど」

「あら、別にあなたの事を言ってるわけではなかったのに。ごめんなさい勘違いさせてしまったかしら……それとも被害妄想がご趣味なの？」

もはや謝罪とは何かと言う議論をさせたいと思う八幡だったが、そこは黙って両手を挙げた。

ギブアップだ。

これ以上は八幡の心が持ちそうになかった。

もうすでに少し涙すらこぼれかけている。

「誰かのために何かをするタイプには見えないけど……なに？ 実は博愛主義者なの？」

「違うわね。けど、優れた人間は憐れな者を救う義務がある、のだそうよ。博愛主義者……なんて言うつもりはないけれど、目指すべき場所ではあるのかしら……だつて優秀な人間が辛い思いをするなんて、そんなの間違つているもの……ああ、この話は昨日もしたかしらね」

少し傍げにうつむく視線は、落ち込んでいるというよりは、決意の表れとも取れた。

『君から見た雪ノ下雪乃はどうかね？』

結局聞くことができなかつたが、平塚静は彼女をどう思っているのだろうか。

「なあ、その優秀な人間つてのは自分の事か？」

何気なく聞いた八幡の言葉に、雪ノ下はすぐに答えることができなかつた。

もし仮にこの場に平塚静がいれば、——それは聞いてはいけない質問だ、と指導を受けるかもしれない。

「そんなの……. わからないわ」

少しの間をあげ、彼女は答えた。——否、正確には『答え』てはいないのだが。

「そうか」

だが、それを追求することを八幡はしなかつた。

する必要がないと思つた。

なぜなら彼女のその言葉は——すべて。

「何か言いたいなら言いなさい。勝手に納得されるのつて私すごく不快なの」

「——ん？ 別にそんな気はないが」

「どうせ馬鹿な事言つてると思つているのでしょ？ ……私だつて、わかつてい

るわよ……. そんな事…….」

（先ほどまでの強気な姿勢はどこへやら……. やっぱあの質問はNGだつたつてことですかね平塚先生）

——仕方ないか。

「そう言えば、誰かを救う部活だつて言つてたな。それつて具体的にはどんな感じで解決するんだ？」

先にミスをしたのは八幡だ。ならば、それを回収するのも八幡でなくてはならない。

——この質問が分岐点。

「——？ え、ええ。そうね、その時その時で違うと思うでしょうけど、根本の解決を目指すべきだと思つてはいるわ」

「根本？」

「そうよ。飢えている人間に魚を与えるのではなく、魚の取り方を教えてあげるの。奉仕部の理念でもあるわね」

——ここだな。

「なるほど。考えは分かるが……」

そこで、八幡は今日初めて、

「——お前がそれをできるとは思わないな」

雪ノ下雪乃の顔を見た。

「なんですつて」

その声には明らかな怒気をはらんでいた。

「根本の解決、と言つたものの、お前にはそれが見えてないだろ」

「どういふ意味かしらッ」

睨み殺しそうな雪ノ下の視線を受けても、それにたいする怯えは見えない。

「飢えてる人間に魚の取り方を教える。なるほど確かにそれは正しい。けど、きつと雪ノ下雪乃はその先を考えない。考えられない。——なぜその人物が飢えているのかを考えることができない」

「………っ！」

「お前は自分が優秀な人間だと自覚している。だからこそ、他人の問題を解決できても、何故その問題に突き当たったのかが分からない」

八幡は、睨む彼女の目をそらさない。

「別に誰かを救うのが馬鹿げているとか、世界云々を阿保らしいとか言うつもりはないけどな。………まあ、なんて言うか、お前の言葉は——」

——軽すぎる。

その一言で、雪ノ下雪乃はキレた。

「あなたに!! あなたなんかは………!! 私の気持ちは………分からないっ」
「………」

睨みつける目つきだった。しかし、八幡にはそれが泣きそうにすら見えた。

だから怯む必要すらない。

「なあ雪ノ下。一つ聞くけど、お前、なんのために努力してんだ？」
「……急に何を」

「いやな、昨日からお前、曖昧な答えしか返さないからさ。結局何がしたいのか俺にはわからねえんだよ」

そう。比企谷八幡はまだ数えるほどしか彼女の言葉を聞いてない。

先ほどの言葉、『優れた人間は憐れな者を救う義務がある、のだそうよ』
つまりこれすら他人の言葉。

「答えられないか？」

「……」

答えられない。雪ノ下雪乃はそれを答えるすべを持っていない。

雪ノ下は努力型の人間だ。それはとても素晴らしいことで、きつと誰もがまねできることではない。

けれど——。雪ノ下は……雪ノ下雪乃には、『努力している理由』を持っていない。

それだけなら別にかまわない。そんな物、いつか見つければいいのだし、時間が経てば勝手に見つかるかもしれないからだ。

しかし、その努力の正当性を他人に説くというのならば話は別だ。

飢えている人間は、きつと魚の取り方より魚がほしい。でも、雪ノ下が言う通りそれだけではだめなのだ。それでも雪ノ下にはそれが何故必要な行為なのかを説明できない。

簡単な話だ、雪ノ下は魚の取り方を得た理由が希薄ということだ。

夢がないとでも言えいいのか。

要は『言ってることは分かるが納得できない』と言う奴だ。

あれもできるこれもできる。

確かにすごい。完璧な少女と言つて差し支えないだろう。

だが、彼女はそこ止まりだ。彼女は譲れない何かを持つていない。

故に、雪ノ下雪乃の言葉は軽いのだ。他人の言葉を借りるのだ。

でもそれは、雪ノ下が自分で探すしかなくて、今言つても仕方がない事なのだろう。

——だから。

「なら、その答えを、いつか教えてくれよ」

静かに告げられたそれを、雪ノ下は聞き逃すことはなかった。

「……………あなたは、それを持つているの……………」

消え入りそうな声だった。

「さあな」

八幡は答えない。

「けど、自分が何をしたい人間なのかは知ってるつもりだ。それがないうときつと俺は迷ってばかりだ」

「迷う……何を……したいか……」

「何かしらあるもんなんじゃねーの。普通なら。ほら、プリキュアになりたいとか仮面ライダーになりたいとか、世界征服したいだとか……あつ特に最後のなんかお前つぼくてよくないか？」

「今度私の事をどう思っているかじっくり話し合う必要がありそうね」

「すみません。俺が悪かったです」

先ほどよりも強い雪ノ下の視線に、八幡は即座に折れた。

「けどそうね……もし、それを見つけたら……いいえ、きつとあなたには話さないわね」

最低限の意趣返しのももりか、雪ノ下はそっぽを向きながらそう口にする。

「そうかよ……」

それ以来。再び二人に会話はなかった。

いつも通り時計の針は進み。

部活動の時間は終わる。

お互いに会話なく、先に準備が整った八幡が教室を後にする。その瞬間——。

「ま、『また』あした……」

八幡は、その言葉を背中で聞いて、

「ああ、また明日な」

振り返らず、雪ノ下の顔を見ることがなく、教室の扉を閉じた。

きつと、お互いにその顔は、見せるべきではなかっただろうから。

十九話〈 〉『——起きて、『 』（くうはく）』

『ボーダー』に来るのが、ひどく久方ぶりの気がした。

いや、『ボーダー』自体にはよく来ていたのだ。

ただ春休みが終わり、学校が始まったこともあつてか、隊員としてきたのが久しぶりだっただけの事かもしれない。

最近『ボーダー』に来て『くうはく』とゲームをするだけ。仕事すらほとんどしていなかった。

思えば防衛任務に就くこともなかった気がする。

——と、八幡はだらだらと意味のない思考に浸る。

防衛任務とは、時間シフトである区域に侵入してきた近界民ネイバーを狩るという。もはや説明するまでもない、『ボーダー』の一般的な仕事である。

「まっ、大半はぼーっとしてるだけなんだけどな」

そして。

現在、八幡はその任務についていた。

最低でも二チーム以上で臨む行為だが、八幡の周りには近界民ネイバーどころか人の影すらない。

当然だ。なぜならそれは2チームではカバーしきれない区域を手分けして防衛するため。固まって防衛につくなど、B級上がりたての育成ぐらいしかない。

自称ボッチ比企谷八幡。嘘から出た誠とでも言うべきか有言実行と捉えるべきか。彼は世界からボッチと認められたのかもしれない。

『へいへいハチ？ 次はお前の番だぞ。早く数字言えよ』

「ああ悪い。じゃあ7654390」

『あー3Eat、4Bite。——まっ意味ないけどな、それ。．．．．．じゃあ答えと行こうか!! 0347821!』

「はあー7Eatだよクソ野郎。てか強すぎない？ まだおれ全然わかんないんだけど．．．．．」

『．．．．．ハチ兄．．．．．弱すぎる．．．．．』

「てめえ空、白を使うのはチートじゃないですかね？」

音声の向こうでケラケラと笑う『くっはく』の強さに呆れながら、静かにため息を吐いた。

今彼らがやっていたのはNumberonと言う思考ゲーム。

各自に0～9の数字を使った番号を言っていき、お互いが指定した番号を当てると

いったシンプルなゲームである。本来は三桁で行うものだが、二人が行っていたのは七桁。本来あるアイテムを禁止したとは言え、頭の中だけで数字データをやり取りするその様は流石と言ったところだろうか。

「てかこの手のゲームで白に勝てるわけなくね？　なんで13手で答えわかんたよ……」

『三十六万二千八百八十通り——けど七桁と言う性質と最初のハチの聞いてきた……つまりお前が選ばないと思ってる数字を加味して、絶対に考えない並び合わせを算出。あとは簡単な消去法だな』

「……」

——気持ち悪っ！　と声を挙げなかったことに八幡は自身を称賛した。

（いや意味わかんねーよ。説明端折りすぎじゃね？　そこまでに至る膨大な計算式がまるでわかんねーわ）

時に。再度確認するが、今は八幡は防衛任務中である。

間違つても楽しくゲームに興じる時間ではない。

もしこれで市街地にトリオン兵を逃がそうものなら、本部に及び風間にぶつ飛ばされることは決定事項なのだが、それが無いから質が悪い。

突如、ヴー、つと『ボーター』基地周辺に響く警報が流れた。

『^{ゲート}門発生。門^{ゲート}発生。座標誘導誤差1・23。近隣住民は避難してください』

無機質に流れるその音声を聞いても、八幡は動かない。

ぶっちゃけこの警告は意味をなしていない。住民に座標誘導を何タラ言われても分かるわけがないのだ。

これは言い訳文。『ボーダー』はちゃんと活動していますよ、とどういう意思表示だ。とは言え、隊員にとってはいい目印になるだろう。

まあそれでも——

『^{くうはく}……計算、終わった……』

『^{くうはく}には関係ない。』

「……アクセスするぞ」

『……おっけー……』

八幡は自身の背後に目を向け、何も無い空間へ《イーグレット》を構える。時に、覚えているだろうか。

以前、『^{くうはく}』が行っていた仕事として挙げた一つに、近^{ネイバーフッド}界を求めるといふものがあつたという事を。今更だが、それには続きがあつたのだ。

だが特別変わったことはない。ある意味ただの再確認だ。

——ああ、結局のところ。

『くはく』にとつて、『ボーダー』とはどこまで言つてもゲームでしかないのだな、と。八幡は引き金を引いた。

何も無いその空間へと。何も無いとは言え、それは特筆するべきものがないというだけで、全く何も無いと言う意味ではない。

そこは住宅街があつて、空が見える。いたつて普通の景色。

だが、八幡が引き金を引いたとほぼ同時。ほんの……コンマ程度遅く、そこに黒い穴が開いた。

『ゲート』。トリオン兵が送られてくるその場所へ、八幡が放つた弾丸が吸い込まれるように入つてゆく。否、そう見えた。

少しの時を開け、そこから白い巨体が姿を現す。

トリオン兵《バムスター》。戦闘力はほぼ皆無なものそのその装甲は固く、捕獲を目的とするならば十分に驚異的な存在だ。

しかし――。

「……ビンゴだったな」

二、三十メートルはありそうな個体は、その脅威を見せることなく、黒い穴から転げ落ちた。

『……白、百発百中……ブイツ……』

近イパー
界民がトリオン兵を送るのには理由がある。道理がある。ならば。
『』には分かるのだ。

いつ? 何が? どこで? それらが。

今回はそれ一体だったらしく。被害は起きなかった。

「被害地ですでに住人がいないとはいえ、壊すのは気分がよくないからな」

八幡はビルの屋上。

彼が担当する区域すべてを見渡せるその場所で……。

『次は、しりとりしないか?』

「いいぞ。じゃあ最近はやりの『消去しりとり』で」

『へーハチから条件だしてくるなんて珍しいな。予習でもしたのか? その程度で勝て

ると思ってるの?』

「わかってないのにわかってるふりするのはお前の十八番だったか? ビビってます

ねわかります」

『……なめるな……素人……』

また先ほどと同じように。

すでに仕事は終わったと。

『三人は』次なる遊戯へ意識をゆだねた。



比企谷八幡のランクはもはや語るまでもなくS級である。

すなわち定期給与が約束されている。出来払いと言われている防衛任務の数によって変化は生じるが、そこら辺のバイトよりは高い給与が支払われている。

学生にしてこれほどの待遇は『ボーダー』ならではと言ったところだろう。

とは言え——実を言うと、就職という形をとっていない学生の金額はそこまで高くはない。

どんなに稼いでいても、それだけでは生活が送れるほどではないとは言っておこう。

これでは『ボーダー』の危険度とみあっていないような気もするが、実はそうではない。

『ボーダー』のトリオン体——正隊員には、ペイルアウトと言う機能が存在する。それ以外にも、『ボーダー』基地周辺と言う決まりを作ることで、ある程度の安全性を保障しているのである。

さらに言うならば、上層部としては、もし万が一隊員に何かあった時のための謝罪費

の方を優先している結果ともいえた。

それは——『ボーダー』が誇る安全性の自信とも取れるだろう。さて。

ここで何が言いたいかと言うと、『ボーダー』に入るメリットは、隊員の家族からしたらほとんど存在しないと言う事である。

「……うーん？ 確かにそうかもしれないけど、でも戦う技術を得られるだけでも十分だと思わない？」

そこまで話を聞いて声を出したのは、那須隊の隊員熊谷友子である。

「確かに熊ちゃんの言う通りね。でも比企谷君が今その話をしたつてことはそうじゃないんじゃないかな？」

そう言つて、那須玲が視線を向けた先は、机に肘をついていかにも不機嫌ですよオーラを漂わせる比企谷八幡であつた。

その場所は那須隊隊室

三人の他に、お茶を入れなおしてふらふら器を運んでいる日浦茜を入れてその場所には合計四人。

男女比三倍の場違いの場所にいる八幡は、なぜこうなつたと頭を抱えた。

そう、今この状況を説明するには少しばかり時間を遡る必要があるのだ。

.....。

防衛任務を終え、ゆつたりとした様子でマックスコーヒーを飲む八幡の心は、貴族のブレイクタイム並みの心地よさ。

仕事。と名のつくものは毛嫌いする八幡ではあるが、仕事終わりの一杯だけはなかなか悪くないと、これもこの一年で学んだ一つである。

素晴らしきかなマックスコーヒー、と。

気分豊かなそのひとは、唐突に幕を閉じた。

『あ、比企谷君こんなところに来ていたのね。探してたの。今日みんなに紹介しようとおもっていたから見つかって良かったわ』

声が出た。顔を上げた。

ギギギ、と言う擬態語があうその動作で首を動かした八幡の目の前にいたのは那須玲。

滅多に人が通ることのない廊下である八幡のお気に入り鉢合わせ。

(えー.....なんでここにいるんだよ.....。しかもなんか不穏な発言してなかったかこいつ)

探していた。みんなに紹介。と言うワードに聞き覚えがなさすぎる。

ぶっちゃけいきなり何言ってるのこの子？——って感じである。

『「ボーダー」で会うのは初めてか？でも悪いな、俺今日防衛任務の日なんだよ』

『そうなんだ。実はちよつと相談に乗ってほしいことがあつて、今日はみんないるから私たちの隊室に来ない？』

『……………』

絶望的に話がかみ合っていない。

ていうか話を聞いていない。

『ねえちよつと？お話聞いてました？俺今日防衛任務なんですけど』

嘘ではない。

確かに今日は防衛任務の日である。まあ先ほど終わったばかりであるが……………。

『え？知ってるよ？さっきまでやってたよね？』

『——は？』

(いや待て、なんでそれを知ってる?)

そんな八幡の心に答えるように、

『防衛任務のシフトってね、同時刻の人は知ることができるのよ？比企谷君のスナイ

プすごかったわね。茜ちゃんがすごい興奮してたよ？』

連携という面と、『ボーダー』基地周辺と言う敷地範囲を考えれば当然ことである。まあ那須隊が比企谷八幡を見つけたのは、たまたま近くをうろついていただけであるが。

——・・・。

絶句であつた。

ちよつと調子に乗つて空のまねをしてみたものの、それが恥ずかしくなるまでの失敗。まだピエロの方が似合いだろう。

少し考えれば思いついたはずだ。那須は言っていたではないか。——探していた、と。

それはつまり今日この日に八幡『ボーダー』に知っていることを知っていたということだといふのに。

『だまそうなんてひどいと思うなー。てことで——埋め合わせ・・・』

再度八幡の前に回り込み。

——してくれるよね。

純粹無垢。

微笑むような顔を浮かべる那須に、八幡は当然のように、

『いやだけど?』

と口にした。

.....。

.....。

今度は那須が言葉を失う番だった。

那須は自身が知っている情報の差異に言葉を失なったのだ。

那須は、比企谷八幡に何かを頼った際には、まず初めに言い訳からはいることが知っていた。

だからこそ、それを崩したわけだし、言い訳さえなければ素直になると、そこまです小南やら木虎からの情報だった。

（え？ あれ？ 普通に否定されけど情報を違うよ小南ちゃん!?!）

『じゃ、また今度な』

ごく普通にその場を後にする八幡に対し那須は動けない。

『え？ えーと、えっ!?! ね、ねえまってよ!?! 相談に乗ってくれるって言ってたよね?』

はッと意識を戻したが、慌てて八幡の腕をつかむことぐらいしかできないかった。

『.....、』

八幡から言わせれば、相談くらいなら問題ない。この場で少し話すぐらいならそれは

許容範囲だった。

だが、那須隊全員となれば話は別だ。オールガールズ。女性だけのチーム。

(そんな場所に行けるわけないだろ……)

と、そういうわけである。

だが、そんな事を誘ってる側が分かるはずもなく、ただただ疑問にしか思わない。

『えーつと、ごめんなさい。今日もしかして用事とかあったの?』

『いや、それは……』

ここで、用事がありましたと、言えないところが比企谷八幡。

那須の申し訳なさそうなその顔を見て、なお嘘をつきとおせるならば出てこいと言わんばかりである。

はつきりしない八幡に対し、那須はさらに疑問を重ねるだけ。

(やっぱり使うことになっちゃったよ小南ちゃん……)

こんな時のため、と。小南から用意されたウルトラC。

絶対に八幡を動かすことができる一手。

小南から嚴重注意をされた最終手段。

躊躇なく那須は——その切り札を切った。

『「不可視の弾丸」っていい名前よね?』

『——ッ!?!』

——どう言い訳したのか、と頭を悩ませていた八幡は、その一言に振り向かざるをえなかった。

『オイ、それどこで——』

『武器の高速切替の事なんて言っただけ……? 「ラピッド・スイッチ高速切替」だったかな? かつ

こいいたいと思うよ?』

『グハツ……っ』

幼気な少年の心はそこで限界だった。

『三人は』で考えた黒歴史。

いや、空と白はまだ普通に使っているが、八幡がそれをかつこいいたいと思っていた時代はどうに終わったのだ。

何故那須が? いいや、そんなことすら八幡にはどうでもいい。

知っているという現状がすでに問題だ。

『あとはなんだっけ? えーつと「ピリアー銃弾打——』

『わかった! わかったから黙ってください!! マジで!』

わかるだろうか? 自身の黒歴史を暴露されるかもしれないその恐怖を。

目の前でそれを羅列される苦しみを。

『はあー、どうせ小南だろまた……。お前ら仲良すぎないか？ とりあえず、今日は行くからそのことは誰にも言うなよ……。』

その言葉を八幡から引き出して、可愛らしく——やった！ と笑顔を向ける那須の事を八幡は天使の振りをした悪魔に見えた。

.....

そして場所は那須隊隊室へ。

「比企谷せんばわわわわッ、——とつとつと、はいっお、お茶です！」

お盆を揺らしながらもなんとかお茶を運ぶという任務を終えた日浦茜は、満足げにどや顔を浮かべている。

「よくできました。茜ちゃん」

「今日はこぼさなかったわね」

なるほど。普段は溢しているらしい。

確かにこれならどや顔をする理由も理解できる。

さりげなく器に三代目と記入されているのは、割った回数を覚えるためのドジ対策だろう。

控え目に言つて実に愛らしい。

日浦は、那須と熊谷にもそれを配り終えると、八幡の隣へ腰を下ろす。

「ささっ！ 続きをお願いします！」

その行動に特別な意図はない。

用意されていた机が一般的な二対二タイプの机だったただけだ。

（わかつてはいるが……。やめてッ！ そんなまぶしい笑顔を向けなくて）

八幡は期待されている、と言う現状がとてつもなく居心地悪かった。

（絶対期待にこたえられないんだが。どうすればいい……）

那須隊のこと自体は事前に調べていた。

弧月使用の攻撃手に、メインがバイパーシューターの射手。そして狙撃手スナイパー。バランスのいいチー

ムだ。

だが、その構成が八幡と最悪的に相性が悪い。

「前提条件として、親から何か言われるのであれば、何かしらのメリットを与えなくちゃいけないわけだ。近界民ネイバーと戦う技術なんてむしろマイナスだろ。例えば「怪我もしません、だから武器を持ってテロリスト殲滅してください」なんて言われてお前親を送り出せるか？ ぶっちゃけ戦争より質悪いぞそれ？」

「でも実際私たちは怪我しないし、安全なことは親に説明されてるじゃん」

『ボーダー』はその技術の性質上隠し事が多い。大事なことはまるで話してないだろう？
実際ちよつとの事で記憶封印措置使うしな。親からしたら質の悪い詐欺師とかわらねえよ」

そこまで聞いて、熊谷は黙る。

『ボーダー』の内部を知ってる、と言う事実と、さらには八幡と決定的に違う価値観が、
わずかに思考のずれを思わせる。

「比企谷君。それはなんとなくわかってたけど、それでどうすればいいと思う？ 結局
強くなってA級に上がるしか道はないんじゃないかな？」

「那須せんばーい、それ結局振り出しですよ」

A級になるのはまだ難しい。ならどうやって親を説得するか。そもそもなぜ反対されるのか。

ここにきて最初に戻ってしまっている。

「まあ親からすれば「芸能人目指します」ってのと変わらないだろうな。実際A級とか嵐
山隊なんかは芸能人扱いだし……。理解のある親じゃないことをあきらめるか。
自身を心配してくれているのだとプラスにとらえるかだな」

「そんなこと言ったら、何もできないじゃない」

熊谷は、うにやーとでも言いたげに机に突っ伏す。

「ねえやつぱり比企谷君私たちの事鍛えてもらえない?」

「あつ! それが良いです! 私も近界民ネイバーが出てくる前に撃ち抜くとかやってみたくてす—!」

「こら茜つ! あんたにはちゃんと師匠がいるでしょう? ちゃんと奈良坂に許可貰いなさい」

「ううつ、ごめんなさい」

仲がいいのか仲の良い振りなのか……。女子の怖さを雪ノ下直々に教えられた八幡には、彼女らのそれを判断することはできなかった。

むしろこれで影では悪口とか言っていたら、怖すぎて女子には近づけないだろう。

「どちらにしろ俺にはどうしようもないな。チーム組んで半年あたりか? なら実を結び始めるのはこれからだろ……。ランク戦もそろそろのはずだし、練度高めるのが一番じゃね」

そんなある種突き放すような解答に、那須は懇願するように口を開く。

「ちよつとだけでも訓練見てくれない? 藍ちゃんも比企谷君に見てもらってから調子よさそうだし何かが変わると思うの」

「いや、だから俺には無理なんだが……」

その言葉に嘘はなかった。言葉通りに『無理』。

特別な理由があるわけでもなく、深い意味があるわけでもない。ただの事実として不可能。

その言葉に嘘がないからこそ、彼女らは八幡のそれが意味不明だった。だって、S級試験では様々なトリガーを使いまわしていたではないか。作戦だって素晴らしかった。その一端を教えることぐらいできるはずだ。

何故頑なにそれを否定するのか……。

今『ボーダー』で比企谷八幡の情報を知らないものはいない。

それと照らし合わせても八幡の言葉が、それと矛盾している。

三人のそれを感じ取ったのか、八幡は自身ではどうにもならないことを改めて悟った。

「ちよつと電話してくるわ」

唐突に立ち上がり、部屋を後にする。

たまたまだった。

偶然と言つてもいい。しかし、その行動を八幡に取らせたことにより、那須隊はいち早く『比企谷隊』と言うものを知った。

・
・
・
・
・

「——あ、空か？ 悪いんだけど違和感覚えられた。どう対処すればいい？」

その相手は『くうはく』。空ではなく『くうはく』だ。

『はは、奇遇だな、おい!! こつちにもお客さんがきたぜ』

「——へ？ いいの？ もしかして俺ミスったか？ 流石に早すぎると思うんだが」

『いいや、むしろ遅いぐらいだな。ぶつちやけ相手がいなさ過ぎて暇すぎだったからちようどいいわ。そつちはともかく俺の方はここまで来たんだからかなりできるぜ？』

何を言っている？ いや、何の話をしている？

『欲しかったのはS級試験からランク戦までのこの四か月だったからもういいや。話していいぞ、ここからいくらあがいてもゲームオーバーだしな』

ゲームオーバー？ なお分からぬ。もしかしてあの『くうはく』が？

いや、それこそありえない。……分らない。

「まあ全部お前らに任せてるし俺からは何も言えないな。にしても、そつちは大丈夫なのか？」

それは『くうはく』がそのお客さんを相手にできることかそれとも。彼らが言ったゲームオーバーについてか。

『——心配か？』

『・・・・・・・・、』

少しの無言。

すると——、

『・・・・・・・・ハチ兄・・・・・・・・白達信じる・・・・・・・・大丈夫、だから・・・・・・・・』

白がそれを言ってきた。

いったいどこから聞いていたのやら。

その言葉に八幡は小さく笑い。

「『^{お前}を、俺は疑ったことはねえよ』

最後にその一言を添えて——。

八幡は電話を切った。

仮に八幡が切らなくとも空から切っていただろう。

——だって恥ずかしいだろ？ お互いに。

「さて、どう説明したもんかな・・・・・・・・」

そう呟いて、八幡は三人が待つその部屋の扉を開けた。

・・・・・・・・。

・・・・・・・・。

多くが勘違いしていた。

『くうはく』』と言う存在を軽視していた。

彼らは『くうはく』』が定めた時間の中をさまよっていただけ。

いいや。その表現は正しくないのかも知れない。

——だが、特別それを表現する方法がわからない。

防衛任務を思い出す。

確かにゲームにも興じたくなるだろう。暇で暇で仕方なかったはずだ。

なぜなら、誰一人そこから出れなかったのだから。

悲しいかな、『くうはく』』はいつでも全力で相手をしているというのに。

『くうはく』』はあくまでプレイヤーだ。

忘れていたのではないか？ 『くうはく』』はゲームプレイヤーであり、比企谷八幡はそれが操

るキャラクターでしかない。

比企谷八幡だけを見て、背後の存在に気付かない。見ようとしない。

そんなんだから。『ボーダー』』はキャラクターから抜け出せないのだ。

『くうはく』』と戦えてすらいらないのだ。

比企谷八幡がすごい？ 比企谷八幡が強い？

——違う。全く持つて違う。わかっていない。

だからこそここで言おう。

声をかけよう。

——起きて、『くはく』。

やっとゲームを始められるよ。

二十話<<『……………understand?……………』

比企谷隊隊室とは名ばかりの『くうはく』住居。

回転椅子をぐるぐると回し。

そこにいる少年。——空は、楽しそうにそれを話し始めた。

「俺らが『ボーダー』に入る条件として——『くうはく』として負けられないことを大前提に考えた時、『俺』はハチに負けないことを強要した」

空は過去を振り返るように、八幡との最初の出会いを思い出すように口を開いた。

「けどさ、ほとんど初心者のハチにそれができるかって言われたら不可能なのは当然だろ？ 無理なことを強要するほど俺も馬鹿じゃない」

——ニヤニヤと。何が面白いのか静かに笑うその様子は、ちよつとしたイタズラに成功した子供の様だった。

そして、空の膝元に座る白が、今度は代わりに口を開く。

「……………でも、ね。白達が知らない面白い技術……………『ボーダー』にはあつた……………」

「フアンタステイック！ サイドエフエクト!! いやー、あの存在には流石にビビったね。だって俺らから見ても当時のハチじゃゼータに勝てない風間蒼也にその力で勝つてるんだぜ？ リアルチートだわあんなの」

——比企谷八幡のサイドエフエクトが、ではない。

——サイドエフエクトと言う存在自体が、と『くっはく』は言っているのだ。
バツつと手を広げ。

舞台役者のごとく全身でそれを表現する。

「さてー、ここで問題です!! ハチが負けないために俺らは何個『ボーター』で仕組んだでしょうか!？」

その問いに回答者はいるのかいないのか。

いたとして答えられるのか。

「………答え、全部、だよ………」

頭のおかしい出題者はこれだから困る。

これでは疑問が残るだろう。そもそも、全部とは何なのだ、と。

「いやーおかしいと思わなかったのかねー。なんでハチは玉狛支部でしか訓練をしない？ まずそこから疑問だろ。強くなるためなら多くの人物と訓練をする当たり前の事だ。ハチの目的は妹の周りを守るためだろ？ そのためなら嫌なことだってできるの

「がお兄ちゃんつてもものなんだぜ？」

——それに、と空は続けて。

「しかも事実として風間蒼也にも勝ってるんだ。きつと俺らが出した条件もクリアできるさ。」

条件とはすなわち『ボードー』で負けないこと。

——うんうん。とうなずく姿は、先の自身の発言をまるで忘れたかのようにだ。

「・・・・・・・・でも、それをハチ兄はしなかった・・・・・・・・ううん、白達がさせなかった・・・・・・・・」

「——何故かって？ そんなの答えるまでもないだろ。——勝てないからさ。」

——一から十まで理解不能。

いいや、そもそも、二人の言ってることは前提条件からして間違っている。

なぜなら比企谷八幡が玉狛でしか訓練をしなかったのはコミュ障だからで・・・・・・・・。普通考えね？ ハチは確かにコミュ障だけど、その程度で訓練できないわけないだろ・・・・・・・・。もしそうなら『ボードー』やめてるって・・・・・・・・だってさ——

——

溜めるように言葉を区切り。

「——それじゃあハチはどうやってC級からB級に上がったんだ？」

空の言葉を補足するように、白が後からそれを語る。

「……ハチ兄は、結構普通に喋れる、よ？ ……ただ、相手に合わせるのがとことん苦手なだけ……」

比企谷八幡の性格は置いとくとしても、空の発言はなるほどその通りだ。

「さて！ なら次の疑問が出てくるよな!! なんで玉狛だけは大丈夫なんだ？ なんで戦ってOKなんだ？ ここまでたどり着いたんだから分かるだろ？ あんたならさ」

空は今まで話していた相手にその疑問を投げつけた。

空と白、——『くうはく』と対面するその人物は、眠たそうに、ほんの少し笑みを浮かべて——しかししつかりとした口調でそれに答えた。

「……比企谷八幡では三人が限度だったんでしょー？ 『あなたち』が調べ、対策と対策を講じれば、負ける相手はそうもないもんね。でもー、それを『実行できるかは話が別』だもーん」

その人物は、ソファーに腰をかけ、目の前にあるチェスをいじりながら。何でもないようにそれに答えた。

「比企谷八幡では玉狛支部にいる三人の対策しか間に合わなかった。……まあ私からしたら十分すぎると思うけどー」

「いやーっ！——That is right!! さすが!!——……で、そ

れで終わり?」

——その程度しかわかってないわけないよな?

そう相手を煽るように。

目を据えて。

「玉狛のネームバリユーそれも狙いなんですよー? 弱い相手にいくら勝つてもー比企

谷八幡——ひいては『^{三人}』が『ボードー』で一番と明確にするためにはそれではだめだもんねー。——その分、玉狛ならなんの問題もないですよー? だってー『ボードー』最強チームなんだから」

淡々と、それが当たり前であるかのように。

「——そこら辺のA級でもよかったのかもしれないけどー、それだと三人と言う上限を越しちゃうもんねー」

その答えに、空は満足そうにうなずいて。

「——いい手だろ? 八幡の他人と接するのが苦手と言う本来の性格を隠れ蓑にするこ
とで、誰もそのことに疑問を持たない。——本当は矛盾だらけなのにだ」

少しずつ語られる『^{くっはく}』が用意した勝つための土台。

「——でも、何故そこまでした? 何故それをする必要があつた? ——つまり、俺らは何を隠していた?」

「それも簡単だよ。だってあなたが答えを言ったでしよ。——比企谷八幡のサイドエフェクト、それさえあれば風間蒼也にすら負けないって」

その人物はすでに『』^{くっはく}に追いついている。
完璧だ。

——ニヤリ、と。嬉しそうに空は笑う。

「そう。サイドエフェクトはそれ単体で脅威だ。けど、それにたいする危機感が少ない。それは何故か。そりやそうだ……知ってれば対策できるもんな」

当たり前なことだ。

——未来を見る？ ——感情を受信する？ うらやましいさ。カッコいいとも！

でも、対策し放題なんだよなー、と。

「……うん。だから白たちはその本来の性能を隠した……」

「あれは問答無用切り札だ。けど切り札は切ったら終わり。種が割れたマジックほどつまらないものはないだろ？」

だから。だからこそ、八幡は『』^{くっはく}の対策で勝てる、あるいは自身単体の実力で勝てる相手としか戦闘をしなかった。

それが玉狛の人員であり、少し前で言えば木虎だった。

「今思えば、S級試験ははまりすぎてたな」

空の言葉にその人物は小さく笑う。

「・・・・・・・・そうだね。普通違和感ぐらい感じるでしょ。A級相手にあそこまでやったのに、その後あなたたちが求めたのが『ボーダー』全体の底上げ？ その程度なわけないよね？」

「さっすが！ そのとおりっ！ あれは俺らの力を誇示するために敢えてあそこまでした!! 今度は『^{くっはく}』を隠れ蓑にし、八幡のサイドエフェクトの価値観を下げる。それが本来の目的だ。・・・・・・・・まつ、ばれないために、あんたが言った表向きの理由を用意してな」

空の答えに、その人物はジロリと目を向ける――。

「まーたそうやって嘘をつくー・・・・・・・・。それだけじゃないでしょ？ 比企谷八幡と言う評価にニセの情報を流す。それも狙いじゃない？ あくまで『二番目の』だと思うけど」

もはや理解できる次元ではなかった。

どこからどこまでが本場で、どこまでがブラフだったのか。

「いや、答えはすでに言っていた。『全部』――つまり、今までのすべてが、『^{くっはく}』が用意したものだったのだろう。」

「人聞き悪いなーもうっ!! 俺らはあくまでい・ろ・ん・な・ト・リ・ガ・ーを使っただけ。周りが勝

手に勘違いしただけだろ？」

「……人は、それを詐欺師と呼ぶ……」

いつもその手で兄に負かされている白はその様子がうざかったのか。辛辣なその言葉に少し涙するも、乗ってきた空のそれは止まらない。

「さて、どこまでわかつてる？ おたくはさ」

今度は静かに、空は相手の考察を聞いた。



八幡は、那須、熊谷、茜の三人に向かってまずは端的に事実を述べた。

「まず言つとくが、俺が使えるメイントリガーは四つだけだ」

それを聞いて、三人はハテナを頭に浮かべる。

いきなり何の話をしているのだと。

「一つは《スコープオン》、そして《イーグレット》、後は銃手の《アステロイド》と射手シューターの《ハウンド》だ。だから俺はお前らに教えられることはほとんどないんだよ」

その八幡の言葉に真つ先に声を上げたのは那須だ。

「えっ、え？ ちょっと待って比企谷君。木虎ちゃんが『比企谷先輩はほとんどすべての

トリガーがマスタークラスらしい』って言ってたけど・・・・・・・・」

「――? 木虎に俺が使ったトリガーなんて実際、『アステロイド』とシールドぐらいのはずなんだが・・・・・・・・?」

確かにそうだ。

では何故そのような発言を木虎はした――?」

考えるまでもない。木虎にそれを言ったのは嵐山だ。

『あいつは基本的に全部のトリガーがマスタークラス以上だし』

確かに、木虎に八幡を紹介する際に口にしてる。

――つまりどういうことか?

「きつと嵐山さんにでも聞いたんだろ。まあそもそも情報が間違ってたんだから仕方ないけどな」

そうつまり――八幡を理解している、比較的つながりが深い、嵐山すら本当の事を知らなかったという事実。

――騙し切ったという証明。

まあ勘違いもするだろう。S級試験でメテオラやバイパーを巧みに扱うその姿を見れば、あれはすべて『くま』がいてこそその技術だというのに。

玉狛にすらそういう風に思わせたのだから。裏付けも文句なし。

「あーそれから。那須が言った不可視の弾丸やら高速切替ラビッド・スイツチ。あれはお前らじゃ覚えるだけ無駄だからやめとけ」

「ちよつとそれは私らじゃ使いこなせないってこと?」

熊谷が少し不機嫌そうに口にする。

「いやちげえよ。……まず不可視の弾丸だが、あれはそもそも欠陥品だ。技術として破綻してんだよ」

「欠陥品ですか? あんなにすごいのに?」

「あーなんて言えば……そうだな、不可視の弾丸は速度重視の技術の極限だ。言っちゃえば相手にばれない銃撃。——言葉だけなら無敵だが、『ボードー』じゃ意味がないんだわ。だって——トリオンの弾丸じゃ遅すぎるからな」

——言っている意味が分からない。

そののいつたい何が問題だというのか。

「攻撃手段が技術に速度で劣つてたら意味ないだろ? 見えない銃撃なのに弾は見えますなんて意味なさすぎる。実際に太刀川さんには、知られているだけで止められたしな」

「確かにそうだけど——」

理解はできるが納得はできない。

そんな顔をする三人に、八幡は続ける。

ラビット・スイッチ

「高速切替も同様にお前らには意味をなさない。確かにメリットが大きい技術っぽく見えるが、それ以上にデメリットがでかい。お前なら分かるか？ 日浦」

「ええええ!! わ、私ですか!! えーつとえーつと・・・・・・・・——ツ! あ、え?

も、もしかして、武器を切り替えるたびに生じるトリオン減少・・・・・・・・です、か?」
そこに気付けるのだから日浦は優秀だと言えるだろう。

——師匠が、かもしれないが。

「正解だ。スナイパーなら普段から意識して分かると思うが、武器の生成には毎回トリオンが必要だ。——本来なら壊れでもしない限りその必要はない。でも俺のはそれを無視した技術だ。特に《シールド》なんて壊れる前にしまつて作り直すなんて非効率すぎる。絶対防御もオペレーターありきだし。《スコープオン》を使つてる俺以外そこま
で必要ない、と思う」

なるほど。と、三人は納得の色を見せる。

だがそれだとさらなる疑問が出てくる。

何故そんな使い勝手の悪い技術を、八幡は身につけてるのかと・・・・・・・・。

その那須の疑問に対して八幡は簡潔に答えた。

「ああ、それは俺のサイドエフェクトと最高に相性がいんだよ。てか、俺の戦闘スタイル

ルはそもそもサイドエフェクトありき、それを最大限生かす戦い方だからな」

「比企谷君のサイドエフェクトって言うの『思考投影』って言う噂の?」

八幡のサイドエフェクトは多くのものが知ってる。

確かに、自身の頭の中身を見られるその行為は戦いずらいだろう。

——だが、S級試験において、その弱点は風間によつて暴露されている。さらに言えば対象は一人のみ。

現状の評価としては迅や景浦に比べたら使い勝手の悪いサイドエフェクトと言わざるをえなかった。

「ああ、相手の作戦を見抜くとか、視界を共有するとか、ぶっちゃけそれは副産物なんだよ。オペレーター曰く、それっぽい使い方、尚且つ相手が対策を打ちやすいものにしてやってことだな」

「「——は?」」

言葉を失った。

迅や景浦と比べたが、強力なものには変わらないそれらの情報が副産物? 目の前の男

はいったい何を言っているのだ?

「本領?」って言うのかなんて言うのは知らんが、俺が最初に風間さん相手に使ったのはもつと別なんだよ。…….なんて言えいいのかわかんないだが、相手の空白

箇所を見つける?　とでも表現するのか?」

「うん、それじゃ全然わかんない」

八幡は——だよな。

と言う感情を押し殺し。

「えーつと、例えばだが人間の視野は200度程あるだろ?　けど、その認識率は大きく変動する。簡単に言えば『視界の端つこで何か動いても気が付かない』だったりな。そんな視覚、聴覚、嗅覚、そして感覚それらの認識が0パーセントの場所の把握。それが所謂空白だ」

「えーつと?」

余計に理解できませんとでも言いたげな那須を見て、八幡は頭を抱える。

「あーそうだな、じゃあ那須、お茶をとつてくれないか?」

「え?　——いいけど・・・・・・・・?」

そう言つて、那須は八幡の目の前にある器を手につけて差し出した。

——サンキューな、と一言言つて、八幡はそれを口に含み。

「なあ、なんでお前はこれのお茶をとつたんだ?」

「え、だってそれが比企谷君のお茶だから・・・・・・・・」

「俺は別に俺のお茶とは言つてないぞ?　・・・・・・・・もう一度聞く。なんでお前は机の

上にある四つのお茶からこれをとつたんだ？」

「——え……」

那須玲にそれを説明することはできない。

「ま、要はこれと似たような現象だな。お前の頭の中では『お茶をとつてくれ』と言う一言を聞いて、四つの内三つがすでに見えていなかった。——さらに言うなら、お茶を入れなおすつて発想もそこにはなかった」

「——あつ」

「そう言った無意識のうちには否定する選択肢。つてのを俺は見てるんだよ」

相手の脳にアクセスする八幡のサイドエフェクト。

仮にそれができるとしたらおかしい。なぜなら相手が認知できない部分を八幡が認知できるわけではないのだから。

だが、事実としてそれができている。

部分的に情報を自身の脳とごちゃ混ぜにする八幡のそれは、相手の『認識していない部分』と言った曖昧にアクセスすることで、勝手に八幡の脳の方が処理を行うのである。

そもそも、八幡のサイドエフェクトは他人の理解。その延長線上にある。

空が得意とするコールドリーディングの究極とでも言えればいいのか。

——相手の決まり切つてない『曖昧な心』にアクセスできる権限こそその真骨頂なの

だ。

「S級試験でオペレーターの力を誇示した理由も分かるだろ？俺はこのサイドエフェクトを最大限活かす戦い方をしている。逆に言えば、これさえ攻略されれば負けるんだよ」

甘かった。認識が甘かった。

こんなの、比企谷八幡に——比企谷隊に勝てるわけがない。

「で、話を戻すが、俺はその空白部分に攻撃を仕掛ければいい。それだけを行う技術があればいい。その他の技術やらトリガーの練度は、そこまでもつていく程度で十分なんだ」

「・・・・・・・・、」

言葉を失う。

だから。

「まっ、それもあくまで今日まで、の話らしいけどな」

——だから、静かに呟いた八幡の言葉は、三人には届かなかった。



『』と対面する人物は、同時刻。

八幡が那須達に語ったのと同じ見解を述べていた。

「ブラボー!! どんどん。パフ。パフ!! ここまでピッタリ当てられるとちよつと自信なくすな、結構必死で考えたんだぜ?」

「心にもない事言うな、まったく」

ああ、本当に心にもないことを口にする。

——必死で考えた。その部分以外全部嘘。

本当に、息をするように嘘を吐く。

「ここまでわかっているなら、『この先の疑問』にもぶつかつたはずだ」

「……ハチ兄は、サイドエフェクト……研究されたら、負ける……」

「なら、なんで今この場でそれをばらすことを許可した?」

そんな相手を試す。ある種のパフォーマー気取りでそれを聞いてくる空に、その人物はいい加減疲れたというように手を振るつた。

「もうめんどくさいよ」

——もうわかっているから。と、言外に告げたそれに、空は少し面白くなさそうに顔を歪める。

「ならこれだけ聞かせろ。あんたはどれくらいの期間を予想している?」

「早くて一年半、遅くても二年って感じかな」

「うわーそこまで分かるとか化け物かあんだ・・・・・・・・」

「あなたたち兄妹には言われたくないな」

以前、『^{くっはく}』が八幡を戦闘の天才と称したことを覚えているだろうか。

これを聞いた時多くのものは思ったはずだ。

——は？ と。

戦闘。と言っているが、曖昧過ぎる定義だ。そもそも戦闘の天才なら、ここまでする必要はない。

しかし、天才と言う部分は——ここばかりは本当だ。

だとしたら、何が足りないのか。

「ハチは戦闘の天才だ。だが、それはあくまで答えを導き出すという面においてのみだ」
そもそもこの話、技術的に天才であるならば、八幡は格闘技術を盗むことすら容易だろう。

天才と言うのだから、見ただけで、軽くまねしただけでそれを獲得することも可能だ。
まああくまで『^{くっはく}』が語る天才の定義ならではの話だが。

『ボーター』何かではなくオリンピックピック選手でも目指してろって感じである。

しかし、八幡はそれをしなかった。——否でできなかった。

確かに覚えは早い、観察力も申し分ない。しかし天才的ではない。

風間も最初に八幡を見つけた際に言っていたではないか。センスがいい——と。

「ハチのセンスは間違いなくピカ一だ。——けど、あくまでそれは『ボーダー』でならば、そもそもあれぐらいなら『ボーダー』には山ほどいる。太刀川、小南、緑川、木虎、——名前を上げればきりが無い」

八幡自身も言っていた。

——『そこそこできるつもり』だと。

誇張でも謙遜でもなく、客観的に自身の実力を把握していた。

「……でも、ハチ兄は天才だった……」

「そうだ。戦闘において最も重要な、状況判断。それをハチは『間違つたためしがない』

——しよばい、とでも思っただろうか。

もし『ボーダー』でそう思った者がいたとするなら、即刻辞めることを『くうはく』は勧めただろう。

——才能がない。あきらめろ。と。

「意味不明で理解できん。『ち』が何年もかけてゲームで培い、やつと手に入れたモノをあいつはあっさり手にしていたんだぜ？ 嫉妬もするわな——マジで。言葉にするなら

——戦闘経験予兆とでもいうのかな？」

「なるほどね。そこまでは分からなかったかなー。・・・・・・・・まあ分かるはずもないね。だって、言うならそれは、年月とともに鍛えられる——要は、忍田本部長や太刀川さん、風間さんクラスが身につけてる言うならば『勘』。それを無意識で正解を引き出すとか——」

「・・・・・・・・ゲームで言うなら、経験値最初からマックス・・・・・・・・バグキャラ、チート・・・・・・・・」

それ以上のチートがそれを口にする。

これは普段の生活でもちよくちよく表には出ていた。

問題解決に当たった時のラテラル・シンキング的発想。論理的ではなく、複数の並行する選択肢から、現状を以て答えを導く。

それ故に——

なんでそれをしたのか？ と問われれば『それ以外に選択肢がないから』あるいは『なんとなく』としか八幡は答えられない。

あとから理論を捻くりだすことは可能でも、その瞬間に理論は存在しない。

雪ノ下に唯一『それ』を指摘できたのも分かるだろう。

——なぜなら実体験なのだから。

小南との戦闘を覚えているだろうか？

八幡はあの時最後の最後で、不可視^{インヴィジブル}の弾丸を小南に使わなかった。それも元をただせば八幡の天才性ゆえである。

後づけで理論的なことを言つてはいたが、それが本当かどうかは分かつていない。

サイドエフェクトで、わかつていた。的なことを口にしてはいたが、あの短い時間でサイドエフェクトを使用できないことなど、今となつては議論する意味すらないだろう——否だ。

「——で、本題に戻るが、今までの事を前提で話すと——八チには致命的な欠陥があるのよ」

——困った困った。

と、まったく困つてなさそうな様子でそれを口にして。

「……ハチ兄、技術が追いつかない……」

「そう、いくら強力なサイドエフェクトだろうと対策をうたればそれまで。天才性も『ボーダー』の発足からの年月を考えればカバーは難しい。だからこそ俺らが設定したのは二年」

分かつてきただろうか。

——玉狛支部。

——S級試験。

——サイドエフェクトの隠蔽。

——トリガーの勘違い。

それらを用意した意味が。

「まずひとツ！ 俺らが全隊員を調べ終わるのに二年はかかると判断した」

愉快な口調で。空はそれを口にする。

「・・・・・・・・仮に成長しても、倒せる状況・・・・・・・・教え込むの苦労する・・・・・・・・」

「そしてふたツ!! ハチのセンスでも誰にでも対応できる技術を身につけるのにそれぐらいの年月は必要だと判断した」

「・・・・・・・・事実、ハチ兄まだトリガー四つだけしか、使えない・・・・・・・・」

「そしてみーつツ!!! それを踏まえて『^{三人}』が求める水準、すなわち連携を完成させるのに二年は必要不可欠だと判断したからだ」

「・・・・・・・・understand?・・・・・・・・」

流暢な英語で白が最後に口にした。

さて、ここに来てやつと戻れる。

『^{くっはく}』が設定した二年。それにはまだ半年ほどの年月がある。ならばなぜここでそれをばらすことを許可したのか。

ああ、これはもつとも最初に言っていた。

「さーて、ここまではお互いの認識確認ってことで間違いないか？」
「間違いないよ」

——空が何故ここまで話したのか。
言うまでもない。

——相手もわかっているのだから隠す意味がないだろ。そう言うことだ。

「じゃあ本題の質問だ」

その一言で空の雰囲気が変わる。

先ほどまでニコニコとテンション高めな男はそこにいなかった。

むしろつまらなそうに。終わった祭りを眺めるように。

「——あんたら、もう負けてんだけど自覚ある？」

空は言っている。

もうどうあがいても『』に勝つどころか——。

——ハチにも勝てないんだぜ？ あんたら、と。

ゲームオーバー。

もう終わっている、そう言っているのだ。

つまらなそうな顔をするもの納得だ。

そんな空の辛辣ともとれる一言を聞いて、その女は……。

「その言葉を聞いて・・・・・・・・」

軽く微笑し、あきれるように肩で息をして、

「信じる馬鹿本当にいると思う？ 詐欺師さん」

先ほどまでのゆるい雰囲気など存在しない。——明確な敵がそこにはいた。

要は——なめるな馬鹿野郎、と。

てか、いつまで演技続けるつもりだ、と。

「あれま、やつぱりばれてた？」

そのおちやらかした一言にその女はもう一度小さく笑い。

「詐欺師は無数の真実の中に嘘を一つ混ぜるといふけど、あなたは無数の嘘の中に真実

をほんの一つしか入れないね」

「いや、流石にもうちよつと真実あるけど・・・・・・・・」

女は気づいていた。

S級試験の目的。

『ボーダー』全体の底上げ、サイドエフェクトの隠蔽。

——『^{くわくはく}』がその程度なわけではない。

そんな当たり前を——。

「そう言えばまだ自己紹介済んでいなかったね」

眠たそうな目。緩い雰囲気。年齢相応の笑みを浮かべて。

「鳩原未来って言うの——よろしく」

まるで見せつけるように、似合わない作り笑顔でそう言った。

二十一話〉〉『それじゃあゲームを続けよう!』

鳩原未来が『^{三人}』を見つけたのは、S級試験よりも前の事である。

彼女の入隊時期は比較的早い。『ボーダー』内でのコネもそこそこ多かった。要は迅悠一が負けたという情報を彼女は知っていただけの事。

その時の彼女が抱いた印象は、ほとんど『ない』と言っていいだろう。ぶっちゃけ、—強い子がいるな—、程度の認識すらなかった。

そんな彼女が『^{三人}』に目をつけたのは、S級試験からだと言っている。

彼女自身も言っていた違和感。すなわちそれは、『何故手を抜いて戦っている?』その一点に限る。

そう。彼女は知っていた。

迅悠一に単独で勝利する。——その異常性を。

今まで負けたことがない。——その不可解さを。

ただ遊んでいるだけか。それとも何かしらの意図があるのか。

分からない。だからこそ、彼女は考えざるをえなかった。

もし仮に、自分と同じように何かしらの目的があるのだとしたら、と……
『ちよつと調べるしかないかな』

ここで唯一の彼女の勘違いと言えば、『^{彼ら}』の思惑が実際に出てきたことだったことだろう。

だがその意味は単純なものだった。簡単な事——。心配してたのは杞憂に終わり、何かと思えばただ遊んでいるだけだったのだから。

——けど。

その純粹さは尊敬に値するほどだった。

……

……

とはいえ、鳩原未来からしたらそのことはさして重要ではなかった。

『ボーダー』の全員を相手にしようとする傲慢さ。実際に相手取つているという事実。それらが彼女にとつては邪魔すぎた。

別に悪役ぶつてるわけではない。そもそも彼女の目的は悪事ではないし、『ボーダー』と敵対することでもないのだから。

ただ、自身のそれを邪魔する可能性が増えたのはいただけくない。

よつて彼女が至つた結論は一つ。

なに、別に『^{三人}』を脅そうとかそう言ったことではない。

『だって、絶対負けちゃうから』

と、当たり前前の事。

要は――。

『私がいなくなるまでゲームの相手してあげるから、手伝ってほしいなく?』

――と言う。可愛らしい願いだっただ。

さて。ここまでくればもはや語るまでもない。『^{くうはく}』が用意したS級試験の思惑の最後。

だってありえないのだ。

あの『^{くうはく}』がS級試験で違和感を残す。調べればその思惑が露見される。素人相手にそんなことあり得るわけないだろ。

だから答えは簡単。明快。

.....。

.....。

ソファアに腰をかけ。崩したチェスの盤面を元に戻す彼女――鳩原未来は口を開く。

「遊び相手が欲しかったんでしょ? 今回の事は、『^{あなた達}』が行ったにしてはちよつと雑

過ぎるもーん。.....だから疑問に思っちゃった。中途半端に分かりづらい、な

らその目的は——」

カチャツ、と最後の駒——ポーンをそこにおいて。

『——ここまでたどり着けるものを待っていた』

「.....」

『くうはく』は、静かに彼女を見据えた。

彼女の言葉がブラフか否か。

最初からその結論に至っていたかどうか。——などではなく。

あえて間違つた、上澄みだけすくつた解答を言った理由を見るために。

そもそも、鳩原未来はゲームマーではない。『ボーター』ももちろん同じくだ。ことゲー

ムにおいては素人と言つていいだろう。

さんざん『くうはく』のそれを話してきて今更だが、外野からしたら今回の事は『くうはく』の一人芝

居に他ならない。

まあ、だからこそ戦いたい理由をS級試験で作つたわけだし、事実——綾辻やら木虎、

風間や太刀川のやる気は見ての通りだ。

だが、そうなつた場合、彼らがゲームに乗つてきた時を考えていないわけがない。

ゲームの舞台はあくまで『ボーター』。なら、『くうはく』と同じ場所に降り立つた場合、総合

的に不利になるのは『くうはく』だ。

だからそこに彼らを引き下ろすと同時、その確認が必要だった。

「結局、俺らのそれに気づいたのはあんただけだった。ハチから現状報告は聞いて、那須玲だけはまさかと思つたがそれも違つた」

空は静かに口を開き――。

「さっき言つた通り、ハチプラス^{俺ら}』の戦術があればまあ負けないだろ。この一年で実証も済んだ。ただ――それはあくまで、ゲームーじゃなかつたらの場合だ」

そう。もし、『^{くうはく}』と同じくらいの実力が一人でもいれば……。

まあ、いてもいなくても関係ないのが『^{くうはく}』だが、相手の実力が分からないなんて問題外なのは言うまでもない。

「……でも、これで線引きはできた……。だから、言つてる……。もう勝てないよ? ……つて」

白が最後にそれをつけたした。

「あんたすごいわ。――ぶつちやけ、ちよつとでもこつちの考えを見破つてくれてれば御の字程度だったんだが、ほとんど見破られていとわな」

――ほとんど。

つまりまだあるのだ。

だが、それを話すつもりなどないのだろう。

「私がここに来た時点で、あなたたちは私の願いに気付いてたんでしょ？ 優しいね、私は君と遊ぶつもりないって言ってるのに……」

「いやいいさ。まだゲームは終わってない。ウサギになるつもりなんてねえよ。まだ時間山ほどあるんだ。存在するかもしれない一発逆転を考えないほど俺らも馬鹿じゃない」

一発逆転。

——そんなモノ……

(あるなんて思ってもない癖に……本当に、嘘しかつかないんだね)

ある、ない。ではなく『させない』。

ならば、そんなモノはないのと一緒にだと。

そもそも何回も——「もう勝てない」って連呼してるくせにと。

鳩原未来は小さく溜息を吐いて。

彼女の本题——自身の目的を口にした。



『くうはく』の事を知ってる者がいたとすれば、『ボーダー』でのそれに違和感を覚えずにはい

られなかっただろう。

つまるところ——『くうはく』らしくない作戦だ、と。

今回の事を例えるならトランプタワーとでも言うべきかもしれない。

小さな土台を用意して、だんだんと積み上げる。

そして、頂点を作り上げることですべてが完成する。

あらゆる懸念材料を排除した、言わば精密機械と同じ。

例えるなら上空一千メートルでの綱渡り。

しかし、『くうはく』とは本来このような作り方はしないのだ。

『くうはく』は本来、ドミノのように、駒を並べる。自身が駒になる事はなく、駒を並べるこ

とすら駒たちにやらせるほどと言っている。

『くうはく』の仕事と言えば、最後に駒を倒すだけ。

たった一手ですべてを無に帰す不条理。——あるいは完成させる理不尽。

それこそが真骨頂。

だが今回はそれができなかった。

要は『くうはく』も必死だったと言うことだろう。『ボーダー』なんて言う未知の組織。トリ

オンなどと言うファンタジー的エネルギー。トリガーなどと言うS F武器のオンパレード。

そんな、意味不明デタラメに対して比企谷八幡を負けさせない。それがどれだけの難易度か。答えを持つ者すらいないだろう。

八幡が異様に卑屈な理由も説明がついたはずだ。なぜなら、大半が『くうはく』によって作られているのだ。

もちろん。八幡自身も努力はしているし、『ボーダー』で数えるほどしかない実力者ではある。

だが、それを『絶対』にまで押し上げたのが『くうはく』だけに、八幡が大手を振ってそれを断言することなどできるわけがない。

「那須……悪いが俺がお前らに教えられることはない。まあ相手ぐらいなら受けるし、アドバイスもしようと思えばできる——けど、それが的外れかもしれないなら、ちやんとした師匠か何かを探したほうが良いと思うぞ？」

「……………」

那須隊に対し、現状八幡ができることは新しいトリガーを教えることか、日浦茜の相手ぐらいしかない。

日浦にはすでに師匠がいるし、それも狙撃手第二の実力者だ。

八幡とは技術のベクトルが違うため、教えること自体は問題ないが、それは今決めるべきことじゃない。さらに言えば、師匠と言う形を八幡がとるわけもないのだ。

「比企谷が私たちの相手をしてくれるのはダメなの？ 私なんかは攻撃手だし、それだけで勉強になるんだけど……」

「あー別にそれぐらいなら良いが、俺は基本的に『ボーター』いないからな……」

「そもそも『ボーター』で時間を縛られないためにS級なんて持つてるんだし」

「そう、だよね……」

「えー、私比企谷先輩に教えてもらいたいです」

唐突に、馬鹿が何かを言い出した。

「ちよ、ちよつと茜ちゃん？」

「だってー、聞いてくださいよ那須せんぱーい。奈良坂先輩最近怖いんですよ!?! 訓練メニューが鬼のようにあるんです!! その点、比企谷先輩なら優しそうですし、強くなれる気がします!!」

「……」

なんてことはない、ただの反抗期がそこにはいた。

「おい。別に俺は優しくもないぞ。むしろ厳しいまである。他人に厳しく自分に甘く。それが俺の信条だ!」

それを断言する必要性はあったのか。

——うわく、と言いたげな女性人三人の視線が八幡に刺さる。

「えーでも、小町ちゃんも言つてましたよ。『お兄ちゃんは捻だレだから押せば優しくなる』つて——「ちよつと待て」——はい？」

「なんでお前が俺の妹の事を知つてるんだ？」

「え……つ、あれ？ 知らなかつたんですか？ 私小町ちゃんとは同じクラスの同級生、そして親友なんですよ！」

そこまで聞いて、八幡は思い出した。

『最近小町にお兄ちゃんの事を聞いてくる『ボーダー』の人が増えたんだけど』

確かに小町はそう言つていた。

(まさか、それが日浦茜こいだったなんてな……)

「へー比企谷君つて妹さんいたのね」

何かを納得するように呟く那須のそれは、八幡の『ボーダー』に時間を置けない理由を理解したのだろう。

だが、八幡はそんなことよりも聞かなければならない事がある。

「なあ日浦。学校での小町はどうだ？」

「——へ？ え、えーつと……小町ちゃんは明るくていい子ですよ？ 友達も多いですし、クラスの人気者つて感じですよ！」

「……そうか……」

「それがどうかしたんですか?」

「いや、まあな……」

時に、八幡が『ボーダー』に所属している理由は妹のためである。

今更だが、入隊前は引越しなども考えた。

しかし、『ボーダー』を信用していなかった八幡からしたら、『ボーダー』のネイバーの誘導装置等、信用することなどありえない。

結論として、無駄に動くより、まだ『ボーダー』の近くに身を置いた方がいいと考えたための現状だ。

『ボーダー』を知った今もこの町を離れないのは、小町の周りに多くの友人や小町にとって大事なものがそろっているからだと言える。

——ならば。

(小町の友人の願いを俺は無碍にできるのか? 利己的なことを言えば小町を守ってくれる者が近くに居るのは俺にとっても都合だ)

比企谷八幡は考える——。

(親が『ボーダー』をやめさせるなら、この町から出ていくのは極めて一般的だ。それで小町が悲しまないとは言いい切れない)

親からしたら——こんな危なっかしい場所にいられるか！　と言う事であろう。

（小町のためにその友人を強くする……それは俺がここにいる理由に矛盾するか……？）

くだらだと言いつつ諷がましいとはこのことだ。

もはや答えなど出ているくせにめんどくさい。

妹のために全力を尽くすお兄ちゃん。

それが比企谷八幡らしいかどうかはさておき。もし、そんな兄弟愛が存在するならば、

——それはきつと綺麗なはずだ。

だから。

いや、ここは最後まで問おう。

——比企谷八幡。お前はここで彼女たちを見捨てるのか？　と。

「なあお前ら、これから始まるランク戦。上上がる事に問題あるか？」

——ああ、聞く必要なかった。決まりきったことだった。

（決まつてるだろ……）

「もしないなら、勝てるように」^俺『が手伝ってやる。やるかどうかはそつちで決めてくれ』

——Yesだ。

彼女たちは、一瞬顔を見合わせ、お互いに言葉をかけることなく。

「「——やる!!」」

短く一言。

そう宣言した。



鳩原未来が『くうはく』に会いに来た理由は、彼らがこれから何をしでかすか全く予想がつか
なかつたためである。

それは、先ほどから何度も言っている彼女の目的の失敗の懸念材料だ。

「ふうん。つまりあんたはネイバーフッドに遠征に行きたいってことか?」

「ね、『話聞いてた?』」

「いや、悪い悪い。思いの他小さな願いだつたから拍子抜けしてな……。えーつ
と今どこまで終わってるんだつけ?」

「……。拍子抜けして……。こつちは結構ギリギリなんだよ? 計画を決

めてから半年間。迅悠一に絶対に近づかない。もし見られればそれだけでアウトなん

だから心臓ももたないよ〜」

この言葉で彼女が今ここにいる理由がわかるだろう。

比企谷八幡がこの場にいない。だから彼女はここにきたのだ。

『^{くわくはく}』の性質と彼女自身の警戒によって、迅悠一にすら絶対に見通すことのできない唯一の時間と場所。——もう流石としか言いようがない。

さて鳩原未来がここまでする理由。それは、彼女目的はネイバーフッドへ行くことだからだ。

つまり、鳩原未来は『ボーダー』を裏切る気にいる。

彼女の真意はどこにあれ、そう捉えられても仕方がないことをするつもりなのだ。

「すでに仲間集めは終わってるよ〜。けど、結構危ない橋もわたってるから慎重になる時期なんだよ〜」

「あーはいはい。それで俺らが出てきて邪魔になりそうだから釘を刺しに来たわけね……」

鳩原未来は『^{くわくはく}』のそれをすべて読み切った。

しかし、そこから先を読めるかどうかは話が別だ。

読めたとして、最後の一手。あるいは最初の段階から間違える可能性がある。つまり現在、彼女はちよつとした慢心すら危うい状況なのだ。

だからこそ——なら、『賭けに出るしかない』よね、とそれが今の状況だ。

「でもそれさ、俺らがチクらないってなんで思った？　いくら何でもレイズ決めすぎだろ」

「えへへへ。だつてく分の悪い賭けつて——」

例えようによつては気持ち悪い。

見ようによつては可愛らしい笑みを浮かべて。

「——『すぐくゾクゾクするのよね』」

なるほど。確かに彼女はゲーマーではない。

「ギャンブラーかよ。……無計画だと破綻するぞ?」

「しないしないよ。だつて、イカサマなんて日常茶飯事だし?」

「へーそう」

つまり——隠し事なんて当たり前、と。

「(……………にい……………)」

「(……………わかつてる……………)」

もはや隠すつもりなどないらしい。

鳩原未来は『^{くうはく}』を利用する気満々だ。

——しかも、それに『^{くうはく}』は乗るしかない。

「もしばれたら俺ら——てかハチに迷惑かかるんだけど?」

「大丈夫だよ。私がかくなんのために二宮隊にいると思う?」

(権力は持つてるよってか……用意周到なこつて)

基本的に『ボーダー』は緩い。と言うより、内部で裏切りが発生するなど全く考えていないのだろう。

鳩原未来は疑われても、二宮隊の権限でどうにでもなるレベルしか、まだ動いてないのだ。

そして、その権限でどうにもならないほど動くときは、『すでにすべてが終わっている』と言っている。

「つまり、最悪知りませんでしたで話を通るってことか? ——足りないな、万が一嘘がばれたらどうする?」

「そうねー。だから大したことはしなくていいよ。ただ、——邪魔をしなければそれでいい」

「……俺らの行動に制限をかける?」

「……メリット、ない……」

これは相手の引き出しを探る問答。

——ただで使われる気はねえぞ、と。つまりはそういう事である。

「もちろんだよー!! こっちもあなた達」と敵対するつもりないしね? だからこれー
 ……はーい。私が用意した正隊員100人分のデータだよ?」

今の彼らの状況はお互いに銃を向けているのと変わらない。

片方が引き金を引けば片方も致命傷を負う状況。

—だから、お互いに引き金を引かない建前を用意する。

「いやーあなた達」が用意した期間が二年で良かったよ。ってことはまだ半分程度しか終わってないよね? これがあれば三か月は縮められるよ?」

「信用できるのかそのデータ?」

「えーと、その答えはねー……『そろそろ受けとれよ。めんどくさくない?』—だよ」

鳩原未来は人を撃てない。それが演技か本当かはさておき。現状武器破壊しかできない彼女は、『ボーダー』随一の観察眼を有する。

撃たれる側からしたら『武器しか狙ってこない』のだ。もはや防御できない状況の方が難しい。

そんなヌルゲーを決めている奴らの武器を的確に狙い撃ちするには、その人物についてとことん研究するしか道はない。

癖から始まり好きなもの、普段の行動。言ってしまうえば人間観察。

そのことに気付いてる人物は『ボーター』にいるか？ いたとしても少数なのは確かだろう。

そしてそれは、唯一『くうはく』が八幡経由でしか得られない情報ですらある。

そのデータを与えると云っているのだ。

『くうはく』の動きの制限とデータ。重要なのは間違ひなく後者だ。

「まっ、別にまだ手が無いわけじゃないしな。それに縛りプレイは嫌いじゃない」

「………むしろ、最近そればっか………」

肯定ともとれる二人の眩きに、鳩原未来は大ききうなずき。

「よくしー！ それじゃあゲームを続けようー！」

まさか『くうはく』が気づかないとでも思ったのか？

いいや、むしろ気づいて欲しくてのその言葉だろう。

——つまり、裏切るからそのつもりで、と。

彼女は、大仰に宣言した。

二十二話〉〉『無理、かな……』

〔名前——影浦雅人。年齢17歳（満年齢18）。〕

——ポジション『攻撃手』^{アタッカー}——使用武器《スコープオン》。サイドエフェクト持ち。命名『感情受信体質』——自身に向けられた意識や感情を肌で感じ取る。

ここまでは「ボーダー」の書庫^{バンク}の情報です。以下の文から私の分析結果になります。

——景浦雅人の素行は決して褒められたものではなく、感情のコントロールを苦手とする節が存在します。短気で粗暴、とそれが周りからの認識でしょう。

しかしその実、その攻撃性には理由が付けられ、『ムシヤクシヤしてやった』などという理不尽な暴力は存在しません。

コントロールが苦手とは、最終的に攻撃を実行に移してしまう若輩者故とお考え下さい。さて、それらの感情は彼のサイドエフェクトが原因とされ、他人の悪意やら敵意を受信してしまうそれに起因します。

——即ち、それはサイドエフェクトの切り替えができないという事であり、『特技』と言うより『病気』と言うほうがじっくりくる能力でしょう。

——彼の能力は事戦闘においてはプラスに働き、攻撃と言うアクションを意識してしまつた時点でそれを察知するため、不意打ちが成立しません。遠距離狙撃にも反応でき、彼の能力範囲は相当な距離だと思われず（正確な数値は不明）。

攻撃手^{アタッカー}としての実力も非常に高く、単純な戦闘では彼に勝てるのは片手の指で足りると思われず。

——そんな中《スコープオン》の扱いは「ボーダー」で最も長けており、それは彼オリジナルの技である『マンティス』からも伺えます。

補足解説、『マンティス』は、『スコープオン』を二つ重ねることによつて本来より長いリーチを持つ蛇腹剣の様なものだとお考え下さい。

——ただ、そのような事実はこの際問題ではありません。彼の最も恐ろしいところは、『それを成立させるほどの《スコープオン》の技術』にあります。

「ボーダー」考案の攻撃手用武器は、それぞれ特殊性が付随されていますが、すべてにおいて固体化と言う部分が共通してあるのはご存知でしょう。『鞭のように振るう』とされる『マンティス』ですが、それは言葉通り鞭のようであるが鞭とは決定的な違いがあります。

——鞭とは、その柔軟性を利用し、遠心力を用いた使い方が一般的です。その付加価値として先端に行くほど威力が増すものであり、ただの縄が刃物以上の殺傷能力を持つ

ことも不可能ではありません。

とはいえ、『スコープオン』は変化できるとは言え柔軟性は皆無です。

——あくまで手動的にしか変化しない武器。要は、影浦雅人は、手動によつて『鞭のように見せている』だけなのです。

つまるところ『スコープオン』を鞭のように変化するように見せている』にすぎず、それを鞭と同系統と捉えることは危険でしょう。

そして、それをできているという事実が影浦雅人以上の技術がありえない証拠なのです。

——すなわち、彼はその変化スピードのみで攻撃性を有していることに他なりません。

ご存知の通り、『スコープオン』の攻撃力はAではありませんが、それは言ってしまうとよく切れる剣と同義なのです。

剣の刃に手を添えるだけでは皮膚が傷つかないように、あくまで外的力（振るう、突き出す）の様な作用が働いてこそその攻撃力と言う事だと思っただけならば良いでしょう。

——だからこそ、『スコープオン』を変化させるだけでは攻撃性を伴わず、トリオン体に対する威力はほとんどなくなることは必須。それを影浦雅人は変化スピードのみで

その威力を再現していると言え、その異常性は理解できるかと思えます。

——風間蒼などが使用する枝ブランチブレイド、刃も、モグラ爪モルクラローなどから見ても分かる通り、『変化速度が遅すぎる攻撃』は不意以外では当たりません。要は『枝ブランチブレイド、刃を認識してからでも避けられる』『地面にひびが入った後でモグラ爪モルクラローを察知し、回避できる』このような状況は、速度が足りないが故に起こる現象です。

——キレがない。とも表現できる通り、各隊員が多用しないことから、技に必要な技術が誰一人追いついていないことが伺えます。

そこに唯一到達したのが影浦雅人であり、彼以上の『スコープオン』の使い手は存在しません。

——とは言えそれはあくまで『スコープオン』単体において言えることであり、『スコープオン』を使った戦闘』では迅悠一や風間蒼也も後れを取ることはないでしょうと付け加えておきます。

——さて、影浦雅人が有するその技術は『マンティス程度よりはるかに厄介』であり、『マンティス』はあくまで、その技術から行き着いた一つの答えでしかありません。

リーチが長い——つまりそこまでの攻撃時間が弱点になりうるそれすら、その技術によつて克服しています。『気づいた時には切り刻まれていた』ほどの錯覚を与えるその技術には、もはや感嘆の声を上げたくなくなりますね。

——あくまで手動による変化のため、その攻撃は鞭と違い、相性の悪い位置が存在することがなく、その攻撃範囲内すべてが危険区域と化します。

——ただ、変化速度を極めたためか『変化自体』は大雑把であり細かい誘導を苦手としている節があるようです。

——鞭のようにしならせるといふ行為も、彼の技術を後押しするイメージ付随と言えるでしょう。

攻撃までの時間が非常に短く、避けるという行為がほとんど無意味となりますが、ギリギリで避けた後も追尾するようなことはありません。

——また、効果範囲外に伸ばすことができず、その技術は自分ルールともとれるある種の決まりによって、その効果を最大まで引き上げているものと思われれます。

そのため影浦雅人の擬似イメージを超えることない攻撃パターンは来る可能性がほとんどなく、あつたとしても稚拙な物。そのパターンさえ覚えてしまえば『マンティス』の脅威はほとんどないと言えるでしょう。

——ただ、それを支えている変化速度はなんにでも応用が利き、単純な戦闘ですら脅威です。考えうる可能性を絞り込まず、あらゆる可能性を考慮しなければならぬからこそが最も恐ろしい技術と言えます。

彼との戦闘は、その範囲外からの攻撃を与えることこそが最も有効ととれる手です

が、それはサイドエフェクト——『感情受信体質』によつて守られています。

——自身に対する意識をその性質ごとに感じとれると言われているそれは、自身に対する攻撃的意識を見極めることが可能であり、『攻撃前に攻撃を認識される』と称することができそのサイドエフェクトによつて、遠距離攻撃が無意味となつています。

——事実、影浦雅人に狙撃を成功させた事例はなく、銃手であつても攻撃範囲外に逃げる事が可能であるため、決定打には欠ける攻撃手段と言えます。

——ただし、対処法がまるでないというわけでもありません。彼のサイドエフェクトはあくまで自身に向けられた意識のみを感じ取るものであり、それ以外に対しては作用しません。つまり——『自身の武器に向けられた意識』を感じ取ることができないのです。

——実証結果として武器破壊を私は成功させた実績があります（それに関しては付随した映像をご覧ください）。

狙撃、銃撃も彼にさえ意識を向けなければ潜りぬけるものであり、例えば『たまたま狙つた石ころの前方に影浦雅人がたまたま通りかかった』などと言う状況が成立すれば可能です。そして、それ自体は事前に相手の動きを予測できるあなた方なら問題ないと思われず。

——《スコープピオン》の『ラビッド・スイッチ高速切替』を体の中からの『出し入れ変化』ではなく実際

に『武器を消し作り直す』と言う、無駄な行為を行っている比企谷八幡とはまったく別の技術になるとは思われませぬ。

変化速度が悩みどころのだからこそそのその行為でしようが、逆に言えば、それを極めた影浦雅人にはすでに気づかれていると言う前提での作戦を推奨します。

続きまして、彼の性格分析からのアプローチについての――」

そして――ぐしやりと。

そこまでそれを読んでいた者の手が、その資料を軽く握り潰した。

「……………なげーよ」

ただ一言。比企谷八幡はそれまでの沈黙をためたかのように呟いた。



八幡が手に持つそれは数十枚にも及ぶ紙の束であり、先日空から『これ全部に目を通しとけ』と、投げ渡されたものである。

（俺がいない間に、鳩原未来と何かあったとこまでは予定どうりだったから良いとしてナニコレ？ 一人頭数十枚、それが何人分だよ……………多すぎて半分家に置いて来たわ）

個人情報などは極力なくして八幡及び相手側へ配慮。事実と考察、実証実験が織り交ぜられて書かれていた。

（まだ数人しか目を通してないけどやばすぎるなこれ。まあ情報もさることながら、量がやばい。マジで読み終わるのか？ 広辞苑の方がまだ早く終わる気がするぞ……）
「あなた、先ほどから何に目を通していいのかしら？ ため息が多すぎて流石に鬱陶しいわ」

「……ああ、悪い」

八幡がペラペラとそれを捲っていたその場所は奉仕部の部室だ。であるならその場には毒舌女こと雪ノ下雪乃様が存在する。

「一人芝居も構わないけど、ほどほどにしないと気持ち悪いわよ？ 私が優しい女の子で良かったわね」

「今のどこに優しさがあつたんだよ……。むしろ胃が痛くなつたんだが？」

「あら、最近の女の子はもつとひどいわよ。他人の粗を見つけては陰で周りに広めて、仲間ができると見るや今度は聞こえるか聞こえない声でそれを話すの。それにこちらが反応しないと今度はそのことについて馬鹿にされ、逆に反応して見ると、自意識過剰だと理不尽に笑われる。それに——」

「わかった。わかりました。おれが悪かったから許してください」

わかればいいのよ。と何か勝ち誇ったように笑みを浮かべ雪ノ下は再度本へと目を落とした。

「……………はあ」

その様子に八幡は静かに溜息吐き再度その資料へ視線を落とした。

【影浦雅人考察記録】

——と、その書類の一番上に書いてあった。

それは当然、空達が鳩原未来から半分奪い取るような形で交渉を終わらせた戦利品である。

(あと一、二週間、程度はかかるなこれ)

八幡は、残りの資料をペラペラと捲り、その人物の数に眩暈すらした。

太刀川慶、風間蒼也、嵐山准等などの古参から木虎藍、緑川駿などの新人までおおよそB級以上の人材はすべて書かれていた。

(本気度が伺えるな。空達から鳩原先輩と交渉する前から鳩原先輩の計画は知っていたけど、そのためだけにこれだけするか……………。そりゃ空達も手こずるよな……………)

例えばの話。そう、例えばの話だ——。

鳩原未来がああ場に来ることを空達が知っていたらどうだろう。

先日秘密裏に行われた密会。それらの見方が180度変わるのではないだろうか。まるで騙し絵だと気付いたその時のように。

鳩原未来から『』に交渉を持ちかけたのではなく、鳩原未来は『』へ交渉を持ちかけさせられたと言ったように。

まあもちろん鳩原未来がそれを認識できていたかは別としてだが。

ではなぜ、あのような形でそれは行われたのか。

恐らく、『』は、あくまで鳩原未来からの交渉あるいは脅し、という建前こそがほしかったのだろう。つまるところ主導権を握っていたのは『』、であるなら鳩原未来はそれに合わせるしか方法はなかった。ある程度の自由度はあれど最終的に形があのよう
に収まるのは必然。

とは言え、その踊らされてる可能性すらあると考えた結果が鳩原未来の最後のセリフ
だろう。

つまるところブラフ。

——お前たちのやり方は気づいているぞ、と。

自身の知らないあれやこれやを浮き彫りにするための一言。

結果としては失敗に終わったが、プレッシャーがゼロのわけでもないところ流石と言
える。

那須達のところまで八幡へ空が口にした『鳩原に対しての来るのが遅いという』発言、それは確実に誰かが来ることがわかっていたからこそ出た言葉と捉えることも可能だろう。

ならば、『^{三人}』が欲しかったS級試験から欲しかった四か月とは鳩原未来が空達の元に
来るために有する時間なのか……。

だが、鳩原未来も凄まじいことに変わりはない。

交渉がうまくいくタイミング（時期）を見計らい。口調や性格を演じることで『動揺』
や『嘘』を隠し、『^{くうはく}』から『手を出さない』という一言を言わせた。

結局、八幡ですらどちらの絵が正しいのか知ることはない。

それでも問題ないと思えているところ、彼もやはり『^{くうはく}』の一人と言えるだろう。

空達と言わないのであれば知る必要のないことなのだ。突き抜けた信頼を持って
いるのがその証拠。

普通なら疑い知ろうとする。

そんな当たり前を足蹴りにする例外こそが比企谷八幡なのだ。

……

「終わりよければすべてよし……か。俺その言葉嫌いなんだけど」

「……私も得意ではないはねその言葉」

目線はその書物から目を離すことなく、雪ノ下も静かに同意した。

「へー意外だな」

大事なのは結果であり過程ではないと、成功者のみ許された言葉。

「訳し方は人それぞれだけれど、どう訳しても私にはマイナスの言葉に聞こえるの。【終わりがうまくいったのなら過程もうまくいったと言える】【終わりさえよければ過程に何があろうとハッピーエンド】……何都合よく解釈しているのよって思ってしまうわ……」

「……なるほど。今度はお前らしい」

八幡は特に理由なく——なんとなく嫌いと言ったつもりだったが、一部納得、と雪ノ下の捻くれた思考に少し笑みを見せる。

雪ノ下の言い分は努力を否定されたようで気に入らないと言ったところだろう。

「まあ【結果があるのならどんな過程だろうと意味はあるはず】——なんて訳すこともできるから一概にはマイナスの言葉とは言えないけどな」

「それ、自身の努力を認めてもらいたい負け犬の言葉に聞こえるわね。比企谷君にはピッタリなのではないかしら」

「……」

最後に皮肉を混ぜるあたり流石雪ノ下だった。

本から目を離さないあたり、雪ノ下のそれは無意識ですらあるのかもしれない。

結局のところ言葉遊び。本にも飽きてきたという二人の暇つぶしでしかなかった。

しかし、この会話はこの二人だからこそだろう。二人の会話は終始『結果を出すことは大前提』として話していた。成功の道を生きてきた雪ノ下雪乃。そして敗北を知らない『^{三人}』の一翼比企谷八幡。

互いに天才だからこそその捻くれたこの考えである。

そこへ——。

「し、失礼します……」

ガラガラ、と。静かに奉仕部の扉が開かれた。

おどおどとしているように、あるいはドキドキとして様子で、お団子髪の少女が二人の暇な時間を終わらせた。

「いらつしやい。ようこそ奉仕部へ」

今日初めて、雪ノ下はその本から目を離れた。



『ボーダー』本部訓練場。射撃訓練用。

その風景に鳩原未来はいた。

「どこにいるのかな？」

まるで恋人との待ち合わせでもしているかのように、人の少ないその一角で壁にもたれ。携帯でもいじっているかのように《イーグレット》を持つその姿は、遠目から見れば絵になってなくもない。

「あ、あれ？ これは私が間違えたかな？」

後輩射撃手、スナイパー絵馬ユズルとの待ち合わせはここであつてあるはずなのだが？ とキョ

ロキョロと見渡すその姿は、可愛らしいというよりもおどおどしていると云つた方が正しいだろう。

「……ユズル」

しやがみこんで心細そうに俯くその様子は、先日『くはく』と対峙したものと同一人物とは思えない。

「鳩原先輩？ 何やってるの？」

聞きなれたナイスボイス。

カチャカチャといじっていたおもちゃトリガーから目を離し、顔を上げるとそこには待ち合わせ

せの相手が困惑したように目を向けていた。

「……遅い。遅いよユズル」

立ち上がって睨むようにユズルを見た。

だが、とてもじゃないが睨んではと言えない。ここまで目に力がない人物をユズルは自分以外初めて見たな、と。そんな感想がうかぶほどだ。

「遅いも何もまだ集合まで一時間あるんだけど？」

「えっ？ あれーやっぱ私が間違ってたのか……ごめん。勘違いしてた」

「……おつちよこちよい……」

冷めた目で見えるユズルに対し、鳩原はたじろぐ。

「……ユズルだってこんな早い時間からいる癖に」

「——っ……そ、それは……」

顔を背け、軽く赤くなっている様子に、鳩原は密かにほほ笑んだ。

間違っても「鳩原先輩との訓練が楽しみだったんです」と言えない少年ユズルは、まさに思春期真っ最中と言えるだろう。

「よし。それじゃ、行こうか」

「はい。よろしくお願ひします。鳩原師匠」

彼らは師弟関係。

「それ、堅苦しいからやめるように言うことが今日初めてのアドバイスだから
弟子のちよつとしたいたずらに、苦笑いしながらツツコム師匠。

頭を小突くその姿は楽しそうですらある。

微笑ましく。ほのぼのしく。『ボーダー』で見慣れた光景。

そんな日常の「ページ」。

.....

.....

的に向けて構えるユズルの肩を、鳩原は少し触って下へと向けた。

「ユズルは目が良いからね。感覚で大体当てちゃうけど、『見ないで当てなきゃならない
とき』きつと正しいフォームが必要になるよ」

「.....はい」

そして引き金を引く。

真つすぐトリオン弾は進み。

しかし、その弾は狙った場所へは行かなかった。

「ほら、また目で見てる。目線と銃口がずれてるでしょ」

「.....難しいですね」

少し落ち込んだ様子を見せるユズルへ、鳩原は微笑んだ。

「でも体はぶれてないし、銃口も固定されてた。後は慣れからの微調整だけ。少し練習したらユズルなら使い分けられるよ」

鳩原は、絵馬ユズルの事をこれでもないほどに評価していた。

——この子は天才だと。

きつと強くなる。そんな確信めいた物すら持っていた。

「鳩原先輩に比べればまだまだです」

「そんなことない。すぐ追いつくよ」

さらには謙虚でこちらを立ててくれる。こんな可愛い後輩がいるだろうか？ ——
否である。

鳩原は自信を持って最高の弟子だと。自分の自慢ですらあった。

あの鳩原未来にそこまで言わせる。それがどれほどの事か知る者は少ない。

技術という面において鳩原未来を超えるものは『ボーダー』にはいない。恐らく忍田本部長ですら、ここまでの物は持ってないだろう。

ではなぜ？

答えは簡単——『人が撃てない』と言う事実がそれを封殺してしまっているのだ。

技術だけで言えば、比企谷八幡をして『限定的に並びうる』しかできないものなのにある。

「ありがとうございます。鳩原先輩」

そんな師匠を、ユズルは心から尊敬している。

口元が上がる。そんな顔の変化を感じながら絵馬は再び引き金を引いた。

.....

ほんの少しの休憩時間。

「あ、ところで——」

飲んでいたドリンクを口元から離して。

そんな前振りをし、ユズルは聞いた。

「鳩原先輩なら、比企谷先輩に当てられる？」

これは聞きたいと息巻いてすらあった。

ユズルの今日の目的の半分はこれですらあったのだ。

狙撃。あるいは銃弾において無敵を誇った比企谷に対して『武器破壊』を成功させることができるのか。

その質問に、鳩原は苦笑して——。

「無理、かな.....」

そう答えた。

「……っ——。そ、それは……どんな状況でも?」
「どんな状況でもだよ」

即答。その回答に、信じられないと言ったようにユズルは目を見開く。

自分の師匠と言う色眼鏡はあるだろう。

それでも、鳩原未来は『人さえ撃てれば』すぐにでも射撃手スナイパーで一位の座につける実力があると思っっている。

それほどまでに彼女の技術は高見にあるのだ。

その彼女が不可能だと断じている。

すなわち、これがいかに異常事態かは考えるまでもなかった。

「まあ、それ以前にできても意味ないけど」

「——? 何が?」

「仮に武器破壊できても『絶対に勝てない』からだよ」

「え?」

ユズルは言っている意味が分からなかった。ユズルが話していたのはそんな話ではない。当てられるのか当てられないのかだ。

元より、鳩原が勝てるかどうか問う質問は、それ自体が間違ってる。

「そうだね。比企谷八幡について少しだけ教えておこうかな」

少しだけ、雰囲気が変わった。

どう変わったか説明はつけられなかったが、ユズルは確かにそう感じたのだ。

「そもそもね、比企谷八幡は絶対に勝てる戦い以外は勝負しない人間なんだ」

「——？ それって言い方は悪いけど卑怯ってこと」

そんなユズルの意見に、鳩原は首振って、

「違う違う。どつちかっていうと逆かな？ 比企谷八幡が戦っているということはそれ

はすでに勝ちが決定してるってことなんだよ。まあ冷水と温水ぐらいには違うんだけ

ど……. とらえ方って言うか見方っていうのかな」

意味が分からない。

そんな表情を浮かべるユズルへ鳩原は続けた。

「ちよつと飛ばしすぎたか。うん、さっきの質問に戻るけど、狙撃可能か不可能かと言え

ば恐らく『できる』」

「さっきと言ってること逆なんだけど…….」

「正確には狙撃させてもらえる——だけだ」

「——!？」

そこまで聞いて、ユズルは鳩原の言いたいことを理解した。

「そう。比企谷八幡が撃たれたのなら、それはきつと勝利に必要な条件ってことなんだ

よ」

言葉が出ない。

困惑するように口をパクパクさせるユズルへ鳩原は口にする。

「確実に勝利する。言葉なら簡単だけど、それには膨大な予測が必要。ぶつちやけ無理。……でも、できている。ならそんな当たり前は無視して考えると答えは一つになるの」

「……………」

「比企谷八幡には通用『する』『しない』での議論は無意味。『したならした』で負けるし、『しないならしない』でそれでも負ける」

「そ、それは……………流石に……………」

そう思いたくなるだろう。

当たり前の感情だ。間違っていない。

だからこそ鳩原は、——勝てないんだよ。と思った。

そんなわけがない。できるはずがない。信じたくない。

その程度の思考をしている時点で負けは確定。

そりゃ自身のすべてが否定されたような状況だ。思考停止は仕方がない。故に——そこに付け込まない理由がない。

「今はそれでも良いよ。いずれ分かるし。まあ、ギリギリできて……うーんそうね。比企谷君にとつて『当てられた方が都合のいい状況を作る』事ぐらいかな？」

「……ね、意味ないでしょ」

そこまで聞いて、ユズルは心底師匠がこの人で良かったと思つた。

この人のすごさを知つてるのは自分なのだ。

この人といれば必ず強くなれる。いや——なつて見せる。

そんな感情を胸へと秘めた。

だからなのかもしれない——。

この時は思いもしなかった。

その尊敬の目には映ることはなかった。

(ごめんねユズル……)

悲しそうにユズルを見る目。

申し訳なさそうに光る瞳に。

どんな気持ちがあつたのか、気づくことはできなかった。

——本当にごめん。

二十三話〉〉『青酸カリ!!』

はいどうも。部活メンツにパシリにされた比企谷八幡ですコンニチハ。

と、何時になく、というかいつも通り八幡は不愉快そうな面を浮かべている。

「あの野郎……」

ゴロゴロと転がった缶を手に取りながら、八幡はそれを命じた雪ノ下へと悪態をついた。

（いやね、確かに女子の質問に対しての配慮が足りなかった俺の責任だけど、なんでお前の飲み物も買わなきゃならんねん）

先ほど奉仕部に来た依頼主由比ヶ浜結衣。

同じクラスであること以外特に記憶してなかった八幡だが、トップカーストの彼女がどんな悩みを持っているのか少し興味を持ったことが失敗だったのだろう。

おもつくそ「あなたに聞かれないんですが」的な目をされた八幡は、本来なら回避すべき心への攻撃を受けることになったのだ。

「……由比ヶ浜の分も買つとくか」

そう。今の状況は空気を読んで飲み物を買つてくると腰を浮かせた時に――

『私は野菜生活100いちごヨーグルトミックスでいいわ』

と、ナチュラルにパシられたが故の状況なのである。

「てか、よくこんなの校内に売ってたな。初めて見たわ。そして少し飲んでみたくなつて買っちゃたわ」

マックスコーヒー信者としてこれはダメと思いつつも八幡は誘惑に逆らえなかつた。

——仕方ない。今日は箱での購入で帳尻を合わせよう、とアホなことを考えてるあたり信者の格は落ちていないと思われる。

「そう言えば、初めての依頼かもしかして……」

結局入部と言う形をとり早二週間。一向に依頼が来ない名ばかり部活にとうとう光が差したのだ。

少しワクワクしないと言えば嘘なる。

まあ、それもこのパシリで帳消しどころか辞めてやろうとまで考えたためすでにマイナスだが……

「さて、そろそろ戻るか」

あれもこれも独り言。

八幡は自分が無意識に言葉に出していることに気付いていない。

これだから彼は見知らぬ女子生徒にヒッキーなどと言う不名誉なあだ名をつけられ

てしまったのだろう。いや、由比ヶ浜がそういう理由でつけたかどうかは本人以外あ
 ずかり知らぬことだが。

——時に、比企谷八幡のサイドエフェクトは奉仕部との相性がいいということをご存
 知だろうか。

いや、そもそも比企谷八幡のサイドエフェクトについて詳しく知らない者の方が多い
 かもしれない。

なんたってあの『くろはく』ですら完全に使い方を理解しているわけではないのだ。恐らく
 この力を100パーセント理解しているのは長年付き合ってきた本人だけだろう。

サイドエフェクト『思考投影』。

使い方は多岐に渡る。

——思考の奪取。——視覚の共有。——無意識へのアクセス。——肉体行動の受け
 渡し。

これだけあればむしろあれ？ と思うだろう。

つまり、結局これはどういった能力なのだと。

それ以前に、サイドエフェクトはあくまで人間の延長線上にあるものだ。こんな
 不思議能力フアンダメンタルなわけではない。——では何なのか。

とは言えもつたいぶることもない。

これを『^{くっはく}』は『心の理解』と表現した。

『心の理解』などと言うと、心を読むことと考えそうだが、比企谷八幡のはまた一味違う。

言うなればこれはその一歩先。

理解した先を求めた結果の能力なのだ。

このようなことを思ったことはないだろうか。

そう、例えば好きな人物が現在どうしているのか考えたりなど――。

アイドルでも俳優でも、尊敬できる先輩でもいい。そしてその次に、その人の真似をしてみたいと思ったことはないだろうか？

アイドルなら踊り。俳優ならしぐさ。先輩なら口調や髪型。

もつと簡単なものを例に出すならスポーツなどが良いだろう。上手い人物のプレーをまねたことはないか？ ゲームでもいいかもしれない。上手い人の思考を考えたことはないだろうか。

つまるところ八幡のサイドエフェクトはそれだった。

『観察や思考による第三者の再現』その再現率を100パーセントまで強化したのが比企谷八幡のそれなのだ。

疑問に思ったことがあっただろう。比企谷八幡はどうやって『くうはく』を見つけたのか。『思考投影』なのはそうなのだが、目の前にいない人物のそれにどうやってアクセスしたのかと。

これはもう考える必要がない。

例えにも出てきただろう。ゲームプレイヤーの思考を考えたことはないかと。

比企谷八幡のサイドエフェクトは迅悠一などは違い、その人物が目の前にいる必要がない。『知らぬあの人を理解する』ことこそができなくて何になる。

その人物を知る何かさえあればそれで事足りるのだ。

——ああ例えば、その人物が操るキャラクターとか。

故に比企谷八幡のそれは、その行為を脳をリンクすると言った一つの方法に落ち着いた力だと言える。

そのため対象は一人と言う弊害を患っているが、そこに文句をつけても仕方がない。しかし、だからこそ脳の部分共有も可能になっている。

『あの人の言葉遣いだけ真似しよう』と言ったように、むしろできて当たり前。

それをなしにしても、『物を書きながら音楽を聴いて、歌を歌う』など全く別々の場所からアクセスできるのが脳と言うものだ。

計算式を解きながら隣のこの子可愛いなー、なんてのはよくある事だろうか？

憧れやら興味、尊敬、お気に入り、何らかの理由からその人物と同じになりたい、知りたいという人間的感性を實現させたサイドエフェクト。

他人に興味の薄い八幡がその様な才能を持つているとはまた皮肉めいているが………。

話を戻そう。

この力は最初に言った通り、『心の理解』と言った一面が強い。

これは奉仕部の活動には最適と言える力だ。

人が誰かに相談を持ちかけるといふ状況は大まかに二パターンだ。

一つは『自分の中ですでに答えが決まっただけで背中を押してほしい』パターン。もう一つは『答えがなく何をすればいいかわからない』パターンだろう。

前者の場合は簡単だ。「あなたは正しい」「間違っていない」と肯定してやればよい。八幡ならどれが背中を押してほしい事柄かすぐに分かる。

後者なら質問と応答を繰り返して、「本当はどうしたいのか」探ればよい。全く答えがないなどと言う事はない。点と点を結べないようなそんなものだ。だからどの点をとどつて線をつなぎたいのか細かく調べて行けばそれで済む。

まあ中には『他人に責任を擦り付けたがため』みたいなものもあるがそれは今はいいだろう。

要は奉仕部において八幡が失敗することなどありえない。

『くうはく』に頼る必要などなく。いや、むしろあの対人スキルゼロの連中に手を貸されてはマイナスかもしれない。

「楽な仕事だ」

そんな意気揚々とした心持で、八幡は奉仕部の扉を開いた。



「楽な仕事のはずだったんだ」

そんなセリフをして、八幡は目の前の状況に絶望を吐いた。

奉仕部に戻ってから、彼は家庭科室へと連行された。

どうやら彼女の願いはお礼のクッキーを作る事らしい。

その時点で八幡の『思考投影』はクソほどの役にも立たないゴミへとなり果てたのだがそれは百歩譲って良いだろう。

問題はそこからだ。

「おい雪ノ下、この黒い物体はなんだ？」

「もしこれをクッキーと答えたら私は嘘つきかしら……?」

「ひどい!？」

雪ノ下が手本を見せ、その後に由比ヶ浜が挑戦する。

流れは完璧だった。

味見役へとレベルダウンした八幡は雪ノ下さんマジパネエ——とまではいわないが、素直に料理ができることに関心すらしていた。

「なんで失敗したんだろう……」

シヨボンでも言いたげな由比ヶ浜の発言に、二人はギョツとした目を向けた。

「あのね由比ヶ浜さん。あれだけの事をやっておいてまさかそれが分からないなんて言うわけないわよね」

「ひーッ……!？」

あからさまな笑顔を向ける雪ノ下に由比ヶ浜はおびえた声を上げる。

笑顔には攻撃的な面も含まれているとよくいう話だが、雪ノ下のそれはもはや凶器の域にあった。

「はあーまあいいわ。とりあえず食べてみましょう。もしかしたら……. 万が一……. 奇跡的に……. 味は問題ないかもしれないわ」

「そこまで賭けないと保証できないほどなんだ!？」

「ああ、雪ノ下にしてまだ甘い判定だな」

「……うう、ちよつと泣きそう……」

そんなことを言いつつ、三人は問題のそれへと手を伸ばした。

「そうね、流石に死ぬことはないと思うわ。だから比企谷君先に逝きなさい」

「ちよつと待て、今字が間違つてなかった? 『行く』が『逝く』になつてなかったか!」

「……? 何を言っているの? 言葉で言われても分からないわ」

「そんな本気で分からないみたいな感じで首をかしげるのをやめろ」

「かわいそうね由比ヶ浜さん。この男あなたの料理を毒か何かと勘違いしてるわよ」

「……うう、ヒツキー……」

身長のせいかな自然と上目遣いになった由比ヶ浜に八幡はたじろぐ。

ここに来て、八幡は気づいた。これは雪ノ下と八幡、どちらにこのクツキーダイクマターを食べさせるかの勝負なのだ。

気づいた時にはすでに遅く。

すでに八幡は崖つぶちだ。

「大丈夫だよヒツキー。私だって料理少しくらい知ってるもん」

「ほー。この現状でまだそんな口を開くのかお前」

「そ、そんなことないよ! 料理の「さしすせそ」だつて知ってるんだから!! 砂糖で

しょ? 塩で、次が酢、でせが……え、えーつと、せ、——あつ、青酸カリ!! で

最後が味噌! ほなね!」

「……………」

何がほらね、つて言うかむしろ——ほらな、つて感じなのだが。

「比企谷くん——」

そこで初めて雪ノ下が優しく名前を呼んだ。

「提案があるのだけど。これ今回は私ダメだと思うわ。だから引き分けにしましょう」

「奇遇だな。俺も同じことを言おうとしてたんだ」

——えっえ？　と言った感じで何が何だか分からない由比ヶ浜だが、八幡達はむしろ声を大にして『わかれ』と叫びたかった。

「由比ヶ浜さん。私思ったのだけど今度は比企谷君も一緒に作ってみようと思うの。ほら、由比ヶ浜さんが渡す相手男子なのでしょ？　なら男性視点の味の好みとか分かるかもしれないじゃない？」

——その心は、監視をもう一人つけるからやり直そうと。

「えっ、でもまだ味見……………」**「ゆ、由比ヶ浜!!」**——「？」

「ほら、せつかく手順覚えたんだ、忘れないうちにやったほうが良いだろ？　俺じゃ力不足かもしれないが、やつぱ少しでもおいしい物渡したいだろ？　時間はないんだし早く始めたほうが良いと思うぞ」

——その心は、お願いします。早くこのクツキーダークマターから意識を背けてくださいと。

もちろん二人はこれに毒が混じっているなどと本気で考えたわけでは………な、い。

だが、学校には理科室がある。

ちよつと目を離れたうちにここまでの事をやってのけたのだ。

「人の命がかかっているわ、ほんのわずかにすら賭けることはできないのよ」

可能性は0ではない。

流石に青酸カリはないにしろ、似たような名前でも何かしら入れられていたら普通に死ぬのだ。

「え? なんの事」

と、首をかしげる由比ヶ浜を何とか説得し料理は再開。

「由比ヶ浜、秤のメモリ0に戻し忘れてるぞ? 俺は甘めが好きだが、これじゃ砂糖が分量以上に入るだろ? ……いい、いや違う! 今のは桃缶を入れたいという意志じゃない! てかなんでそんなに卵持ってルンダ?」

「だって、小麦粉混ぜにくくないこれ。多分水分が足りないと思うの私!」

「待つて由比ヶ浜さん、大丈夫だからちゃんと混ぜれば溶けてくれるから。卵の代わりに水を足す必要はないのよ? ……わ、私が悪かったわ! ゆつくり混ぜましよ

うゆつくり!! 勢いがありすぎて小麦粉が飛び散ってるわ!」

もはや悪魔的なまでの料理センスを發揮し、『何か』を作り出そうという由比ヶ浜を、何とかクッキー作りと言うステージへと八幡達は押し込んでいく。

それでも、今まで本を読むことをしかしてこなかった二人には、やはりそれは楽しいようで、口元は密かに笑っている。

途中バンツッ！ などと言う料理の内容では出ることのない音などがたまに出たりしたが、その時は何とか訪れた。

.....

結果として、出来上がったクッキーと呼べる代物はちゃんとクッキーと呼べるものだった。

雪ノ下と八幡、二人の安堵の様子を見るに、取り合えずはうまくいったと言えるだろう。

「おかしいわね、クッキーを作る過程で卵が一パック消え失せたわ。これ三人分よね？」
「ねえなんで最初に用意したボールが二つも紛失してんの？ 怒られるの教室借りる時に名前を出した俺んだけど.....」

「.....制服汚れた.....」

三者三様な感想を抱きつつ。

三人は前のクツキーへと目を向ける。

「こ、今回はちゃんとできたね！ 雪ノ下さんのと比べるとなんかあれだけど……」

「いや、十分だろ。見た目もしっかりしてるし匂いもいい」

「そうね、でも万が一があるわ。三人同時に倒れても問題だしやはりここは一人ずつ……」

「ゆきのん?!」

心の中で呼んでいたのが思わず出てしまったのだろうか？

とりあえず。

——ゆきのんってなに？ という議題を開催したい雪ノ下だったがここは大人な対

応を見せた。

「まあ良いわ。ここまで来て不公平はよくないわね。みんなでいただきますよ」

雪ノ下のその言葉で三人はそれぞれクツキーを手取る。

「いただきます」

そしてパクリと。

感想だけを言うなら、それは決しておいしいものではなかった。

何故だか舌触りが絶妙に悪く甘たるい。火は通っているはずなのにフニャフニャ過ぎて気持ち悪い。

点数をつけるなら赤点ギリギリ。

結果、由比ヶ浜の顔はすぐれない。

それでも――。

八幡と雪ノ下は二つ目へと手を伸ばした。

「ヒッキー……ゆきのんも……」

不安そうに見る由比ヶ浜へ二人は言った。

「俺も最初に作った時は失敗しまくった。大体こんなもんだろ」

「そうね。それに楽しかったわ。もともと料理ってそういうものなのよね」

褒めたつもりも慰めるつもりも二人になかったのだろう。

そもそも二人は――美味しい、とは決して口にしなかった。

でも、だからこそ由比ヶ浜はそれが温かいと感じるのだろうか。

「ありがとう……」

自然と出た由比ヶ浜の言葉に、二人はほんの少したじろいだ。

「依頼自体は中途半端になっちゃったわね。……いいえ、ここは素直に失敗と認

めましょう。だから由比ヶ浜さん、あなたさえよければこれを継続と形で今後ともやっ

て行く気はないかしら？」

「――え？」

「暇な時でいいわ。もし、後数日時間をくれればあなたが満足するクッキーを作れるようにすると約束します」

「……………」

それを聞いて、八幡は素直に——こいつ誰だ？　なんて失礼なことを考えていた。まず失敗を認めて、尚且つその払拭の可能性を相手にゆだねているのだ。思わず手に持っているクッキーを疑ってしまった八幡は悪くないだろう。

「うん！　ゆきのんよろしくお願ひします!!」

そんな八幡を尻目に、二人の話は進んでいく。

「あの、そのゆきのんっていうのやめてもらえるかしら？」

「えーなんで？　すつごく可愛いのにー？」

「かっ……………っ、可愛いかしら……………？」

「うん。可愛いよ！　絶対！」

「そ、そう。な、なら問題ないかしら」

——いやあるだろ。なんて言う野暮なツッコミは八幡はしなかった。

そもそもツッコむなら男の自分を差し置いて女子同士でラブコメを展開しているこの空間にだろう。

「雪ノ下、悪いが今日は先に上がるぞ後片付けはもう終わったから」

いつの間にか食器の片付けを終えた八幡は、すでに帰宅モードだ。
「え、ええ。今日はありがとう」

「……………明日は槍でも振るのか」

「……………そうね。とりあえず背後には注意することね」

それの方がお前っぽいと、八幡は少し安心したように扉を開いた。

大丈夫だった、クツキーは問題ではなかったのだ。

どうやらこの男、本気でクツキーの危険性を案じていたらしい。

「じゃあ、また明日な」

適当にプラプラと手を振る八幡へ、

「ヒツキー、バイバイ!!」

由比ヶ浜も手を振った。

「……………」

とりあえず、ヒツキーなどと言う不名誉な見ず知らずの人物は自分ではないと、それには手を振り返さずに。

ガラガラと、八幡は扉を閉めた。

「やっぱり、俺の□□□□□□□□□□まぢがつてるな」

その独り言に、やはり八幡は気づかなかった。



パクリと、『くっはく』の片割れ、空はそれを口にした。

「うわまず」

シンプルにして最強。

「ここまで真つすぐ言われると逆にさすががしくすらある。

「おい白。このクツキーの形をした食べ物なんだ？」

「……クツキー……じゃないの……?」

「いや、そうなんだけどな」

そこは『ボーダー』本部比企谷隊隊室。

空はテーブルへ置いてあったそれに手を伸ばした感想がそれだった。

「……ハチ兄が、置いてった……部活の、らしい?」

「いや俺に聞かれても困るんだが妹よ」

決して、八幡は二人を通称『由比ヶ浜クツキー』の処理係を押し付けたわけでない。

これは学校へと通わない二人へのささやかな八幡の気遣いなのだ。

特に空に関しては女子生徒からのクツキーと言うもはやご褒美!

——と、白に説明したのだが。おもいつきし『女子生徒から』と言う部分が省かれて
いる。

空と八幡は言わずもがな。白もなかなかのブラコンだ。まあぶつちやけ超えてる節
もあると、八幡は常日頃から思っているが。

「………にい、今度白がお菓子作る………?」

「え? いいよ、怪我されても困るしな」

「………む………。——にいきらい………」

「なんで!」

何やら八幡のせいで二人の仲が怪しい。

とは言えそんなことは一瞬あつたかないようなもので。

「怒らせたか? ほら、こつちや来いこつちや」

自身の太ももへと白をのつけて、白もそれを心地よく思っているあたり、この二人は
やはりなんて言うかあれだった。

「まあ、クツキーはどうでもいいんだけどさ、これ見てみ白」

「………ん?」

二人が見ているモニターに映し出されているのは俗に言うモデルと言うものだった。
モデルと言ってもゲームなどに使われるポリゴンでできたあれだ。

二人が『ボーダー』隊員の動きをどう観測しているかの答えがこれだった。相手を完全に誘導する。

それをするための作業が『ボーダー』内の戦闘ログを見直す程度なわけではない。てかその程度で、誘導できたならそれはもう相手が弱すぎるのだ。

それらを可能にするために用いたのが、『くうはく』が使っている『これ』だ。

プログラム上に作った三次元的空間に、データをコピーしたモデルを配置。一人一人の出力やら似た動きを重ねての誤差座標の計算。

トリオン量との計算での攻撃範囲内と、攻撃回数^の把握。

攻撃移行の際の体の各部位の座標位置——すなわち態勢の弱点考察

それら割り出すのが『くうはく』の作戦に必要な第一段階。

今後は鳩原未来から得た情報を含めての、モデルデータだけでない心理的観測の方からもアプローチをかけていく予定なのだろう。

二人の手は会話をしながらもせわしなく動いていた。

「おかしいだろ？ これ、振幅が大きすぎる」

「くうはく……確かに……早すぎる……」

何が、とはお互いに問わなかった。

二人が見ていたのは一人の男のデータだ。

「入隊時期は最近。師匠は荒船？ ああなるほどね。ま、それにしても早すぎる。どう考えてもサイドエフェクトだろ」

「……鳩原ちゃんからもらった、資料……ある？」

「いや、今はハチに渡してる。あらま、先に俺らが目をとおすべきだったか？」

これがあるから鳩原未来との交渉は空達にとつて通るべき絶対条件だった。

そういつたイレギュラーを完全に排除することこそ、空達のやりかた。

こんな『ない』可能性の方が高いこの程度のものに、ランク戦を巻き込んだのだから呆れて物言えない。

まあだからこそもう届かないのかもしれないが。

「さて、鳩原未来もそろそろ動くころだ。尻尾ぐらいは掴んでおくか。手綱を握るか。それとも完全にこのまま無視が利口か」

「……でも、白ならここで必ず動く……」

「ああ、俺でもここで仕掛けるだろうな」

やはり二人は何を、とは聞かない。

例えば、鳩原未来は二人に絶対勝てないことを確信していた。

しかし、裏切るとも宣言した。

ならそれはどのタイミングだ？

決まってる。カウンターをもらわないう絶対の瞬間。確か、バスケットボールではこれを『ブザービーター』などと呼ぶ。

「さあどう裏切るのか見せてもらおうか」

つまり、どうしかけるのか。

鳩原はここでもすでに手を打っていた。

『』に接触し、いいやこの場合『』かどうかは関係ないだろう。自身の目的を誰かに話した場合の対策。

しかし、自身のそれを知られてなお、相手に裏切らせないウルトラC。

所謂あの一言が保険の正体。『』にのみ通用する回避不能な攻撃。

『それじゃあゲームを続けようー!』

あらかじめ裏切ると、利用すると予告することによって。

明確な敵からゲームへと移行させる一手。

要は『私が仕掛ける《何か》を回避して見せろ』という申し込み。

そしてそれを『』は受けた。——否、『』だからこそ受けた。

なら遊ぼうと——。

答えて見せよう、ゲーマーとして。

もちろん鳩原自身も負けることは織り込み済みのだろう。

それをして最大限自身が得をするよに組んだとみるのが正しい。

とは言え、万が一勝つたらそれ以上得をするように組んでいるだろうか。

「・・・・・・・・わくわく・・・・・・・・」

「楽しみだなーしろー」

そんな鳩原未来のそれをあざ笑うかのように、二人は満面の笑みで呟いた。